

岩手県埋文センター文化財調査報告書第71集

上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

上斗内Ⅷ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書正誤表

ページ	行	誤	正	ページ	行	誤	正	ページ	行	誤	正
4	8	破壊された	石産された	31		住居址	住居跡	27		縄文時代__後葉	縄文時代後葉
7	28	__検出面	遺物検出面	40	3	土坑_P9	土坑_P9	95	17	入組み文風E	入組み文風の
8	2	"	"	4	4	伴ない	伴い	111	17	若干づつ	若干づつ
9		床面直土	床面直上	41	12	志葉	志葉	114	1	正式な名称が	正式な名称が
11	14	土師器については	土師器の	14・15・23		竪穴住居跡	竪穴住居跡	120	15	どのような__区別	どのような区別
12	8	各ページ__とに	各ページごととに	43	6	"	"	121	30・31	叩き石	叩き石
13	6	35__m	350m	44	5・17・23	"	"	129	7	プロビライト	プロビライト
10		やせ尾根	その尾根	20		竪穴__居跡	竪穴住居跡	143	3	286	286
25		3, 西根町の遺跡	3, 西根町の遺跡	45	5	E-09住居跡__遺構	E-09住居跡遺構	147	6	北向__斜面	北向斜面
24	12	なおお	なお__	47	3・11	竪穴住居跡	竪穴住居跡	151	21	東壁中央部のやや南寄	東壁の南寄
20		基礎__なす	基礎なす	5		ま__がって	まながって	153	20	PL横回転	RL横回転
27	20	埋土は4層	埋土は3層	15		台付跡	台付跡	25		頸__には	頸部には
28	2	楕円形	楕円形	49	4	炭化水微粒	炭化__微粒	157	22	層する	層する
5		竪穴住居跡	竪穴住居跡	6		P1_P4	P1_P4	158	1	志葉	志葉
29	25	4層	3層	50	2	両柱筋__東	両柱筋は東	158	28	層する	層する
39	7	炉址	炉跡	51	14	だけ__は	だけでは	159	29	具塚	具塚
31	8	把握	把握	53	17	するか__は不明	するか否かは不明	160	14	文書	文書
11		から__	から__	57	3	平面__は	平面形は	23		ことが	ことから
25		近い部__	近い部分	75	1	蓋状	蓋状	162	2	比較的では	比較__では
26		志葉	志葉	5		いわざわざえない	いわざわざえない	8		細文	細分
29		F-17__に	F-17グリッドに	78	9	各1点づつ	各1点づつ	164	10	蔵屋敷遺跡	蔵屋敷遺跡
33	8	平面形は__を	平面形は円形を	79	9	第V層土器	第V層土器	17		土師器	土師器
13		体部が	体部を	22		円外面	内外面	18		それを比較	それと比較
34	1	志葉	志葉	29		最__とも	最__も	20		しか__	しかし
7		東西約1.5m	東西約4.5m	85	8	"	"	28		共伴して__土	共伴して出土
35	9	土坑__	土坑__	85	8	B型	B型				
35	25	中期志葉	中期志葉	90	21	沈盤	沈盤				

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和57年10月末における遺跡台帳によれば約6,000ヶ所が登録されております。

貴重な文化財を保護することと、現代生活を豊かにする開発指向との調和のとれた施策は今日的課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手郡岩手町、西根町、松尾村を通過する広域農道整備事業に関連して、昭和57年度に発掘調査した西根町上斗内遺跡群の調査結果をまとめたものであります。

調査の結果、上斗内Ⅲ遺跡は、縄文時代後期の集落跡で、竪穴住居跡の出入口施設や、方形や円形に配列されている柱穴遺構の検出があり、上斗内Ⅳ遺跡の炭焼窯跡、上斗内Ⅴ遺跡における奈良時代竪穴住居跡などの遺構と、それに伴う出土遺物は、当地方の歴史解明にとって貴重な資料となっております。

この報告書が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜りました県教育委員会、西根町教育委員会、岩手北部土地改良事業所をはじめ関係各位に感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和59年1月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事	長	金子	彰	吉	(県教育長)
副理事	長	柴内	内	眞	(県教育次長)
常務理事		熊谷	正	男	(県埋蔵文化財センター所長)
理事		熊吉	田	和	(県農政部長)
	"	高橋	健	之	(県林業水産部長)
	"	穂積	昭	慈	(県土木部長)
	"	板橋	源	一	(県立博物館長)
	"	草形	俊	夫	(県立盛岡短期大学長)
	"	小佐藤	信	公	(元常務理事)
監事		小藤	公	志	(県教委総務課長)
	"	小原	吉	雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷	正男			
副所長	鈴木	正吉			
(総務課)				専門調査員	岩
総務課長	菊池	勉		"	光
庶務係長	阿部	久		"	井
主任	佐藤	久郎		"	川
	戸草	幸男		"	石
	立花	多加		"	工
技能員	佐藤	春男		"	中
				"	高
				"	高
				"	佐
				"	酒
(調査課)					久
調査課長	嶋	秋光			行
主任専門調査員	近藤	尚			喜
	藤生	二			喜
専門調査員	野池	利			幸
	朝野	惠			重
	菊池	洋			紀
	鈴木	一			門
	渡大	則			介
	田	夫			文
	佐	直			孝
	枋	郎			
	田	一			
				(資料課)	
				資料課長(兼)	鈴
				主任専門調査員	木
				専門調査員	野
				"	井
				"	平
				"	鈴
				"	三
					信
					吉
					靖
					進
					英
					一

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡西根町寺田字上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の発掘調査結果を集録し、広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査報告書としてまとめたものである。
2. 本遺跡に対する発掘調査は、広域農道整備事業岩手地区第8号調査に伴うものであり、調査は、岩手県農政部農地開発課および岩手北部土地改良事業所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査の面積および期間は次のとおりである。
 - (1) 上斗内Ⅲ遺跡 調査面積 900㎡
調査期間 昭和57年5月6日～6月17日
 - (2) 上斗内Ⅳ遺跡 調査面積 2,550㎡
調査期間 昭和57年6月18日～7月31日
 - (3) 上斗内Ⅴ遺跡 調査面積 1,250㎡
調査期間 昭和57年6月28日～7月15日
4. 調査担当者は以下のとおりである。
専門調査員 大原一則、専門調査員 高橋与右エ門
5. 発掘調査によって検出された遺構は次のとおりである。
 - (1) 上斗内Ⅲ遺跡 ①竪穴住居跡-7、②竪穴住居跡状遺構-4、③方形柱穴列-1
④円形柱穴列-1、⑤土 坑-7、⑥焼土遺構-5
 - (2) 上斗内Ⅳ遺跡 ①炭焼窯跡-1、②土 坑-3
 - (3) 上斗内Ⅴ遺跡 ①竪穴住居跡-1、②土 坑-1
6. 出土した遺物の中から、本報告書には次の点数を掲載した。
 - (1) 上斗内Ⅲ遺跡
〔土 器〕①縄文式土器（実測図・拓影図含む）-403点、②弥生式土器-2点
③北海道系土器-1点、④土師器-12点、⑤須恵器-1点
〔土 製品〕①土偶-11点、②スタンプ状土製品-2点、③土器片円盤-3点、④ボタン状土製品-1点、⑤土製管玉-1点、⑥土製勾玉-1点、⑦振り子状土製品-2点、⑧器種不明-2点
〔石 器〕①石鎌-22点、②石匙-42点、③石鎌-4点、④搔器-20点、⑤切削器-30点
⑥使用痕ある剥片-12点、⑦黒曜石剥片-2点、⑧磨製石斧-24点、⑨打製石

斧一1点、⑩凹み石一78点、⑪擦り石一4点、⑫磨石一19点、⑬叩き石一1点
⑭石皿一18点、⑮砥石一7点

〔石製品〕①石棒一9点、②装飾品一5点、③その他一2点

〔参考資料〕土偶一1点

(2) 上斗内IV遺跡

〔土器〕縄文式土器一4点

(3) 上斗内V遺跡

〔土器〕①縄文式土器一4点、②土師器一11点、〔石器〕凹み石一1点

7. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

I. 調査に至る経過——嶋調査課長

II. 調査の方法——大原

V. 検出された遺構と遺物の項は、遺構関係が

III. 遺跡の環境——大原・高橋

大原、遺物関係は高橋が担当した。

IV. 基本層序——大原

VI. まとめの項も前項Vと同様である。

8. 分析や鑑定は次の方々や機関に依頼した。(敬称略)

①石質鑑定 佐藤二郎(岩手県立大船渡農業高等学校教諭)

②C¹⁴測定 学習院大学

③木炭の樹種鑑定 早坂松次郎(社団法人 岩手県木炭協会)

9. 遺跡地内の基準点測量は東日本測量KKに依頼し、次のような結果が得られている。

基点一 X = -1,209.41m, Y = +22,829.06m, H = 313.472m

基点二 X = -1,261.02m, Y = +22,656.61m, H = 319.75m

10. 本遺跡に対する発掘調査では次の機関や方々からご協力を賜った。(敬称略)

西根町役場

西根町教育委員会

高橋昭治

11. 現地調査においては、西根町寺田・荒木田地区の方々、また、室内整理は当センターの室内整理作業員の協力を得た。

12. 本遺跡群の調査結果については、現地説明会資料および昭和57年度調査略報の中で公表されているが、その後の整理や検討によって若干の訂正や補正した点もあり、本書の報告をもって最終報告とする。

13. 本遺跡の調査によって得られた一切の資料(実測図・写真・全遺物)は当埋文センターが保管している。

14. 本報告書の編集・レイアウト・校正は高橋が担当した。

本文目次

序	①
センター組織	②
例言	③
I. 調査に至る経過	4
II. 調査の方法	4
1. 野外調査	4
2. 室内整理	8
III. 遺跡の環境	12
1. 立地	12
2. 地形	13
3. 西根町の遺跡	13
IV. 基本層序	22
V. 発見された遺構と遺物	27
1. 上斗内III遺跡	27
(1) 住居跡	27
(2) 竪穴住居跡状遺構	41
(3) 柱穴列遺構	47
(4) 土坑	51
(5) 焼土遺構	56
(6) 遺構外の遺物	72
2. 上斗内IV遺跡	147
(1) 炭焼窯跡	147
(2) 土坑	150
(3) 遺物	151
3. 上斗内V遺跡	151
(1) 住居跡	151
(2) 土坑	153
(3) 遺物	153
VI. まとめ	156
1. 上斗内III遺跡	156
(A) 遺構	156
(B) 遺物	159
2. 上斗内IV遺跡	166
(1) 遺構	166
(2) 遺物	166
3. 上斗内V遺跡	167
(1) 遺構	167
(2) 遺物	167

表目次

第1表 西根町内の遺跡一覧表	14・15	第3表 時代別・種類別遺跡数	16
第2表 種類別の遺跡数	16	第4表 出土石器計測一覧表	170~174

図版目次

第1図 岩手県全図	1	第3図 遺跡周囲の地形 ($\frac{1}{1,000}$)	3
第2図 遺跡の位置 ($\frac{1}{50,000}$)	2	第4図 調査範囲	5・6

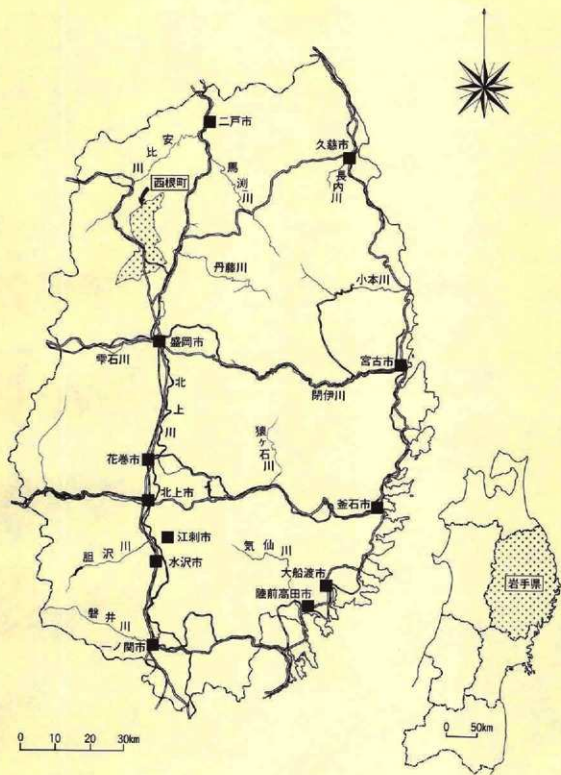
第5図	グリッド配置図(土器層・B・土器層) …… 9・10	第37図	遺構出土の遺物(石器-4) …… 71
第6図	西根町内の遺跡位置 …… 15・16	第38図	遺構外の遺物(土器-1) …… 74
第7図	基本層序 …… 23	第39図	遺構外の遺物(土器-2) …… 75
第8図	上斗内Ⅲ遺跡遺構配置図 …… 25・26	第40図	遺構外の遺物(土器-3) …… 76
第9図	D-12住居跡 …… 28	第41図	遺構外の遺物(土器-4) …… 80
第10図	D-15住居跡 …… 30	第42図	遺構外の遺物(土器-5) …… 81
第11図	E-17住居跡 …… 32	第43図	遺構外の遺物(土器-6) …… 82
第12図	F-07住居跡 …… 34	第44図	遺構外の遺物(土器-7) …… 83
第13図	F-11住居跡 …… 36	第45図	遺構外の遺物(土器-8) …… 84
第14図	F-14住居跡 …… 38	第46図	遺構外の遺物(土器-9) …… 86
第15図	F-16住居跡 …… 48	第47図	遺構外の遺物(土器-10) …… 87
第16図	E-05竪穴住居跡状遺構 …… 42	第48図	遺構外の遺物(土器-11) …… 88
第17図	E-07竪穴住居跡状遺構 …… 43	第49図	遺構外の遺物(土器-12) …… 89
第18図	F-09竪穴住居跡状遺構 …… 45	第50図	遺構外の遺物(土器-13) …… 91
第19図	F-03竪穴住居跡状遺構 …… 46	第51図	遺構外の遺物(土器-14) …… 92
第20図	E-04円形柱穴 …… 48	第52図	遺構外の遺物(土器-15) …… 93
第21図	F-05方形柱穴 …… 50	第53図	遺構外の遺物(土器-16) …… 94
第22図	土坑(土器層・B・土器層) …… 52	第54図	遺構外の遺物(土器-17) …… 95
第23図	土坑(土器層・B・土器層) …… 55	第55図	遺構外の遺物(土器-18) …… 96
第24図	D-11焼土遺構 …… 57	第56図	遺構外の遺物(土器-19) …… 99
第25図	焼土遺構(土器層・B・土器層) …… 59	第57図	遺構外の遺物(土器-20) …… 100
第26図	遺構出土の遺物(土器-1) …… 60	第58図	遺構外の遺物(土器-21) …… 101
第27図	遺構出土の遺物(土器-2) …… 61	第59図	遺構外の遺物(土器-22) …… 102
第28図	遺構出土の遺物(土器-3) …… 62	第60図	遺構外の遺物(土器-23) …… 103
第29図	遺構出土の遺物(土器-4) …… 63	第61図	遺構外の遺物(土器-24) …… 104
第30図	遺構出土の遺物(土器-5) …… 64	第62図	遺構外の遺物(土器-25) …… 105
第31図	遺構出土の遺物(土器-6) …… 65	第63図	遺構外の遺物(土器-26) …… 106
第32図	遺構出土の遺物(土器-7) …… 66	第64図	遺構外の遺物(土器-27) …… 107
第33図	遺構出土の遺物(土器-8) …… 67	第65図	遺構外の遺物(土器-28) …… 109
第34図	遺構出土の遺物(石器-1) …… 68	第66図	遺構外の遺物(土器-29) …… 110
第35図	遺構出土の遺物(石器-2) …… 69	第67図	遺構外の遺物(土器-30) …… 112
第36図	遺構出土の遺物(石器-3) …… 70	第68図	遺構外の遺物(土器-1) …… 114

第69回 遺構外の遺物(土製品-2) ……115	第86回 遺構外の遺物(石器-17) ……135
第70回 遺構外の遺物(石器-1) ……117	第87回 遺構外の遺物(石器-18) ……136
第71回 遺構外の遺物(石器-2) ……118	第88回 遺構外の遺物(石器-19) ……137
第72回 遺構外の遺物(石器-3) ……119	第89回 遺構外の遺物(石器-20) ……138
第73回 遺構外の遺物(石器-4) ……120	第90回 遺構外の遺物(石器-21) ……139
第74回 遺構外の遺物(石器-5) ……122	第91回 遺構外の遺物(石器-22) ……140
第75回 遺構外の遺物(石器-6) ……123	第92回 遺構外の遺物(石器-23) ……141
第76回 遺構外の遺物(石器-7) ……124	第93回 遺構外の遺物(石器-24) ……142
第77回 遺構外の遺物(石器-8) ……125	第94回 遺構外の遺物(石器-25) ……143
第78回 遺構外の遺物(石器-9) ……126	第95回 遺構外の遺物(石製品-1) ……144
第79回 遺構外の遺物(石器-10) ……127	第96回 遺構外の遺物(石製品-2) ……145
第80回 遺構外の遺物(石器-11) ……128	第97回 土偶(参考資料) ……146
第81回 遺構外の遺物(石器-12) ……130	第98回 B-16炭焼窯跡 ……148
第82回 遺構外の遺物(石器-13) ……131	第99回 土坑(A-E・H・F-18) ……149
第83回 遺構外の遺物(石器-14) ……132	第100回 B-20住居跡 ……152
第84回 遺構外の遺物(石器-15) ……133	第101回 C-24土坑 ……154
第85回 遺構外の遺物(石器-16) ……134	第102回 遺物(A, 土器IV遺構) ……155

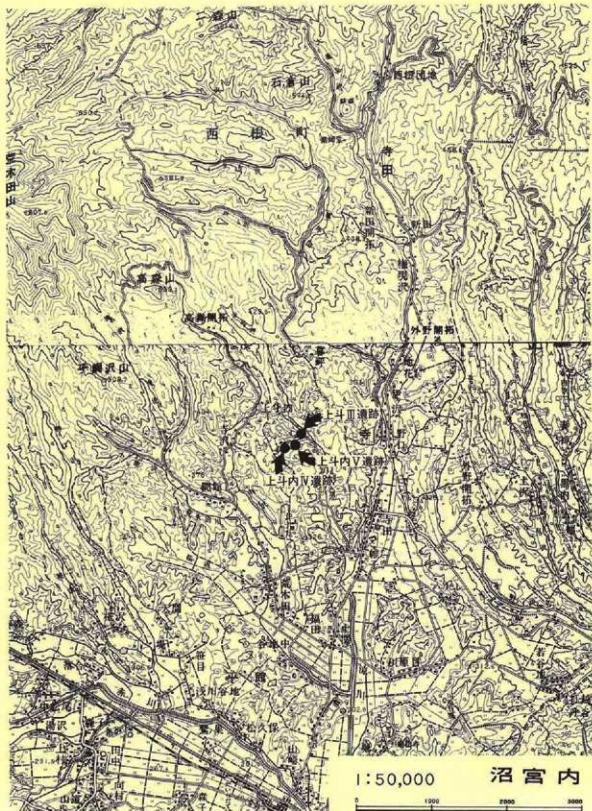
写真図版目次

PL-1 上斗内III遺跡の遠景・近景 ……177	PL-16 遺物(A, D-12住居跡, B, E-12住居跡) ……192
PL-2 上斗内III遺跡調査後全景 ……178	PL-17 遺物(A, E-11住居跡・B, F-11住居跡, C, F-11住居跡, D, F-11住居跡) ……193
PL-3 調査風景 ……179	PL-18 遺物(A, F-16住居跡, B, E-16住居跡, C, E-17住居跡, D, E-16住居跡, E, F-16住居跡) ……194
PL-4 調査風景 ……180	PL-19 遺物(A, E-10内房跡, B, E-10内房跡, C, E-10内房跡, D, E-10内房跡, E, E-10土坑) ……195
PL-5 A. 現地説明会の状況 B. 基本計画 ……181	PL-20 遺物(A, F-16土坑, B, D-11土坑) ……196
PL-6 A, D-12住居跡 B, D-12住居跡 ……182	PL-21 遺物(A, D-12住居跡, B, D-12住居跡) ……197
PL-7 A, E-11住居跡 B, F-11住居跡 ……183	PL-22 遺物(E-17住居跡) ……198
PL-8 A, F-11住居跡 B, F-11住居跡 ……184	PL-23 遺物(A, F-11住居跡・B, F-11住居跡, C, E-17住居跡, D, D-11土坑, E, F-11住居跡, F, F-11土坑, G, 遺構外) ……199
PL-9 A, F-11住居跡 B, E-11住居跡 ……185	PL-24 遺物(第I群土器) ……200
PL-10 A, E-11住居跡・遺構 B, E-11住居跡・遺構 C, E-11住居跡・遺構 ……186	PL-25 遺物(A, 第I群土器・B, 第II群土器, C, 第III群土器・D, 第IV群土器) ……201
PL-11 A, F-11住居跡・遺構 C, E-11住居跡・遺構 ……187	PL-26 遺物(A, 第IV群土器・B, 第VI群土器, C, 第VII群土器) ……202
PL-12 A, E-11住居跡・遺構 B, E-11土坑・C, E-11土坑 ……188	PL-27 遺物(第VI群2類土器) ……203
PL-13 A, E-11土坑・B, E-11土坑, C, F-11土坑・D, F-11土坑 ……189	PL-28 遺物(A, 第VI群土器, B, 第VI群土器) ……204
PL-14 A, E-11土坑・B, D-11土坑, E, F-11土坑 ……190	PL-29 遺物(第VI群3類土器) ……205
PL-15 遺物(D-12住居跡) ……191	

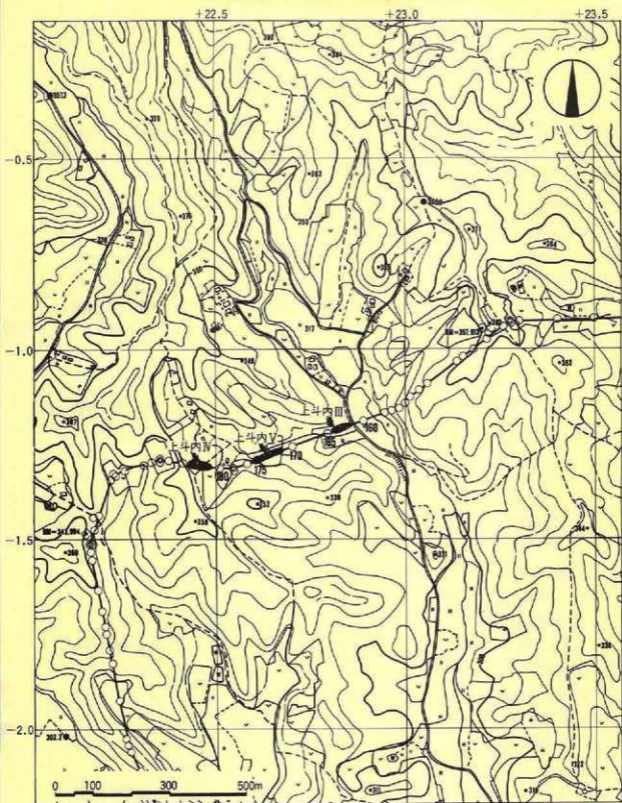
P L—30	遺物 (A. 第VI群I類土器・B. 第VI群II類土器) ……………	206	P L—45	遺物 (A. 磨石・B. 磨石)	…221
P L—31	遺物 (第VI群4類土器) ……………	207	P L—46	遺物 (磨製石斧・凹み石) ……	222
P L—32	遺物 (A. 第VI群I類土器・B. 第VI群II類土器) ……	208	P L—47	遺物 (凹み石) ……………	223
P L—33	遺物 (A. 第VI群I類土器・B. 第VI群II類土器) ……	209	P L—48	遺物 (凹み石) ……………	224
P L—34	遺物 (A. 第VI群I類土器) ……………	210	P L—49	遺物 (磨石・磨石・石皿・叩き石) ……	225
P L—35	遺物 (A. 第VI群I類土器) ……………	211	P L—50	遺物 (石皿・砥石・石棒) ……	226
P L—36	遺物 (第IX群土器) ……………	212	P L—51	遺物 (石製品) ……………	227
P L—37	遺物 (A. 第IX群土器・B. 第IX群土器) ……	213	P L—52	參考資料 (土偶) ……………	228
P L—38	遺物 (第XII群土器) ……………	214	P L—53	上斗内IV遺跡 (A. 遺物・B. 遺物)	…229
P L—39	遺物 (A. 第XII群土器・B. 第XII群土器) ……	215	P L—54	遺構 (A. 第I—II土坑・B. F—II土坑) ……	230
P L—40	遺物 (A. 第XIV群土器・B. 第XIV群土器・C. 第XIV群土器・D. 第XIV群土器・E. 土器・F. 土器) ……	216	P L—55	上斗内V遺跡 (A. 遺物・B. 遺物) ……	231
P L—41	遺物 (土偶・土製品) ……………	217	P L—56	上斗内V遺跡 (A. 遺物・B. 遺物) ……	232
P L—42	遺物 (A. 土器・B. 土器) ……………	218	P L—57	遺構 (B—20住居跡) ……………	233
P L—43	遺物 (石匙) ……………	219	P L—58	遺構 (C—24土坑) ……………	234
P L—44	遺物 (搗器・切削器) ……………	220	P L—59	遺物 (上斗内IV・V遺跡) ……	235



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置



第3図 遺跡の位置と周囲の地形

I. 調査に至る経過

岩手町、西根町、松尾村を結ぶ、県営岩手地区広域農道整備事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地のとり扱いについての協議は、昭和54年度に入り、県農政部農地開発課と県教育委員会事務局文化課との間で、遺跡台帳、遺跡基本地図をもとに開始された。

昭和55年6月に文化課では、事業計画ルートに沿って分布調査を行なった。その結果、岩手町25遺跡、西根町14遺跡、松尾村4遺跡の計41遺跡が確認されている。

文化課では、この結果をもとに、各遺跡の立地や遺物の出土状況とルートのかかわりや工事工法の変更を含めて検討し、9月に農政部と協議をもち、止むを得ず工事によって破壊されたり遺跡の現況を大きく変える遺跡について事前の発掘調査を行うことにし、発掘調査実施遺跡のリストアップをした。これをもとに工事着工年度にあわせて計画的に発掘調査をすすめることとした。

以上の調整の後、昭和57年5月から当埋文センターが岩手北部土地改良事業所との契約にもとづいて、西根町上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの三遺跡について発掘調査を実施した。なお上斗内Ⅳ遺跡は、調査進行過程において調査面積を現地立会の上変更した。

II. 調査と整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の呼称

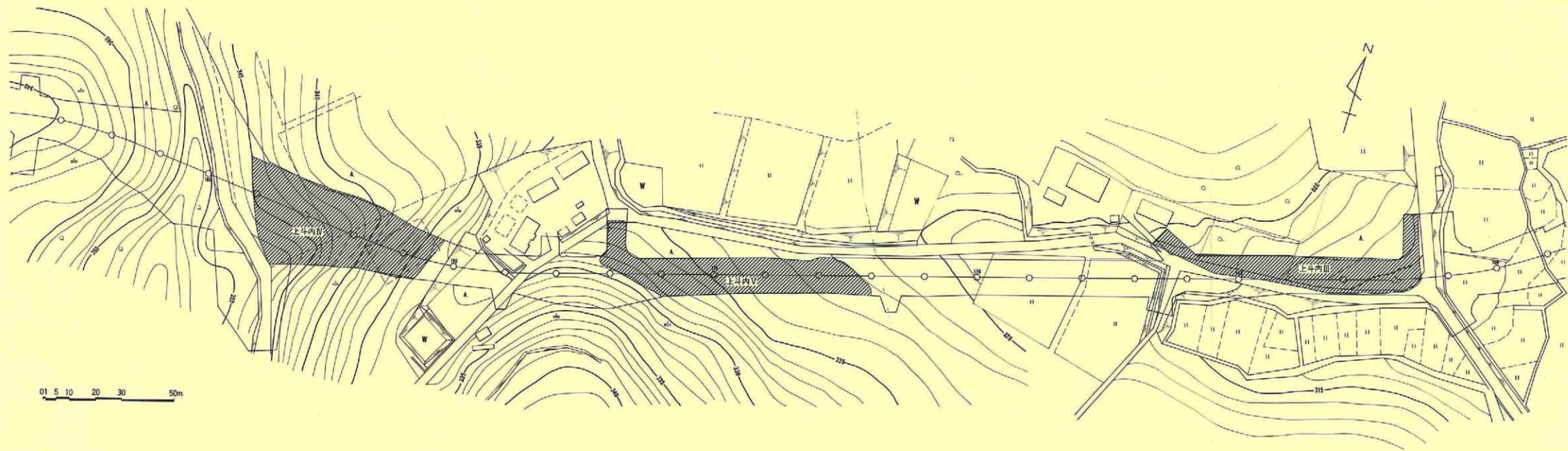
調査区域は、三遺跡いずれも広域農道建設予定地内を範囲とするため、調査区の設定にあたっては、農道建設に伴って設置された路線の中心杭を利用した。

[上斗内Ⅲ・Ⅴ遺跡]

この二遺跡地内の農道路線予定地が一直線上にあることから、調査区は上斗内Ⅲ遺跡内の中心杭No163を基点-1 ($X=1,209.41m \cdot Y=+2,2829.06m \cdot H=313.472m$)、上斗内Ⅴ遺跡内の中心杭No172を基点-2 ($X=-1,261.02 \cdot Y=+22,656.61m \cdot H=319.75m$)とし、この2点間を直線で結び中軸線とした。

次に、両遺跡の調査区内に各々その中軸線を基線として、4m間隔の平行または直交する直線を設定し、全面を区画した。したがって調査区最小単位は4m×4mとなる。

さらに、上斗内Ⅲ遺跡では、中軸線に平行する区画線に南からA～Iを、中軸線に直交する区画線に対しては東から、01～20を付し、グリッド名はこれの組み合わせでA-01・B-01と呼



第4図 調査範囲

称した。なお基点-1はE-10の交点、基点2はE-07の交点にあたる。

遺構名は、調査区域内での位置をも判るように、グリッド名と遺構の種別名を組み合わせ、A-12竪穴住居跡・A-01土坑というように呼称した。

〔上斗内IV遺跡〕

本遺跡についても前の二遺跡と基本的には変りがない。具体的には中心杭Na182とNa184の2点間を直線で結び中軸線とした。調査区は、さらに中心線に直交する軸線を入れて4m×4mに区画した。中心杭Na182はグリッドE-11の交点になる。

遺構名の命名と呼称は前の二遺跡と同じである。

(2) 粗掘り遺構検出

〔上斗内III遺跡〕

調査対象面積は約900㎡で、他の二遺跡のそれに比較して狭いが、表土に包含する遺物が多いことから、重機を利用した粗掘りは、遺物の損壊あるいは粉失のおそれがあったことや調査区域が調査時にも畑地として利用されていたので土が軟かいことなどから、人力によって行った。

その具体的な方法は、まず、調査区域内の遺物を表面採集した後、調査区の北端線上に土層観察のための畦を設定し、これに沿って東西に巾約30cmのトレンチ掘りを行った。さらに、南北にも20m間隔(5グリッド)に同様のトレンチを入れ、遺構検出面の確認を行った。

次に、各グリッドごとに順次層位を確認しながら掘り下げていった。現表土(基本層序第I層)は層厚約10~25cmで、比較的多くの遺物を包含している。基本層序第II層は、層厚約10~25cmを測り、多量の遺物を含んではいるが、遺構は検出されなかった。

遺構が確認されたのは、基本層序第III層上面であり、本層からは、遺構以外に縄文時代早期中葉に属する土器も若干出土している。

遺構の検出は困難を極め、当初確認されたのは数棟の竪穴住居跡、土坑、焼土遺構だけである。特に、竪穴住居跡状遺構・円形・方形柱穴列等は、数度にわたる遺構検出作業の結果、検出されたものである。

〔上斗内IV・V遺跡〕

上斗内IV遺跡の対象面積は2,550㎡、同V遺跡のそれは1,250㎡で、先の同III遺跡よりも広い。表面採集される遺物が極端に少なく、また、検出面確認のためトレンチ掘り(両遺跡ともグリッド中軸線に直交する巾1mのトレンチを任意の位置に数ヶ所設定し、確認している)を行なった結果、表土層が厚く(60cm~90cm)、遺物包含層も存在しないことが明確になったことや、調査期

間の制約等の理由から、粗掘りはパワーシャベルを利用した。

粗掘りの結果、上斗内IV遺跡での検出面は、基本層序第II層であることが確認され、さらに、遺構は北向き緩斜面にのみ存在することも明らかになった。

一方、上斗内V遺跡では、表土が3～4層に細分され、その全体層が90cm位の層厚に達する部分もあることや、遺構検出面が基本層序第II層であることも判明した。

(3) 遺構精査

遺構の精査は、各遺跡とも竪穴住居跡は4分法、その他の遺構は2分法を原則とした。また、埋土の掘り上げや遺物の取り上げは、層位ごとに確認して行なった。遺構内の遺物の中で、埋土上位のものは層位を確認し一括して取り上げたが、大形破片や完形土器、そして床面直土からの出土遺物については、平面図に記入し、写真撮影の後一点ごとに取り上げた。

(4) 記 録

遺構の実測図は、平面図・断面図ともに縮尺1/20を原則としたが、竪穴住居跡に伴う柱穴状土坑や炉跡および焼土遺構は1/10の縮尺で作成した。

平面図の実測は、地面にグリッド軸に沿った1m×1mの水糸を張り、いわゆる遺り方測量の方法を応用した。

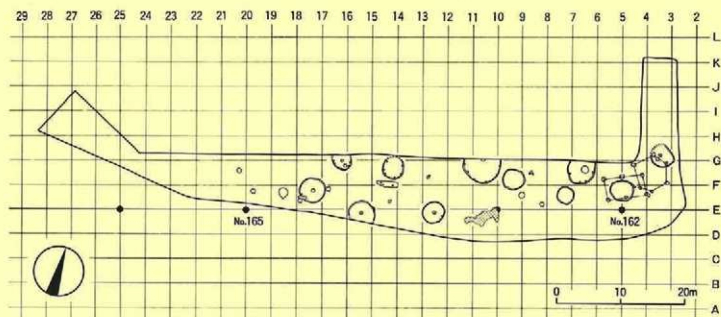
土層の区分名は、基本層序はローマ数字で上位からI・II……とし、細分される場合はローマ数字でa・b……を付し、I a・II aのようにした。遺構内の埋土はアラビア数字で上位から1・2……とした。なお、土層の色調は「新版標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)によった。

写真撮影は、6cm×7cm(モノクロ)、35mm版(モノクロ・カラークバーサル)の3種を1組にし、適宜使い分けた。

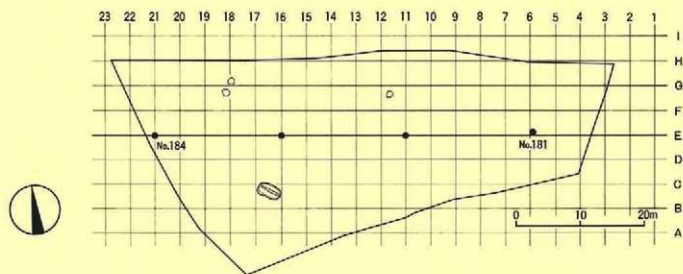
2. 室内整理

遺構の実測図に対する点検・修正は野外調査中に終了していたが、室内整理の段階で再度点検・確認をした上、報告書作成用トレースを行った。

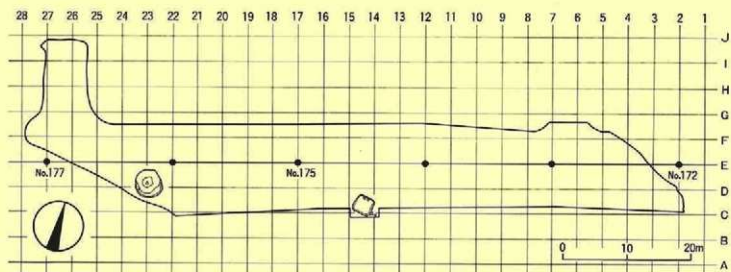
遺物については、野外調査中に雨天時等を利用して洗浄・注記・大まかな仕分けと接合・復元の一部まで終了していた。そこで、室内整理では、残りの接合・復元・仕分けの吟味から始めた。ついで、遺物の実測・拓影図の作成を行なった。なお、これらの実測図・拓影図の作成、トレースはすべて実物大で行なった。



A. 上斗内Ⅲ遺跡



B. 上斗内Ⅳ遺跡



C. 上斗内Ⅴ遺跡

第5図 グリッド配置図

〔遺物〕

出土遺物はすべて実物大で実測やトレースをしたが、本報告書では次のように縮尺し、各ページにその縮尺率を明記した。

○土器・土製品類 実測図—1/4・1/3・1/2・2/3 拓影図—1/2

○石器・石製品類 剥片石器1/2・2/3 礫石器1/3・1/4 石製品1/2・実大

また、遺物番号は次のようにし、図版中の番号と写真中の番号は一致させている。

○土器 上斗内Ⅲ遺跡の場合は、遺構内出土・遺構外出土に大別して、それぞれ一番から登録したが、同Ⅳ・Ⅴ遺跡の場合は遺構出土のものがないので、Ⅲ遺跡の遺構外出土の後に続けて連番とした。

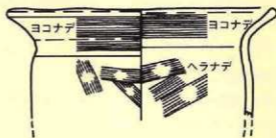
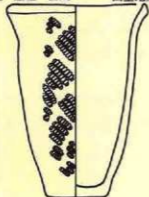
○土製品 遺構内出土・遺構外出土のものを合せて、アルファベットでA～Wまで付した。

○石器・石製品は遺構内出土・遺構外出土のものを一括して、器種ごとに分類した後一覧表を作成し、その登録番号を図版にも付した。なお、同Ⅴ遺跡出土のものも同Ⅲ遺跡のもの最後に連番で一括した。

なお、土器の出土地点や法量、土師器については調整技法については次のように示した。

凡例1

口径・底径・器高 出土地点



〔写真〕

各遺跡とも遺構や遺物出土状況の写真は、野外調査で撮影したものの中から選択して使用し、

09 上斗内Ⅲ遺跡の一部の遺構で撮影漏れがあったほかは、全遺構について掲載した。

遺構関係の写真は野外調査で撮影したものの中から選択して使用した。遺物は、本報告書に掲載するものに限って整理の段階に撮影した。

本報告書の全体的な凡例は、次のとおりである。

〔遺 構〕

遺構配置図は、野外調査中に縮尺1/20で作成した遺構平面図を1/100に縮小して作成し、本報告書には縮尺1/400で掲載した。

遺構関係の実測図は、野外調査で作成した縮尺1/20・1/10の原図をそのままトレースして図版を組み、規模に応じて適宜1/60・1/40・1/30・1/20の縮尺にし、各ページごとに縮尺を明記した。

また、遺構実測図の中で、次のことについてはアルファベットやスクリーントーンで示した。

S—礎 P₀—土器 P₁・P₂・P₃……P_n—柱穴状土坑 P—土坑

凡例2



遺物の写真は、実測図・拓影図に掲載したものの中で、一部撮影漏れがあったが、ほとんどのは掲載した。縮尺率については、遺構は任意とした。遺物関係は次のようにした。

○土器・土製品—土器完形品は、不定縮尺・土器片と土製品は縮尺約1/2

○石器、石製品—剥片石器は縮尺1/2、礫石器は縮尺1/3・1/4、石製品は2/3・実大

〔原稿執筆〕

原稿の執筆分担については、巻頭例言でも記したが、執筆は野外調査を担当した大原一則と高橋与右門で協議・連絡を重ねながら行なった。執筆を担当した部分の文末には、それぞれ担当者名を明記して文責を明らかにした。 (大原)

III. 遺跡の環境

1. 立 地

本遺跡群は、岩手郡西根町寺田字上斗内地内に所在する。西根町は、田頭村、西根村、平館村、寺田村の旧4村の合併によって生れた町であり、本遺跡群は、旧寺田村に属している。寺田地区は、国鉄花輪線大更駅に接するように走る国道282号線を大更から約4km北上、さらに、平館地区から旧津軽街道に入り、約5.5km北上した地点に位置する。その寺田地区内を南流する源川に

かかる斗内橋を渡り、町道帷子一荒木田線を西方に約100m進んだ地点から右折、約1.5km進むと上斗内に至る。本遺跡群は、上斗内内地内に入り、T字路を左折した地点に所在する。

上斗内III遺跡は、そのT字路を左折した右側にある。上斗内III遺跡から60～70m西方に直進すると上斗内V遺跡に至り、さらに約80m西進すると上斗内IV遺跡がある。

三遺跡中、上斗内III遺跡は、涼川の支流斗内川と斗内川より派生した開折谷とに挟まれた標高35m前後の丘陵の南側裾部に貼りついた低位段丘に立地する。そして、上斗内V遺跡は、上斗内III遺跡の立地する丘陵地の南側に相対する標高320m前後の丘陵地の北側斜面裾部に立地する。そして、本遺跡の北東部は、一部埋没谷側端にかかっている。上斗内IV遺跡は、上斗内III・V遺跡の西方の東に突出した丘陵地の標高約344m前後の尾根に沿って立地し、遺跡の広がりやせ尾根を挟んで南・北両斜面に跨がる。(大原)

2. 地 形

東に北上山地、南流する北上川を挟んで西には奥羽山脈が南・北に連なる。遺跡の所在する西根町は、その奥羽山脈の北部端の裾部に位置する。つまり、本遺跡群は、北部に七時兩山、西に八幡平、南部に岩手山といわゆる東日本火山帯に属する連峰によって取巻かれ、その中央部の凹地に位置することになる。

この凹地域は、低高度の丘陵地、北上川およびその支流の松川、赤川、一方井川沿いの段丘や氾濫原、そして、丘陵間、段丘上に残存的に残る幾つかの孤立山体より構成されており、そのうち本遺跡群の立地する寺田地区は、松川の支流涼川沿いの丘陵低位段丘上にある。

そして、上斗内III遺跡は、南流する涼川の支流斗内川上流域に形成された氾濫原の西側の低位段丘べりに立地し、地形的には3～8°位の南向き緩斜面上にある。同じく上斗内V遺跡は、III遺跡の西端から70～80m西の段丘北向き斜面の裾部にあり、地形的には、3～20°の傾斜をもつ急・緩斜面上に立地する。さらに、上斗内IV遺跡はV遺跡の西端から西約100mにあるほぼ南北に走る丘陵から東に突出した尾根づたいに広がっているが、地形的には北向き斜面が緩やかで、南向き斜面は北側に比して急斜面を呈する。(大原)

3. 西根町の貴跡

西根町内には138ヶ所の遺跡が知られている(昭和57年10月末現在の県教委資料による)。これらの遺跡と性格・所在地等は第1表と第6図、性格別の集計表は第2表に、そして、時代別・性格別集計表は第3表に示しておいた。なお、第3表の遺跡合計数と登録遺跡数が合致しないのは、第3表は重複遺跡を1時代1遺跡として集計したからである。

第1表 西根町内の遺跡一覧表

番号	図帳コード	遺跡コード	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1	J E-85-01	0300	稲野野一里塚	一里塚		寺田遺野沢	墳墓
2	J E-95-01	0305	白坂墓石	祭祀跡	白面瀬音倉、鉄製鏡(円形)	寺田白坂	
3	J E-95-01	2253	龍野高地集落	瓦跡跡	土器、縄文中期、本瓦	寺田龍野	
4	K E-05-01	0013	瀬ノ沢	散布地	土器、縄文中期	箕本田原館	
5	K E-05-01	0041	子飼山山麓集落	瓦跡跡	土器、縄文中期	箕本田原館	
6	K E-05-01	1126	寺沢Ⅰ	瓦跡跡	土器、縄文晩期	箕本田原第1地割寺沢	
7	K E-05-01	1207	上小内Ⅰ	瓦跡跡	土器、縄文	寺田上小内	
8	K E-05-01	2101	開館Ⅰ	瓦跡跡	土器、縄文中期	箕本田	
9	K E-05-01	2206	九ツ森	遺構		箕本田第7地割	
10	K E-05-01	0360	寺田龍野	散布地	縄文片	寺田龍野、野口	
11	K E-05-01	0383	野口Ⅰ	散布地	縄文片	寺田野口	
12	K E-05-01	0390	上小内Ⅱ	散布地	縄文片	寺田上小内	
13	K E-05-01	0395	野口Ⅱ	散布地	縄文片	寺田野口	
14	K E-05-01	1218	上小内Ⅲ	散布地	縄文片	寺田上小内	
15	K E-05-01	1224	上小内Ⅳ	散布地	縄文片	寺田上小内	
16	K E-05-01	1226	上小内Ⅴ	散布地	縄文片、土器器	寺田上小内	
17	K E-05-01	2189	箕本田Ⅰ	散布地	土器器	箕本田	
18	K E-05-01	2240	箕本田Ⅱ	跡跡		箕本田	
19	K E-05-01	2214	箕本田Ⅲ	散布地	縄文、土器器	箕本田	
20	K E-05-01	1017	小曲沢Ⅰ	散布地	土器器	箕本田14	
21	K E-05-01	1026	小曲沢Ⅱ	散布地	縄文(後)土器	箕本田14-20	
22	K E-05-01	1110	長瀬沢	散布地	縄文(後)土器	箕本田14-45-1	
23	K E-05-06	1119	寺沢Ⅱ	瓦跡跡	縄文土器	箕本田1-6	
24	K E-05-06	1123	寺沢Ⅲ	瓦跡跡	縄文土器	箕本田1-7	
25	K E-05-06	1129	寺沢Ⅳ	瓦跡跡	縄文土器	箕本田1-60	
26	K E-05-06	1147	寺沢Ⅴ	瓦跡跡	縄文(後)土器	箕本田2-11-1	
27	K E-05-02	1156	寺沢Ⅵ	瓦跡跡	縄文土器	箕本田2-82	
28	K E-05-02	1160	原館Ⅱ	瓦跡跡	縄文(中)土器	箕本田2-64-12	
29	K E-05-02	2117	石倉(龍野)屋敷跡	屋敷跡		箕本田	
30	K E-05-02	2131	稲沢Ⅰ	散布地	土器器	箕本田4	
31	K E-05-02	2151	稲沢Ⅱ	瓦跡跡	縄文(後-後)土器	箕本田3	
32	K E-05-02	2176	稲沢Ⅲ	散布地	土器器	箕本田14	
33	K E-05-02	2178	稲沢Ⅳ	散布地	土器器	箕本田14	
34	K E-05-03	2271	箕本田集落	遺跡	土器器	箕本田	
35	K E-05-02	2272	変換Ⅱ	散布地	土器器	箕本田	
36	K E-05-02	2325	寺田龍野	川跡		寺田	
37	K E-06-01	0040	真前	散布地	土器縄文、縄文前期ツブ型	寺田真前	
38	K E-06-01	1030	野口古輪塔	祭祀地		寺田野口	
39	K E-06-01	2045	寺田	散布地	矢直土器	寺田第8地割	
40	K E-06-01	0058	野口Ⅲ	散布地	縄文	寺田野口	
41	K E-06-01	0071	野口Ⅳ	散布地	縄文片、土器器	寺田野口	
42	K E-15-01	0332	変換Ⅰ	散布地	須恵器、縄文中期	箕本田第3地割	
43	K E-15-01	0329	春宮田	散布地	土器器	龍子春宮田	
44	K E-15-01	0342	上原	散布地	土器器、須恵器	上原第4地割	
45	K E-15-01	2290	山崎一里塚	一里塚		平館第6地割稲切	
46	K E-15-01	2234	稲切ノ手塚	跡跡	縄文土器	平館稲切	
47	K E-15-01	0063	稲沢	散布地	縄文土器	平館稲沢	
48	K E-15-01	0103	箕本田Ⅳ	散布地	土器	箕本田	
49	K E-15-01	0124	箕本田Ⅴ	散布地	土器器	箕本田	
50	K E-15-01	0202	変換Ⅲ	散布地	土器器	箕本田4-5-2	
51	K E-15-01	0217	新田	瓦跡跡	縄文土器	箕本田、龍野	
52	K E-15-01	0300	赤田館	跡跡		寺田	
53	K E-15-01	0372	上原館	跡跡		寺田上原	
54	K E-15-01	1261	山崎野	瓦跡跡		山崎	
55	K E-15-01	1273	向館	跡跡			
56	K E-15-01	1200	稲切館	跡跡		平館稲切	
57	K E-16-01	1000	川原目川	散布地	土器器、須恵器	龍子川原目	
58	K E-16-01	1101	川原目橋口	散布地	土器、後晩期土器器	龍子川原目	
59	K E-16-01	2000	稲野	散布地	土器、晩期土器器	平館第5地割稲切	
60	K E-25-01	1005	中村	散布地	土器器	田原第33地割中村	
61	K E-25-01	1157	開野松	散布地	土器器	田原第33地割	
62	K E-25-01	1221	大久保	瓦跡跡	縄文式土器、土器	平館大久保	
63	K E-25-01	1228	東原Ⅲ	瓦跡跡	土器、弥生(?)土器	平館東原Ⅲ	
64	K E-25-01	1310	東原Ⅳ	瓦跡跡	土器、弥生(?)土器	平館東原Ⅳ	
65	K E-25-01	2184	稲穂Ⅰ	散布地	土器器	田原第26地割	
66	K E-25-01	2275	北切	瓦跡跡	縄文土器、土器器	大夏北切	
67	K E-25-01	2291	谷田森	瓦跡跡	土器器	田原稲穂	
68	K E-25-01	2295	内前Ⅰ	散布地	土器器	大夏内前	
69	K E-25-01	0206	平館	跡跡		平館	

番号	区組コード	道路コード	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
70	K E-26-01	0103	堀切	敷布地	土器、縄文晩期	平野堀切	
71	K E-26-01	1061	溝合	集落跡	土器類	平野溝合	
72	K E-26-01	2128	浮筒平古墳	古墳	貫刺器、土師器、酒刀、鉄鏃、鉄輪、琥珀玉	大栗河川 大栗河川	墳域
73	K E-26-01	2128	洪川又平墓	敷布地		大栗河川	
74	K E-26-01	1065	白屋	敷布地	縄文	大栗白屋	
75	K E-26-01	2252	洪川	敷布地	土師器	大栗洪川	
76	K E-26-01	0011	柳岡山御	館跡		蟹沢	
77	K E-34-01	0256	陣野山	敷布地		平野第2地割	
78	K E-34-01	0268	扇石	敷布地	土器、縄文晩期、縄文晩期深鉢	平野第2地割	
79	K E-34-01	0309	森倉渡口	敷布地	土師器	田原第7地割	
80	K E-34-01	0315	金堂	敷布地	土師器	田原第7地割	
81	K E-34-01	0326	高宮	敷布地	土師器	田原第4地割	
82	K E-34-01	0376	狭立	敷布地	土器、縄文土師	平野第1地割	
83	K E-34-01	0378	留石五輪塚	墳墓		平野第1地割	
84	K E-35-01	0299	北村I	敷布地	土師器	大栗北村	
85	K E-35-01	0324	西原前	集落跡	土師器	大栗西原	
86	K E-35-01	0329	西原II	敷布地	縄文土器、土師器	大栗西原	
87	K E-35-01	1183	細中	敷布地	土師器	田原第3地割	
88	K E-35-01	1113	川崎	敷布地	土師器縄文(?)石鏃	田原第5地割	
89	K E-35-01	1124	大石	敷布地	土師器、石鏃	田原第5地割	
90	K E-35-01	1125	カウ塚森庭塚	塚塚	径10mの円形、高さ約2mの塚	田原第5地割	
91	K E-35-01	1145	柳下	敷布地	土師器	田原第5地割	
92	K E-35-01	1147	向坂	敷布地	土師器	田原第2地割	
93	K E-35-01	1168	津野新道田原遺跡石	遺構石		田原第1地割	
94	K E-35-01	1235	大栗稲荷神社	集落跡	土師器	大栗下町	
95	K E-35-01	1340	大栗I (A)	集落跡	土師器	大栗第21地割	
96	K E-35-01	1347	五百森IV	集落跡	土師器	大栗五百森	
97	K E-35-01	1361	大栗I (B)	敷布地	縄文式土器	大栗第19地割	
98	K E-35-01	1379	野中	集落跡	土師器	大栗野中	
99	K E-35-01	2114	土井坂	敷布地		平野第16地割	
100	K E-35-01	2137	新道	敷布地	土師器	田原第1地割	
101	K E-35-01	2153	蟹沢	敷布地	土器、縄文、土師器	平野第17地割	
102	K E-35-01	2191	中谷地	敷布地	土器、縄文、土師器	平野第23地割	
103	K E-35-01	2199	新道跡	館跡		大栗松川	
104	K E-35-01	2293	津野新道松川遺跡石	遺構石		大栗松川	
105	K E-35-02	0146	田原館	館跡		田原	
106	K E-36-01	0067	西原IV	敷布地	土師器	大栗西原	
107	K E-36-01	0126	西原V	敷布地	土器、縄文、土師器	大栗西原	
108	K E-36-01	0141	中腰加	敷布地	土師器	大栗中腰	
109	K E-36-01	0179	中腰I	敷布地		大栗中腰	
110	K E-36-01	0189	中腰II	敷布地	土器、縄文晩期	大栗中腰	
111	K E-36-01	0332	五百森I	キャンプ集落跡	土器、縄文晩期	大栗五百森	
112	K E-36-01	3039	上山後	集落跡	土師器	大栗山後	
113	K E-36-01	2116	山後	敷布地	土師器	大栗山後	
114	K E-36-01	2144	下山後	集落跡	土師器	大栗山後	
115	K E-36-01	0127	鬼袋I	敷布地	土師器	大栗鬼袋	
116	K E-36-01	0159	鬼袋II	敷布地	土師器	大栗鬼袋	
117	K E-36-01	1279	山手沢I	敷布地	土師器	大栗山手沢	
118	K E-36-01	1249	山手沢II	敷布地	土師器	大栗山手沢	
119	K E-36-01	1320	山手沢III	敷布地	土師器	大栗山手沢	
120	K E-36-01	1362	薬袋I	敷布地	土師器	大栗薬袋	
121	K E-36-01	1351	山手沢IV	敷布地	土師器	大栗山手沢	
122	K E-36-01	1364	薬袋II	敷布地	土師器	大栗薬袋	
123	K E-36-01	1396	栗ノ木谷地	敷布地	土師器	大栗第48地割	
124	K E-36-01	2246	土京	敷布地		大栗土京	
125	K E-36-01	2312	山後II	敷布地	土師器	大栗山後	
126	K E-37-01	1042	大石平	敷布地	土器、土師器	大栗大石平	
127	K E-44-01	2385	平の沢	敷布地	縄文晩期土器、石鏃	平野第22地割	
128	K E-44-01	2308	三ツ森山高地集落	集落跡		三ツ森山	
129	K E-45-01	0102	崎山	敷布地	土器、縄文晩期	平野第22・23地割	
130	K E-45-01	0214	ベコウたり	渡し堀跡		大栗	
131	K E-45-01	0221	おせわたし	渡し堀跡		大栗	
132	K E-45-01	0255	松川目	集落跡	土師器	大栗松川	
133	K E-45-01	0325	松森	敷布地	土師器	大栗第2地割	
134	K E-45-01	1256	松川	敷布地	土器、縄文後期	大栗第1地割	
135	K E-46-01	0018	上山後開拓	敷布地	土器、縄文中後期	大栗山後開拓	
136	K E-46-01	0197	寺沢目	集落跡	縄文(晩)土器	荒木田	
137	K E-34-01	0197	新道	館跡		平野第1地割	
138	K E-34-01	0230	沼利	敷布地		平野第1地割	

(昭教委文化課 昭和58年3月末現在の遺跡登録台帳による)

第2表 西根町内の性格別遺跡数

集落跡 遺物散布地	貝塚	郡宮 城跡	城館跡	社寺跡	生産遺跡	古墳 墳穴	その他の 墳墓	その他の 遺跡	合計
113			13			1	5	6	138

(文化行政の方針と計画 県教委文化課 昭和58年度による)

第2表は県教委文化課資料による遺跡の性格別遺跡数であるが、この表によると、集落跡や遺物散布地が113と圧倒的に多く、次いで、中世の城館跡が13ある。その他は古墳1、墳墓5となり、以上の区分に入らない遺跡(渡し場跡や一里塚等であろう)が6となっている。

文化課資料をもとに、現地における遺跡の性格や重複関係、さらに、新たに確認した資料をもとに再構成したのが第3表である。

第3表 時代別・性格別遺跡数

集落・遺物散布地				城館跡 屋敷跡	寺院跡	古墳	墓と塚	一里塚 道標	渡し場	合計
縄文	弥生	古代	不明							
53	2	68	7	13	2	1	4	4	2	156

(文化課資料や筆者の調査資料による)

集落跡や遺物散布地とされている113遺跡の中には、時代が重複する遺跡が17ヶ所あり、それらを1時代1遺跡としてみると、延130遺跡ということになり、時代別の遺跡数は縄文53、弥生2、古代68、不明7に分けられる。その次に多いのは城館跡や屋敷跡の13であるが、これは城館12と屋敷跡1に細分される。城館跡は中世に属することは明らかであろうが、屋敷跡(治左衛門屋敷跡)は時代的に明確でない面もある。遺構の平面的な観察では、堀や土塁で方形に区画された遺構で、環濠屋敷とか豪族屋敷と呼ばれる部類であり、時代的には必ずしも中世とは限らず、近世まで下る可能性もある。寺院跡としたのは先に触れた白坂観音である。この遺跡は、岩手町御堂の御堂観音、同町一方井大森どじの沢の小祠跡、そして二戸郡浄法寺町御山の八葉山天台寺等と同じ性格をもつという説もあり、古代の官道といわれる「みづのうみ流霞道」との関連で考えられている。御堂観音も北上山新通法寺・正覚院という寺院であり、古代の官道が岩手町御堂から一方井地区を経て、当町寺田から白坂観音(寿応山沢岡寺)を通り、さらに車之走峠を越えて二戸郡安代町の荒屋に至る道筋や、田代平を越えて浄法寺に出る道筋であったという説もある。その傍証が、岩手町一方井大森どじの沢小祠跡や当町寺田跡の白坂薬師から出土した平安時代の八稜鏡の存在なのかも知れない。何れにしても、興味のあることである。その他に寺院として荒木田の寺沢がある。これは、現在、平館字細切にある竜松寺が、昔は寺沢にあり、現在「寺窪」と呼ばれる場所がその故地であるという。これも白坂観音と同じよう



第6図 西根町内の遺跡位置図

に、寺院跡として登録しておく必要がありそうである。古墳1は、昭和35年8月に草間俊一氏によって調査された谷助平古墳である。この古墳は2基検出・調査され、遺跡そのものは開田によって消滅した。また、小田島祿郎氏の大正14年の報告の中に、当町荒木田に5基の古墳が存在するとして、九ツ森古墳群と命名して記載されているが、これは、現在九ツ森遺跡(墳墓)として登録されているものに相当するであろう。しかし、古墳ではなく、墳墓としている。墓や塚は4としたが、これは文化課分類の第2表では5としている。遺跡地名表の中から、古墳と一里塚を除いた墓・経塚・五輪塔を含めて集計しても4にしかならない。もう少し検討の余地がある。一里塚・道標は広義の交通関係遺跡ということができ、当町内で4ヶ所が知られている。これらはいずれも江戸時代の旧津軽街道に関連する遺跡で、この種の遺跡は県内でも数少なく貴重である。渡し場もある意味では交通遺跡と理解することができ、旧津軽街道が松川を渡川する際に使用された渡し場であり、その同岸が知られていることは貴重である。

当町内の遺跡の中で、特に注目しなければならない遺跡として、平笠の三ツ森山、荒木田の子飼沢山、寺田暮坪等にみられる、山頂部や尾根部の比較的標高の高い(三ツ森山623m、子飼沢山約500m、暮坪約430m)、現在の生活環境と全く隔絶した場所に位置する「高地集落」と呼ばれる遺跡がある。遺跡の詳細は他書(西根郷土史物語 近谷秀雄 昭和51年)に譲るとして、このような高地に集団で生活の根拠地を築き、集落を形成していく背景はなんであろうか。生業の問題、戦乱期の逃げ集落と関連しそうな事は考えられるが、正式に発掘調査されていない現在では、詳細なことは不明である。しかし、地元の研究者によって子飼沢山の竪穴住居跡から須恵器の破片が採集されている(遺物は筆者も実見している)。そのことから、このような集落は古代(奈良・平安時代)に属するらしいことは推定される。地元の人達の話によれば、このような遺跡は他にも多く存在するらしい。これから、特に注目して行く必要がある。

遺跡の分布について見てみよう。当町は平館の市街地と長者山を結ぶ地域を境にして、河川の流域が異なり、その両者間で遺跡の分布とその時期的な比率に差がみられる。

平館地区より北の寺田・荒木田地区は源川が南流しており、遺跡の多くはこの源川本流域とその支流、特に北から暮坪川・斗内川・寺沢・荒木田川・桜沢沿いに密集している。この地域には61の遺跡があるが、南部地域よりは少ない。それらの多くは先の川筋に面した低丘陵地の頂上部や裾部に立地し、平野部の上関・川原目・椎子地区には古代の遺跡が多い傾向がみられる。遺跡の時代や性格をみると、縄文時代34、古代19、寺院跡1、城館跡10、墓・五輪塔2、一里塚2となり、縄文時代の遺跡が多い。正式な発掘調査例がないので正確なことは不明であるが、掘切遺跡の縄文時代早期、地花遺跡の縄文時代前期・晩期、寺沢遺跡の縄文時代晩期等、優美な遺物を出土した遺跡がある。古代の遺跡としても、川原目遺跡出土の土師器は、当

地の7・8世紀の土師器として標式となり得るものである。城館遺跡は南部よりも多く、そのほとんどは台地の頂上部や尾根の舌端部を掘って区画した単郭式や複郭式が主である。中でも荒木田城跡は大規模な連郭式の城館跡として著名であり、城主の荒木田五郎は鎌倉時代の人物とか南北朝期の人物とかという説がある。この地域で特記すべきことは、幕坪遺跡から北海道系土器（北大式）と弥生時代の土器が出土していることである。これは上斗内III遺跡出土の北海道系土器（北大式）と併せ、注目すべきである。

平館より南の田頭・大更・平笠地区は、松尾村野駄方面から南流する赤川と、岩手山の北東裾部を東流する松川に挟まれた地域で、一部は泥流地形であることが知られており、南東部の玉山村との境界付近で、両河川は合流している。この地域には77ヶ所の遺跡があり、その中の49は古代に関する遺跡で、縄文時代の遺跡は19と先の北部とは全く異なる立地を示している。このことは、先の北部に比較して平担地や半湿地状の地域が多いことに関連するであろう。城館遺跡は4と少なく、この状況は、中世における水田開発の関係でみると、寺田・荒木田地区の方が開発された時期が古いことを示すものであろう。また、この地域には弥生時代の遺跡が2ヶ所知られている。もっとも遺跡数の多い古代の遺跡をみると、そのほとんどは平安時代の遺跡のようである。このように、北部地域では平安時代以前の遺跡も知られる中で、この地域では平安時代の遺跡が一気に増加するということは、興味ある問題である。

それでは、次に当町内の遺跡に対する調査研究の歴史を振り返っておこう。

当町内の遺跡をもっとも早く報告したのは小田島祿郎氏であろう。氏はその著「県下に於ける堅穴及「チャシ」に関するもの其一」^①を大正13年に発表し、寺田幕坪に埋没しきらいない10棟の堅穴が存在することを報告している。しかし、これは実際に発掘調査したものでなく、地表観察による結果の報告である。その時、他の遺跡では何棟か発掘しており、それらはいずれも土師器を出土したことから、古代の住居跡であろうとした。その後、氏は先にも触れた荒木田の九ツ森を古墳であろうとした^②。氏は大正13年に岩手町一方井の浮島古墳を調査し、その関連の中から九ツ森も古墳であろうとした。九ツ森にはその時5基の墳丘があり、それが尾根状台地に直線的に並んでいたことや、地名が九ツ森であることから、かつては9基あったものと推定している。また、墳丘には大小があるとともに、方墳と円墳があり、さらに上円下方墳もあることを述べている。この遺跡は、現在は古墳としてではなく、墳墓として登録されている。

昭和35年には草間俊一氏によって大更沢川の谷助平古墳が調査されている^③。この古墳は開田工事中に須恵器や土師器が出土したことから調査され、偶然発見された遺跡である。古墳は2基調査され、いずれも主体部に敷石をもっていた。詳細は報文に譲るとして、直刀・刀子・鉄鎌・琥珀玉・須恵器提瓶等が出土したことが注目された。昭和45年1月に寺田の川原目で開

田工事が行なわれ、その際に多量の土師器やカマド跡とおもれる焼土と河原石が検出されている^⑤。また、同年5月には同じく寺田の地花でも、開田や宅地造成によって縄文時代前期の土器や石器が大量に出土し、その際に石囲い炉も検出されている。これらは正式な発掘調査ではなく、工事中に偶然発見された遺構や遺物ではあるが、地元研究者によって収集・研究され、遺物の保存と報告書が刊行されていることは特筆すべきである。その後、昭和52年には東北縦貫自動車道関連として松川遺跡が調査され、遺構の検出はなかったものの縄文式土器や土師器が出土している^⑦。また、同じ関連として崩石遺跡が昭和53年に調査され、縄文式土器が出土している^⑧。

以上、簡単ではあるが当西根町内の遺跡について、その数や性格、分布状態、そして調査の歴史をみて来たが、これ以外にも、地元研究者が遺物を表面採集し、保管されており、この資料を調査することによって、遺跡の時代や性格を推定することができ、非常に有益かつ貴重である。(高橋)

参考文献

- ① 「00埋蔵文化財包蔵地市町村一覧」『文化行政の方針と計画昭和58年度』岩手県教育委員会事務局文化課昭和58年
- ② 小田島祿郎 「県下に於ける竈穴及「チャシ」に関するもの其一」『史蹟名勝天然記念物調査報告第4号』岩手県大正13年
- ③ 「第3、県北に於ける古墳の二・三」『史蹟名勝天然記念物調査報告第6号』岩手県大正14年
- ④ 草間 俊一 「岩手県西根村谷助平古墳」『岩手大学学芸学部年報第18巻』岩手大学昭和36年
- ⑤ 高橋 昭治 「西根町川原目出土の土器」『北上川上流地域の考古学資料(1)』北進考古学資料室1970年
- ⑥ 「西根町地花遺跡」『 (4) 』 1973年
- ⑦ 「松川遺跡」『岩手県文化財調査報告書第31集』岩手県教育委員会昭和54年
- ⑧ 「崩石遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集』岩手県埋蔵文化財センター昭和55年

IV. 基本層序

1. 上斗内III遺跡

(第7図A.PL-5B)

本遺跡は、丘陵地裾部の低位段丘に立地することからシルト層が多く観察される。また、遺跡内は、現在畑地として利用されているところでもあり、表土上位は、いわゆる攪乱を受けている。なお、掲載した基本土層断面図には表われていないが、II層とIII層に挟まれるように降下火山灰がブロック状に観察される。

以下、その概要を記す。

第I層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：現在も畑地として耕作されているためいわゆる攪乱状態を呈している。全体的には砂質シルトである。縄文時代の土器片が若干みられる。層厚は10～15cm。

第II層 Hue10YR1.7/1 黒色シルト：I層の起源となった土層である。全体的に砂質の団粒構造のシルトである。調査区全域を覆っており、縄文時代後期の土器片を多量に包含している。層厚は10～25cm。

第III層 Hue10YR3/2 黒褐色シルト：弱い粘性をもつシルトで、本遺跡の遺構検出面に相当する。ごく少量ではあるが縄文時代早期の土器片が出土することから再堆積層の可能性もある。なお、一部で細分可能と思われる箇所もみられたが、全体的には著しい相違はなくあえて細分はさけた。

第IV層 粘土質シルトで、本遺跡が立地する地形の基盤を構成する層である。なお、本層は2層に細分される。

a層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：

色調は一定しない。凝灰質の角礫小塊が若干混入している。b層に比して色調が暗いのは植性によるものと思われる。

b層 Hue 5 YR4/4 暗いオリーブ：

シルト層である。a層に比して色調が明るい。a層と起源を同じくし、特徴も近似する。

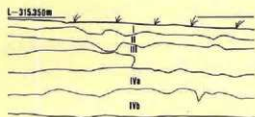
2. 上斗内IV遺跡

(第7図B.PL-53B)

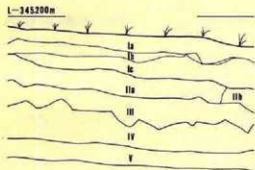
3遺跡中最も標高が高く急傾斜に立地するが、東西に走る尾根を境に南北両斜面で比較する

と南向き斜面が急である。本遺跡内は、元来は雑木林を形成する山林であったが、第二次世界大戦後当地に開拓地として二度にわたって入植・開墾、表土を除去し畑地として造成されたところであり、現在も採草地、野菜の栽培等で利用されている。したがって、調査区の現表土の一部（特に北向き斜面）は10～20cmと薄い。遺跡全体から概観すると、遺構検出面に達するには60～70cmも表土を除去しなければならない。今回の遺構検出面は第III層中位である。

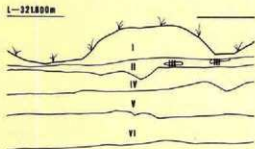
以下は、本遺跡の基本層序であるが、観察・記録した地点は、丘陵西端付近の調査区と調査区外との境界をなし、旧地形が保存されているところである。



A. 上斗内III



B. 上斗内IV



C. 上斗内V

縮尺 $\frac{1}{40}$

第7図 基本層序

第I層 本遺跡の表土を形成する層である。

a層 Hue10YR2/3 黒褐色シルト：
砂粒・角礫小塊が多量に混入しているほか、植物根・腐蝕した木の葉も多量に混入する。

b層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：
砂粒・角礫小塊が多量に混入する。
a層に比して少量であるが植物根・腐蝕した木の葉が混入する。

c層 Hue10YR2/3 黒褐色シルト：
砂粒・角礫小塊が多量に混入する。
若干の植物根が混入する。a・b層と起源を同じくする。

第II層 シルトで本遺跡の立地する地形の基盤をなす層である。

a層 Hue10YR3/2 黒褐色シルト：
硬くしまっている。微量の炭化物粒・砂礫粒・褐色のシルトがブロック状に混入する。

b層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：
硬くしまっている。a層に比して若干多量の炭化物粒・砂礫粒が混入する。また、暗褐色シルトもブロック状に若干混入する。

第III層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：

粘土質シルトで、II層に比してやや軟かい。若干の砂礫粒が混入する。IV層相当の粘土質シルトがブロック状に混入する。

第IV層 Hue10YR3/4 暗褐色シルト：

粘土質で若干の粘性がある。径1～2cmの角礫状浮石が散状に混入する。

第V層 Hue10YR4/4 褐色粘土：

ローム層で、IV層に比してやや大きい浮石が若干混入する。

3. 上斗内V遺跡

(第7図C.PL-56B)

本遺跡は、上斗内III遺跡の南側を東流する谷状の沢を挟んで相対する丘陵地裾部の北向き急斜面に立地する。さらに、遺跡の広がりには、遺跡の東寄りの一部が埋没谷にかかっている。したがって、遺跡の北東部ほど表土が深くなっている。

調査区内は、現在畑地として利用されているところであり、現表土に相当する第I層は攪乱層である。なお、遺構検出面は第IV層である。

以下は、本遺跡の基本層序の概略であるが、観察・記録した地点は、調査区西端の中央部付近である。

第I層 Hue10YR2/3 黒褐色シルト：耕作土であり現表土を形成する。

第II層 Hue10YR2/1 黒色シルト：砂粒が混入し、全体的にザラザラするがしまりは整い。

また、降下火山灰がブロック状に点在する。

第III層 Hue10YR2/2 黒褐色シルト：砂粒が混入するが、II層に比して細粒である。しまりに欠ける。

第IV層 本遺跡の立地する基盤なす層であり、遺構検出面でもある。

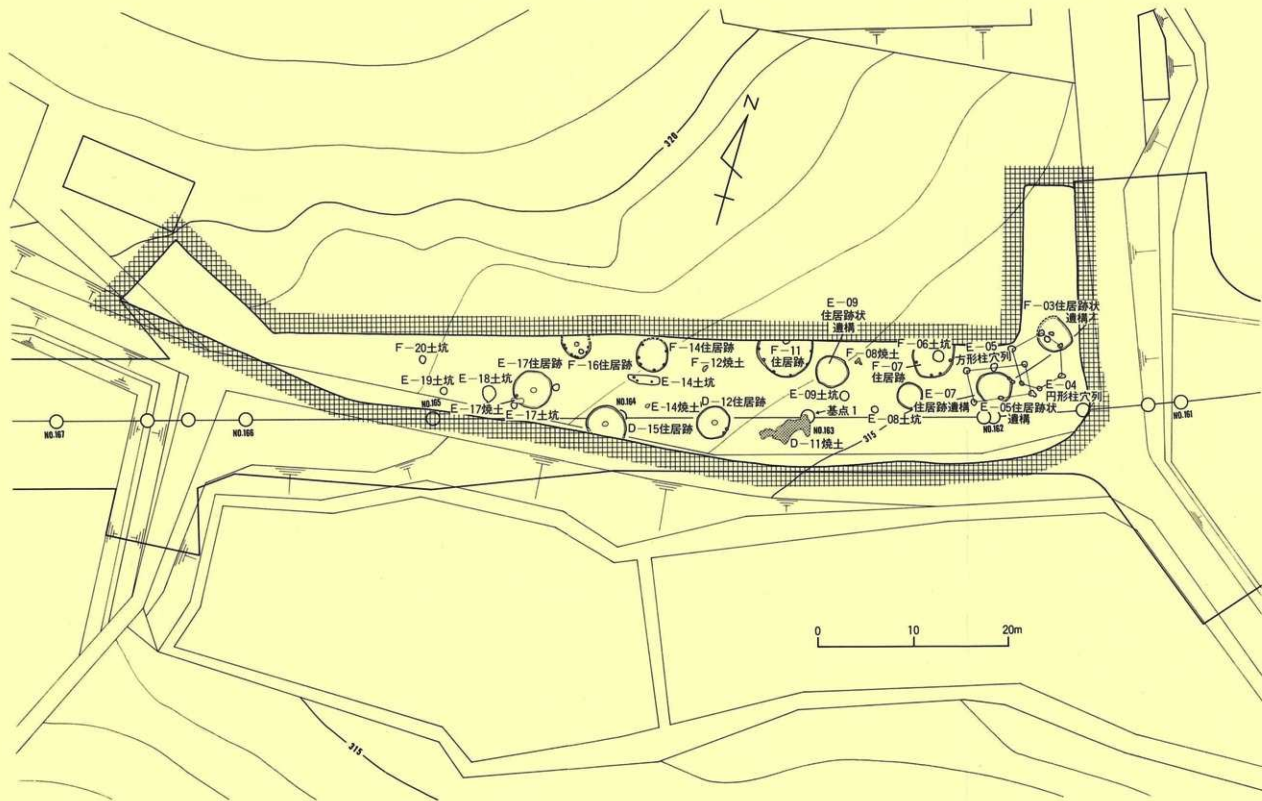
a層 Hue10YR2/1 黒色シルト：

堅くしまっている。粘土質で弱い粘性をもつ。混入物はみられない。

b層 Hue10YR4/4 褐色シルト：

粘土質でa層に比して若干粘性が強い。混入物はみられない。

(大原)



第8图 上斗内Ⅲ遺構配置図

V. 検出遺構と出土遺物

1. 上斗内川遺跡

本遺跡から検出された遺構は次のとおりである。(第8図、PL-2)

- ①竪穴住居跡 7棟 ②竪穴住居跡状遺構 4遺構 ③方形柱穴列 1棟
④円形柱穴列 1棟 ⑤土坑 7基 ⑥焼土遺構 5遺構

これらの遺構中、竪穴住居跡・方形柱穴列・円形柱穴列・焼土遺構(1遺構のみ)が、出土遺物等から縄文時代に所屬する。他の遺構については時期が不明である。

なお、竪穴住居跡状遺構については、平面形・規模的には竪穴住居跡に近似するが、壁のプランが明確でない、柱穴を持たない、炉跡ないしは焼土が検出されない、床面(底面)が竪穴住居跡に比して軟かい、遺物は若干出土するが竪穴住居跡であると確定し得なかったために呼称したものである。また、方形柱穴列はすでに多くの検出例をもつが、円形柱穴列については他に検出例をもたない。したがって、円形柱穴列については、本遺構を構成する柱穴状土坑が、方形柱穴列を構成する柱穴状土坑と形状・規模・埋土・出土遺物が類似し、これら6個の土坑は径6mの円周上に配列され、住居跡の柱穴の配列と同じである。さらに地面の掘り込みはなく竪穴住居跡とはならない等から独立する一遺構としてとりあえず仮称したものである。

(1) 竪穴住居跡

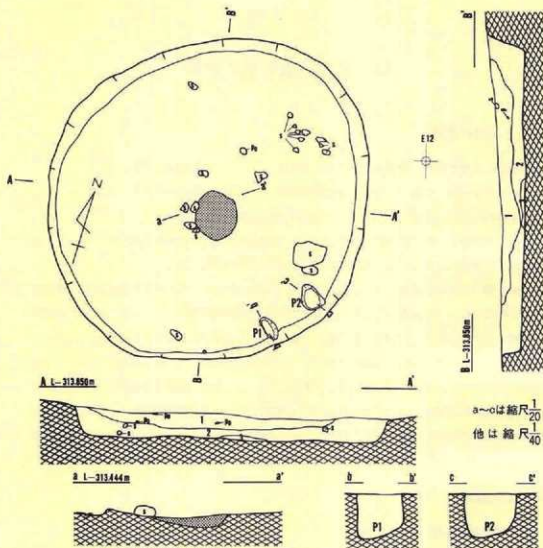
〔D-12竪穴住居跡〕

遺構(第9図、PL-6A)

本住居跡は、調査区のほぼ中央のD-12、E-12区にまたがって位置する。

規模は、約3.6m×約3.3mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。埋土は4層からなるが、自然堆積の様相を呈している。壁は、基本層序第Ⅲ層まで掘り込み、床面から垂直に近い立上がりである。壁高は20~40cmを測るが、南へ向かって下る緩斜面上に位置するため概して北側壁が高い。床面は地山を基盤とし、平坦かつ水平である。

炉跡は、床面のほぼ中央に構築されている。焼土範囲の平面形は円形を呈し、直径約50cm、最大層厚約10cmを測り、焼しまりは比較的強い。焼土の周囲には小ぶりの垂角礫が数個埋設され、さらに、同様の礫が床面に散乱している。したがって、本炉跡は元来それらの礫を利用した石囲い炉であったと思われる。なお、これらの礫はすべてが埋設されたものではなく、単に床面に配置しシルトを貼付けたものもある。



D-12 竪穴住居跡埋土層注記

層位	色調	土性
1	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト	跡まわりがあり強い粘性もある。若干の地山シルト粒、炭化材小片を散状に含む。
2	10YR3/3 暗褐色シルト	堅く締まっている。粘性はない。多量の地山シルト粒を含む。
3	10YR3/3 暗褐色シルト	堅く締まっている。多量の地山シルト粒の他、若干の焼土粒も含む。

D-12 竪穴住居跡柱穴状土坑埋土層注記

色調	土性
10YR2/3 黒褐色シルト質粘土	軟らかいが締まっている。微量の地山シルト粒を含む。

第9図 D-12住居跡

柱穴状土坑は、 $P_1 \cdot P_2$ の2個検出された。いずれも南東側壁に接して検出された。 P_1 は26cm×12cm、床面からの深さは20cmを測り、平面形は楕円形を呈する。 P_2 は26cm×20cm、床面からの深さは20cmを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土はいずれも単層で、混入物がほとんどみられない黒褐色シルトである。 $P_1 \cdot P_2$ の芯々間距離は55cmを測る。他に、E-17竪穴住居跡でも同様の柱穴状土坑が検出されており、さらにD-15竪穴住居跡でもその可能性があるが、本

土坑は、出入口施設に関連する柱穴の可能性がある。

遺物 (第26図・第27図A・第34図A、P L-15・21A)

〔土器〕

本住居跡からは比較的多量の土器が出土しているが、床面直上から出土したものはなく、いずれも埋土内からの出土である。これらの中には口縁端部に刻目帯をもつもの(9・10・15)や、蛇行する沈線文を付すもの(8)、区画して縄文を磨消するもの(11~13)や逆に縄文を充填するもの(6)、隆沈線で施文するもの(7)等があり、これ以外に縄文以外の文様をもたない粗製土器(1~6)もある。15・16の区画は入組文的な様相を示している。体部の縄文は原体L R・R L横回転や縦回転による単節斜行縄文で、12・16は羽状を示している。以上のことから、本住居跡から出土した土器は、11~14は第VI群2類、9・10・15は第VI群3類、16は第VI群4類に相当し、1~6は第Ⅴ群に、8は第VI群1類に入る。

〔石器〕

⑫は石鏃で、⑬は磨石・⑭は石皿であり、⑮・⑯は床面からの出土である。

遺構の時期

本住居跡では床面出土の土器がないので不明の部分が多い。しかし、時期の判る土器はいずれも縄文時代後期中葉~末葉に位置づけられる土器で、遺構の時期もほぼこの時期に入ると推定される。

〔D-15竪穴住居跡〕

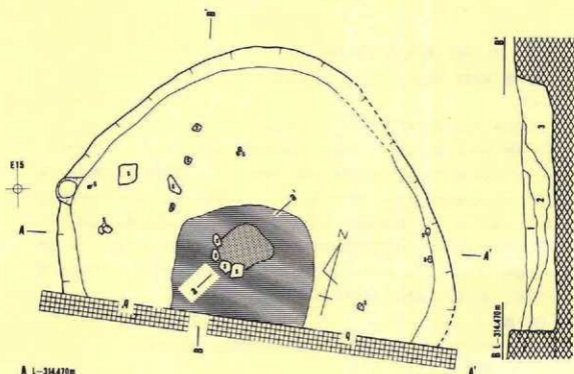
遺構 (第10図、P L-6)

本住居跡は、調査区中央部からやや西寄りのD-14・15、E-14・15の各グリットに位置する。地形的にわずかに南へ下る緩斜面となっている。遺構の一部は調査区外のため、検出されたのは北側の約3分の2である。

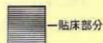
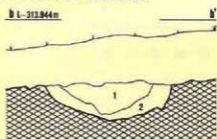
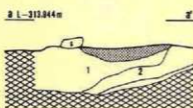
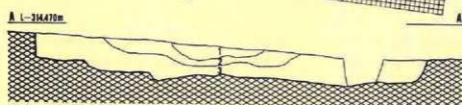
規模は東西で約4.3mを測るが、南北は不明である。検出された部分から平面形は、円形ないしは円形に近いと思われる。

埋土は、基本的には4層からなり自然堆積の様相を呈している。壁は基本層序第IV層まで掘込み、床面からはほぼ垂直ないしは垂直に近い立上りをみせる。壁高は22~50cmを測るが、南側ほど高い傾向を示す。床面は地山を基盤とするが、炉を中心とした床面のほぼ中央部を直径約1.5mの範囲は貼床がなされている。貼床は、層厚25cm前後に基本層序第IV層類似のシルトをたたきしめている。なお、床面には若干凹凸がみられ、さらに、東、南側がやや低く水平ではない。

炉跡は石囲い炉で、床面のほぼ中央部に構築されている。石囲いに供された礎は、10cm×10



a-bは縮尺 $\frac{1}{20}$
 他は縮尺 $\frac{1}{40}$



D-15 壁穴住居跡埋土土層注記

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-------------------|---|
| 1 | 10YR3/1 黒褐色シルト | 締まりがなく粘性もない。微量の炭化物を含む。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 締まりがなく粘性もない。1層より若干多い炭化物粒を含む。 |
| 3 | 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト | 堅く締まっている。強い粘性がある。中央部付近に焼土細粒を散状に含む。径1cm前後の小礫、炭化物粒若干含む。 |

D-15 壁穴住居跡貼床部分断面土層および伊址断面土層注記

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|----------------|--|
| 1 | 5YR4/4 暗オリーブ | 基本層序第IVb層に近似するシルトで、凝灰質の菱角礫小塊のほか黒褐色シルト、炭化物を散状に含む。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 基本層序第IVa層に近似するシルトで、黒褐色シルト、炭化物を散状に含む。 |

第10図 D-15住居跡

cm×5cm前後の亜角礫(山石)である。遺存するのは4個で、他は床面に散乱・散逸している。遺存する礫から元来は円形に配置したと思われる。また、囲い石はD-12住居跡と同様すべてを床面に埋設するのではなく、一部の礫は、床面に配置しシルトが貼付けられている。石囲いの内部には、直径40cm前後、最大層厚約6cmの焼土がみられる。焼けしまりは良く堅い。

床面から柱穴状土坑が1個検出された。本土坑は、北東側壁を切るようにあり、直径約20cm、床面からの深さは約20cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土は単層で住居跡の埋土3層に相当する。なお、本土坑はD-12・E-17住居跡と同様出入口施設に関連する土坑の可能性も考えられるが、住居跡の南側が調査区外のため全容が把握できず確定はできない。

遺物(第27図B・第28図A・第34図B・第35図A、P L-16A・21B)

〔土器〕

床面直上から出土したものはないが、埋土下部からも出土している。中でも19・20・22・25は床面に近い部分から出土した。この住居跡から出土した土器は、所謂瘤付土器といわれるもの(19~24)とそうでないもの(17・18)そして縄文のみが付された粗製土器に大別される。先の瘤付土器は縄文をもたない19・20とその他になり、21と22はほぼ同じ様相を示している。17にも口縁端部に瘤をもつかも知れないが明確でない。25・27は縄文をもち、26は無文である。体部の縄文は原体L Rの横回転(17・22・25・27)とR L横回転(18)による半節斜行縄文が付され、24は羽状に表出されている。また、18は充填縄文である。23・24は沈線に区画された刻目帯をもつ。なお、20は小型の土器である。

以上のことから、19・20は第VII群6類、17・18は第VI群4類、21・22は第VII群1類、23・24は第VII群4類、25・27は第VII群、26は第VIII群土器に相当する。

〔石器〕

比較的多量の石器が出土している。器種としては石鏃(㊸)、石皿(㊹・㊺)、凹み石(㊻)、石棒(㊼)、磨石(㊽)、打製石斧(㊾)、削器がある。

遺構の時期

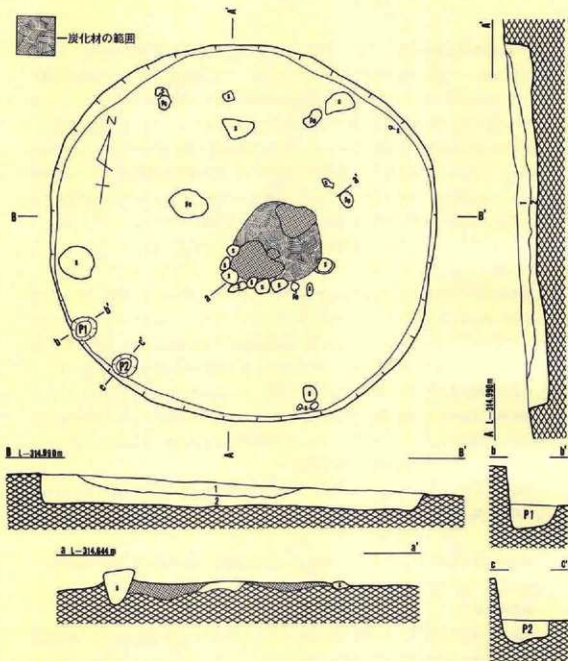
床面直上の出土ではないが、床面に近い部から出土した19・20・22の存在により、縄文時代後期末葉の瘤付土器期に位置づけられるであろう。

〔E-17竪穴住居跡〕

遺構(第11図、P L-7A)

本住居跡は調査区西寄りの南へ下る緩斜面のE-16・17、F-17にまたがって位置する。

規模は、阿輪共に約4.0mを測り、平面形は円形を呈する。埋土は2層からなり自然堆積の様相を呈する。壁は基本層序第III層まで掘込み、床面から外傾して急激に立上がる。壁高は20~30



E-17 型穴住居跡埋土土層注記

- | 層位 | 色 調 | 土 性 |
|----|-------------------|--|
| 1 | 10YR2/1 黒色粘土質シルト | 堅く締まっている。粘性は弱い。ごく微量の焼土細粒、炭化物粒を含む。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト | 締まっており粘性は1層より若干強い。微量の焼土細粒、径1~3cmの五角礫小塊を含む。 |

b・cのみ縮尺 $\frac{1}{20}$

他は縮尺 $\frac{1}{40}$

E-17 型穴住居跡柱穴状土坑埋土土層注記

- | 色 調 | 土 性 |
|-------------------|----------------------------|
| 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト | 住居跡埋土2層に近似するが角状小塊は含まれていない。 |

第11図 E-17住居跡

cmを測り、やや北・西側が高い。床面は地山を基盤とし、ほぼ水平かつ平坦である。

炉跡は、床面中央部のやや南寄りに構築されている。これは石囲い炉で10cm×10cm×5cm前後の直角礫を用いている。礫は一部しか遺存しないが、検出状況から元来円形に囲んだものと思われる。構築方法は、D-12・D-15住居跡と同様である。囲い石の内側には直径90cm前後、最大層厚7～8cmの焼土が認められる。焼けしまりにはむらがあり、全体的に脆い。

柱穴状土坑は、P₁・P₂の2個検出された。いずれも南東側壁に接して検出された。P₁は、直径26cm前後、床面からの深さは約13cmを測り、平面形は円形を呈する。P₂は、直径24cm前後、床面からの深さは約12cmを測り、平面形を呈する。P₁・P₂の芯々間距離は58cmを測る。埋土は単層で、住居跡の埋土2層に相当する。当土坑もD-12住居跡同様、出入口状施設に関連する可能性がある。

遺物(第28図B・第29図A・第35図B・第36図A、P L-16B・17A・22)

〔土器〕

28・29は床面直上から出土したが、その他は埋土内からの出土である。28は体部が沈線で区画した後、必要な部分にのみ縄文が付され、その縄文施文部に小さな瘤を貼りつけている。縄文施文の原体はR Lである。33・34は口縁端部に刻目帯をもち、その下位には原体R L・L R横回転による羽状縄文が付されている。30は器表に髹漆きによるおもわれる条線をもつ。37は28とほぼ同じ特徴をもつ。36は研磨された微隆起帯のみによって施文された土器で、全面に光沢をもっている。32・35は粗製土器で、体部縄文は原体L R・R L横回転による羽状縄文㊦と、原体L R斜回転による単節縦縄文である。

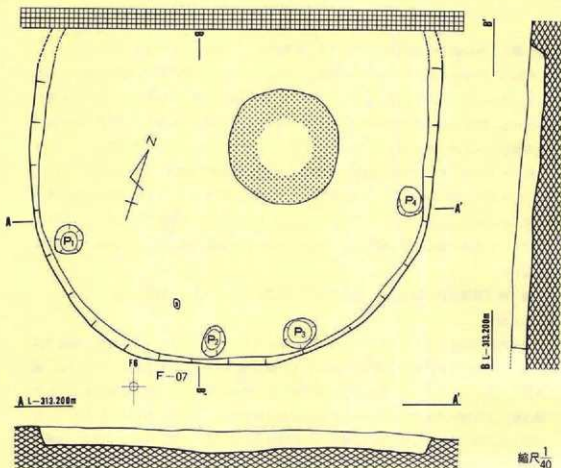
以上のことから、これらの土器は28・37が第VII群1類、33・34は第VI群3類、36は第X群、30は第IX群、32・35は第XI群に相当する。

なお、土偶(A)が1点出している。右肩から右手先と右足と左足そして左乳房を欠失しているが、非常に良好な状態で出土した。出土層位は埋土1層上部であるため、当住居跡に直接伴うものではない。また、右肩と頸が折れていたが接合している。正面腹部の正中線は隆起させて表現し、串先による刺突痕をもつ。乳房は貼りつけたもので、良く隆起している。顔面は全体が逆三角形で、中心に隆帯で鼻を表わし、目は切れ長で目尻が釣り上っている。耳は三角形状に突起し、左右とも各1個の貫通孔をもつ。頸・肩・腹には比線が入っている。

〔石器〕

7点出土している。この中には、石鏃3点、極器1点、磨石1点、石皿2点の器種が含まれている。㊦は床面からの出土であるが、他は埋土内から出土している。㊦の石鏃は基部が尾翼形のものである。

遺構の時期



F-07 竪穴住居跡埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/1 黒色粘土質シルト 軟らかいが締まりがある。粘性は弱い。多量の炭化物粒、若干の砂粒、腐蝕性
 地山粒を含む。

第12図 F-07住居跡

床面から出土した28の存在から、本住居跡は縄文後期末葉の箱付土器期に位置づけられるものと推定される。

〔F-07竪穴住居跡〕

遺 構 (第12図、P L-7 B)

本住居跡は、調査区の東寄り平坦地のF-06・07グリットにまたがって位置する。住居跡の一部は調査区外のため、検出された範囲は南側の約4分の3である。

したがって、住居跡の全容は不明であるが、検出された部分は、規模が東西約1.5mを測り、平面形は円形を呈するものと推定される。

埋土は単層であるが、混入物等の状況は自然堆積の様相を呈している。壁は基本層序第三層まで掘込み、床面から外傾して急激に立上がる。壁高は20cm前後を測る。床面は地山を基盤とし、平坦ではあるが水平ではなく東・南側が若干下る。なお、床面のやや東寄りがF-06土坑に切られている。

柱穴状土坑は、P₁（直径約30cm・深さ約10cm）P₂（長径約30cm×短径約26cm・深さ約30cm）、P₃（直径約30cm・深さ約40cm）、P₄（長径約30cm×短径約24cm・深さ約4cm）の4個が検出された。埋土は住居跡埋土に酷似し、いずれも配置・埋土から本住居跡の柱穴となりうるものである。

土坑間芯々距離、床面からの深さの相違から二分されそうである。まず、土坑芯々間距離は、P₁-P₂間1.84m・P₁-P₃間1.80m・P₂-P₃間0.90mを測る。次に、床面からの深さでは、P₁とP₄が極端に浅く、それに比してP₂とP₃が深い。したがって、P₁とP₄、P₂とP₃は上部構造を構成する目的がそれぞれ異なる土坑の可能性も考えられる。

なお、炉跡は検出されなかった。

遺物（第29図B、PL-17B）

〔土器〕

38~40ともに埋土内からの出土で、床面から出土した土器はない。38は口唇に円柱状の突起そして器面には瘤を貼りつけた口縁部破片で、器表は瘤以外に沈線区画と縄文が施されている。40は口縁端部に刻目帯をもち、沈線で入組文風に区画して縄文を充填している。39は40に近似している。

このような状況から、38は第VII群1類、39・40は第VI群3類に入るであろう。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

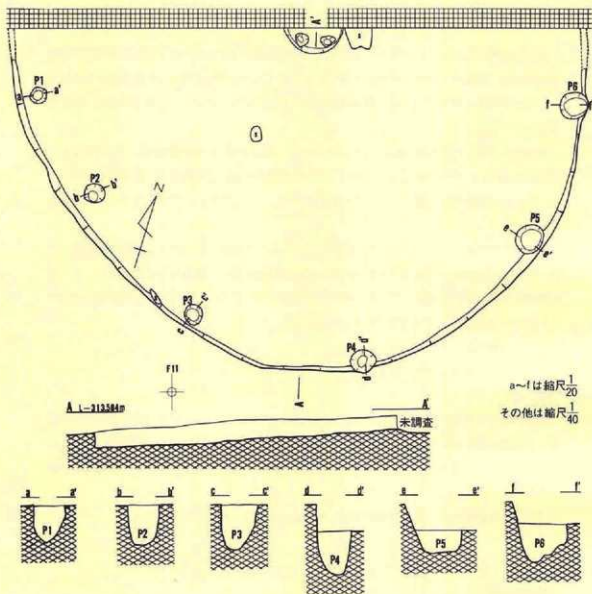
埋土内からの出土ではあるが、3点の土器はほぼ同時期の土器群と考えられることから、本住居跡は縄文時代後期中葉末頃に相当するのであろう。

〔F-11竪穴住居跡〕

遺構（第13図、PL-8A）

本住居跡は、調査区北端の中央部付近のF-10・11各グリットにまたがって位置する。住居跡の一部が調査区外のため、検出されたのは南側の約3分の2である。

したがって、住居跡の全容は不明である。検出された部分からは東西軸が6mを越えるものと思われ、今回検出された住居址中最大の規模をもつ。平面形も円形ないしは円形に近いと思わ



F-11 竪穴住居跡埋土土層注記

色 調 土 性
 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 締まりがない。粘性は弱い。全体にわたって焼土粒が散状に含む。微量ながら炭屑性地山粒も含む。

F-11 竪穴住居跡柱穴状土塊埋土土層注記

色 調 土 性
 7.5YR2/3暗褐色シルト 締まり、粘性共にない。若干の炭化物粒を含む。

第13図 F-11住居跡

れる。埋土は単層であるが、混入物等の状況から自然堆積したと思われる。壁は基本層第Ⅲ層まで掘込み、床面からほぼ垂直に立上がる。壁高は14～20cmを測る。床面は地山を基盤とし、水平かつ平坦である。

床面の中央部に相当すると思われる位置から、直径約60cmの浅い、平面形は円形と思われる土坑が1基検出された。さらに、その土坑内からは、直径約10cm、平面形が円形を呈する浅い小土坑が2個検出された。焼土は確認されなかったが、前者の土坑は形状・規模・配置から炉跡と思われ、後者の小土坑は、石囲い炉に使用された囲い石の抜取り痕であろう。

柱穴状土坑は、P₁（直径約20cm・深さ約20cm）、P₂（直径約22cm・深さ約22cm）、P₃（直径約24cm・深さ約24cm）、P₄（直径約24cm・深さ約24cm）、P₅（直径約16cm・深さ約16cm）、P₆（直径約28cm・深さ約20cm）の6個が検出された。これらは、いずれも壁際から検出された。平面形は円形を呈し、埋土は住居跡のものに酷似する。柱穴芯々間距離は、P₁-P₂=1.20m・P₂-P₃=1.64m・P₃-P₄=1.85m・P₄-P₅=2.20m・P₅-P₆=1.50mを測る。

遺物（第29図C・第36図B、P L-17C・23A）

〔土器〕

床面直上から41の1点が出土している。土器は他にもあるが小破片である。この土器は底部から体部が大きく外傾していることから、浅鉢的な器形の土器であろう。体部には原体LR横回転による単節斜行縄文が付されている。

この土器の属性は定かでないが、胎土・器形等は縄文晩期的である。

〔石器〕

㊦・㊧の2点が出土し、いずれも凹み石である。㊧は床面直上からの出土である。

遺構の時期

断定できないが、41の土器が縄文時代後期か晩期とおもわれることから、そのいずれかに属する時期の住居跡であろう。

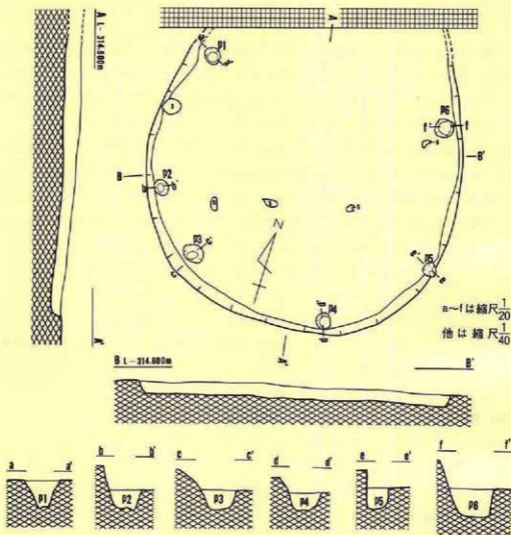
〔F-14竪穴住居跡〕

遺構（第14図、P L-8 B）

本住居跡は、調査区北端の中央部付近のF-13・14各グリットにまたがって位置する。住居跡の一部が調査区外のため、検出されたのは遺構の南側約4分の3である。したがって、住居跡の全容は不明である。

検出された部分からは、東西軸が約3.3mを測る。平面形は円形を呈すると思われる。埋土は単層であるが、混入物等の状況から自然堆積と思われる。壁は基本層序第Ⅲ層まで掘込み、床面から外傾して急激に立上る。壁高は10cm前後を測る。床面は地山を基盤とし、平坦ではあるが水平ではなく、東・南側が若干下がる。

柱穴状土坑は、P₁（長径約18cm×短径約14cm・深さ約14cm）、P₂（長径約18cm×短径約14cm・深さ約10cm）、P₃（長径約22cm×短径約18cm・深さ約10cm）、P₄（長径約18cm×短径約16cm・深



F-14 整穴住居跡埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR3/3 暗褐色シルト やや締まりに欠ける。わずかに粘性がある。若干の菱角礫小塊崖線性地山粒を散状に含む。

F-14 整穴住居跡柱穴状土坑埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/1 黒色粘土質シルト やや締まりに欠け、若干粘性がある。

第14図 F-14住居跡

さ約9cm)、 P_5 (長径約16cm×短径約14cm・深さ約11cm)、 P_6 (直径約18cm・深さ約15cm)の6個が検出された。これらは、いずれも壁に接して検出され、平面形は楕円形さみである。また、土坑芯々間距離は、 $P_1-P_2=1.50m$ ・ $P_2-P_3=0.80m$ ・ $P_3-P_4=1.56m$ ・ $P_4-P_5=1.24m$ ・ $P_5-P_6=1.52m$ を測る。

なお、炉跡は検出されなかった。

遺物 (第29図P、PL-17D)

〔土器〕

床面直上からの出土はなく、いずれも埋土内から出土している。なお、47は埋土最上位からの出土である。46は沈線で区画した後、縄文を充填しており、さらに瘤を貼り付けている。42・47は無文である。43～45は縄文だけが付された粗製土器である。体部縄文は原体L R横回転で付されている。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

時期を確定できるような出土状態ではないが、 ④ や ⑤ の存在から縄文時代後期末葉に位置づけられるであろう。

〔F-16竪穴住居跡〕

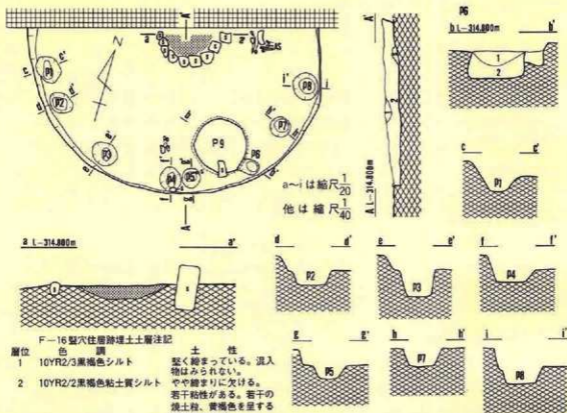
遺構 (第15図、PL-9A)

本住居跡は、調査区北端のやや西寄りのF-15・16グリットにまたがって位置する。住居跡の一部が調査区外のため、検出されたのは南側の約半分である。したがって、住居跡の全容は不明である。

検出された部分からは、東西軸が約3.1mを測り、平面形は円形を呈すると思われる。埋土は2層からなり、混入物、堆積の状況から自然に堆積したものと思われる。壁は基本層序第Ⅲ層まで掘込み、床面から垂直に近く立上がる。壁高は6～12cmを測る。床面は地山を基盤とし、水平かつ平坦で堅くしまっている。

炉跡は、床面のほぼ中央部と思われる位置から検出された。本炉跡は石囲い炉で、10cm×10cm×5cmの直角礫を円形状に配置している。なお、これらの礫は床面に埋設されたもののほか中には床面に置き、それにシルトを貼付ける方法のものもある。炉内には、直径約50cm、最大層厚約14cmを測り、焼けしまりの強い焼土が確認された。

柱穴状土坑は、 P_1 (長径約30cm×短径約24cm・深さ約7cm)、 P_2 (長径約26cm×短径約20cm・深さ約7cm)、 P_3 (長径約28cm×短径約22cm・深さ約12cm)、 P_4 (長径約28cm×短径約22cm・深さ約6cm)、 P_5 (長径約22cm×短径約18cm・深さ約6cm)、 P_6 (長径約20cm×短径約16cm・深さ約7cm)、 P_7 (直径約22cm・深さ約9cm)、 P_8 (長径30cm×短径約26cm・深さ約7cm) の8個が検出された。また、土坑芯々間距離は、 $P_1-P_2=0.38\text{m}$ 、 $P_2-P_3=0.72\text{m}$ 、 $P_3-P_4=0.74\text{m}$ 、 $P_4-P_5=0.22\text{m}$ 、 $P_5-P_6=0.66\text{m}$ 、 $P_6-P_7=0.52\text{m}$ 、 $P_7-P_8=0.52\text{m}$ を測り、いずれも壁に接するように検出されている。埋土は、住居跡埋土の2層に近似する。以上、これらは、形状・規模・配



F-16 竪穴住居跡埋土土層注記

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|-------------------|---|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色シルト | 堅く締まっている。混入物はみられない。 |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト | やや締まりに欠ける。若干粘性がある。若干の換土粒、黄褐色を呈する浮石粒を含む。 |

F-16 竪穴住居跡貯蔵穴状土坑土層注記

- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|----------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR2/3 黒褐色シルト | 締まりがある。わずかだが粘性もある。ごく微量の小塊礫を含む。 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色シルト | 締まりに欠ける。崖錐性地山粒を散状に含む。 |

F-16 竪穴住居跡柱穴状土坑埋土土層注記

- | 色調 | 土性 |
|-------------------|------------------------------|
| 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト | やや締まりに欠ける。若干粘性がある。若干の換土粒を含む。 |

第15図 F-16住居跡

置・埋土から本住居跡の柱穴と思われる。

なお、床面の南東壁近くから開口部直径約54cm、床面からの深さが約30cmを測り、平面形が円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する土坑・P₉が検出された。埋土は、住居跡の埋土2層に近似する。したがって、形状・規模・配置・埋土からP₉は本住居跡に伴ない、貯蔵穴として機能したとも考えられるが、遺物の出土はなく確定はできない。

遺物 (第29図E・第30図A・第36図C、P L-18A・23B)

〔土器〕

床面直上から出土したものは55の1点のみで、他は埋土内からの出土である。55は原体RL縦回転による半節斜行縄文の付された粗製土器である。48・49は口縁端部や頸部に刻目帯をもち、体部には入組文的な沈線文と充填縄文で施文されている。50もほぼ48や49と同じであろう。51は研磨された微隆起帯で施文された土器である。52～54は器面を沈線で区画した後、必要な

部分にのみ縄文を入れる充填縄文で施文されている。体部縄文は原体LR・RLの横回転や縦回転の単節斜行縄文や羽状縄文であるが、0段多条の原体が多用されている。

以上のことから、54は第VI群2類、52・53は第VI群4類、48～50は第VI群3類、51は第X群土器に相当するであろう。

なお、当住居跡からは土偶の残欠が出土している。出土層位は埋土内である。腹部は無文の地に円形刺突文が入り、腰の部分には縄文を付した後横位の沈線が付されている。

〔石器〕

3点出土している。㉔は石錐の可能性もあるが、側縁が片面調整であることから石匙とした。㉕は先端部を利用した。石錐である。㉖は細長い河原石を使用した凹み石である。また、石器とは違うが、床面直上からアスファルトと推定されるゲール状物質の塊が出土している。

遺構の時期

出土した土器はほとんど縄文時代後期中葉末から末葉のものであり、住居跡もほぼこの時期に相当するであろう。

(2) 竪穴住居跡状遺構

〔E-05竪穴住居跡状遺構〕

遺 構 (第16図、PL-9B)

本遺構は、調査区東端近くのE-04・05を中心とするグリットに位置する。E-05方形柱穴列と切合い関係にあるが本遺構が古い。さらに、北東側壁の一部も2個の柱穴状土坑に切られている。

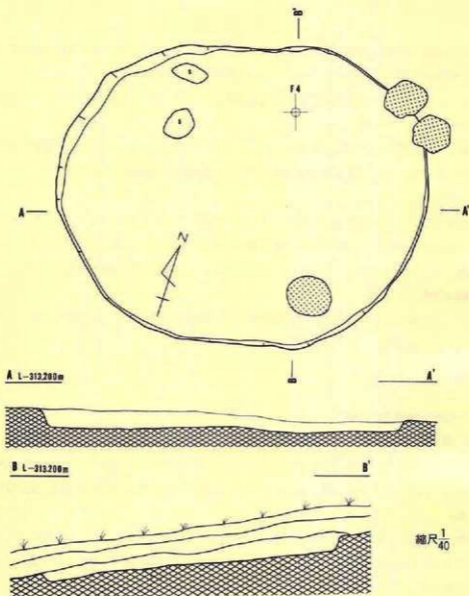
規模は、東西約3.9m×南北約3.1mを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は単層であるが、混入物等からは自然堆積の様相を呈している。壁は基本層序第III層まで掘込み、床面から外傾して急激に立上がる。壁高は10～20cmを測り、西・北側が高い傾向を示す。床面(底面)は地山を基盤とするが、竪穴住居跡の床面に比して軟かい。また、床面(底面)は平坦であるが水平ではなく、南側が下がる。

なお、床面(底面)北側の直上からS₁(約40cm×約20cm×約30cm)・S₂(約35cm×約30cm×約30cm)の2個の垂角礫が出土しているが、本遺構に伴うか否かは不明である。

遺 物 (第30図B・第37図A、PL-18B・23E)

〔土 器〕

いずれも埋土内から出土した。56・57は口縁端部に刻目帯をもち、その下位を磨消帯としている。58・59は沈線で区画した後、縄文を磨消したり充填したりしている。62は縄文を付した後並行沈線で施文しているらしい。60は無文土器で、61は縄文のみを付す粗製土器である。体



E-05 竪穴住居跡状遺構埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 締まり粘性ともにある。若干の炭化物粒、腐蝕性地山粒を含む。

第16図 E-05住居跡状遺跡

部縄文は原体LR・RLの横回転や縦回転による単節斜行縄文や羽状縄文が付されている。

以上のことから、62は第IV群、56・57は第VI群3類、58・59は第VI群4類、60は第VIII群、61は第IX群に相当するであろう。

なお、土器ではないが土偶(C)の残欠が出土している。足の部分と推定される。沈線で区画され磨消している。

〔石器〕

凹み石が2点 (㊸・㊹) 出土している。

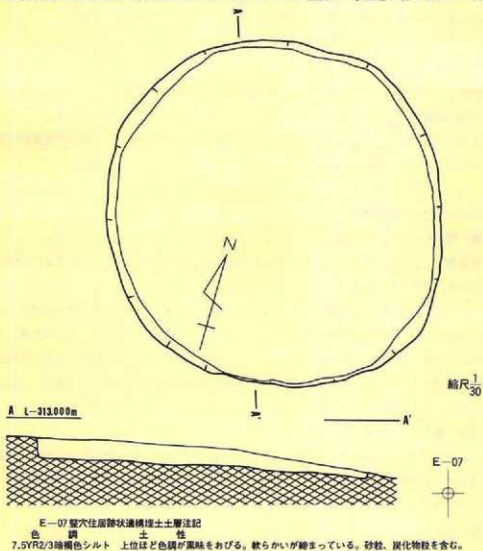
遺構の時期

時期決定としては十分な出土状況ではないが、56～59の出土から縄文時代後期中葉から後葉に位置づけられるものと考えられる。

〔E-07竪穴住居跡状遺構〕

遺 構 (第17図、P L-10A)

本遺構は、調査区東端から約20m西方のE-07グリットに位置する。至近の北からはF-07住



第17図 E-07住居跡状遺構

居跡も検出されている。

規模は長径約2.9m×短径約2.7mを測り、径長に若干の相違をもつが、平面形はほぼ円形を呈する。埋土は単層であるが、混入物の状況から自然堆積と思われる。壁は基本層序第Ⅲ層まで掘込み、床面（底面）からほぼ垂直に立上がる。壁高は6～20cmを測り、概して南・西側が高い。床面は地山を基盤とするが、堅穴住居跡の床面に比して軟かい。また、床面（底面）は平坦ではあるが水平ではなく、西・北側が高い。

遺物（第30図C・第36図D、PL-18C・23C）

〔土器〕

いずれも埋土内からの出土である。63～66はほぼ同じ様相を示し、沈線区画による磨消縄文と充填縄文である。67は口縁端部に刻目帯をもち、一部には無文部分もある。

以上のことから、63～66は第Ⅵ群2類、67は第Ⅵ群3類に相当しよう。

〔石器〕

搔器とした⑦の1点が出土している。剝片の周縁部に簡単な調整を加えたものである。

遺構の時期

床面直上からの出土がないので定かでないが、63～65・67の出土から、縄文時代後期中葉頃に位置づけられるものと推定される。

〔E-09堅穴住居跡遺構〕

遺構（第18図、PL-10B）

本遺構は、調査区の中央付近、E-09・F-09両グリットにまたがって位置する。至近の北西にはF-11堅穴居跡がある。

規模は東西約3.6m×南北約3.3mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。埋土は単層であるが、混入物等の状況から自然堆積と思われる。壁は基本層序第Ⅲ層まで掘込み、床面（底面）から外傾して急激に立上がる。壁高10～16cmを測る。床面（底面）は地山を基盤とするが、堅穴住居跡の床面に比して軟かい。また、床面（底面）は平坦であるが水平ではなく、北側がやや高い。

遺物（第31図A、PL-18D）

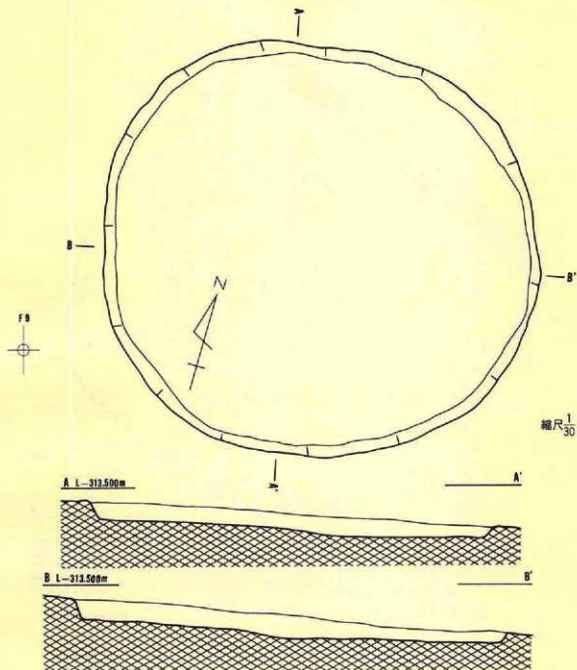
〔土器〕

1点出土している。体部の小破片なので定かでないが、器表全面に縄文を付した後、全面を磨消しその上に搔掻きによる条線を付している。観察される縄文は消し残りの分である。

この土器は第Ⅸ群に相当するものと考えられる。

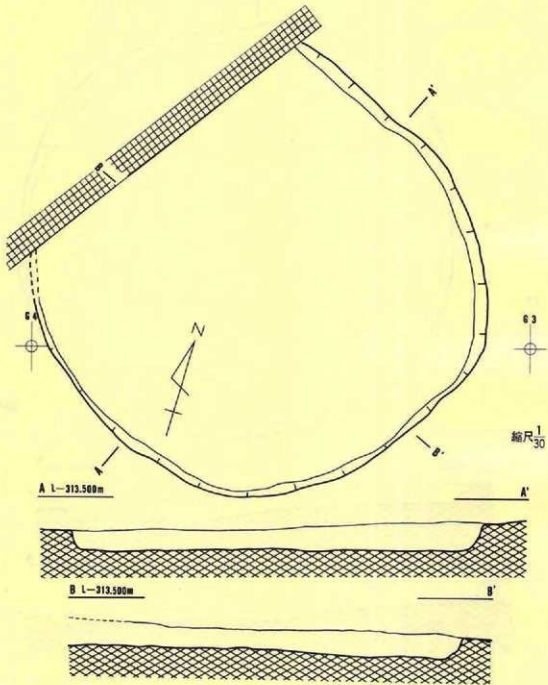
〔石器〕

出土していない。



F-09 雙穴住居跡遺構埋土層注記
 色 調 土 性
 7.5YR2/2 黒褐色シルト 締まりがあり、わずかではあるが粘性をもつ。若干の砂粒、炭化物粒、腐蝕性地
 山粒を含む。

第18図 E-09住居跡遺構



F-03 型穴住居跡状遺構埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 締まり、粘性ともにある。微量の炭化物粒、糜礫性地山粒を含む。

第19図 F-03住居跡状遺構

遺構の時期

床面直上からの出土でないので定かでないが、縄文時後期後葉頃に属すると考えられる。

〔F-03竪穴住居跡状遺構〕

遺 構 (第19図、P L-11A)

本遺構は、調査区北東端のF-03・G-03両グリットにまがって位置する。遺構の一部が調査区外のため、検出されたのは南東側の約4分の3である。また、E-04円形柱穴列とは切合い関係にあるが、本遺構が古い。

規模は南北が約3.6mを測るが、東西は不明である。平面形は円形ないしは円形に近いと思われる。埋土は単層であるが、混入物等から自然堆積と思われる。壁は基本層序第Ⅲ層まで掘込み、壁は外傾して急激に立上る。壁高は16~20cmを測る。床面(底面)は地山を基盤とするが、竪穴住居跡の床面に比して軟かい。また、床面(底面)は平坦かつ水平である。

遺 物 (第31図B、P L-18E)

〔土 器〕

5点出土しているが、いずれも埋土内からの出土である。69~71はほぼ同じ特徴を示し、研磨された器表に沈線だけで文様を施している。71は小型の台は鉢である。72・73は縄文の付された粗製土器である。体部縄文は原体R Lの横回転による単節斜行縄文である。

以上のことから、69~71は第Ⅵ群、72・73は第Ⅶ群土器に相当するであろう。

〔石 器〕

出土していない。

遺構の時期

69~71の存在によって縄文時代後期後葉に位置づけられるものと推定される。

(3) 柱穴列

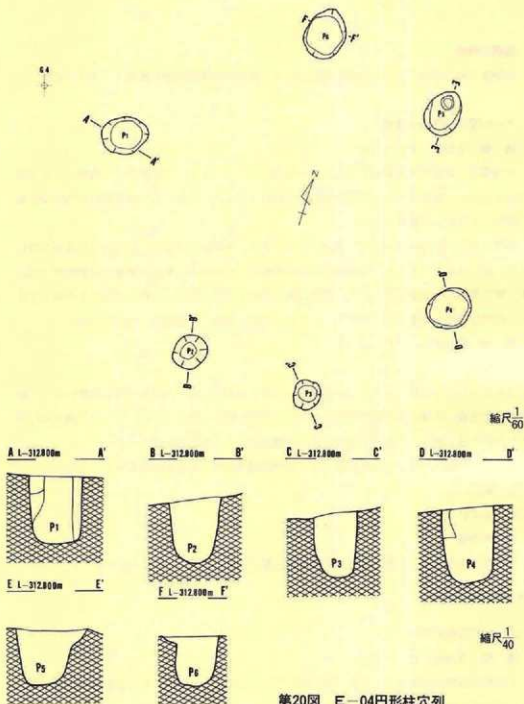
〔E-04円形柱穴列〕

遺 構 (第20図、P L-11B)

本遺構は調査区北東端近くのE-03・04グリットを中心に位置し、E-05方形柱穴列と切り合っている。新旧関係は不明である。

本遺構にかかわる柱穴状土坑はP₁~P₄の6個検出されたが、そのうち、P₁・P₂の両土坑で柱据え方が検出された。

各土坑の規模はP₁(長径72cm×短径約60cm・深さ約70cm)・P₂(長径約60cm×短径約50cm・深さ約70cm)・P₃(長径約50cm×短径約44cm・深さ約70cm)・P₄(長径約74cm×短径約64cm・深さ約



第20図 E-04円形柱穴列

80cm)・P₅(長径約72cm×短径約56cm・深さ約60cm)・P₆(長径約80cm×短径約62cm・深さ約50cm)を測る。したがって、計測値からみると平面形は楕円形ぎみのものが多い。全体規模は、土坑芯々間距離でP₁-P₂=3.70m・P₂-P₃=2.10m・P₃-P₄=2.70m・P₄-P₅=3.30m・P₅-P₆=2.30m・P₆-P₁=3.60mを測る。また、P₁-P₅=5.20m・P₂-P₄=4.20mを測る。このように

計測値からみると各隣接する土坑芯々間距離にバラツキがみられるが、全体的にみると6個の土坑は、直径約6mの円周上に配置される。

P_1 ・ P_4 の埋土の柱据え方には、焼土・炭化物粒が、その周囲の埋戻しの部分には、地山シルトブロックが混入し他の土坑の埋土にも焼土・炭化水物粒が混入しているものが多く、特に、 P_4 には多量の焼土が混入している。

柱は、 P_1P_4 の柱据え方から直径30cm前後の丸柱と思われる。

遺物 (第31図C、PL-19A)

〔土器〕

4点出土しているが、いずれも埋土中の焼土や炭化物等と同時に出土したものである。76は頸部に刻目帯をもつが他はいずれも粗製土器の破片である。74・75は体部に原体のLRの横回転による単筋斜行縄文(74)、LR・RL横回転による羽状縄文である。76も74と同じ縄文である。77は無文である。

以上のことから、74・75は第VII群、76は第VI群4類、77は第VIII群土器に相当する。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

時期決定になるような土器の出土が少ないが、76の出土から縄文時代後期中葉～後葉に属するものと推定される。

〔E-05方形柱穴列〕

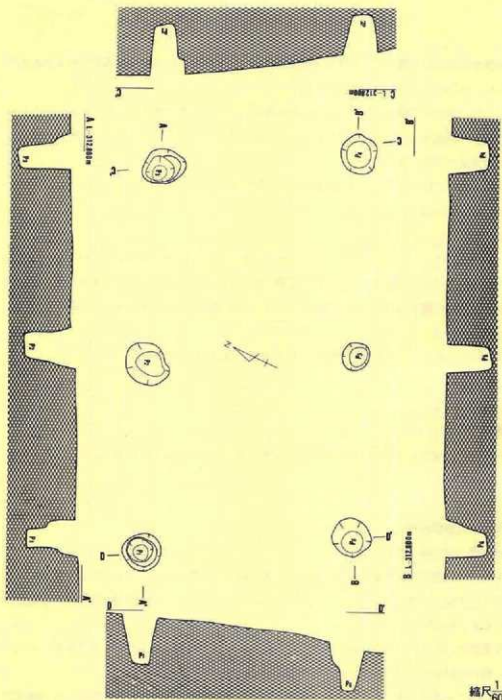
遺構 (第21図、PL-12A)

本遺構は、調査区東端近くのE-04・05、F-04・05の各グリッドにまたがって位置し、E05竅穴住居跡遺構の床面(底面)の一部を切っている。さらに、E-04円形柱穴列とも切合っているが、新旧関係は不明である。

本遺構は、 P_1 ～ P_3 の柱穴状土坑とそれに対応する P_4 ～ P_6 の柱穴状土坑とで構成され、あたかも、桁行2間梁行1間の掘立柱建物跡を思わせる。

これらの土坑のうち、 P_2 ・ P_4 ・ P_5 ・ P_6 の4個で柱据え方が確認された。規模は、 P_1 (両径約60cm・深さ約80cm)・ P_2 (長径約76cm・深さ約80cm)・ P_3 (長径約70cm×短径約56cm・深さ約84cm)・ P_4 (長径約64cm×短径約60cm・深さ約62cm)・ P_5 (長径約50cm×短径約44cm・深さ約70cm)・ P_6 (両径約60cm・深さ約68cm)を測る。全体規模は、土坑芯々間距離で P_1 ～ P_3 =6.15m・ P_4 ～ P_6 =6.20m・ P_1 ～ P_4 =3.40m・ P_3 ～ P_6 =3.20mを測る。

P_2 は、 P_1 ～ P_3 のほぼ中間に位置するが、 P_5 は、 P_4 ～ P_6 の中間から約10cm P_4 側に寄る。また、 P_1



第21図 E-05方形柱穴列

— P_3 ・ P_4 — P_1 の両柱筋と P_1 — P_2 ・ P_3 — P_4 の両柱筋は直行せず、平面形は平行四辺形ぎみである。さらに、 P_1 — P_2 ・ P_3 — P_4 両柱筋東から約25°北に偏している。なお、各土坑の底面レベルについても最大で30cm強の高低差がみられ、概して P_1 ～ P_2 柱筋土坑に比して P_3 ～ P_4 柱筋土坑の底面レベルが低い傾向を示している。

埋土は、P₂・P₄・P₅・P₆では、土坑の中心部に自然堆積土が、その周囲には地山シルトの小ブロックが混入したシルトが認められ、これは埋戻したものである。したがって、自然堆積した部分が柱掘え方と思われる。柱は、これらの状況から直径20～30cmの丸柱と思われる。

遺物 (第31図D・第32図A、P L-19B)

〔土器〕

破片としては他にも出土しているが、小破片が多いことから5点を掲載した。いずれも埋土内から出土した。81・82は無文の口縁部破片である。80は原体L R斜回転による単節横行縄文の付された体部破片である。78・85は沈線区画による磨消縄文された破片である。79・83は沈線で区画して縄文を磨消し、縄文施文部に瘤を貼り付けている。

以上のことから、80は第Ⅷ群、81・82は第Ⅷ群、79は第Ⅷ群4類に相当するであろう。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

出土した土器からだけは明確でないが、78・79の存在から縄文時代後期中葉～後葉頃に属するものと推定される。

(4) 土坑

〔E-08土坑〕

遺構 (第22図A、P L-12B)

本土坑は、調査区の東端から約22m西のE-08グリットに位置する。至近の西から同タイプのE-09土坑も検出されている。

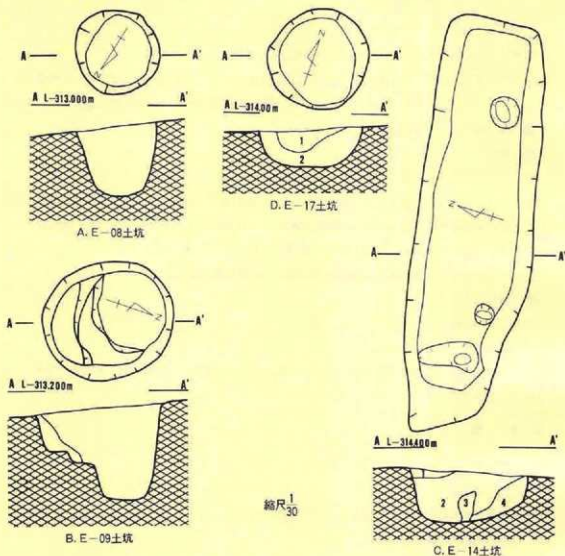
規模は開口部で長径約68cm×短径約66cm、検出面からの深さは約56cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。埋土は、単層で焼土粒が散状に混入し、自然堆積と思われる。断面形は「U」字形を呈する。

なお、本土坑は、形状・規模・埋土がE-09土坑、さらにはE-04円形柱穴列・E-05方形柱穴列を構成する柱穴状土坑にも近似する。ただ、調査区が遺跡の一部に限られているため、円形あるいは方形柱穴列に発展するか否かは不明である。

遺物 (第32図B、P L19C)

〔土器〕

埋土内から4点の破片が出土している。86は口縁端部と頸部に刻目帯をもつ無文の土器である。87は沈線区画による磨消縄文がある。88は原体L R縦回転による単節斜行縄文を付す粗製土器の破片である。89は器表全面がナゲ調整された後櫛掻きによる条線が付されている。



A. E-08 土坑埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/3 黒褐色シルト やや締まりに欠ける。ごく弱い粘性をもつ。炭化材小片、崖錐性地山粒、焼土粒を含むが、特に焼土粒が多く含まれる。

B. E-09 土坑埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/3 黒褐色シルト やや締まりに欠ける。ごく弱い粘性をもつ。炭化材小片、崖錐性地山粒、焼土粒を含むが、特に焼土粒が多く含まれる。

C. E-17 土坑埋土土層注記
 色 調 土 性
 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 堅く締まっている。粘性は弱い。若干の崖錐性地山粒を含む。

D. E-14 土坑埋土土層注記
 層位 色 調 土 性
 1 10YR2/3 黒褐色シルト やや締まりに欠ける。粘性はない。若干の崖錐性地山粒を含む。
 2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト やや締まりに欠けるが粘性はある。若干の崖錐性地山粒、炭化物粒を散状に含む。
 3 10YR2/1 黒色シルト 締まっている。粘性はない。若干の炭化物粒を含む。
 4 10YR3/3 暗褐色シルト やや締まりに欠ける。粘性はない。若干の崖錐性地山粒を含む。

第22図 土坑-1

以上のことから、86は第VI群3類、87は第VI群2類、88は第VII群、89は第IX群土器に属するものと考えられる。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

86・87・89の出土から、縄文時代後期中葉～後葉に位置づけられる土坑であろう。

〔E-09土坑〕

遺構 (第22図B、P L-12C)

本土坑は、調査区東端から約25m西のE-09グリットに位置する。至近の東から同タイプのE-08土坑も検出されている。

規模は開口部で長径約110cm×短径約94cm、検出面からの深さは約76cmを測る。平面形は楕円形を呈する。埋土は2層からなるが、いずれにも焼土粒が散状に混入し、自然堆積の様相を呈している。壁の立上がりは一様ではなく、北側では垂直に近いが、南側には中端に段をもつ。底面は平坦である。

なお、本土坑は、形状・規模・埋土が至近から検出されたE-08土坑、さらにはE-04円形柱穴列・E-05方形柱穴列を構成する柱穴状土坑にも近似する。ただ、調査区が遺跡の一部に限られているため、円形あるいは方形柱穴列に発展するかは不明である。

遺物 (第32図C、P L-19D)

〔土器〕

出土した破片は他にもあるが、小破片が多いので5点だけ掲載した。90・91は口縁端部(90)や頸部(91)に刻目帯をもち、他は無文である。93・94は沈線で区画された後、縄文を磨消している。92は体部の器表に櫛掻きによる条線が入っている。

以上のことから、90・91は第VI群3類、93・94は第VI群2類、92は第IX群に相当する。

〔石器〕

出土していない。

遺構の時期

90～93の出土は縄文時代後期中葉～後葉に位置づけられることを示すであろう。

〔E-14土坑〕

遺構 (第22図C、P L-14A)

本土坑は、調査区中央部からやや西のE-14、F-14グリットにまたがって位置する。

規模は、開口部で長軸約3.30m×短軸約0.94m、検出面からの深さは約0.40mを測る。ほぼ東一西に長軸をもち、平面形は長方形に近い。埋土は4層からなるが、堆積状況は不規則であり、自然に堆積したか否か不明である。壁は、長軸に平行する南・北両壁は垂直に近い立上がりを見せる。短軸に平行する壁のうち、東壁は垂直に近いが、西壁は他の三壁に比してやや外傾してやや緩やかに立上がる。底面は中央部が深い。したがって、短軸断面は「U」字形に近く、長軸断面は「舟底」形を呈する。

底面からP₁（長径約48cm×短径約20cm・底面からの深さ約10cm・平面形は不整形）、P₂（直径約16cm・底面からの深さ約15cm・平面形は円形）、P₃（長径約16cm×短径約14cm・底面からの深さ約15cm・平面形は円形）の3個の小土坑が検出された。

遺物（第32図D・第36図E、P L-19E）

〔土器〕

埋土内から2点の破片が出土している。95は沈線で区画した後その中を縦長の刻目を充填している。96は体部に節挿きによる条線を付している。

以上のことから、95は第VII群4類、96は第IX群土器に相当するであろう。

〔石器〕

縦形の石匙(23)が1点出土している。

遺構の時期

95・96の出土から、縄文時代後期末葉に属するであろう。

〔E-17土坑〕

遺構（第22図D、P L-13A）

本土坑は、調査区西方のE-17グリットに位置する。

規模は、開口部で直径約80cm、検出面からの深さは約30cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土は2層からなり、自然堆積の様相を呈している。壁は、底面よりやや内湾気味に立上がる。底面は、ほぼ平坦かつ水平である。

遺物

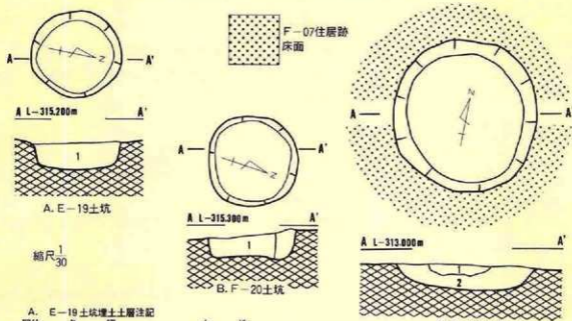
土器・石器とも出土していない。

遺構の時期

遺物の出土がないので定かではないが、縄文時代の土坑であろうと推定される。

〔E-19土坑〕

遺構（第23図A、P L-13B）



A. E-19土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR2/2黒褐色シルト質粘土	締まりがあり粘性も強い。砂礫粒を散状に含む。

B. F-06土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR3/3暗褐色シルト	堅く締まっている。粘性はない。焼土粒、炭化材小片、産鏝性地山粒を散状に含む。
2	10YR2/2黒褐色粘土質シルト	堅く締まっている。粘性は弱い。若干の炭化材小片を含む。

C. F-20土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR2/2黒褐色シルト質粘土	締まりがあり粘性も強い。砂礫粒を散状に含む。

第23図 土坑-2

本土坑は、調査区西端寄りのE-19グリットに位置する。

規模は、開口部直径約70cm、検出面からの深さが約20cmを測り、平面形は円形を呈する。埋土は単層であるが、自然堆積の様相を呈している。壁は、底面から垂直に立上がる。底面は、平坦かつ水平である。

なお、本土坑は、形状・規模・埋土が至近の北西から検出されたF-20土坑（第23図B・P L-13D）と酷似する。

遺 物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

遺物の出土がないので、詳細は不明であるが、おそらく、縄文時代の土坑であろう。

[F-06土坑]

遺 構 (第23図C、P C-13C)

本土坑は、調査区北端の西方のF-06グリットに位置し、F-07窪穴住居跡を切っている。

規模は、開口部長径約1.20m×短径1.16m、検出面（F-06堅穴住居跡の床面）からの深さが約20cmを測る。平面形は円形を呈する。埋土は2層からなり、自然堆積の様相を呈する。壁は、外傾して緩やかに立上がる。断面形は浅皿形を呈する。

遺物（第32図E・第37図B・P.L-20A・23F）

〔土器〕

埋土内から4点の破片が出土している。97は口縁端部に刻目帯を付す以外は無文である。98・100は縄文を施文し沈線を付している。99は100に近いがさらに瘤を貼りつけている。

以上のことから、97は第VI群3類、98は第V群、99は第VII群1類、100は第VI群4類に近い様相を示している。

〔石器〕

凹石(㊸)1点と、石皿(㊹)1点が出土している。いずれも埋土内からの出土で、石皿は欠損している。

遺構の時期

97～100の出土から、本土坑は縄文時代後期中葉～後葉に属するであろう。

〔F-20土坑〕

遺構（第23図B、P.L-13D）

本土坑は、調査区西端近くのF-20グリットに位置し、本遺跡から検出された遺構中最西端から検出された。

規模は、開口部直径約76cm、検出面からの深さは約18cmを測る。平面形は円形を呈する。埋土は単層で自然堆積の様相を呈している。壁は、底面から垂直に近く立上がる。底面は、平坦かつ水平である。

なお、形状・規模・埋土がE-19土坑に酷似する。

遺物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

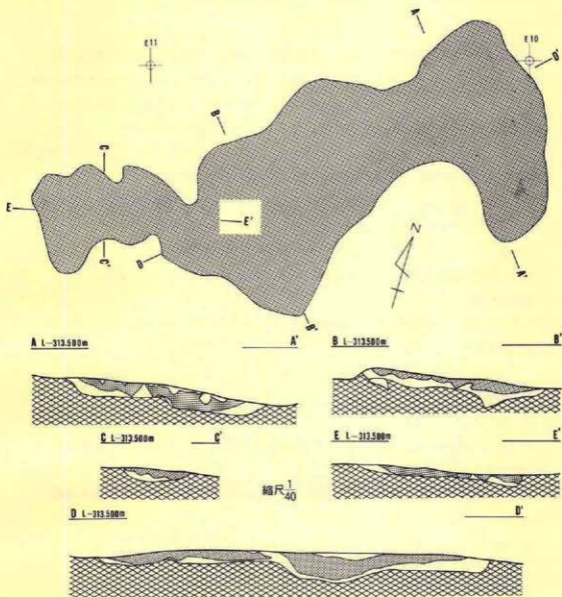
遺物の出土がないので定かでないが、縄文時代の土坑と考えられる。

(5) 焼土遺構

〔D-11焼土遺構〕

遺構（第24図、P.L-14B）

本遺構は、調査区中央部のやや東方D-10・11を中心とするグリットに位置する現地性焼土



第24図 D-11焼土遺構

である。至近の北からF-11竪穴住居跡 F-09竪穴住居跡状遺構、西からは、D-12竪穴住居跡も検出されている。

平面は不整形を呈する。規模は長軸方向最長約5.5m、短軸方向最大幅約2.50m、最大層厚約20cmを測る。長軸は東南東-西南西を示す。なお、長軸断面で観察すると層厚の厚・薄によって数ブロックに分かれるが、いずれも焼けしまりは悪い。

遺物 (第33図・第36図F、PL-20B・23D)

〔土器〕

本焼土遺構は広範囲に分布しているので、多量の土器片が出土している。101・102は縄文を

付した後沈線で区画し、縄文を磨消している。103～105も101・102とほぼ似た状況を示すが、沈線の区画が前者は直線であるのに、103～105は入組文風に区画する。106は無文の器面に沈線が付されている。107・108・111は口縁端部や頸部に刻目帯を付し・111の場合は体部に木葉文風の縄文施文部をもつ。112・113はほぼ同じ様相を示し、沈線区画と磨消縄文によって施文されている。区画はどちらかという直線的である。110・114・115は縄文のみが施文された粗製土器である。116は無文で、109は無文の器面に帯挿きによる条線文をもつ。

以上このことから、101・102・106・112・113は第VI群2類、103～105は第VI群4類、107・108・111は第VI群第3類、110・114・115は第VII群に相当する土器であろう。

〔石器〕

竪形の石匙(24)が1点出土している。刃部は両面剝離され、入念な作りである。

遺構の時期

出土した土器は、縄文時代後期中葉～後葉にかけてのものであることから、ほぼこの時期に属する遺構といえるだろう。

〔E-14焼土遺構〕

遺 構 (第25図A、P L-14C)

本遺構は、調査区中央部からやや西のE-14グリット内に位置し、基本層序第III層が焼成を受けた現地性焼土である。

平面形は不整形を呈する。規模は、長軸約54cm×短軸約46cm、最大層厚5cmを測る。焼けしまりは弱い。

遺 物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

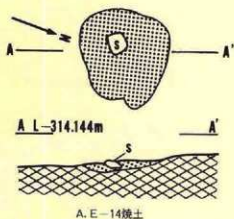
遺物の出土がないので明確でないが、D-11焼土遺構と同位面で検出されていることから、縄文時代後期に属する遺構と推定される。

〔E-17焼土遺構〕

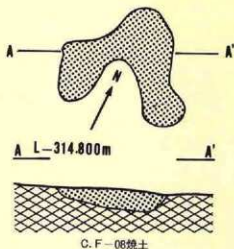
遺 構 (第25図B・P L-17b)

本遺構は、調査区西方のE-17グリットに位置し、基本層序第III層が焼成を受けた現地性焼土である。また、本遺構は、E-17竪穴住居跡南側壁の一部を切り、E-17土坑の北端部に接している。

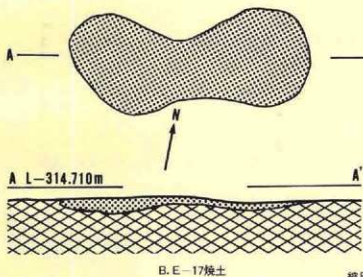
平面形は「ひょうたん」形を呈する。規模は、長軸約1.3m×短軸約0.5m、最大層厚約4cmを



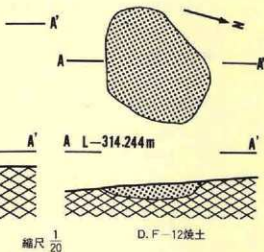
A. E-14焼土



C. F-08焼土



B. E-17焼土



D. F-12焼土

縮尺 $\frac{1}{20}$

第25図 焼土遺構

測る。長軸方向の断面で観察すると中部の焼土層が薄い。これは、強い焼成を受けた部分が2か所あり、それが連続して平面形が「ひょうたん」形を呈していると思われる。

遺物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

前のE-14焼土遺構と同じ理由より、縄文時代後期に属するであろう。

〔F-08焼土遺構〕

遺 構 (第25図C)

本遺構は、調査区中央部からやや東のF-08グリットに位置し、基本層序第III層が焼成を受けた現地性焼土である。

規模は、直径60cmの範囲に納まるが、平面形は不整形を呈する。焼き締まりは弱い。

遺 物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

E-14焼土遺構と同じ理由から、縄文時代後期に位置づけられるものと推定される。

〔F-12焼土遺構〕

遺構 (第25図D、P L-14E)

本遺構は、調査区中央部のF-12グリットに位置し、基本層序第III層が焼成を受けた現地性焼土である。

平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸約68cm×短軸約50cm最大層厚約7cmを測る。焼けしまりは強く硬い。

遺 物

土器・石器ともに出土していない。

遺構の時期

遺物の出土がないので明確でないが、E-14焼土遺構と同じ理由により縄文時代後期に位置づけられる遺構と推定される。

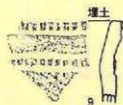
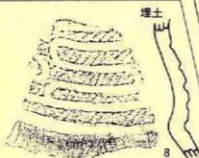
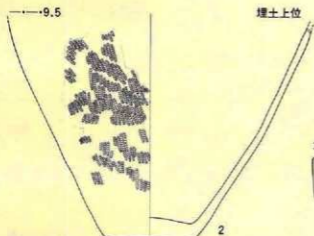
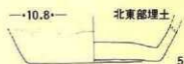
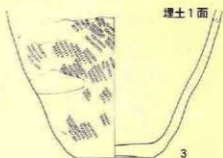
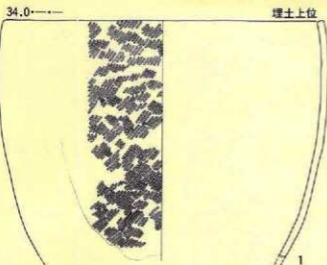
(6) 遺構外の遺物

本遺跡の調査によって出土した遺物は、遺構内から出土した遺物は少く、その殆んどは遺物包含層や、粗掘り、遺構検出中に基本層序第I層～第III層から出土した。遺物の種類としては土器と石器があり、鉄器等の金属製品は出土していない。本項で扱う遺物は遺構以外から出土した土器と石器であり、遺物包含層から出土したものを含めている。

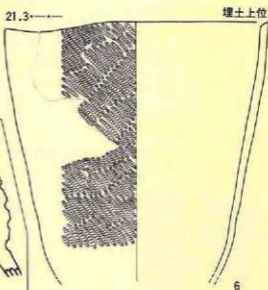
土器・土製品・石器・石製品に大別して以下にその概略を記述する。

1) 土 器

出土した土器の中には、①縄文式土器、②弥生式土器、③土器師、④須恵器の4種類が含まれるが、ここでは次のような群構成で区別し、時代的な面も考慮した。



B. E—12住居跡



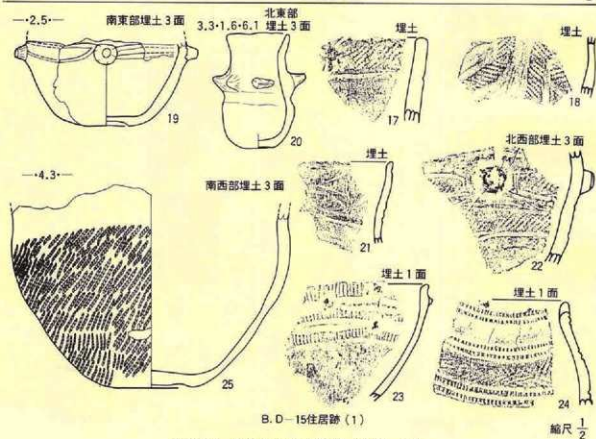
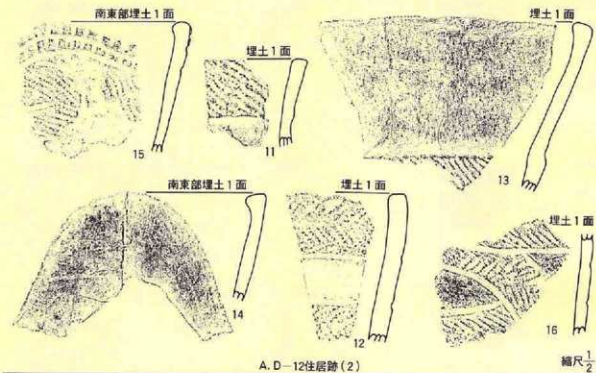
A. D—12住居跡(1)

1・2 縮尺 $\frac{1}{4}$

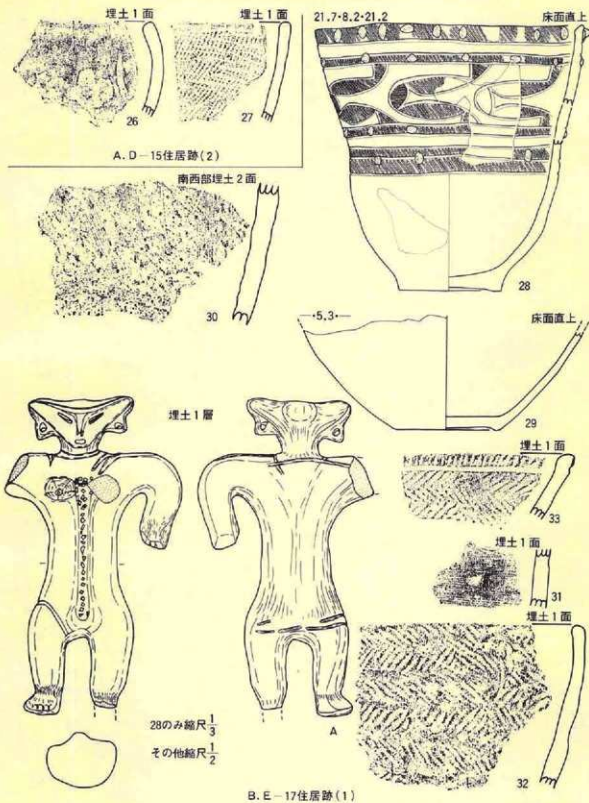
3~6 縮尺 $\frac{1}{3}$

7~10 縮尺 $\frac{1}{2}$

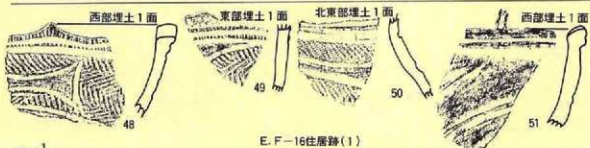
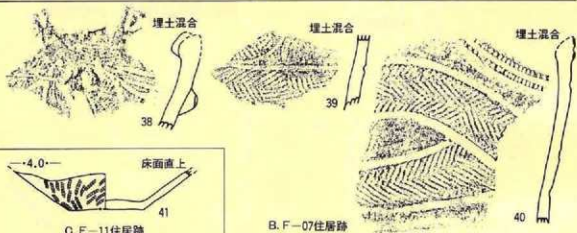
第26図 遺構内の出土遺物(土器-1)



第27図 遺構内の出土遺物(土器-2)

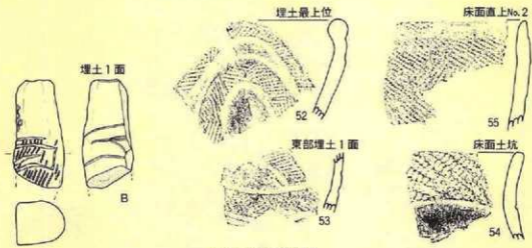


第28図 遺構内の出土物(土器-3)

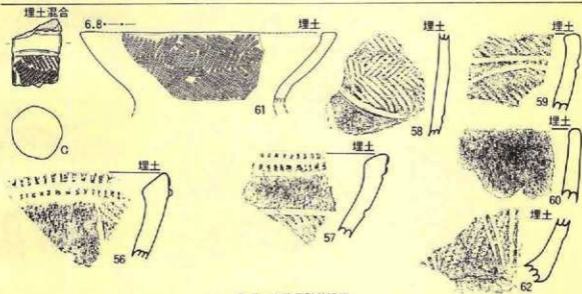


縮尺 $\frac{1}{2}$

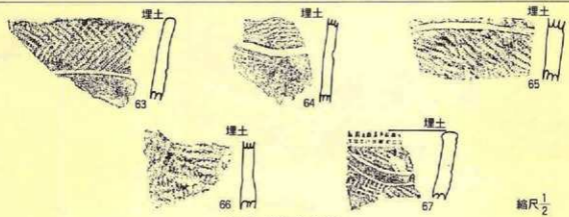
第29図 遺構内の出土遺物(土器-4)



A. F-16住居跡(2)



B. E-05住居跡状遺構



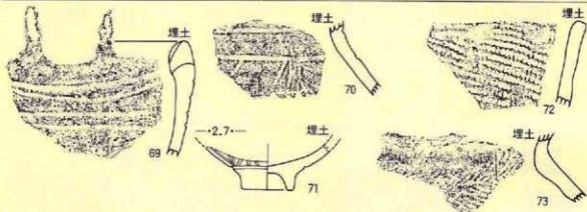
C. E-07住居跡状遺構

第30図 遺構内の出土遺物(土器-5)

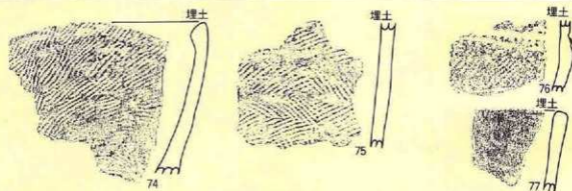
縮尺 $\frac{1}{2}$



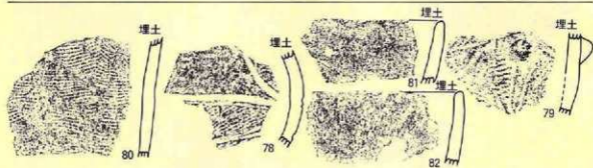
A. E-09住居跡状遺構



B. F-03住居跡状遺構



C. E-04円形柱穴列



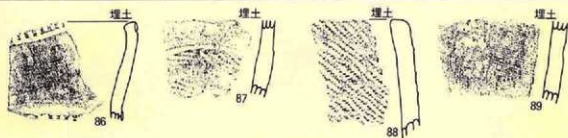
D. E-05方形柱穴列(1)

縮尺 $\frac{1}{2}$

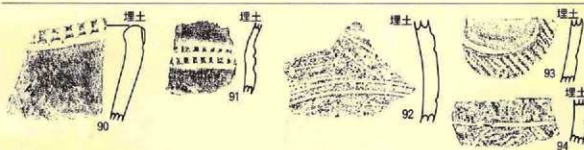
第31図 遺構内の出土物(土器-6)



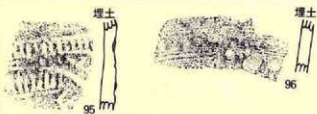
A. E-05方形柱穴列(2)



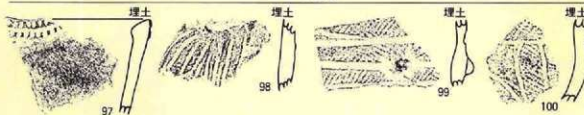
B. E-08土坑



C. E-09土坑



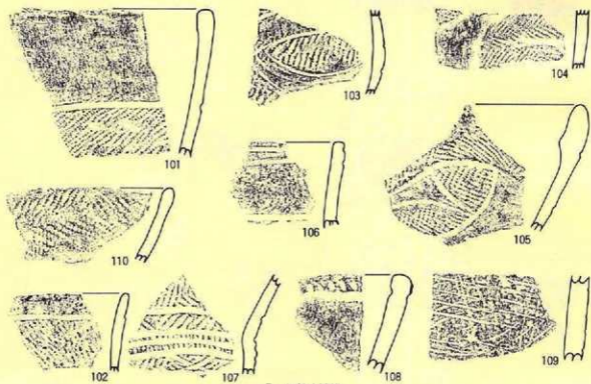
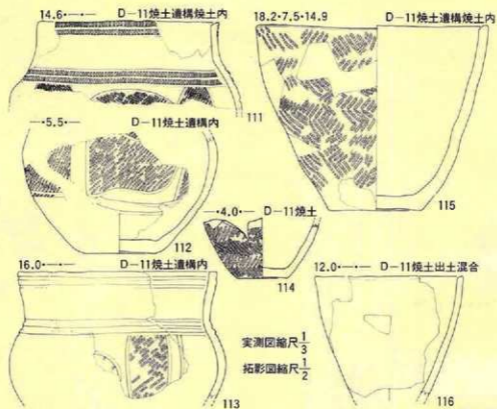
D. E-14土坑



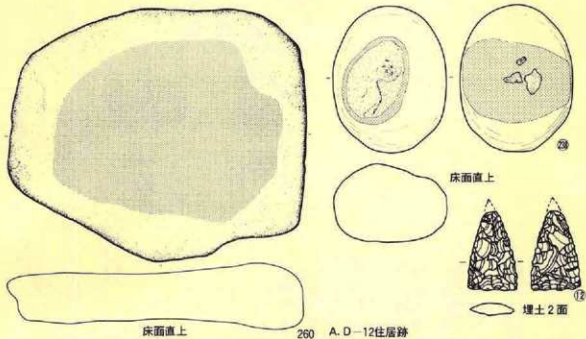
E. F-06土坑

縮尺 $\frac{1}{2}$

第32図 遺構内の出土物(土器-7)



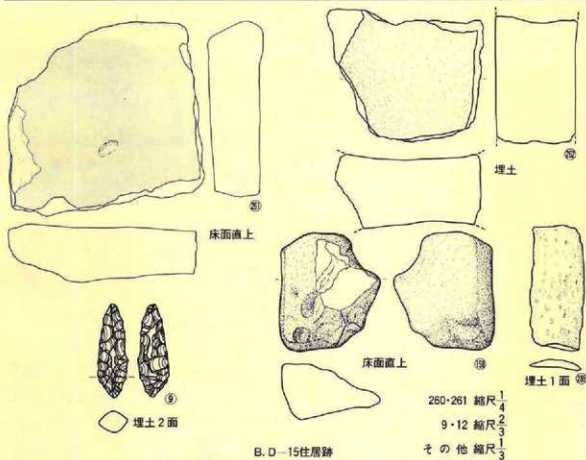
D-11焼土遺構
 第33図 遺構内の出土遺物(土器-8)



床面直上

260

A. D-12住居跡



床面直上

261

埋土

260

床面直上

261

埋土1面

260

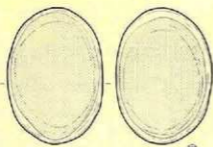
埋土2面

9

B. D-15住居跡

260・261 縮尺 $\frac{1}{4}$
 9・12 縮尺 $\frac{2}{3}$
 その他 縮尺 $\frac{1}{3}$

第34図 遺構内の出土遺物(石器-1)

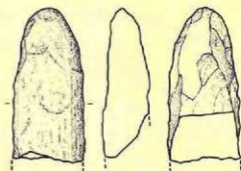


㉘

埋土 3面

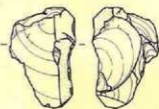


A. D-15住居跡



埋土 2面

㉙



無番号

埋土 1面



埋土 1面

㉚

埋土 2面

㉛

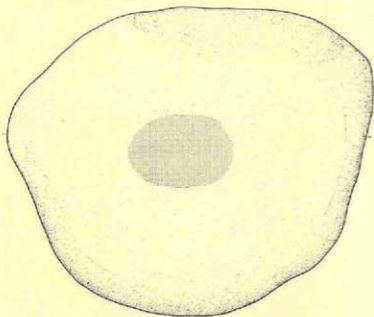
埋土 2面

㉜



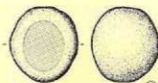
埋土 2面

㉝



床面直上

B. E-17住居跡



埋土

㉞



①・㉚・㉛

縮尺 $\frac{2}{3}$

㉙・㉜・無番号

縮尺 $\frac{1}{2}$

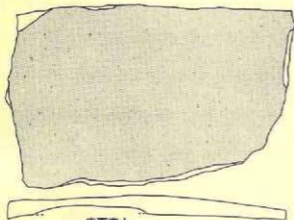
㉚・㉛

縮尺 $\frac{1}{3}$

㉞

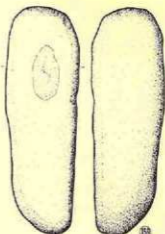
縮尺 $\frac{1}{4}$

第35図 遺構内出土の遺物 (石器-2)



床面直上

A. E-17住居跡



床面直上

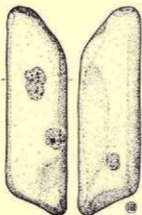


床上5cm



埋土

C. F-16住居跡



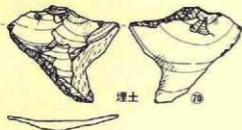
埋土



埋土

B. F-11住居跡

縮尺 $\frac{1}{4}$
 縮尺 $\frac{1}{3}$
 その他 縮尺 $\frac{1}{2}$



埋土

D. E-07住居跡状遺構



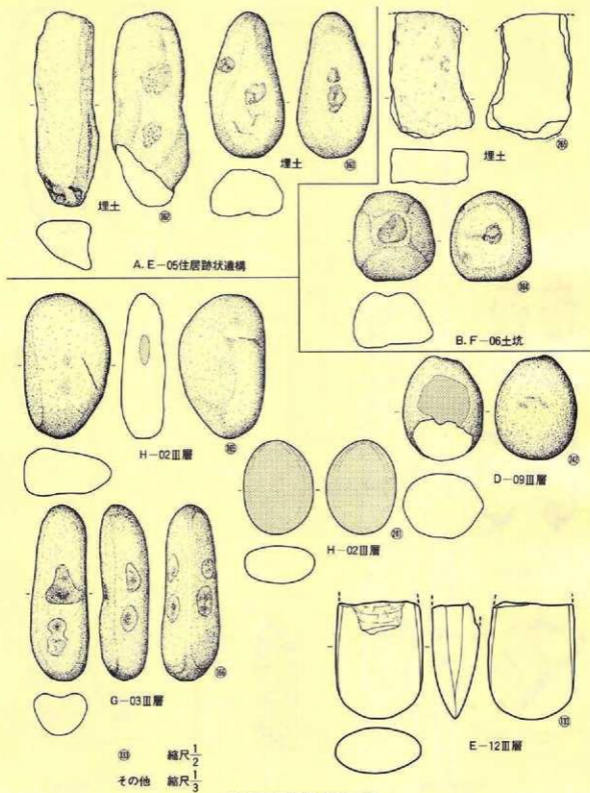
埋土

E. F-14土坑



F. D-11焼土遺構

第36図 遺構内の出土遺物(石器-3)



C. 遺構外の遺物 (石器-1)

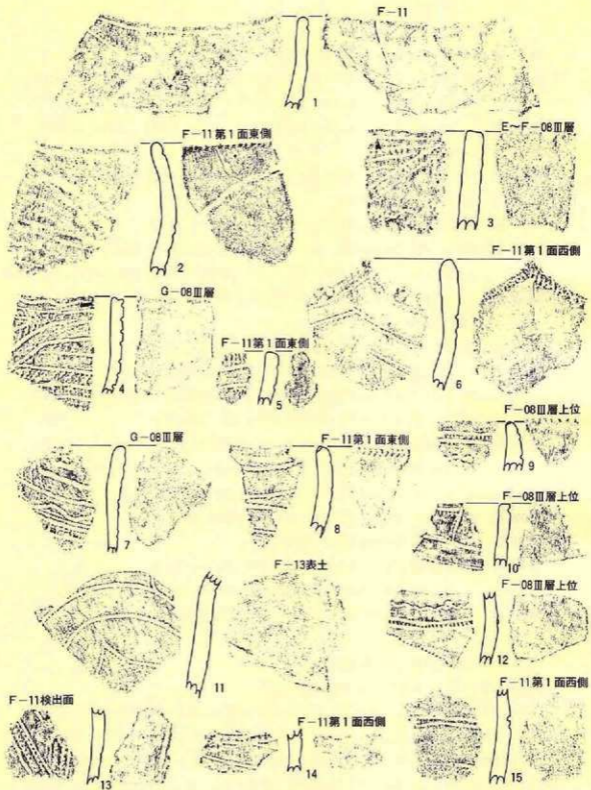
第37図 遺構内の出土遺物 (石器-4)

- 第Ⅰ群 本群には縄文時代早期に属する土器を入れた。
- 第Ⅱ群 本群は縄文時代前期初葉に位置づけられる土器であるが、円筒式土器や大木式土器の範疇に入らない土器である。さらに細分されている。
- 第Ⅲ群 ここには円筒式土器に属する土器を入れたが、下層式（前期）と上層式（中期）に細分されている。
- 第Ⅳ群 本群には大木式土器に属するものを入れたが、時期的には中期に位置づけられる。施文法によって細分される。
- 第Ⅴ群 縄文時代後期前葉に位置づけられる土器を入れた。
- 第Ⅵ群 本群には縄文時代後期中葉に属する土器を入れ、瘤付土器群の直前までを一括した。本遺跡出土の土器の主体を成しており、施文方法でさらに細分されている。
- 第Ⅶ群 ここには縄文時代後期後葉～末葉の所謂瘤付土器を一括したが、施文方法によって細分される。
- 第Ⅷ群 体部に地文を全くもたない無文土器を一括した。
- 第Ⅷ群 地文として縄文の代わりに櫛歯による条線文を施した土器を入れた。
- 第Ⅹ群 本群には良く研磨された微隆起帯の貼付によって文様を表出し、地文として縄文をもたない土器を入れた。縄文後期末葉の土器と考えられる。
- 第Ⅺ群 ここには体部に沈線による斜め格子文をもつ土器を入れた。縄文は持たず、壺れ部に貼瘤がみられることから、縄文後期末葉に属するであろう。
- 第Ⅻ群 縄文以外の装飾文様を何んらもたない所謂粗製土器を入れた。
- 第Ⅻ群 本群にはかつて袖珍土器と呼称された小型土器を一括した。
- 第Ⅻ群 ここには縄文時代晩期に属する土器を入れた。
- 第Ⅻ群 本群は弥生式土器とおもわれる土器である。量的には少ない。
- 第Ⅻ群 ここには北海道系土器と考えられる土器を入れたが、出土は1点のみである。
- 第Ⅻ群 古代に属する土器を一括したが、土師器と須恵器で細分される。

では、次に以上の群構成ごとの細部について記していく。

【第Ⅰ群土器】(第38・39図1～22、P L—24・25A)

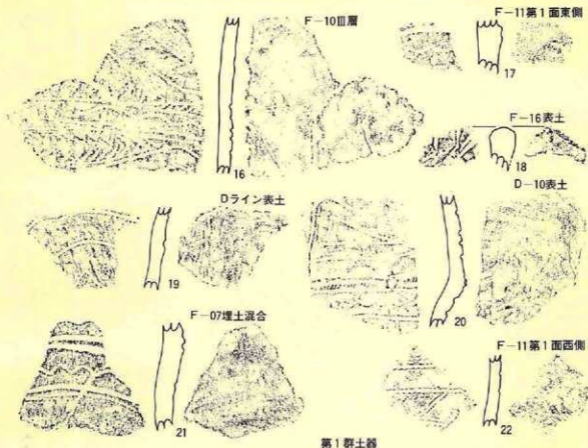
本群は縄文時代早期に属する土器であるが、いずれも破片で、完形や図上複元できるような個体は出土していない。出土点数は25点であるが、本報告書には小破片を除外した22点を収録した。出土地点はグリッドF・G—08～11の範囲でその殆どが出土し、出土層位は相掘り中に表土から出土した破片もあるが、基本層序Ⅱ層下位～Ⅲ層上位での出土が多いことから、本来の文化層はこの層であろう。



第1群土器

縮尺 $\frac{1}{2}$

第38図 遺構外の遺物 (土器-1)



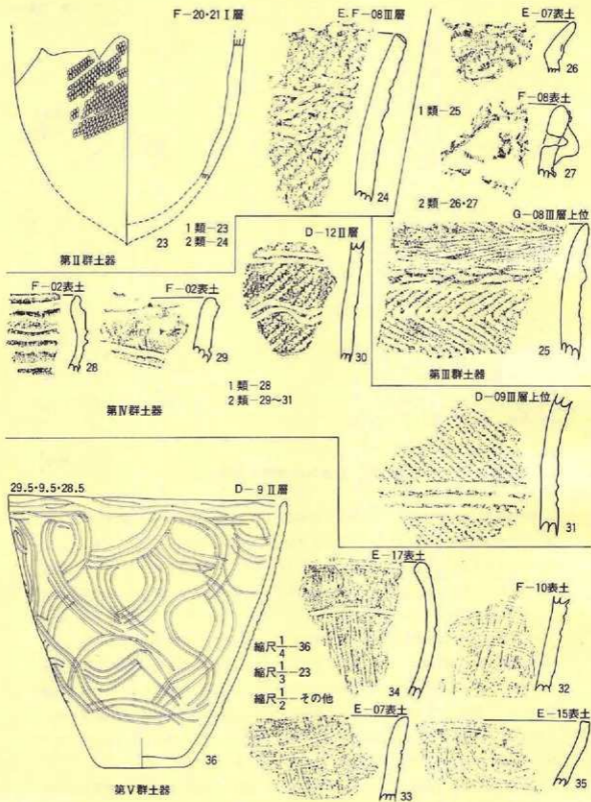
第1群土器

第39図 遺構外の遺物（土器—2）

縮尺 $\frac{1}{2}$

口縁部破片（1～10・18）から口縁部形態をみると、1・2・6・8・18の形態をみると破状を示す個体があることを表わしており、他の3・4・9等は平縁を示しているであろう。口縁部はいずれも体部上位（頭部に相当）で外湾（11・20）した後直立気味に立ち上がり、端部に向って軽く内湾する状態を示し、所謂「キャリパー形」に近い形状を呈している。底部は出土していないので底部形態は不明といわざるおえないが、尖底を示すものと推定される。施文されている文様は、直線的・蛇行・鋸歯状の沈線と、並行沈線とその間を埋める縦位の刻み目・貝殻腹縁文・円形刺突痕等によって構成されている。また、口唇から口縁部内面端部にも貝殻腹縁端部による貝殻腹縁文を入れる個体が多く、中には莖による刻みの場合もある。沈線と貝殻腹縁文は、口縁部と平行や斜行するように施され、時には縁線と腹縁部が接する状態で並行する場合もある。このような文様は口縁部のみではなく体部にも施文されており（11・16・19・21）、口縁部・体部ともに幾何学的な文様を施すことを特徴としている。

内面や外面の無文部は良く磨かれ、条痕や擦痕をもつ破片はない。胎土は良く精選された細粒の粘土を使用し、若干の細砂を混入している。焼成はいずれも良好であるが、一部に黒斑を



第40図 遺構外の遺物（土器-3）

残している。色調な褐色を示すものが多い。

〔第II群土器〕(第40図23・24、P L-25 B)

本群には、縄文時代前期初葉に位置づけられ、円筒式土器や大木式土器の範時に入らない土器を入れたが、いずれも破片の出土であるので全体的なことは不明である。また、本群の土器は2点のみの出土であるが、体部の縄文に違いがあるので次のように細分した。

1 類 (23)

調査範囲の西端グリッド F-20の基本層序第I層から出土した1点が該当する。破片は体部中位～下位にかけての部分を残存している。底部は欠失しているが、破片の湾曲具合からみると、底部形態は尖底を呈するものと考えられる。縄文以外の施文有無は口縁部を残存しないので不明であるが、底部付近を除いた器表全面に縄文を付しているらしい。付されている縄文は一見原体LR横回転による単節斜行縄文に近似した状態を示しているが、本類の場合は、各条の節が左右は一節ごとに、また、上下や斜めはそのまま直線的に連続する特徴をもっている(原体を復元しかねている)。胎土には繊維が混入され、比較的多量の砂粒を含んでいる。焼成は比較的良く、色調は褐色を示している。内面には指おさえによる小起伏があるが、全体としては良くなでられており、縄文や条痕・擦痕等はない。

2 類 (24)

本類にはE-08基本層序第III層から出土した1点が入る。この土器は口縁～体部上位を残存する破片で、前の1類の破片よりも小さい。底部形態や全体的な器形は不明であるが、この破片は口縁端部に向って軽く外湾している。器表には縄文以外の文様を付していない。縄文は、原体LR横回転による単節斜行縄文を地文とし、口縁端部の下位2.5cmには結節部横回転による俗に綾絡文と呼ばれる結節回転文を3条付している。付す順序は、地文を全面に付した後結節部だけを回転して施文している。口唇は丸味をもっているが、篋先の押圧によると思われる刻み目が入っている。内面調整はやや粗く、指撫でとおもわれる擦痕を残している。胎土には少量の繊維の他に比較的多量の粗砂を含む砂粒が混入している。焼成は良く、暗褐色を呈する。

〔第III群土器〕(第40図25～27、P L-25 C)

本群には円筒式土器に属する土器を入れたが、この中には前期の土器と中期の土器があるので細分した。

1 類 (25)

本類は前期の円筒下層式に位置づけられる土器で、グリッド G-09基本層序第III層上部から1点出土している。土器は口縁部～体部上位を残す破片で、口縁端部に向って軽く外湾してい

る。破片は口縁部下端に断面が丸味をもつ隆帯を貼りつけて口縁部と体部を限っている。なお、隆帯には丸棒先端の斜位刺突による列点文を付している。口縁部文様は原体LとRを使用し、その2条を並行させて押圧した原体圧痕文を付しているが、条の方向は、口縁部に並行するものと斜行するものがある。端部には斜位の原体圧痕がある。体部の縄文は、原体LRとRLの末端を連結し、横回転した横位羽状縄文である。なお、使用された原体の0段は多条である。胎土には若干の繊維とやや多目の砂粒が混入し、焼成は良くない。表面の色調はやや明るい褐色であるが、内部は黒色を示し、焼成の際に中心まで火熱が達しなかったことを示している。

2 類 (26、27)

ここには中期の円筒上層式に属する土器を入れたが、E-07表土とF-09表土から各1点ずつ出土している。出土した土器はいずれも口縁部の小破片であるため詳細は不明である。口縁部形態は大きな波状を示し、突起部(27)に横長楕円形の窓をもち、さらに、窓の器表側を橋状貼付帯によって塞いでいる。口縁部の文様は細い隆帯を貼付した後、隆帯で区画された部分を寛先刺突による縦長の列点文を付している。なお、隆帯の上面にも爪先か寛先とおもわれる工具による刻み目をもつ。出土した破片では2点とも縄文の施文はない。胎土への繊維混入は観察されず、砂粒や石英粒等を含んでいる。焼成は比較的良いが、内面に黒斑を残している。色調はやや明るい褐色を示す。

【第IV群土器】(第40図28~31、PL-25D)

本群には大木式土器の範疇に入る土器を一括した。出土点数はグリッドF-02の表土から2点、グリッドD-12基本層序第II層1点、グリッドD-09表土1点の合計4点である。これらはいずれも破片であるので全体的なことは定かでないが、28は所謂「キャリバー形」を示すものであろう。施文された文様は、28・29は隆帯と沈線の組み合わせであるし、30・31は並行沈線のみによっていることから両者を細分した。

1 類 (28・29)

28・29ともに口縁部破片であるが、28は端部に向って内湾していることからキャリバー形の器形を示すであろうことは前述のとおりである。29は隆帯が一部剥落しているがその痕跡を明瞭に残している。この器形は端部に向って外湾していることから一般的に深鉢であろう。文様は隆帯とその両側を撫でた沈線によって付されている。地文として付された縄文は原体RL横回転(29)、原体LR横回転(28)による単節斜行縄文であり、いずれの場合も、隆帯貼りつけや沈線を付す前に全面に施されている。胎土には比較的多目の砂粒を混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成も若干悪く、色調は暗褐色を呈している。内面調整は指撫で、その痕跡を残している。

2 類 (30・31)

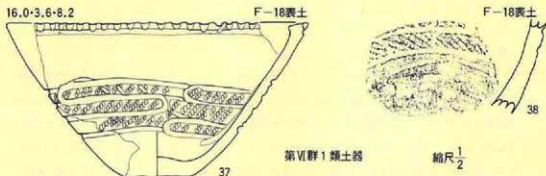
30・31ともに並行沈線のみによって施文された土器である。30の場合は2条の並行沈線が直線状または蛇行状に付されている。31は3条の太い沈線が並行して直線的に付されている。地文の縄文は原形LR・RL縦回転による単節斜行縄文が付されている。土器は体部破片であるので全体的な器形は定かではないが、口縁端部に向って外湾していることから、1類の29と同じような器形を示すかも知れない。胎土には砂粒や石英粒の混入が多く、全体として粗い粘土を使用している。焼成は良好で、色調はいずれも褐色を呈している。内面の調整は良く無でられ部分的であるが光沢をもつ。

〔第V崎土器〕(第40図32~36・第58図220~222、PL-26A)

本群には縄文後期前葉と考えられる土器を一括したが、量的には少ない。編年的には関東地方の堀の内I式に類似する様相を示す土器群である。出土地点はグリッドD~F-7~12までの範囲を中心とし、層位的には表土~基本層序第II層から出土している。32~35・220~222は口縁部(32・33・35・221・222)や体部(34)の破片であるが、32~35がほぼ同じ状況を示し、221・222が同じ様相をもつ。これらはいずれも器表に縄文をもたず、2~4条を1組とする並行沈線のみによって文様を付す特徴をもっている。36はこれの典型的な完形土器である。しかし、細部にわたって検討すると、32~36と220~222とは若干異なる要素をもっている。前者(32~36)は2条~4条の並行沈線によって施文されるが、後者(220~222)は全体的なことは不明であるが、無文の地に口縁端部付近に2条の並行沈線を付しており、前者には波状口縁のものが無いが後者の場合には221のような波状口縁がある。器形としては定かでない部分もあるが深鉢(36)、鉢(32・222)、壺(220)等がありそうである。胎土にはいずれも粗砂を含む多量の砂粒を混入し、焼成もあまり良好とはいえない。色調は褐色や暗褐色を呈する。36は比較的粗雑な調整であるが、他の破片は円外面ともに調整が良好で、光沢をもつ部分が多い。

〔第VI群土器〕(第41~49図37~128、PL-26B~31)

本群には縄文後期中葉に属すると考えられる土器を一括したが、該当するその範囲は第V群土器以降「瘤付土器群」の直前までとした。編年的には関東地方の加曾利B₁~B₃式、東北南半の宝ヶ峰式や宮戸II₁・II₂式、東北北半の十腰内II~III式と呼称されている土器に相当すると考えられる土器群である。これらの土器は調査範囲ほぼ全域で出土しているが、グリッドD~F-08~10を中心とする遺物包含層からの出土が多い。本遺跡から出土した土器の中では、本群に入る土器が最も多い。本群に入ると理解される土器全体を概観すると、器面を沈線で区画しその中の縄文を磨消するもの、口縁部や頸部を並行沈線で区画し、その間を寛先で刻



第41図 遺構外の遺物 (土器-4)

み目を付すもの等の特徴がみられることから、それらの特徴によって1類～4類までに細分した。

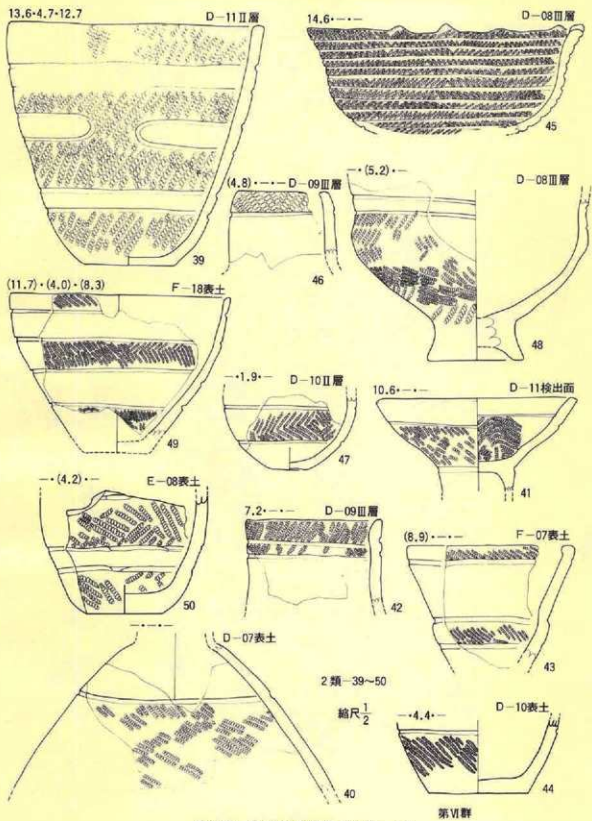
1 類 (37・38)

本類は縄文施文部に並行沈線を付す土器であるが、沈線はほぼ同じ位置で折り返すことによって結果的に並行沈線を出している土器である。本類に相当する土器は少なく、グリッドF-18の表土から出土し、掲載した2点のみである。沈線は折り返し部分が半円状の区画線を付したと同じ状況を示し、37の場合は縄文施文部の上位と下位の縄文を磨消し、無文帯としている。口縁端部には丸棒側面の斜圧による連続する刻み目が付され、刻み目の下端には1条の沈線が引かれている。また、口縁端部の内面は肥厚し、口唇は軽く内削ぎされた後、平らに撫でられている。無文部分の器表や内面は入念な撫でや磨きで仕上げられている。38は体部下位～中位を残存する破片であるが、沈線を付す方法や順序は前の37と同様である。器種もほぼ同じであろうと推定される。縄文は原体LR (37)・RL (38) 横回転による単節斜行縄文である。胎土にはやや多目の砂粒を混入しているが、焼成は非常に良好である。

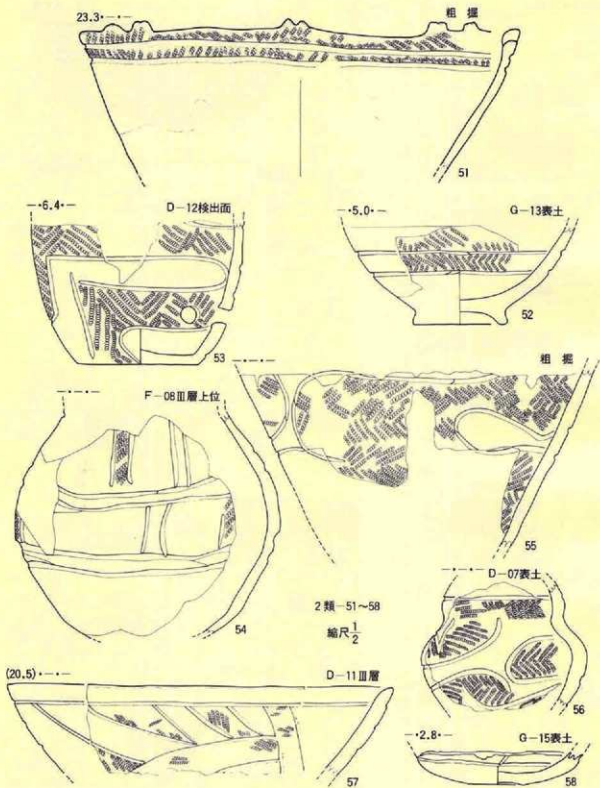
2 類 (39～73)

本類には縄文施文部を直線や曲線で区画し、区画された部分の縄文を磨消している土器を入れた。しかし、全体的にみると、並行する直線でL字形に区画して磨消するもの(54・70・72)や並行する横位の直線が全周した単に全周する無文帯を表出するもの(40～45・47～51・52・55・60～62・64)が量的に多い。53・54・70・71のように並行する直線でも縦位と横位に付して文様を構成する土器は少ない。また、55・56のように曲線で入組文状に区画し磨消するものも少ない。本類に属する土器には地文としての縄文が単節斜行縄文(39～43・54・59～61・66)、単節の縦位羽状縄文(45・46・51・53・57)、単節による横位羽状縄文(47～50・55・56・62～65・67～71)の3種類があり、これによってA種～C種までに細分される。

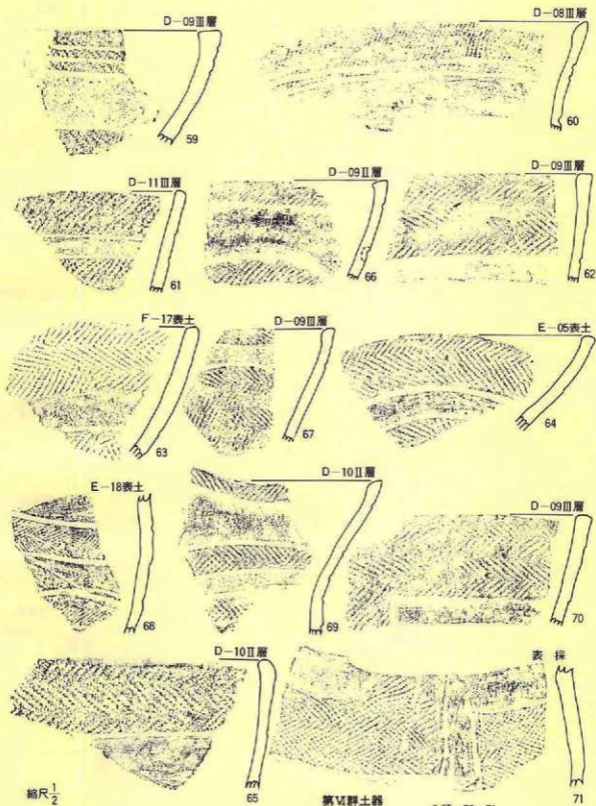
A 種——本種は地文として横回転による単節の斜行縄文を付す土器であるが、使用される原体にはLR・LR $\frac{1}{2}$ ・RL $\frac{1}{2}$ 等があり、0段多条による原体が多用されている。文様をみる



第42図 遺構外の遺物（土器-5）

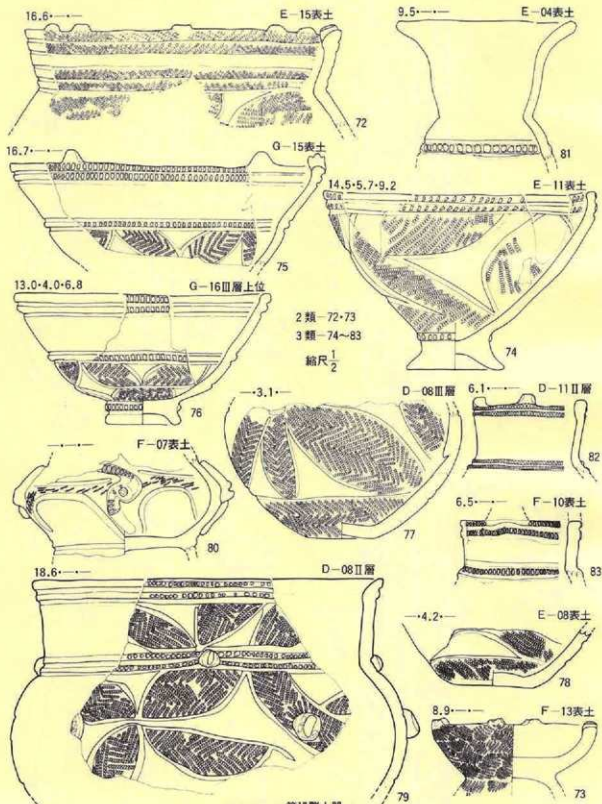


第43図 遺構外の遺物（土器-6）



第44図 遺構外の遺物（土器-7）

2類-59~71



第VI群土器
第45圖 遺構外の遺物（土器—8）

といずれも横位の並行沈線のみによって区画され、縄文を磨消している。本類に入る口縁部を残存する土器の中で、口縁部を沈線で区画して縄文を磨消するものが1点(41)あるが、他はいずれも端部付近には縄文部を残している。なお、41の場合には内面にも縄文を付した後、沈線で区画し端部を磨消している。本類にみられる器種には鉢・壺・台付鉢がある。これらの胎土には比較的多目の砂粒を含み、縄文磨消部や内面は良く撫でられ、光沢をもつ部分もみられる。色調は灰褐色～暗褐色まで巾があり、部分的に黒斑をもつ場合もある。焼成はいずれも良い。

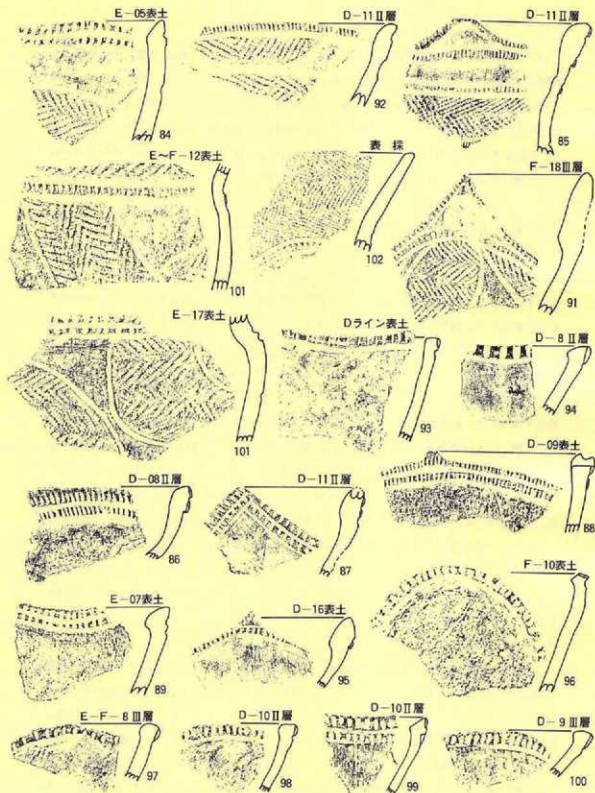
B 類—本種は縦位の羽状縄文を付す土器で、本類の中では最つとも少ない。施文されている文様は横位の並行沈線によって区画され、46・51・53・73は縄文を磨消している。45の場合は沈線の間隔が狭くそして他より数が多い(10条)ばかりでなく、縄文の磨消をまったく行っていない。その意味では他の土器と、若干異なる要素ではあるが、口縁部に大きさや間隔の不定な小突起を付す特徴は本種の51の土器に近似していることから、取り合えず本種とした。縄文の施文に使用された原体はいずれも0段多条によるLR・RLの2種類の原体を交互に縦回転させて羽状を表出している土器(45・46)と、同一の原体を縦方向と横方向に交互に回転させることによって羽状を表出する土器(53)がある。本類にみられる器種は鉢・壺・胎形土器・器台?等がある。胎土や調整・色調・焼成等はA種のそれと大同小異である。

C 種—本種は地文として横方向の羽状縄文を付す土器で、本類A種と同様量的には多い。

施文されている文様は先のA種や51を除いたB種のそれとまったく同じ様相を示すものと、それとは違う56・57のように沈線が入組文風に付され、その範囲を磨消するものが含まれている。実測個体の中に口縁が波状を示すものは含まれていないが、拓影図の中の69は大きな波状となるものと推定される。体部の縄文は0段多条によるLR₁・RL₂の2種類の原体を横方向に並行回転させて羽状を表出している。いずれも沈線で区画する前に縄文が付され、充填縄文はない。69の場合は縦位と横位の羽状が施されている。この種には鉢・壺・台付鉢等の器種がある。その他胎土、焼成・色調はA・B種と大差がない。

3 類 (74~109)

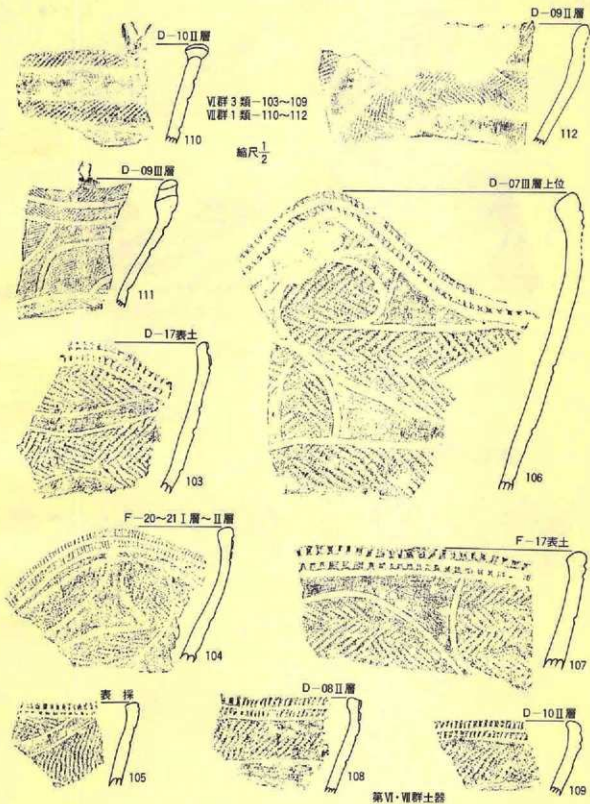
本類には口縁端部や頸部に並行沈線を付し、その間を連続する縦長の刻み目を充填する文様の施文された土器を入れた。しかし、この中には刻み目を2条付す土器(75~77・80・83~92・104~110)と、1条だけ付す土器(76・77・83・84・93~100)が含まれている。また、口縁端部の刻み目の下位には縄文を施さず頸部まで無文にする土器(88~100)と、縄文を付す土器(75・80・85~92・104~110)も混在している。さらに頸部や体部中位にも刻み目をもつ土器(76・77・80~84・101~103)もある。付される刻み目にも86や104のように細長い刻みを数多く密に付す場合と、96や107のように間隔を広くしているものがあり、使用される工具も細長い刻み



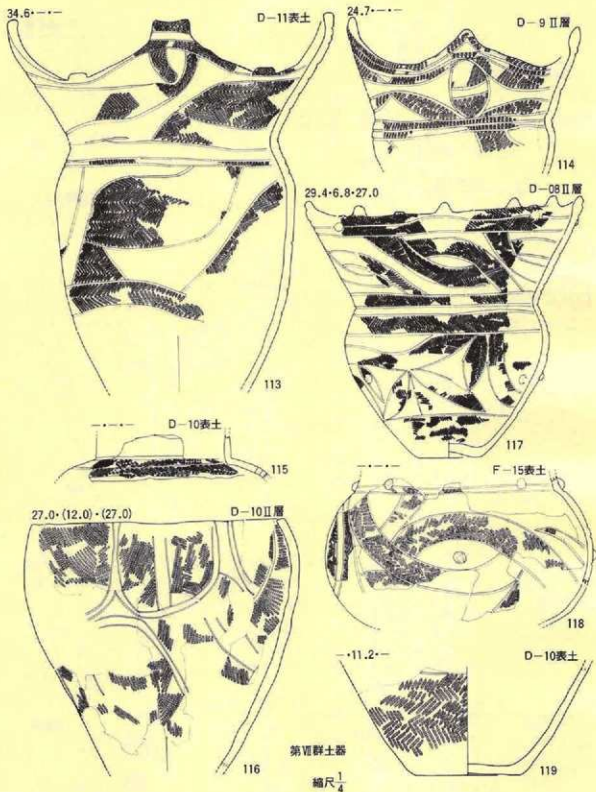
第VI群土器 3類

縮尺 $\frac{1}{2}$

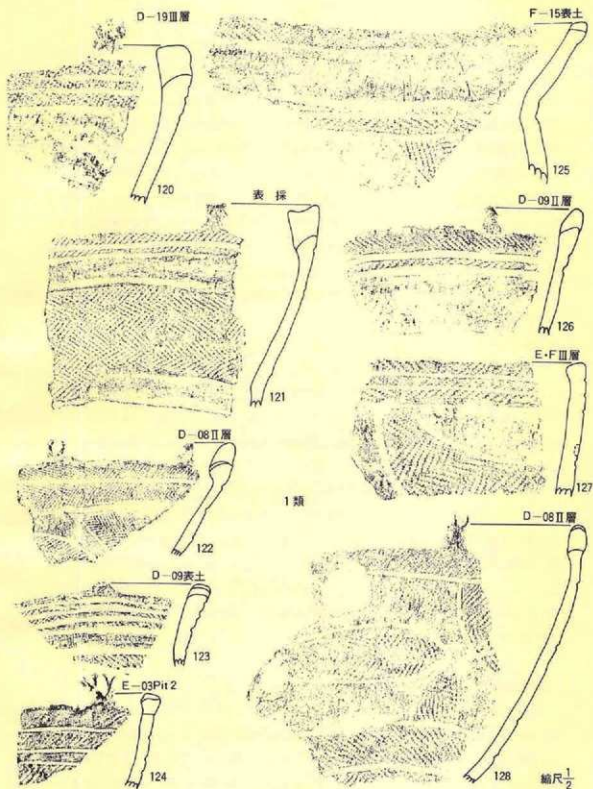
第46図 遺構外の遺物 (土器-9)



第47図 遺構外の遺物 (土器-10)



第48図 遺構外の遺物（土器-11）



第Ⅷ群土器
 第49圖 遺構外の遺物 (土器-12)

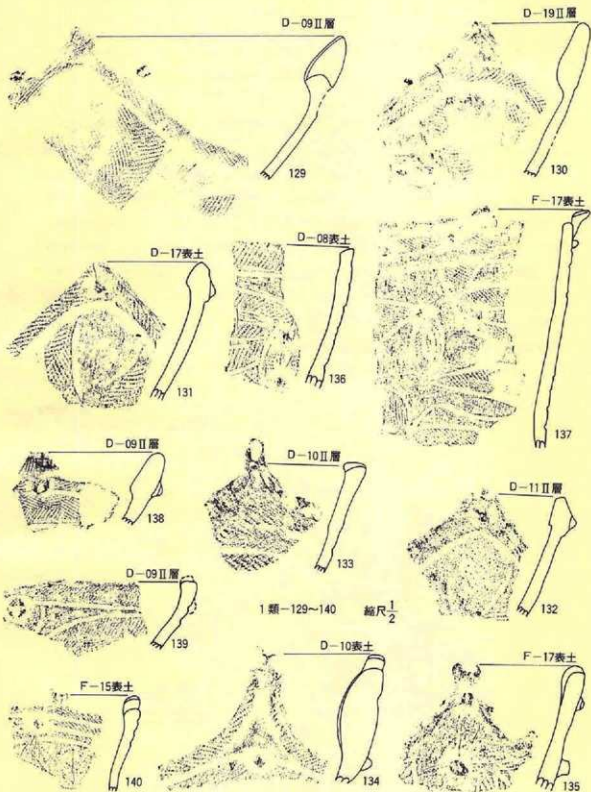
は寛先とおもわれるが96や107等は丸棒の先端を使用しているらしい。体部文様を付す順序は、最初に沈線で区画した後、必要な部分にだけ縄文を付す所謂充填縄文が多用され、その例を78・101などで観察することができる。文様の種類としては、円弧の組み合わせによる木葉文的な文様を付す土器(75~79)と、入組文的な文様を付す土器(74・80・104・107)等がある。また、本類には後期末の特徴といわれる瘤を貼り付ける土器(77・79・80)もある。口縁部は丸味をもつ大波状を示す土器(91・96・104・106)や、三角形に尖る波状のもの(91・95)、平縁に小尖起を付す土器(75・82・83)、平縁の土器(74・76・79・81)等種々の形態を示す土器が含まれている。本類に見られる器形は深鉢・鉢・台付鉢・壺等があるらしい。縄文の施文に使用される原体は0段多条によるLR $\frac{1}{2}$ ・RL $\frac{1}{2}$ が使用され、それを交互に回転させて羽状縄文を表出している。0段多条以外の原体を使用した例は本遺跡にはない。土器の胎土は前の1類や2類とほぼ同じで、やや多目の砂粒を混入しているが、焼成は良好である。色調は全体的に暗色のものが多く、暗褐色である。

4 類 (110~128)

本類は体部の文様は先の3類の一部と同じであるが、3類の特徴であった刻み目帯をもたないことを特徴としている。体部の文様が木葉文的な個体(114・128)もみられるが、主体をなすのは入組み文的な特徴を示す土器(113・117・118・121・122・125・127)である。しかし、施文の方法は3類と同様で、沈線で区画した後必要な部分にだけ縄文を付す充填縄文である。また、一部(117・118)には瘤を貼りつける例もある。体部の縄文は0段多条の原体LR $\frac{1}{2}$ ・RL $\frac{1}{2}$ による羽状縄文であり、全体的に細い原体を使用する土器が多い。口縁部は平縁に小突起をもつもの(110・111・117・120・126・128)と、四波状縁を示す土器(113・114)がある。また、前の3類に見られた頸部に刻み目帯をもつ土器が、本類では沈縁のみとなり、口縁部文様帯と体部文帯を区画している。116の土器は本類の中では若干異質ではあるが取り合えずここに入れておく。先に2類とした土器の中で42・45・51・59・60・72はもしかすると本類に入る土器である可能性がある。本類にみられる器種は深鉢と壺のみである。胎土の調整や焼成・色調は3類のそれと同様である。

【第VII群土器】(第50~54図129~171、P L-32~34A)

本群には縄文時代後葉~末葉に属する所謂「瘤付土器」と呼ばれる一群の土器を一括した。編年的には東北南半の新地式や宮戸Ⅲ_a・Ⅲ_b式、仙台湾周辺の金剛寺式や西の浜式、東北北半では十腰内V式に相当する土器群であり、これらの諸型式は関東地方の曾谷式や安行Ⅰ・Ⅱ式に並行関係を求めている。しかし、本群に相当する土器群全体を概観すると、瘤の形と貼りつける量、沈線区画の変化、縄文施文の有無等に相違点があり、さらに細分される要素が多いこと

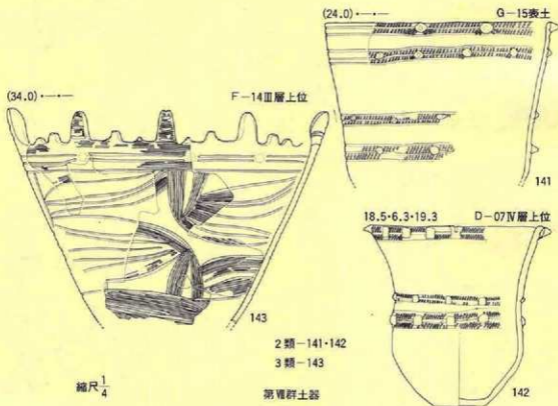


第Ⅴ群土器
 第50図 遺構外の遺物 (土器-13)

から1類~7類に細分される。これらの土器はほぼ遺跡全体で出土しているが、D・E-08~10の遺物包含層からの出土が多く、出土層位では基本層序第II層からの出土が多い。

1 類 (129~140)

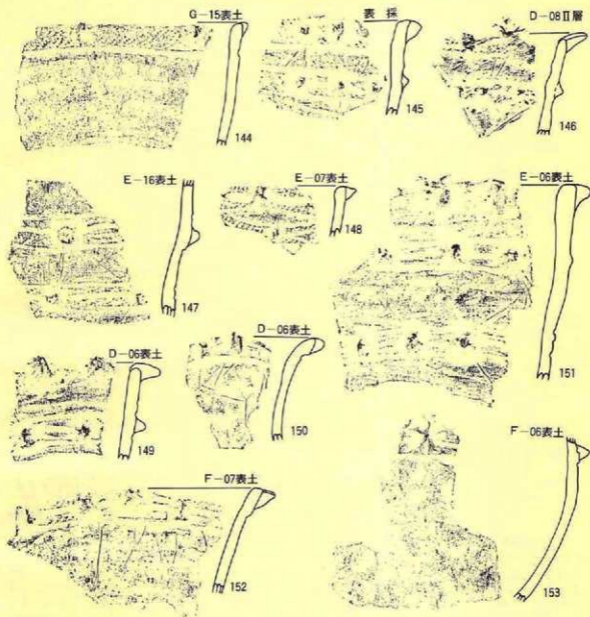
本類は、器面にイボ状の瘤を貼り付けた土器であるが、口縁部の文様は前の第VII群4類のそれと近似している。特に129~131は113・114・117・118の文様に酷似している。しかし、本類の土器の口縁は三角形に尖る波状か平縁であり、113のようなものはなく、貼り瘤の数も本類の方が多。また、口縁が波状のものも平縁の場合も口縁に貼り瘤状の小突起を付すのも本類の特徴である。また、付された瘤の上面は「へソ」状に凹むもの(138)と、「+」状に沈線を付すもの(139)や、断面三角形に尖るもの(131・134・140)等の種類がある。器面の文様は、沈線によって区画された後必要な部分にだけ縄文を付す充填縄文で施されているが、129~132の場合は縄文施文部が無文部より若干盛り上り、瘤は縄文施文部のみに付されている。体部の縄文は原体LR・RLが使用され羽状縄文が付されている。なお、133・136以外の原体は0段多糸が使用され、それも全体的に細い。本類の器種は完形品がないので定かでないが、破片の大きさや湾曲の程度・形等からみると深鉢や鉢が主体であろうと考えられる。胎土にはやや



2類-141-142
3類-143

第VII群土器

第51図 遺構外の遺物(土器-14)



縮尺 $\frac{1}{2}$

第Ⅶ群土器

2類-144~153

第52図 遺構外の遺物 (土器-15)

多目の砂粒が混入し、全体的に粗く、焼成は良い。色調は褐色や暗褐色が多いが、全体的に暗色である。

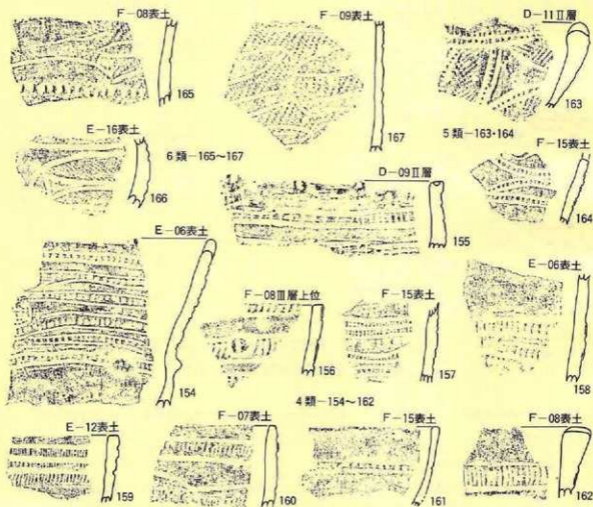
2 類 (141・142・144~153)

本類には巾の狭い縄文施文部分に、横に並ぶように瘤を貼りつける土器を一括した。器面の文様は、1~1.5cm間隔で3条の沈線を全周させ、その部分に原体L R横回転による単節斜縄文

(141・142・144・145・147・148) か柳掻き文 (146・149～153) を付し、その縄文施文部の上に瘤の貼りつけをする。このような文様帯を口縁端部からある間隔をもって3～4段配し、その他の器面は研磨し無文帯としている。瘤の大きさには若干差があり、特に口縁端には大き目の瘤を貼りつける例 (141・141・146・149) がある。また、形も丸形や方形気味・楕円形等の種類がある。全体的な器形は体部中央で軽く窄み、その上位は口縁部に向って外湾しているが、いずれの個体にも大同小異がある。なお、口縁部が波状を示す個体は出土していない。器種は鉢か深鉢であろう。胎土・焼成・色調は1類と大差がない。

3 類 (143)

ここには体部に入組み文系の文様が付され、その部分を柳掻き文で充填し、さらに瘤を貼りつける土器を入れたが、本遺跡では1個体のみ出土である。口縁部には大・中・小の突起が



第Ⅴ群土器

第53図 遺構外の遺物 (土器-16)

縮尺 $\frac{1}{2}$

数多く付されており、広義の波状口縁ということができよう。器面の文様は、最初器面を沈線で入組み文風に区画した後、必要な部分のみ櫛掻き文を充填している。したがって、櫛掻きの方向は施文部の長軸方向に則しており無文部は良く研磨され光沢をもつ。瘤は口縁部の下位に全周するように引かれた2条の沈線の間に付され、位置的には大突起部付近に付すのが一般的らしい。器種は深鉢である。胎土は緻密な粘土に石英粒や砂粒が混入し、焼成が非常に良く、色調も明褐色を呈している。

4 類 (154~162)

本類は器面を沈線で区画した後、篋先で刻みを付す土器である。文様は無文の器面に沈線で巾狭い入組み文風に区画し、その区画された範囲を篋先の刻みで充填し刻目帯としている。瘤はこの刻目帯上に貼り付けされ、瘤の上面は縦に割られる例(155、156)もみられる。刻目帯以外は無文で良く撫でられている。口縁部は波状を示すもの(162)と平縁(154~156・159~161)のものがある。器種は完形のものがないので定かでないが、出土した土器は鉢形か深鉢形であろうと推定される。器厚はいずれも5mm~7mmと他の群よりやや薄目である。無文部は良く撫でられている。胎土には砂粒の混入したやや粗目の粘土を使用し、焼成はあまり良くない。色調は暗色のものが多く、ほとんどは黒褐色を呈する土器が多い。

5 類 (163・164)

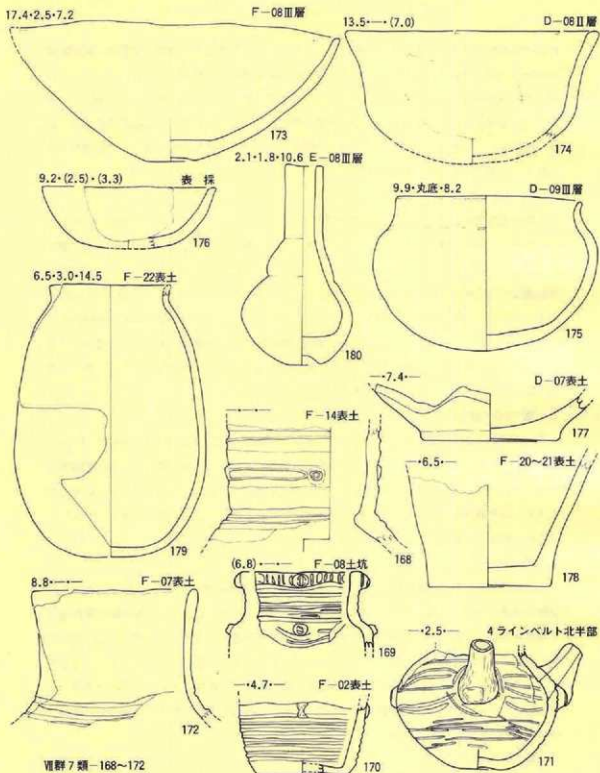
本類は前の4類と同様に刻目帯を付しているが、4類の場合は入組み文風に刻目帯であるが、本類の場合は刻目帯を円弧状に付すことを特徴としている。また、163の場合は一部の区画部分に縄文を充填するのも特徴の一つである。164の場合は縄文施文部をもたないらしい。いずれにしても、破片数が少ないので、全体的なことは不明である。胎土には砂粒がやや多く混入しているが、焼成は良好である。色調は黒褐色である。

6 類 (165~167)

本類は器面が入組み文風に区画され、さらにその部分に縄文を付す土器である。施文順序は、器面を沈線で入組み文風に区画した後、入組み文の部分の原体LR・RLによる単節斜行縄文で充填している。また、165の場合は窄れ部に全周する突き起しによる刻み目帯をもつ。口縁部破片がないので全体的なことは定かでないが、これらの土器には瘤の貼りつけがない。このことから考えると、本群の特徴である瘤付土器群に該当しない可能性もあるが、他群の文様とも異なることから、取り合えず本群に入れておく。胎土は比較的緻密な粘土が使用され、焼成は非常に良い。色調は明褐色である。

7 類 (168~172)

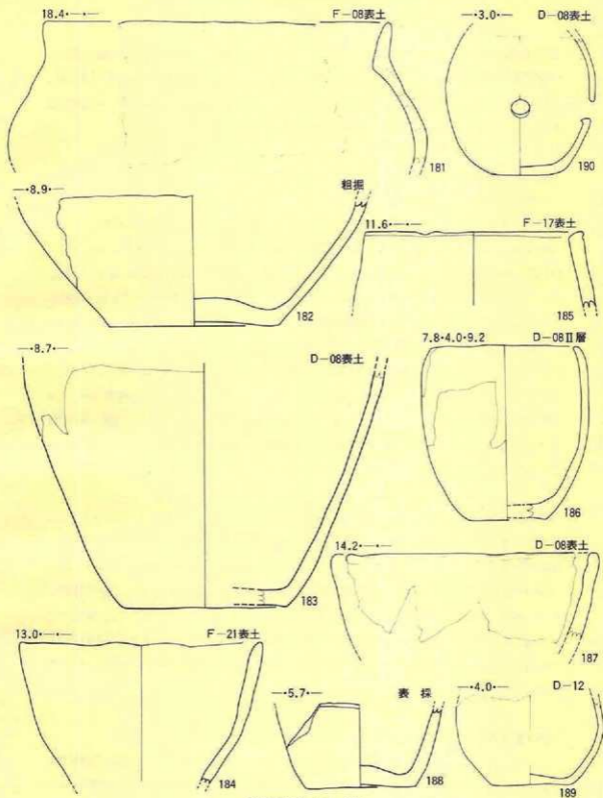
ここには沈線文と貼瘤によって施文された文様を入れた。沈線の付け方には並行沈線だけのもの(168・170・172)と、曲線によるもの(169・171)があり、両者ともに貼瘤がある。瘤の



第Ⅶ・罹群土器

縮尺 $\frac{1}{2}$

第54図 遺構外の遺物(土器-17)



第Ⅴ群土器-181~190

第55図 遺構外の遺物 (土器-18)

上面は刺突状に凹むもの(168)と縦や横に割るもの(169・171)がある。また、169の場合は口縁端部が肥厚し縦位の刻み目が付されている。器種としては171は注口土器であるが、他はいずれも壺であろう。沈線や貼り瘤以外の部分は無文で、良く撫でられている。胎土は比較的緻密で、焼成も良好である。色調は灰褐色のものが多い。

【第Ⅷ群土器】(第54～56図173～202、P L—34 B～35 A)

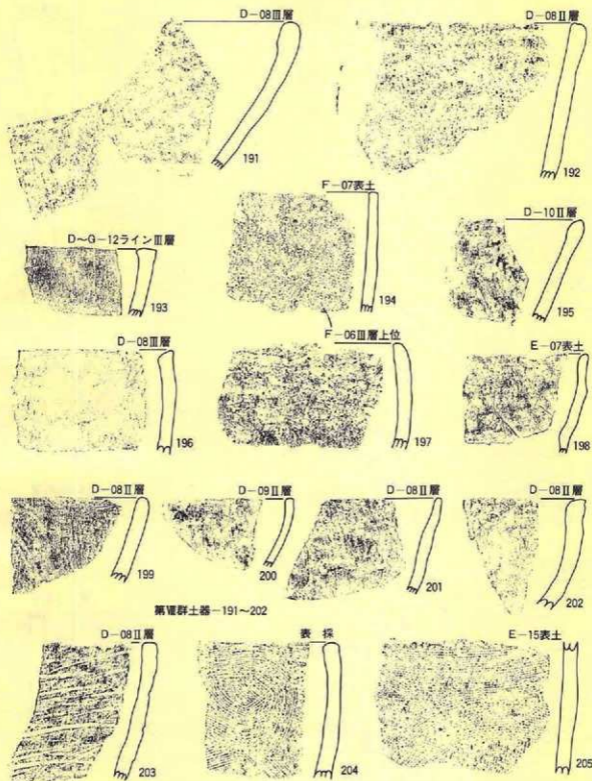
本群には器面にいかなる文様も持たない所謂無文土器を一括した。したがって、本群は本遺跡から出土した土器全体の中の無文土器であるので、時期的に各時期の土器が入っている可能性がある。しかし、全体的にみると、胎土や色調に大差がみられないことから考えると、ほぼ縄文時代後期に相当する土器であろうと推定される。器面の調整は個体差が大きく一概にいえないが、撫で調整されることは全てに共通するが、個体によって精粗がみられる。器種としては鉢(173～176)、深鉢(181～188)、壺(179・180・189・190)がある。鉢の中には174・175のように古墳時代の土師器にみられる环形に近い器形を示し、173は所謂浅鉢形で底部外面が軽く凹んでいる。176は小型の浅鉢形である。深鉢は完形品がないので全体的なことは不明であるが、大型(182・183)と小型(184～188)があるらしい。壺には180のように細頸の形、179の形、190の器形の3種類の器形がある。胎土は文様をもつ土器より若干粗く、本遺跡での第XI群土器の胎土に近似している。焼成についても同様である。色調は個体差が大きいが、明褐色、褐色、暗褐色、黒褐色等がある。

【第Ⅸ群土器】(第56～58図203～217、P L—35 B～36)

本群には地文として縄文の替わりに櫛歯による条線文を施した土器を入れたが、完形品や全体の判明する個体がないので詳細については不明である。条線をつす櫛歯には3本以上1組み(204・205・207・216・217)、半截竹管の腹と考えられる2本1組(208～211)、丸棒の先端による1本線(212～215)の3種類がある。また、条線をつける方向も単に横位の並行線的に付す土器(203・207・～215)と、所謂文様を意識したかのように蛇行させて付す土器(204・205・216・217)がある。器種は深鉢のみと推定される。胎土や焼成・色調は第Ⅷ群のそれと同様である。

【第Ⅹ群土器】(第58図218・219、P L—37 A)

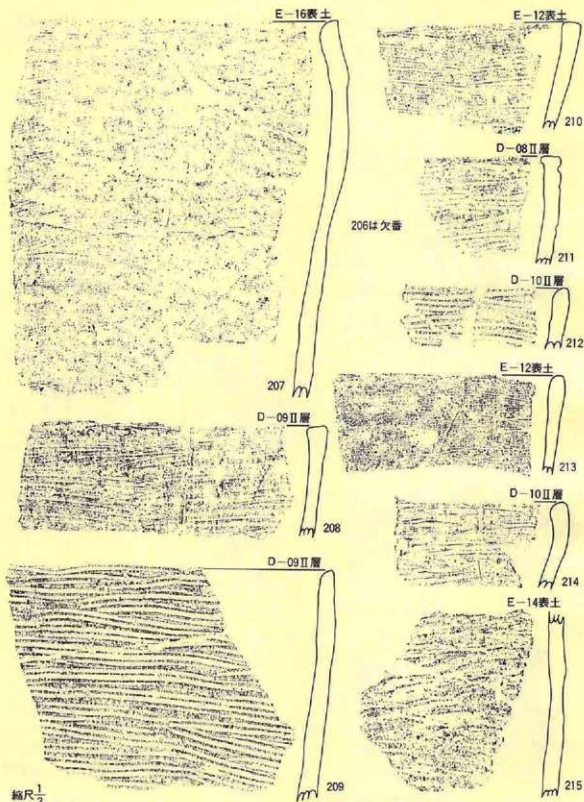
ここには良く研磨された無文の器面に微隆起帯を貼付した土器を入れたが、全体の判明する破片は出土していないので詳細は定かでない。出土点数も少ない方である。破片の湾曲の仕方や形から考えると、壺か注口土器に近い器形であろう。器表は非常に良く研磨され光沢をもつ



第Ⅸ群1類土器-203~205

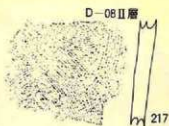
縮尺 $\frac{1}{2}$

第56図 遺構外の遺物 (土器-19)

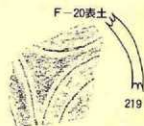


第IX群土器

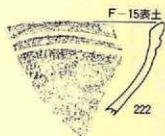
第57図 遺構外の遺物 (土器-20)



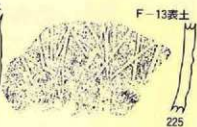
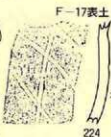
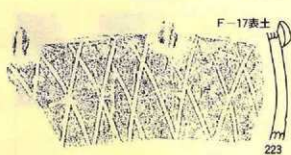
第IV群土器-216・217



第X群土器 218・219



第V群土器 220~222



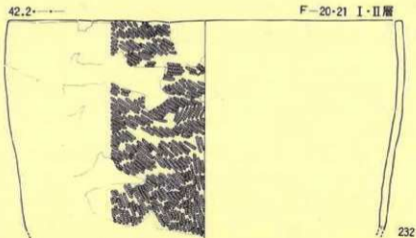
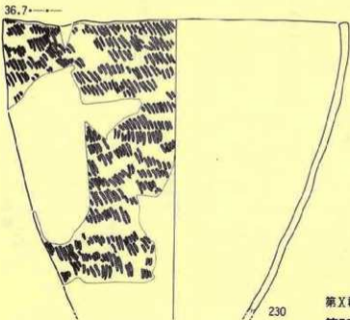
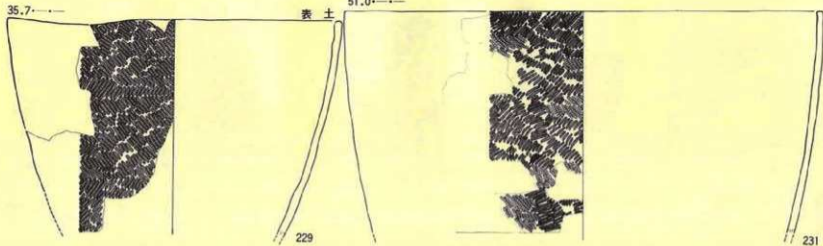
第XI群土器 223~225



第XII群土器-226~228

縮尺 $\frac{1}{2}$

第58図 遺構外の遺物 (土器-21)

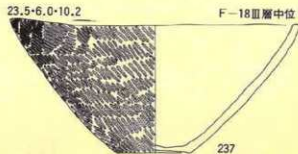
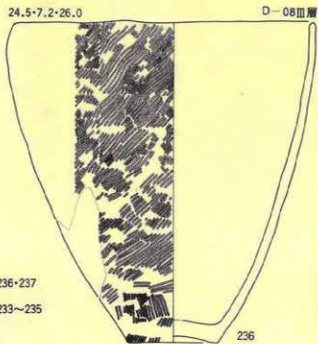
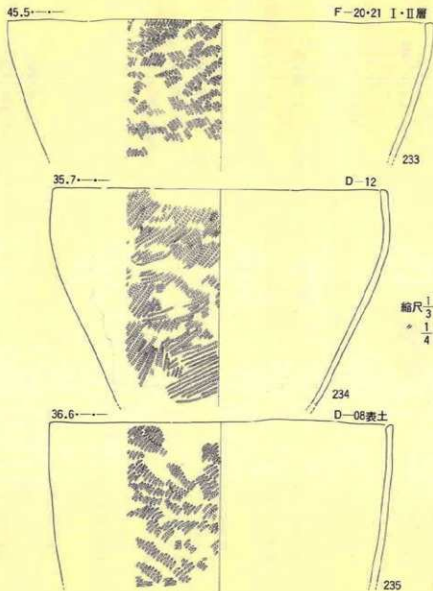


第X群土器

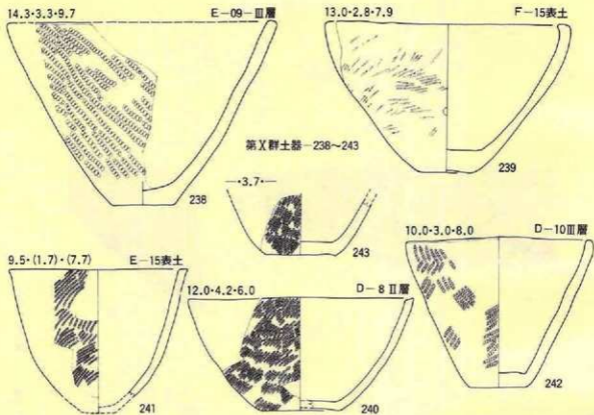
第59図 遺構外の遺物 (土器-22)

縮尺 $\frac{1}{4}$

第60図 遺構外の遺物 (土器-23)



第Ⅷ群土器



第61図 遺構外の遺物（土器-24）

縮尺 $\frac{1}{2}$

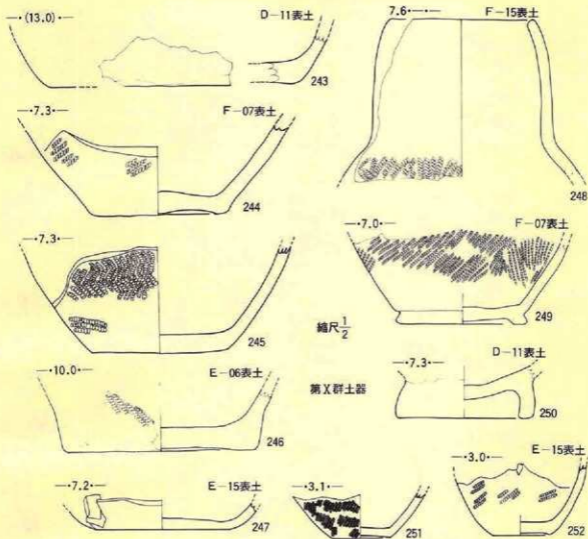
が、内面の調整は軽い撫のみである。また、器面の微隆起帯も良く研磨されている。胎土や焼成は他の群のそれと大同小異であるが、色調は黒褐色である。

【第XI群土器】（第58図223～225、P L-37 B）

本群には、器表に沈線による斜め格子文（網目状）をもち、窄れ部（頸部？）に縦長の貼瘤をもつ土器を入れた。本遺跡での出土はこの3点のみであるため、全体的なことは不明である。地文としての縄文はもたず、良く撫でられた無文の地である。窄れ部の瘤は縦位に割られている。胎土や焼成は第X群土器のそれに近似しているが、色調は褐色である。なお、3点の破片は同一個体の可能性がある。

【第XII群土器】（第58～63図226～264、P L-38・39 A）

ここには器面に縄文以外の文様をもたない所謂粗製土器を一括した。したがって、時的にみた場合には各時期に並行する土器が含まれている可能性が強い。器種としては深鉢（229～236）と鉢（237～242）、台付鉢（249・250）、壺（248）があり、それらの中で大小関係がみら

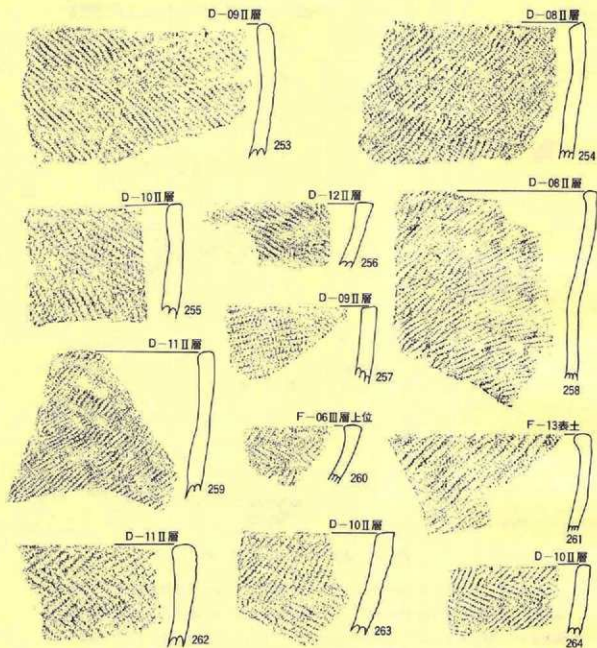


第62図 遺構外の遺物（土器—25）

れる。縄文は原体L R・R L横回転による単節斜行縄文と、それら2種類を横回転した横位羽状縄文、L横回転による無節斜行縄文、同一の原体を縦回転と横回転による縦位羽状縄文等の種類があり、特に0段多条による原体が多用されている。中でも231は一般的なR Lと0段多条によるL R |の原体を組み合わせた羽状縄文である。胎土はやや多目の砂粒を混入し、内面調整は良く撫でられている。焼成は良いもの悪いものがあり、色調も個体差が大きい。

〔第Ⅹ群土器〕（第64図265～283、P L—39 B）

本群の土器はかつては袖珍土器と呼称された小型土器である。したがって、文様等からみれば第Ⅶ土器～第Ⅹ群土器までに相当する土器が入っている。ここでは、それらによって1類～3類までに細分される。



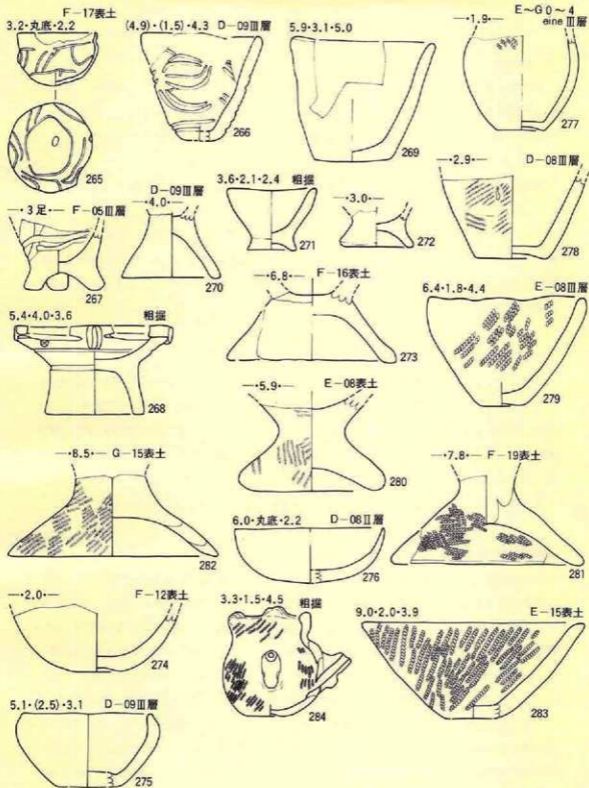
第X群土器-253~264

第63図 遺構外の遺物(土器-26)

縮尺 $\frac{1}{2}$

1 類 (265~267)

本類は第VII群6類の文様とほぼ同様の文様をもつ土器であるが、縮の貼付けがない(265~267)という相違点がある。しかし、265~267の文様は無文の器面に沈線のみによって施文され第54図171と同じ特徴をもっている。器内外面ともに調整があまり良くないが、撫でられている。胎土は良い。器種としては鉢(265・266)、足付鉢(267)、香炉形土器?(268)がある。



縮尺 $\frac{2}{3}$

第64図 遺構外の遺物 (土器-27)

2 類 (269~276)

この土器は本来は第Ⅷ群土器に相当する土器であり、器面に地文をもたない無文土器である。器種としては鉢 (269・275・276)、台付鉢 (270~273)、不明 (274) がある。器面調整は全体的に粗い。胎土や焼成、色調ともに第Ⅷ群土器のそれと同様である。

3 類 (277~283)

本類は第Ⅷ群土器に入るべき土器で、器面に縄文以外の文様をもたない土器である。器種としては鉢 (278・279・283)、台付鉢 (280~282)、注口土器 (284) がある。注口土器は口唇に4ヶの突起を付し、頭部で軽く窄む球状の体部をもち、底部外面は若干凹んでいる。縄文は原体L R横回転による単節斜行縄文、原体L横回転による無節斜行縄文、同一原体の縦回転と横回転の組み合わせによる羽状縄文等が付されている。胎土は比較的緻密で、焼成も良い。色調は褐色~暗褐色である。

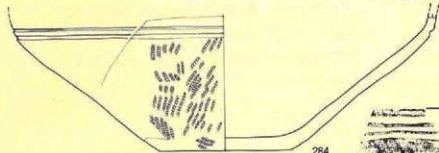
〔第Ⅳ群土器〕(第65図284~287、P L-40 A)

本群の土器は縄文時代晩期に属すると考えられるものを一括しているが、本遺跡では出土が少なく、掲載した4点が全てである。284は浅鉢であるが、頭部に2条の全周する沈線を付し、体部には原体L R横回転による単節斜行縄文が付されている。その他の285~287はほぼ同じ特徴をもち、3点とも口縁端部に3~5条の沈線を全周し、端部内面にも1条の沈線を入れている。縄文はいずれももたない。胎土は4点とも非常に粒子の細かい粘土を使用し、器内外面とも良く撫でられている。焼成も良好であるが、色調は284が明褐色で他は褐色である。

〔第Ⅴ群土器〕(第65図288・289、P L-40 B)

ここには弥生時代に位置づけられる土器を入れたが、出土量は掲載した2点だけである。288は頭部で軽く窄む深鉢で、頭部は無文でその下端に2条の沈線を全周させることと、口唇部を若干削り取って平らにし、小突起をもつことを特徴としている。体部は肩部に最大径をもって軽く窄みながら底部に移行し、底部外面は上げ底風に凹んでいる。器表の縄文は原体L R縦回転によって単節斜行縄文が付れている。なお、太い原体を使用している。289は鉢で口縁部~肩部には縄文がなく、体部には縄文をもつ。口縁端部・頭部・肩部下端には全周する沈線を引き、その沈線と沈線の間には沈線による長楕円文を充填する。さらに、長楕円文の中には一条の沈線が横に引かれる。なお、口縁端部内面にも全周する沈線が付されている。体部器表の縄文は原体L R縦回転による単節斜行縄文である。底部は平らで、内外面ともに非常に良く撫でられている。胎土は深鉢の方が砂粒の混入がやや多いが、非常に細かい粘土が使用され、焼成良好である。色調は両者ともに明褐色である。

(22.6)・7.0・(7.0)



284

F-07表土

F-08表土

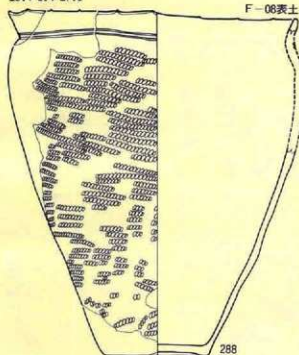


285

縮尺 $\frac{1}{3}$ —288

縮尺 $\frac{1}{2}$ —その他

23.4・8.4・27.8



288

F-06表土



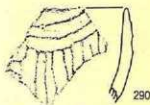
286



287

第XIV群土器—284~287

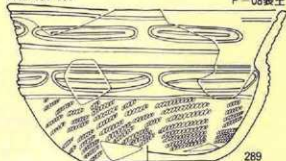
第XV土器—288・289



290

第XVI群土器—290

14.8・6.8・8.0



289

F-08表土

第65図 遺構外の遺物 (土器—28)

〔第XVI群土器〕(第65図290、P L—40C)

本群は所謂「北海道系土器」であるが、1点の出土である。器表全面に化粧粘土を塗りつけた後、篋先等で掻き取る方法によって口縁部に横位3条、体部に縦位10条以上の断面三角形状

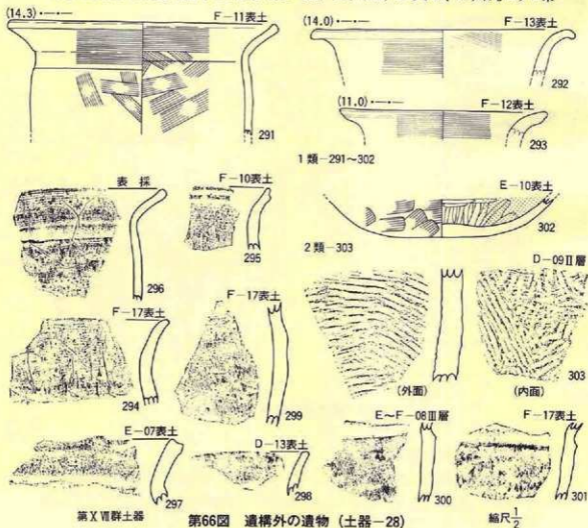
の微隆起帯を表出している。調整は内外面とも粗雑で、粗い擦痕を明瞭に残している。拓影図右上の部分が強く外反し、右上がさらに高くなって行く状況を示してもいることから、この破片の考えられる器種は片口鉢である可能性が高い。胎土は比較的緻密な粘土に砂粒を混ぜたものを使用し、焼成は非常に良い。色調は褐色である。

〔第XVII群土器〕(第66図291~303、P.L-40D)

ここには古代の土器を一括したが、土師器と須恵器があるので細分される。これらの土器はD~F-7-17での出土が多かったが、ある地点で集中して出土するような状況は観察されていない。層位的には表土での出土が多い。

1 類 (291~302)

本類は土師器である。器種としては壺 (291~301) と坏 (302) があるが、いずれもロクロ末



第XVII群土器

第66図 遺構外の遺物 (土器-28)

縮尺 1/2

使用成形である。壺は頸部に段をもち、口縁部は外反するもの(291・293・296~298)と外高するもの(292・294)がある。器面調整は口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後スリケシで、内面はヘラナデである。なお、口唇部の形は軽く肥厚して平らなもの(291・296)、シャクレテ垂れ下るもの(292)、先細りとなるもの(294)、肥厚して沈線状に凹むもの(297)、段をもつもの(293・295)、平らなもの(298)等の種類がある。坏は底部のみの残存である。底部は平底風の丸底で全面ヘラナデされている。内面は底面が放射状、体部は横にヘラミガキされた後黒色処理されている。胎土にはいずれも若干の砂粒が混入しているが、細かい土が使用され、焼成も非常に良好である。色調は灰褐色である。

2 類 (303)

ここには須恵器を入れたが、大甕の体部破片が1点出土している。外面には並行タタキ目、内面には並行と放射状当て具痕をもっている。胎土は非常に緻密で、色調は内外面ともに灰色である。焼成は良好である。

〔注口部〕(第67図304~313、PL-40F)

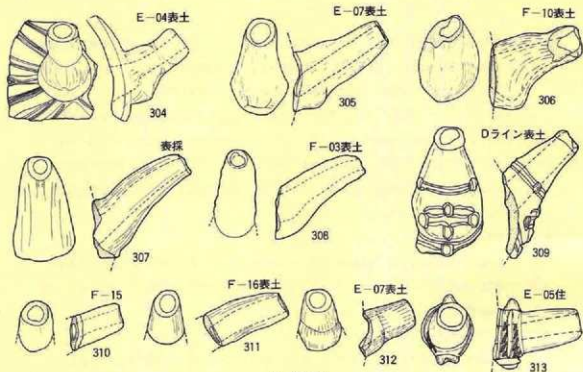
本遺跡から出土し実測された土器の中に、注口土器は171・284の2点があるのみである。しかし、土器が破損して注口部のみとなったものが10点出土しており、これから考えると、器種組成の中に注口土器も存在したことは明らかである。出土した注口部は作り方や形がそれによって若干づつの差がみられ、これらが全て同時期に属するものでない可能性がある。たとえば、304~306・312のように付け根の所に賑らみをもつもの、307・308・310・311・313のように太さにあまり差のないもの等があり、中には309・313のように施文される例もある。「反り」のもち方にも直線的(305・309・310・312)、反り上るもの(304)、口端が若干下るもの(306~308・311)等がある。体部の文様の付されている個体の文様をみると、304は第X群土器の特徴をもち、309は第VII群6類土器に、313は第VII群2類土器の文様に近似する。このようなことからこれらの注口部は本遺跡第VI群土器~第X群土器までの各群に充当されるものが含まれているものと推定される。

〔口縁部突起〕(第67図314、PL-40E)

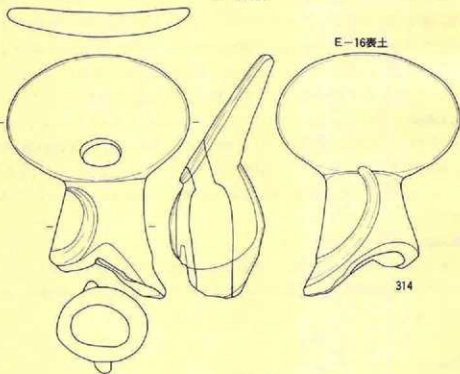
この土器は口縁部突起とおもわれる。円柱部の内部は空洞で、円盤状部分を貫通している。他遺跡の例では、本遺跡VI群土器の口縁部突起に近似した形状を示している。本遺跡での出土は1点のみである。

2) 土製品

本遺跡で土製品としたのは容器としての土器以外のものを全て含めた。したがって、種類としては土偶、スタンプ状土製品、土器片円盤、ボタン状土製品、土製管玉、土製勾玉、振り子



A. 注口部



B. 口縁部突起

第67図 遺構外の遺物 (土器-30)

状土製品等がある。次にそれらを個別に記す。

〔土 偶〕(第28図A、第30図B・C、第68図D～K、P L-41)

本遺跡では遺構出土のものを含めて11点の土偶が出土している。この中にはAのように（E-17住出土）残存状態の非常に良好なものもあるが、他はいずれも破片としてその一部分だけが出土している。たとえば頭部のみ（D）、胴部（B・F・G）、足部（C・E・J・K）、腕部（H・I）が残存しているものが多い。したがって全体的なことは不明である。しかし、これらはいずれも概ね縄文時代後期的な要素を示している。それは、A・Dにみられる頭髮や顔面の写実的な表現、AやFの腹部の正中線や下腹部を強調した表現、手・足を独立させて個別に作りだした表現等は、中期の板状土偶や晩期の遮光器土偶とは異なる表現であり、これらは後期の特徴といわれている条件を具備しているものの、個々の属する時期を明確にすることは困難である。しかし、本遺跡第VII群土器や第VIII群土器に並行することはいえるであろう。

〔スタンプ状土器製品〕(第68図L・M、P L-41)

本遺跡での出土は2点のみである。2点ともほぼ同じ形状を示し「十字形」に近似している。表面は平らで、Lでは入組文状と円弧、Mでは円弧的な文様が沈線によって付されている。裏面には円柱状の爪みがあり、紐通し孔が貫通していたらしいが、孔の部分から欠失している。大きさはLが若干大きい。胎土は砂粒が多く混入し、Lは脆く崩れやすい。両者とも茶褐色である。土器群との関係は定かでない。

〔土器片円盤〕(第69図O～Q、P L 42)

3点出土しているが、いずれも土器の破片を利用し、周辺を打ち欠いて形態調整したものである。大きさもほぼ同じである。

〔ボタン状土製品〕(第69図T、P L-41)

本種は1点の出土であるが、本来は小型の蓋である可能性もある。また、スタンプ状土製品の小型とも考えられる形でもある。明確な用途は不明である。しかし、現在のボタンと非常に似た形状を示し、円盤状部のほぼ中央に紐通し孔のある爪みがついている。文様はまったくもない。

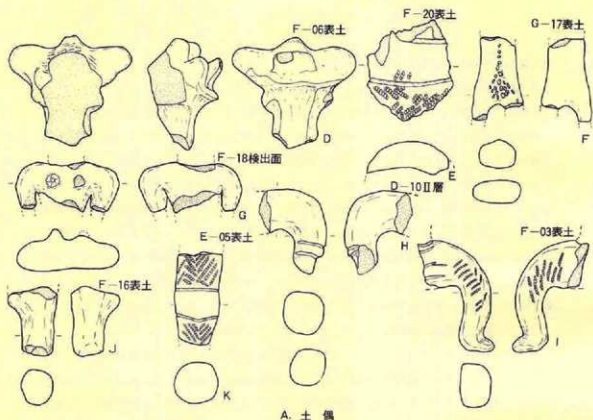
〔土製管玉〕(第69図U、P L-41)

円柱状の玉の中心部に貫通孔をもつもので、本遺跡では1点の出土である。文様はもたず、形状もあまり良好ではない。

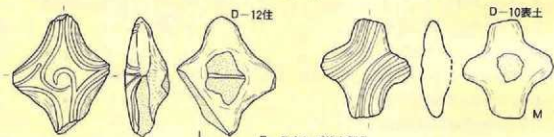
〔土製勾玉〕(第69図V、P L-41)

頭部を欠失しているが勾玉の残片とおもわれるものが1点出土している。断面は丸形で、全体の形はC字形を示すものと考えられる。

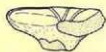
〔振り子状土製品〕(第69図R・S、P L-41)



A. 土 偶



B. スタンプ状土製品



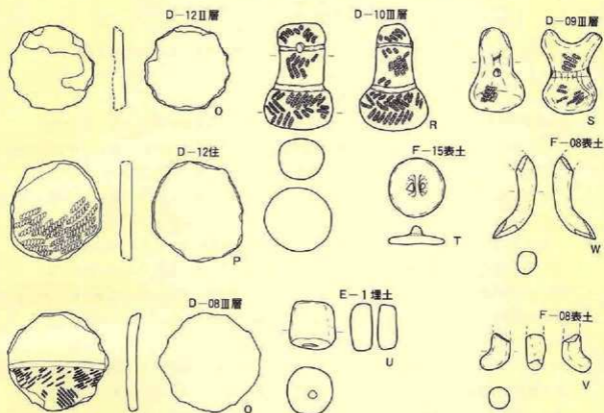
縮尺 $\frac{1}{2}$



C. その他

第68図 遺構外の遺物（土偶と土製品-1）

本種は正式は名称が不明であるので、振り子状土製品と仮称したが、スタンプ状土製品の1種であるかも知れない。2点出土している。振り子状としたのはRの形が振り子とまったく同じ形状をもつためである。Sにしても実測図の上部が又状を示す以外はRと同じである。両者ともに紐通し孔とおもわれる貫通孔を穿っている。また、両種とも縄文が付され、R・Sともに原体L・R・R・L横回転による羽状縄文が施されている。



第69図 遺構外の遺物（土製品-2）

縮尺 $\frac{1}{2}$

〔器種不明〕（第68図N・第69図W、PL-41）

Nは土偶の頭部かとも考えたが、確証がなかった。球体状のものに6ヶの丸形突起が付く形が本来の姿らしいが、4ヶの突起は欠失している。沈線と縄文による文様が施されている。Wは色調が灰色で環状炎焼成された形跡がみられ、実測図の下端には削り痕を残している。いずれも正確な名称が不明である。

3) 石器

本遺跡から出土した石器は遺構出土のものも含めて299点出土している。それらの中に次のような器種があり、その出土点数は以下の通りである。

- ①石鎌——22点 ②石匙——42点 ③石錐——4点 ④振器——20点 ⑤切削器——30点
 ⑥使用痕ある剥片——12点 ⑦黒曜石剥片——2点 ⑧磨製石斧——24点
 ⑨打製石斧——1点 ⑩凹み石——78点 ⑪擦り石——4点 ⑫磨石——19点 ⑬叩き石——1点
 ⑭石皿——18点 ⑮砥石——7点

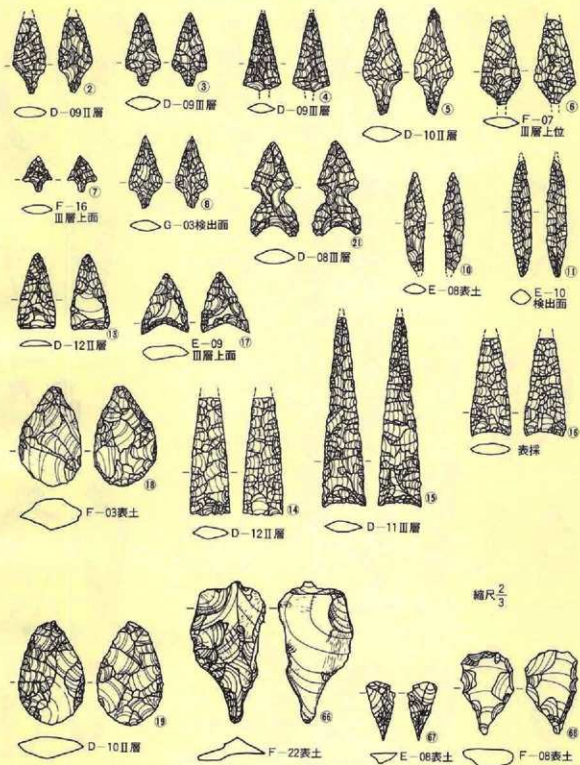
なお、個々の法量等は第4表に記しておいた。それでは次に種類ごとにその概略を説明することとするが、便宜上遺構内から出土したものについても、改めて一括して記述していく。

〔石 鎌〕(第34・35・70図①～②、PL-42B)

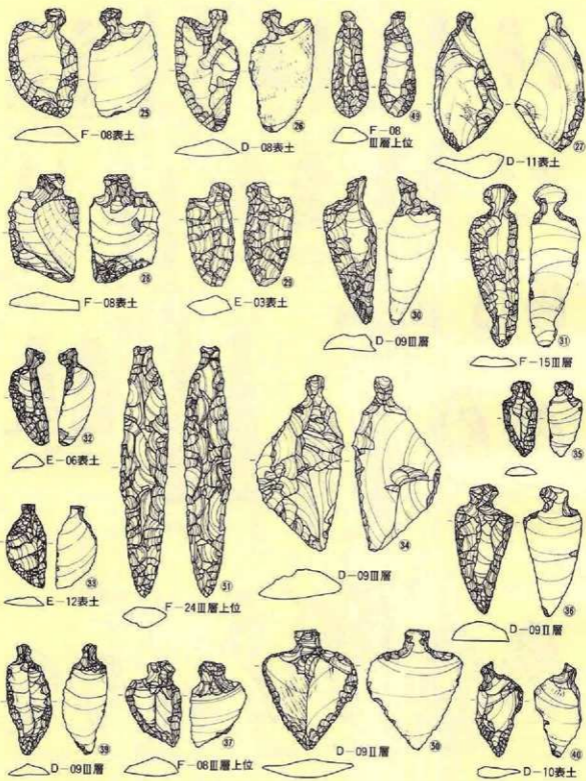
本種は22点出土しているが、その中には遺構内から出土した5点が含まれている。全く欠損していないものは9点のみで、他は多少の差こそあれ尖端部が基部かを欠失している。明らかに全体的な形態の判明する21点をみると、有茎型8点・無茎型8点・基部尾翼型2点・柳葉型3点の4型に大別され、無茎型はさらに円基2点・凹基3点・平基3点に細分される。欠損品が多いので法量測定値はあまり参考にならないが、現存値で単純に比較すると、長さは最大で7.5cm(15)で最小は1.5cmである。全体の平均3.36cmで、欠失部分を考えて実際の長さは3.5cm～4cmの間にあるものと推定される。巾については平均では1.6cmであり、15点は平均より狭い。最も広いのは2.6cm(19)あり、他に2cm台が3点あり、残りは1.6cm以上2.0cm未満である。厚みの平均は0.54cmであるが、0.5cm以上が8点と0.5cm以下が14点に細分される。重量は19点が4g未満であり、その中でも1g台が9点を占め、その他は2g台4点・3g台5点・1g以下1点である。それ以外では4g台1点・7g台1点・9g台1点となり、形の近似した⑧・⑨が最も重い部類に入る。本遺跡から出土した本種は縄文時代後期中・後葉に属するものと考えられるが、これら全体を概観すると、⑭～⑯や⑳・㉑が際だった形を示している。石材として使用された原石の種類と数量はチャート8点・粘板岩3点・珪質凝灰質泥岩3点・泥質凝灰岩4点・硬質泥岩1点(19点を鑑定)となり、石材の産地も北上山地古生界といわれるチャートと奥羽山地中新統の産といわれるその他の石質がある。

〔石 匙〕(第36・71～73図㉒～㉓、PL-42B・43)

石匙は遺構内出土の3点を含めて42点出土しており、その中に5点(43～47)の欠損品があるものの残る37点は完形品である。石匙は一般に縦形と横形に分類される場合が多いが、それに従うと前者29点・後者13点に分かれる。さらに、前者では表面からみた場合に刃部が右側に作りだされるか左側に作りだされるかによって細分することができ、それによると右刃11点・左刃14点・直刃4点になる。後者の場合には表面からみた場合に抓みが左側につくのか右側につくのかによって分けられ、右抓み5点・左抓み6点・中抓み2点に細分される。このような形態的な変化が何に起因するのかが明らかにされていないが、興味を引く所である。特に、縦形の場合には刃部の調整がほとんど片面調整で裏面への剝離をするものが少ない(本遺跡で両面剝離は㉒④⑤の3点のみ)。この現象は使用する際の利便さに関わるものと推定されるが、定かでない。同じように横形についてみると、縦形と同様の現象もみられるが、両面調整される例が縦形より多い。また、縦形の刃部は湾曲するものが多いが、横形の場合は湾曲するものと直線的なものがある。同じ縦形や横形といっても形態や法量は千差万別であり、一概に比較する

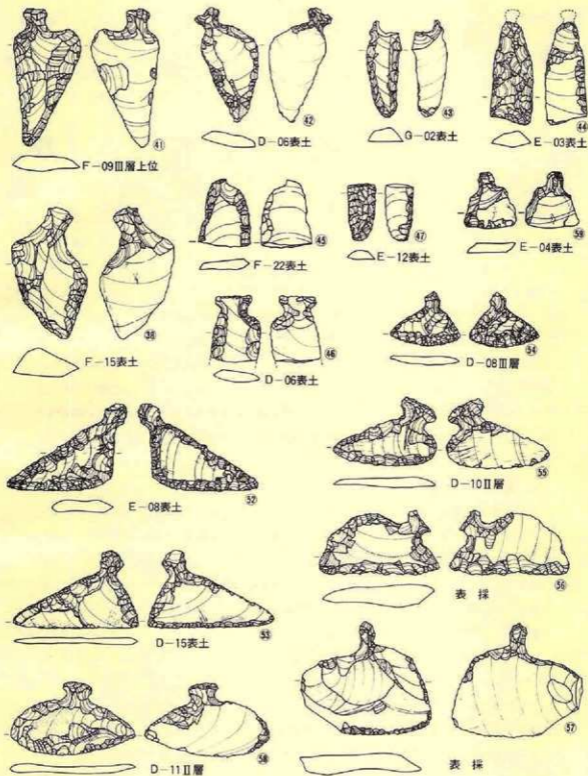


第70図 遺構外の遺物 (石器-1)



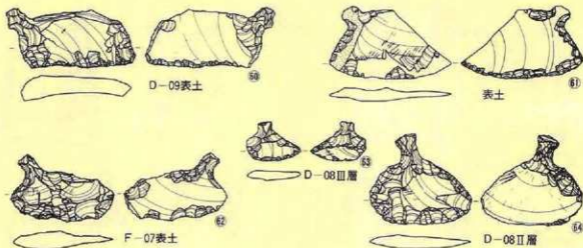
第71図 遺構外の遺物 (石器-2)

縮尺 $\frac{1}{2}$



第72図 遺構外の遺物 (石器-3)

縮尺 $\frac{1}{2}$



第73図 遺構外の遺物（石器—4）

縮尺 $\frac{1}{2}$

ことは困難である。しかし、全体を概観した場合に51の形態が特異であることに気付く。出土した時点では石槍であろうとしていたが、抓みをもつこと、実潤面の上部位置に光沢をもつ磨減痕をもつこと、先端部が若干巾狭くなっており再調整の可能性があるなど、石槍と考えるには問題があるとの判断から本種として認定した。また、本種に使用されている石材は硬質泥岩9点・珪質凝灰質泥岩9点・硬質凝灰質泥岩7点・泥質凝灰岩4点・珪質泥岩3点・粘板岩2点の6種類である。石材の産地も粘板岩は北上山地古生界であるが残る他の種類は奥羽山地中新統である。

〔石 錐〕（第36・70図65～68、P L—42B）

本種は4点の出土と剥片石器の中でもっとも少ない出土である。石錐を形態的にみると抓み部と尖端部（錐部）に分けられるが、抓み部・尖端部ともにあまり入念な調整を加えてはいない。剥片の尖端部分を中心に剝離調整を施したものが多く、抓み部にも調整を加えているのは68のみであるが、調整そのものは粗雑である。形状には極端な違いはないが、大小関係には大きな差がみられる。石材としては珪質凝灰質泥岩とチャートが使用されている。

〔攪 器〕（第35・36・74図69～88、P L—44）

本種は次の切削器とした種類とどのよう区別するかに迷ったが、一応、次のような基準で分類をした。しかし、絶対的な自信をもって分けたものは少なく、いずれにも不安材料を残している。基準は①刃部の調整は表面への片面剝離のものを基本とする。②両面剝離の場合には刃部の角度が鈍角であるもの。③全体的に刃部の角度が切削器より鈍角なもの等としたが、必ずしも全てがこの条件に合致している訳ではない。20点の出土で、形や量では個体差が大きい。調整にしても、剥片の周縁部を剝離して刃部としたものと、さらに⑩・⑪・⑫・⑬のように剥片を折断して形態調整をしているものもある。特に⑪はその典型であろう。また本種は一般に

先刃型と側刃型に分けて考える場合が多いが、本遺跡の場合は先刃型が少なく、ほとんどは側刃型で、中には両型を兼備している例もある。石材としては珩質凝灰質泥岩3点・硬質凝灰質泥岩3点・硬質泥岩3点・珩質泥岩2点・チャート2点・泥質凝灰岩1点・硬質泥岩1点・粘板岩1点の8種類が使用され、そのほとんどは奥羽山地中新統産の石である。

【切削器】(第35・75・76図⑧～⑩、P.L-44-45)

本種の器種認定については、前の掻器に入らない所謂不定形石器と呼ばれる剥片石器を一括しているが、明らかに人為的な加工痕を残すものだけを入れた。切削器とした理由は用途として「切る」「削る」が想定されるからである。おそらく、前の掻器にも同じような役割もあつたものと推定される。本種に該当する石器は30点出土しているが、この中には掻器と同じように折断して形態調整をしたらしいものが5点(⑧・⑨・⑩・⑪・⑫等)入っている。刃部剥離の部分を見ると側縁部に施すものが多く先端部の例は少ない。しかし、全体でみると、形や量と同じように、剥離の部位も個体差が大きく、一概に平均化することは困難である。石材としては泥質凝灰岩8点・硬質凝灰質泥岩5点・硬質泥岩4点・珩質泥岩3点・珩質凝灰質泥岩2点・チャート2点・粘板岩1点の7種類があり、奥羽山地中新統産の石材が多い。

【使用痕のある剥片】(第76・77図⑬～⑱、P.L-45)

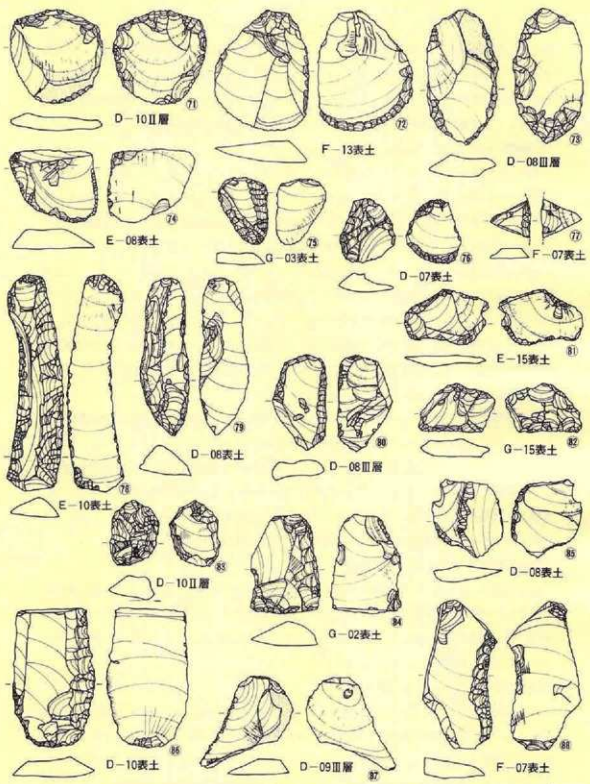
本種は石器として認定するか否かに問題のある所であるが、刃部に人工的な剥離調整はないものの、利器として使用され、その使用部位の刃部が刃毀れしていることから、石器として扱うこととした。したがって、形状・大きさともに個体差が大きい。使用部位も側縁や先端部そしてその両者等と一様でない。中には⑭・⑮のような縦長の剥片を使用している例もある。本種に入る石器は12点の出土で、その中に石材として珩質凝灰質泥岩4点・チャート2点・泥質凝灰岩1点・硬質凝灰質泥岩1点・硬質泥岩1点の5種が使用されている。

【黒曜石剥片】(第77図⑲・⑳、P.L-45)

これは石器ではないが、本遺跡の周辺部で原石を産しない石材であることから、特に紹介しておく。剥片は小型の原石から剥ぎ取られた小さな石片で、人為的に敲打剥離されたことを示す打点を明瞭に残している。成品としての石器は出土していないが、石器製作の為の石材としたことは明らかである。2点の出土である。

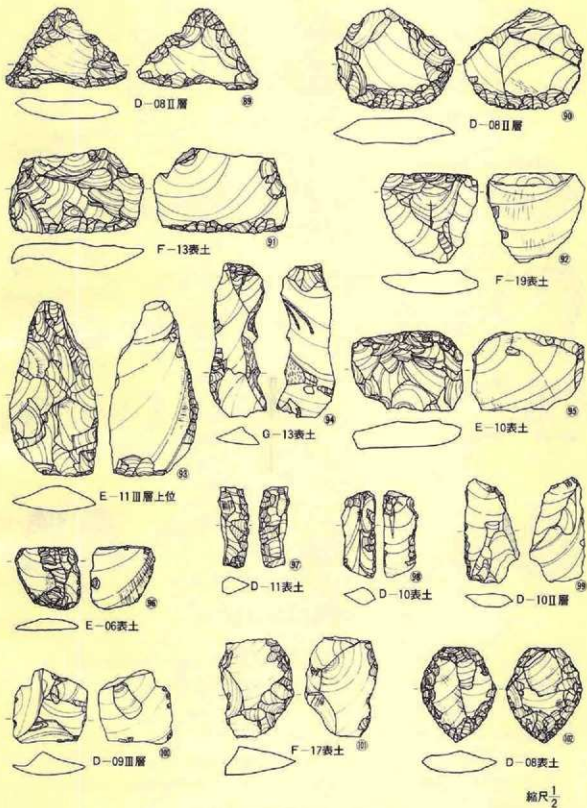
【磨製石斧】(第37・78～80図㉑～㉓、P.L-45～46)

本種は34点出土しているが、完形品は3点のみで他は一部欠失している。欠損品の中には頭部を欠失するもの13点・頭部のみ残存するもの8点・頭部と刃部を欠失するもの1点があり、中には欠損品を叩き石として転用しているもの(㉑・㉒)もある。このように欠損品が多いということは、使用目的が木を叩き切ることにあり、強力な衝撃が瞬間的に加わることによって破損することが多かったことを示すものであろう。大小関係をみると、㉑は小型品であるが、

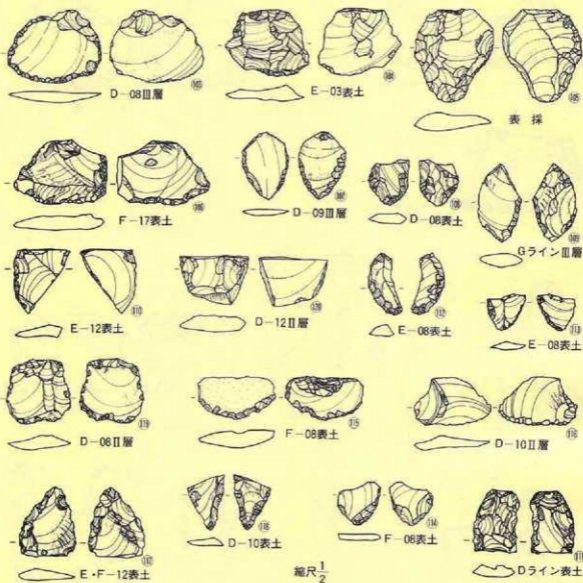


第74図 遺構外の遺物 (石器-5)

縮尺 $\frac{1}{2}$



第75図 遺構外の遺物 (石器-6)

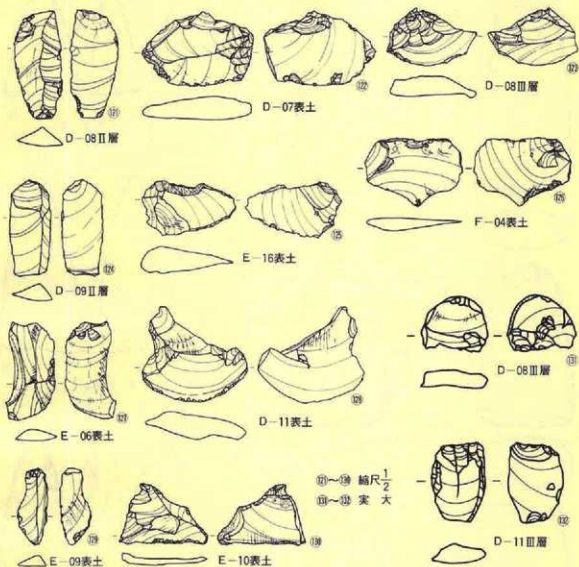


第76図 遺構外の遺物（石器-7）

他はほとんど同じ大きさ位であろう。なお、遺構内から出土したものはない。使用されている石材は緑色凝灰岩16点・プロピライト2点・凝灰質粘板岩1点・両輝石安山岩1点の4種があり、中でも緑色凝灰岩を多用している。

〔打製石斧〕（第35図⑤、P L-46）

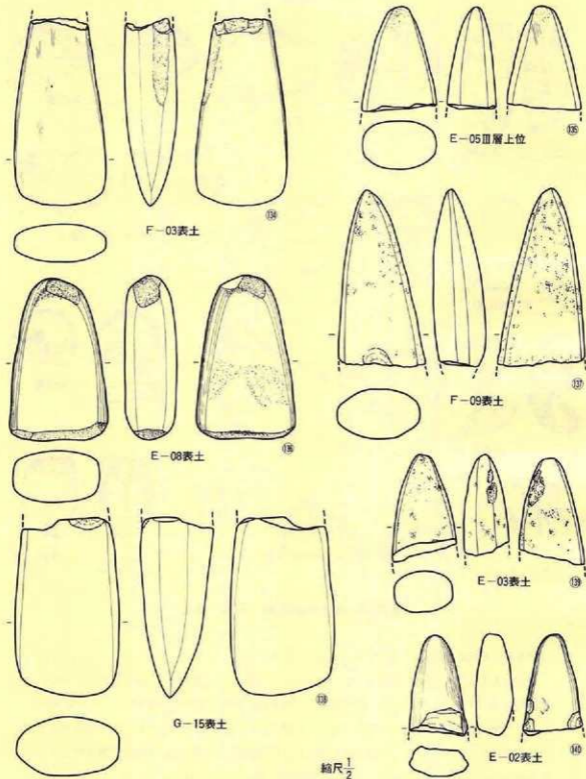
本種に入る石器は1点のみで、頭部のみを残存する欠損品である。形状や調整が典型的とはいえないが、側縁に敲打による調整痕が観察されることから、取り合えず本種に入れておく。凝灰質粘板岩で作られている。



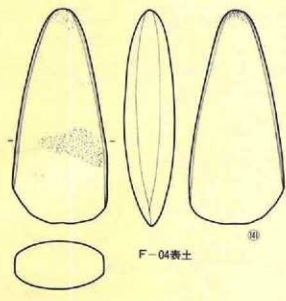
第77図 遺構外の遺物 (石器-8)

【凹み石】(第34・36・37・81~88図⑩~⑱, P.L47・48)

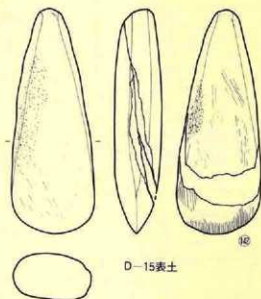
本種は若干扁平な円鏝を使用し、鏝の1面~4面に凹みを付けたもので、78点出土している。その内訳は1面10点・2面48点・3面12点・4面8点となり、使用痕を2面にもつのが圧倒的に多く、形の選び方に起因するものであろう。鏝の形状や大きさは千差万別で、一概に平均することはできない。石材としては両輝石安山岩71点・凝灰質安山岩3点・流紋岩質凝灰岩3点・花崗閃緑岩1点の4種類があり、ほとんどは両輝石安山岩で作られている。



第78図 遺構外の遺物 (石器-9)



F-04表土



D-15表土

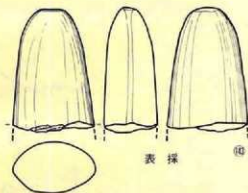
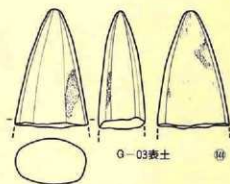


表 採

⑩



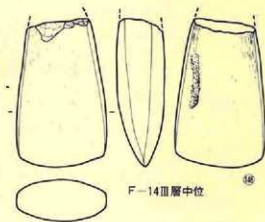
G-03表土

⑭



F-06表土

⑮

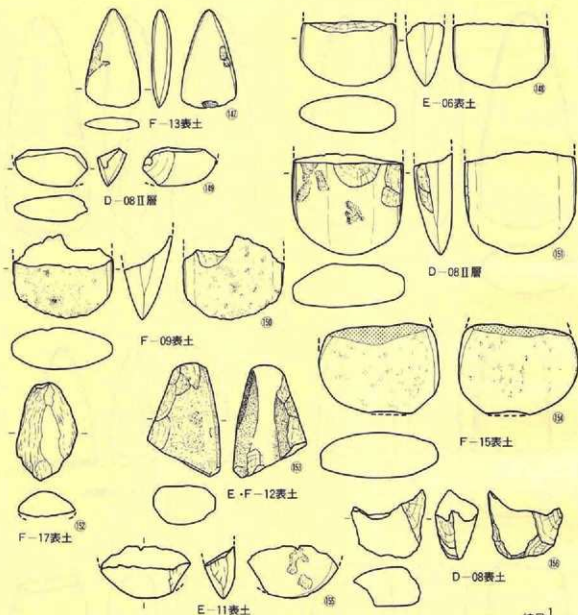


F-14Ⅲ層中位

⑯

縮尺 $\frac{1}{2}$

第79図 遺構外の遺物 (石器-10)



第80図 遺構外の遺物 (石器-11)

縮尺 $\frac{1}{2}$

【擦り石】(第88図②・③、PL-49)

ここで擦り石としたのは②を典型的な形としており、③はそれと若干異っている。しかし、次の磨石とも若干相違しており、どちらかという和本種の方に近いものと判断し、本種に入れた。したがって、本遺跡では2点の出土である。③は欠損しているので全体的なことは不明ではあるが、断面三角形の河川礫を利用し、その稜線を使用面としている。石材は②が緑色凝灰岩で、③は安山岩質溶岩を使用している。

【磨石】(第34・34・37・89・90図㉓～㉕、P L-49)

本遺跡で磨石としたのは形が円形や楕円形で、断面も円形か楕円形を示し、その扁平な面または全面に磨り面をもつもので、遺構出土のものも含まれて21点出土している。これらを磨り面の数でみると1面3点・2面8点・全面9点・側縁1点があり、扁平な両面を使用面とするのがもっとも多い。また、どちらが主たる使用目的であるかは定かでないが、中の6点(㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘)は凹み石として使用されている。使用されている石材は両輝石安山岩12点・緑色凝灰岩3点・石英安山岩2点・プロピライト1点・チャート1点・珪石1点の6種類があり、中でも両輝石安山岩がもっとも多い。

【叩き石】(第90図㉙、P L-49)

本種はやや長目で扁平な河川礫を利用し、先端部に近い側縁を使用面としている。使用部分叩き潰された状況を示していることから、実際の使用方法は手に持って台石の上に置いた物を叩き潰すために使用された道具と考えられる。本遺跡では1点の出土で、石材は両輝石安山岩である。

【石皿】(第34～36・91～93図㉚～㉜、P L49・50)

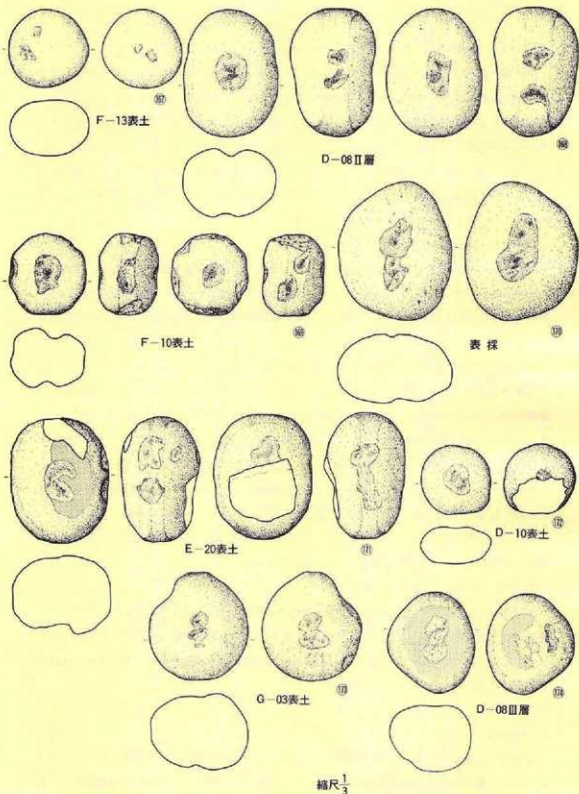
本種は遺構内のものも含めて19点出土しているが、その中には完形9点・破片10点がある。遺構内のものは6点の内4点が完形、遺構外のもの13点の内5点が完形である。形態をみると、いずれも扁平な自然礫の平坦面を使用面としており、中には使い減りによって軽く凹んでいるものもある。加工によって脚を作りだすとか、使用面の縁をつけるとかという加工痕をもつものは1点も含まれていない。使用面はどれも磨滅によって滑らかで、中には光沢を放つものもみられる。また、㉚の片面には何か硬いもので引っ掻いたような細い条線が多く付いている。なお、分類の際には次の砥石と区別しにくいものもあった。石材は両輝石安山岩4点・石英安山岩質砂岩4点・石英安山岩1点の3種類である。

【砥石】(第93・94図㉝～㉞、P L-50)

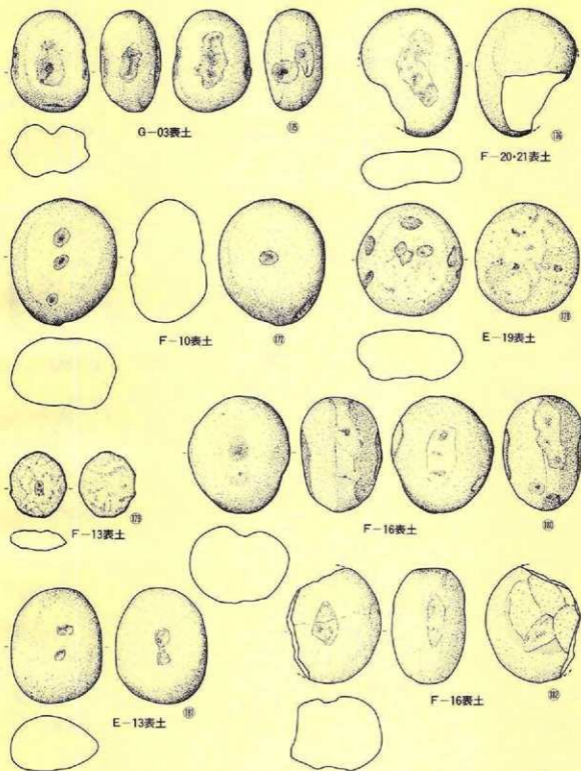
本種は6点出土しているが、この中には最近のものとおもわれる1点(㉞)も含まれている。使用面は1面のもの2点、2面3点、条痕の入るもの1点の種類がある。大きさもあまり大きなものではなく、やや小型のものが多い。石材としては流紋岩質凝灰岩3点、安山岩溶岩3点の2種類がある。

4) 石製品

本遺跡で石製品としたのは、前項で扱った以外のいわば生産に関連する利器・道具とは考えられない、精神的な生活に関連する石製のものを一括した。したがって、石棒・装飾品・その他のものが入っている。量的にはそれほど多くない。

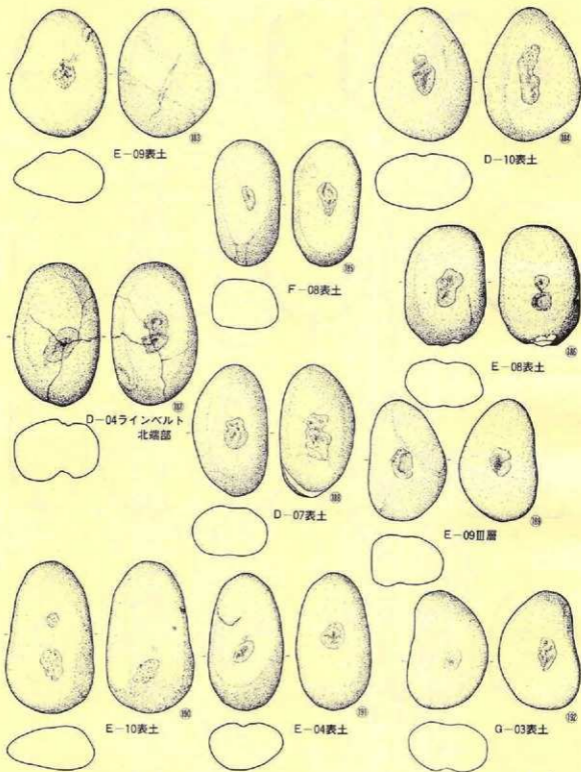


第81図 遺構外の遺物 (石器-12)



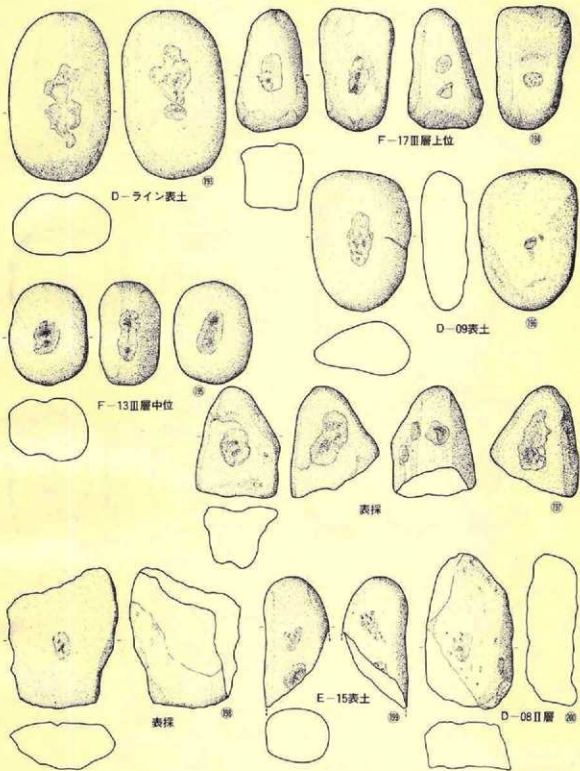
縮尺 $\frac{1}{3}$

第82図 遺構外の遺物 (石器-13)

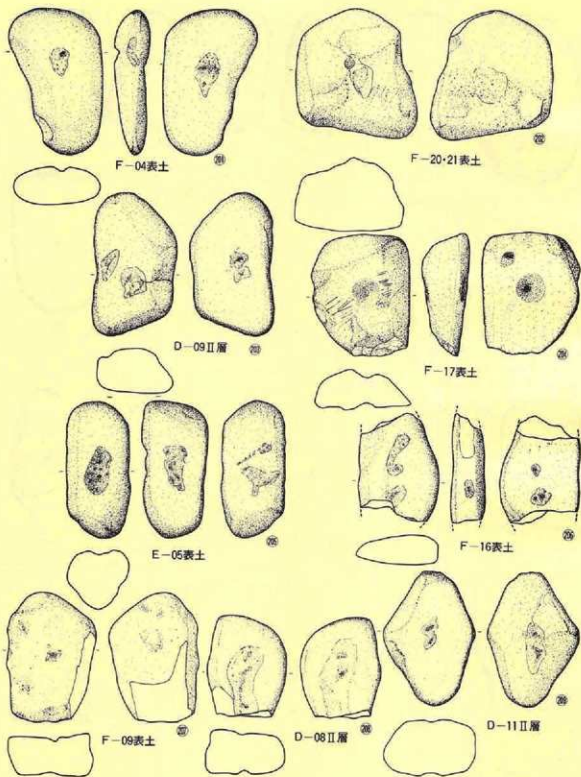


縮尺 $\frac{1}{3}$

第83図 遺構外の遺物 (石器-14)

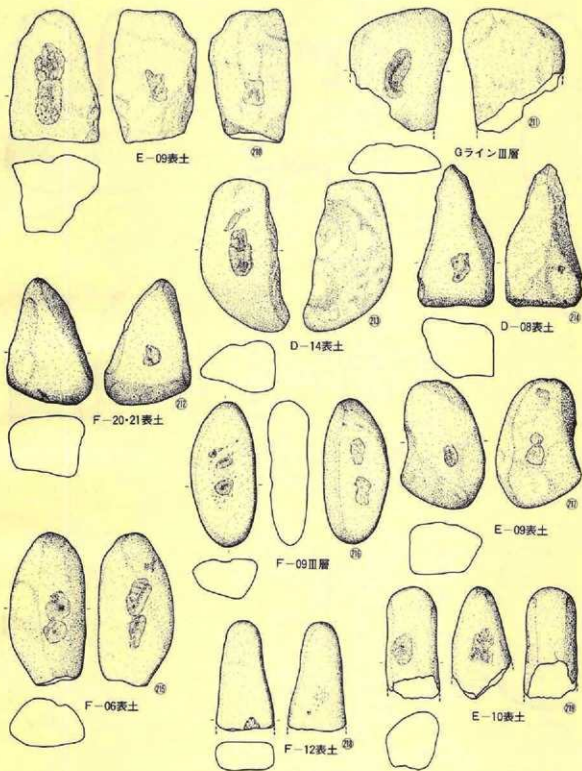


第84図 遺構外の遺物 (石器-15)



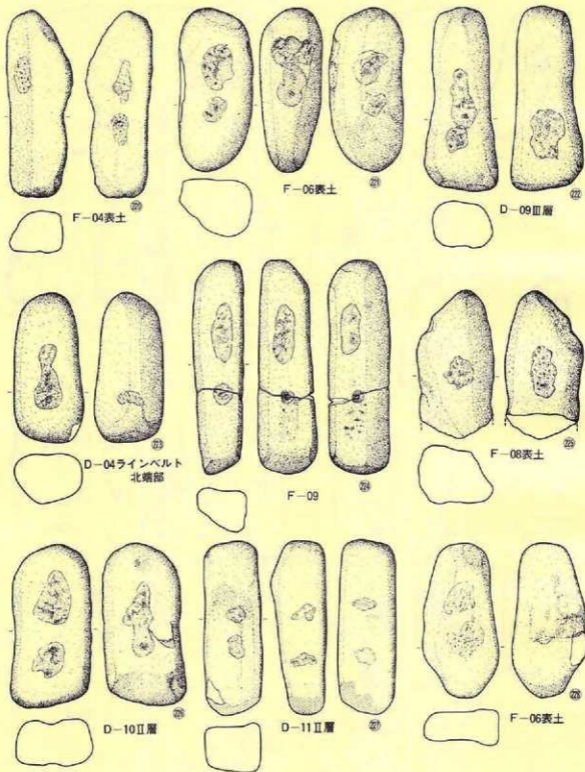
縮尺 $\frac{1}{3}$

第85図 遺構外の遺物 (石器-16)



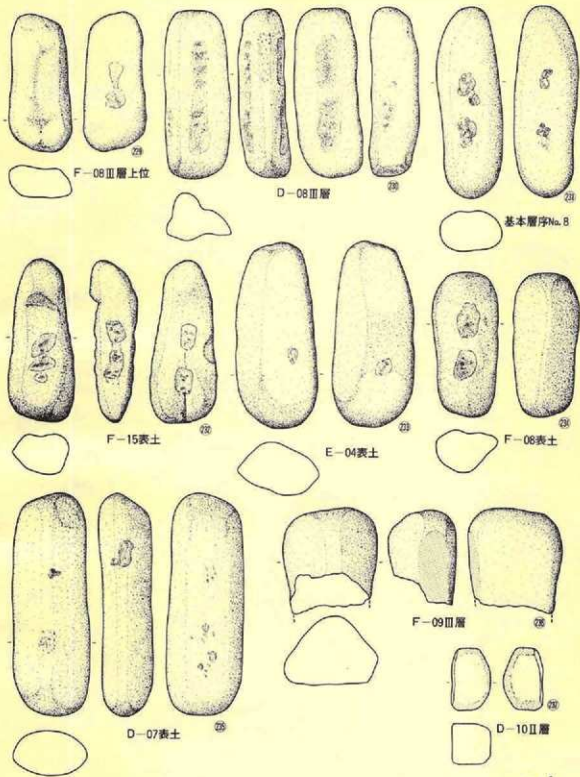
縮尺 $\frac{1}{3}$

第86図 遺構外の遺物 (石器-17)

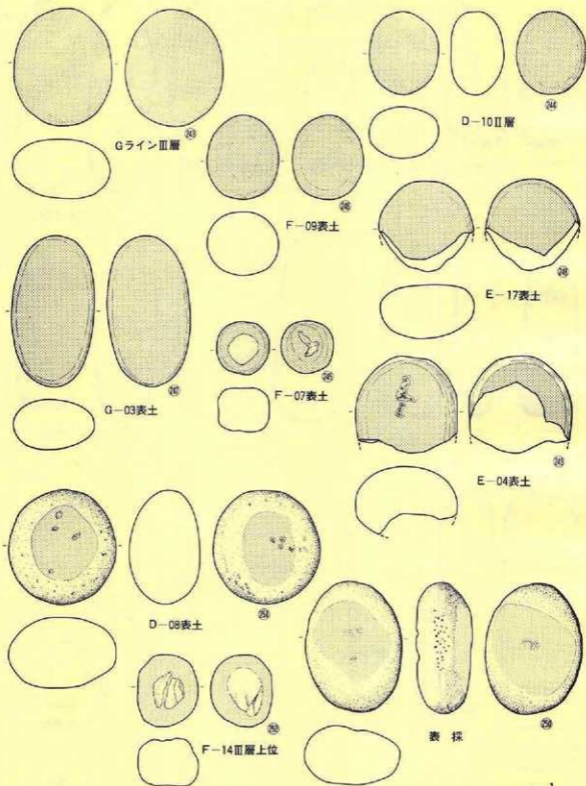


縮尺 $\frac{1}{3}$

第87図 遺構外の遺物 (石器-18)

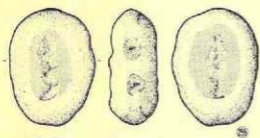


第88図 遺構外の遺物 (石器-19)

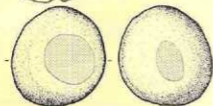


縮尺 $\frac{1}{3}$

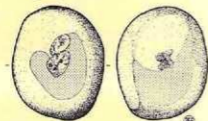
第89図 遺構外の遺物 (石器-20)



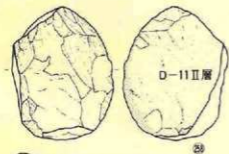
D-11表土



E-13

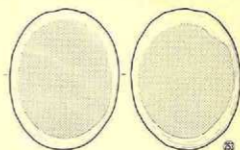
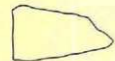


F-08Ⅲ層上位

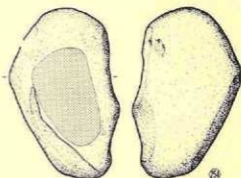


D-11Ⅱ層

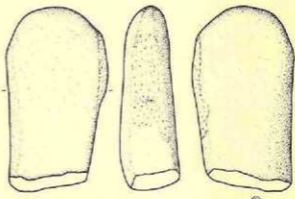
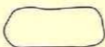
D-08表土



E-12表土



D-11Ⅱ層

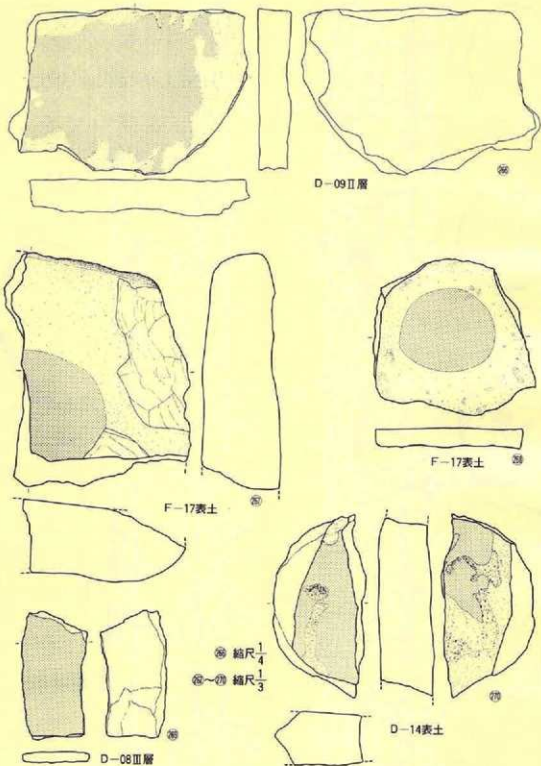


F-11表土

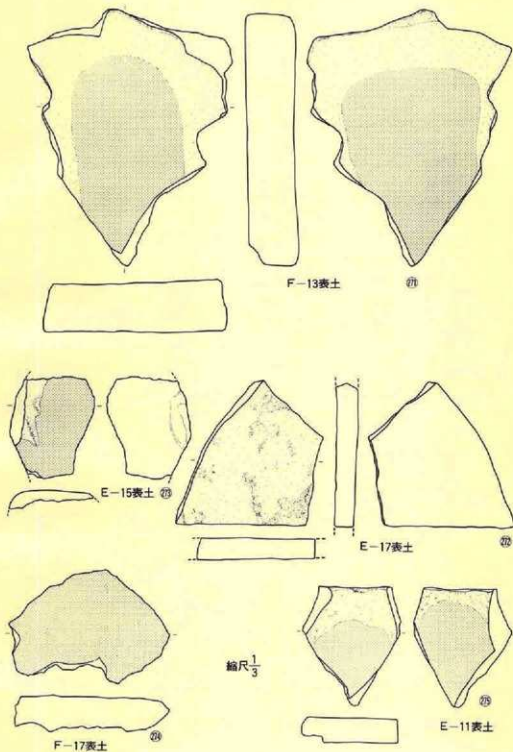


縮尺 $\frac{1}{3}$

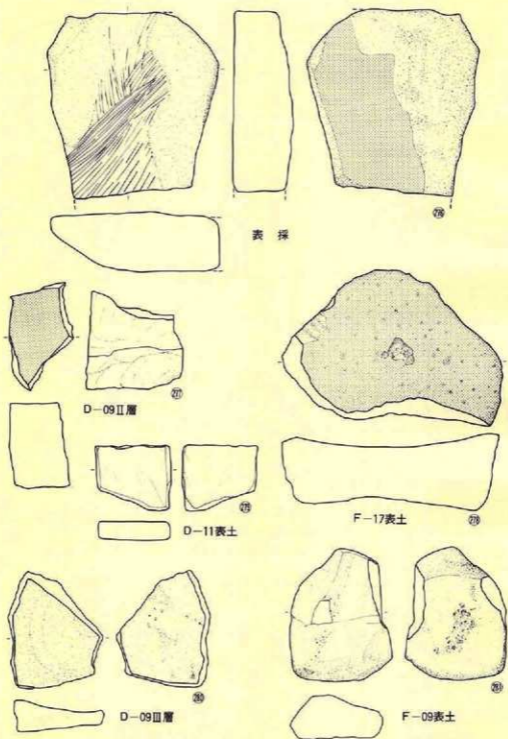
第90図 遺構外の遺物 (石器-21)



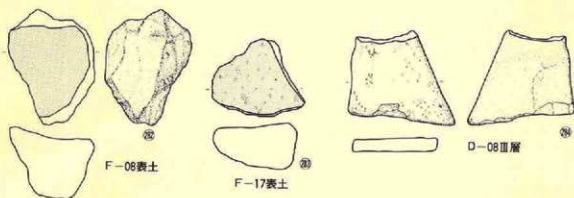
第91図 遺構外の遺物 (石器-22)



第92図 遺構外の遺物 (石器-23)



第93図 遺構外の遺物 (石器-24)



縮尺 $\frac{1}{3}$

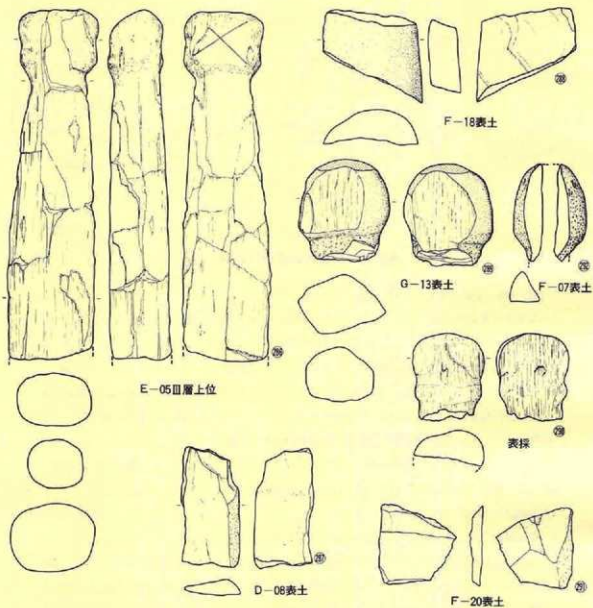
第94図 遺構外の遺物（石器—25）

〔石 棒〕（第34・95図②③～⑤、P.L-50）

本遺跡で9点出土しているが、いずれも欠損品で、全形を知るようなものはない。その中で286は比較的残存状態が良い。②以外での残存部位は頭部を残すもの③・④・⑤の3点で、他はいずれも円柱部の一部を残存している。頭部は中間に窄れをもつもの(③・④・⑤)とまたないもの(②)があり、⑤の場合はさらにX状に線刻が入っている。頭部の下端は大きく窄れ、円柱は次第に太さを増して移行し、ある部分でまた太さを減じて末端に達するのが一般的な形らしい。なお、頭部や円柱部の断面は円形や楕円形を示すらしい。また、③・④は全面を研磨しているが、他はいずれも叩き潰しによって形態調整され、その痕跡を明瞭に残している。石材は緑色凝灰岩3点・安山岩2点・両輝石安山岩1点が使用されている。

〔装飾品〕（第96図⑥～⑧、P.L-51）

本遺跡から出土した遺物の中で装飾品と考えられる石製品は5点ある。⑥・⑦はともに灰褐色の多孔質軽石を磨いて土板状に形を整へ、一端の中央に1ヶの貫通孔を穿っている。当初は「浮石」かとも考えられたが、全面が研磨されていることから、垂飾り的な装飾品であろうと考えた。⑥は貫通孔はないが、前2者と同様両面に研磨痕を残していることから、⑥・⑦と同種とした。⑧は非常に小型で、形を整えた後全面を研磨し、さらに線刻を施している。さらに実測図下端の巾広の部分には左右各1個の貫通孔をもつ。上端は下端と同じ形とすることを意識したらしいが、加工中に欠損したために、研磨しなおしたものらしい。それが上端に残る2個の貫通孔の残痕であろう。表面を意識したのか、施分量が面によって異なる。文様は線刻による斜め格子を基本としている。珪質凝灰質泥岩を使用している。⑨は扁平で細長いチャート製の岩板の一端に1個の孔を穿っており、さらに全面を研磨している。垂飾りであろう。

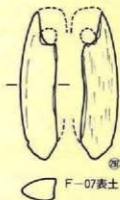
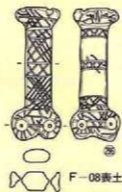
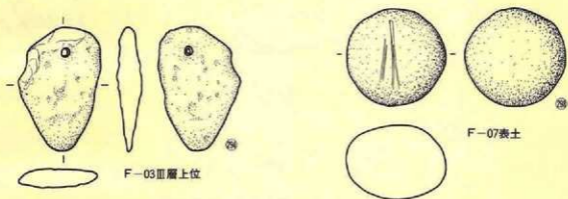
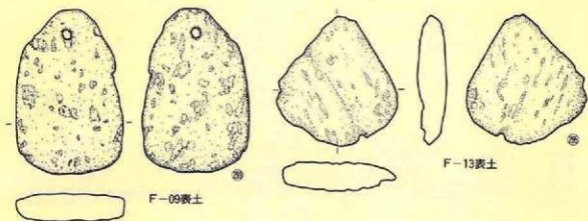


第95図 遺構外の遺物 (石器-26)

縮尺 $\frac{1}{3}$

【その他】(第96図㊸・㊹、PL-51)

その他としたのは前記のいずれの器にも入らない石製品を入れた。㊸は円縁に線刻が入っているものである。石質は両輝石安山岩である。㊹は流紋岩質凝灰岩塊を削って小型の石皿状に整形している。内側は若干掘り窪められ、縁辺は丸く仕上げられた後、縦位の線刻が付されている。非常に軟質の石材であるので、実用的なものとは考えられず、事実、使用痕らしい跡は観察されない。



縮尺 実大 ⑨・⑩
縮尺 $\frac{1}{2}$ ⑪~⑬・⑭・⑮

第96図 遺構外の遺物 (石器-27)



5) 参考資料

参考資料として掲載した第97図（PL-52）の土偶は、本調査が終了後土木工事に出土したものである。出土した地点はC～F-07～09に存在した小規模な遺物包含層の南東端付近とのことである（本調査に参加し、引き続き土木工事に従事した駒ヶ嶺かほる氏談）。この遺物包含層の南東端は公共道路（西根町々道）であったので、本調査では道路敷内は調査を断念して終了している。出土した土偶は下半身のみで上半身を欠損している。完形品であれば非常にボリューム感に溢れた大型土偶であったものと推定される。

2. 上斗内IV遺跡

本遺跡は、東に張り出した尾根を境に南北両斜面にまたがるが、そのうち、遺構はすべて北向き緩斜面からだけ検出されている。検出された遺構は、炭焼窯1基・土坑3基である。

(1) 炭焼窯跡

〔B-16炭焼窯跡〕(第99図、P.L-54A)

本炭焼窯跡は、調査区南西端近くの北向斜面B-16グリッドを中心にして位置する。

規模は、長軸約3.70m×短軸約2.00mを測り、平面形は長軸を北西-南東方向にもつ隅丸長方形を呈する。壁は外傾して急激に立上がるが、掘り込みは斜面高位の北側が約46cmと深く、斜面低位の南側は約14cmと浅い。底面は、壁の掘り込み同様南側が北側の底面より若干高いが掘り込みの深さの比よりは水平に近い。また、底面はほぼ平坦ではあるが、長軸に並行する中央部に上縁巾25cm前後・長さ約3.00m・深さ約5cmを測る細い溝状の掘り込みをもつ。

埋土は4層で構成され、上位の1層～2層は締まりのないフカフカした黒褐色(1層)や暗褐色(2層)のシルトで、1層には若干の炭化材小片や木灰を含んでいる。底面直上に堆積する3層は、炭化材片や木灰の堆積層で、底面全域に堆積している。4層は壁を造る地山の流れ込みである。

なお、本遺構から出土した炭化材の樹種鑑定を行ったところ、すべて「檜」であることが判明している。また、これらの炭化材でC₁₄年代を測定したが、その結果1020±90年B・P(A, D.930)という年代が得られている。

共伴遺物はない。

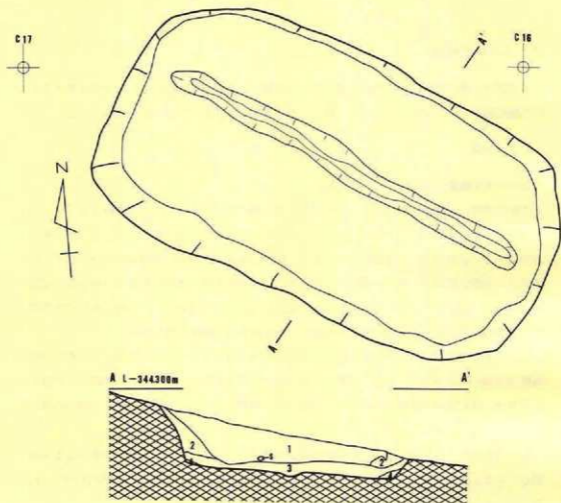
(2) 土坑

〔F-11土坑〕(第100図A、P.L-54B)

本土坑は、調査区北側斜面の中では比較的平坦なF-11グリッドに位置する。

規模は、開口部で長径約1.14m×短径約1.04m、検出面からの深さは約0.66mを測る。平面形は不整形気味ながら円形を呈し、断面形はフラスコ形に近い。底面は平坦ではほぼ水平である。

埋土は6層で構成され、暗褐色・黒褐色・明褐色等のシルトが堆積している。1・2・4層は比較的堅く、微量の炭化物粒や焼土粒を混入している。3層は軟く多量の地山粒を含む。5・6層は地山シルトの崩落した土層である。堆積状況の観察から、本土坑は自然埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。



B-16炭焼窯跡埋土層注記

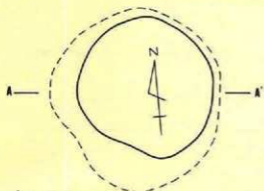
層位	色調	土性
1	7.5YR2/2黒褐色シルト	締まりなくフカフカする。粘性がない。若干の炭化材小片、木灰を含む。
2	10YR3/4暗褐色シルト	締まりがなくフカフカする。粘性がない。地山シルトの流込みである。
3	10YR3/1黒色	炭化材片と木灰の堆積層である。
4	10YR3/3暗褐色シルト	締まりがなくフカフカする。地山シルトの流込みである。

第98図 B-16炭焼窯跡

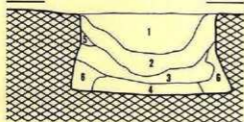
〔F-18土坑〕(第100図B、P L-54C)

本土坑は、調査区北側斜面の北西部F-17・18グリッドにまたがって位置し、至近からG-17土坑も検出されている。

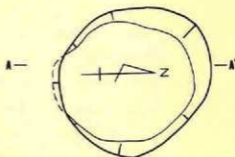
規模は、開口部長径約1.24m×短径約1.04m、検出面からの深さは最深部で約1.00mを測る。



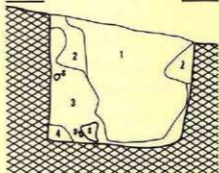
A L-341.570m



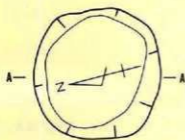
A. F-11土坑



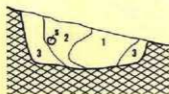
A L-341.570m



B. F-18土坑



A L-341.100m



C. G-17土坑

F-11 土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR3/4暗褐色シルト	堅く締まり粘性はない。微量の炭化物粒、焼土粒、浮石粒を含む。
2	10YR2/3黄褐色シルト	堅く締まり粘性はほとんどない。ごく微量の焼土粒、焼山シルトが散在を含む。
3	10YR3/3暗褐色シルト	アブカシ締まりがなく粘性もほとんどない。2層よりやや多量の焼山シルトを散状に含む。
4	10YR2/3黄褐色粘土質シルト	堅く締まり粘性がある。ごく微量の焼土粒を含む。
5	10YR3/4暗褐色シルト	焼山シルトが散在したもので粘性はない。
6	10YR5/8暗褐色粘土	焼山シルトが散在したもので、黄褐色を呈するシルトがブロック状に含む。粘性はない。

F-18 土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR2/2黄褐色粘土質シルト	軟らかく締まりもない。粘性がある。焼山シルト、浮石小塊を若干含む。
2	10YR2/3黄褐色シルト	やや堅く締まりもある。粘性はない。
3	10YR2/3黄褐色粘土質シルト	締まりがあり若干粘性もある。焼山シルト、浮石小塊を若干含む。
4	10YR6/6暗褐色粘土	堅く締まり粘性がある。

G-17 土坑埋土層注記

層位	色 調	土 性
1	10YR2/3黄褐色シルト	堅く締まり粘性がない。
2	10YR3/3暗褐色シルト	堅く締まり粘性がない。焼山シルト、浮石を若干含む。
3	10YR3/4暗褐色シルト	堅く締まり粘性がない。微量の焼山シルトを散状に含む。

第99図 土 坑

平面形は楕円形に近く、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で水平に近いことから、断面形はピーカー形を呈する。

埋土は黒褐色や明黄褐色の粘土・粘土質シルト・シルト等で構成され4層に細分される。3層に混入する礫は、本地域の基盤を構成する基本層序第V層に混入する浮石と同質の浮石である。おそらく、壁から崩落したものであろう。自然に埋没した土坑と推定される。

〔G-17土坑〕(第100図C、P L-54D)

本土坑は、調査区北側斜面の北西G-17グリッドに位置し、近くにはF-18土坑が位置する。

規模は、開口部径約0.90m、検出面からの深さは、南側の最深部で約0.40m、北側の浅い所で約0.20mを測る。平面形はほぼ円形を示し、壁は外傾して急に立ち上がり、底面は平坦で水平に近く、断面形は皿形に近い。

埋土は黒褐色や暗褐色を示すシルトで構成され、3層に細分される。2層に混入する礫は基盤層に堆積している浮石と同質で、壁から崩落したものであろう。本土坑の埋土堆積状況は必ずしも自然堆積の状況は示していない。

遺物は出土していない。

(3) 遺物 (第104図A、P L-59)

本遺跡からの出土遺物は非常に少ない。出土地点も南東向き斜面からの出土が多く、北向き緩斜面からは少ない。117・118は南東向き斜面から出土した同一個体の破片である。器表に縄文の付された粗製土器である。119・120は北側斜面からの出土で、胎土に繊維の混入する破片である。これらの土器は遺構に伴って出土したものはない。

3. 上斗内V遺跡

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡1棟・土坑1基である。

(1) 竪穴住居跡

〔B-20竪穴住居跡〕(第102図、PL-57)

本住居跡は、調査区南端の中央部からやや西に位置する。

規模は、長軸約3.0m×短軸約2.8mを測り、平面形は、長軸・短軸の長さに若干の差はあるものの、ほぼ隅丸正方形を呈する。壁は、基本層序第IV層まで掘り込み、床面から外傾して急に立ち上がる。床面は平坦でほぼ水平であるが、あまり堅くない。壁溝は検出されていない。

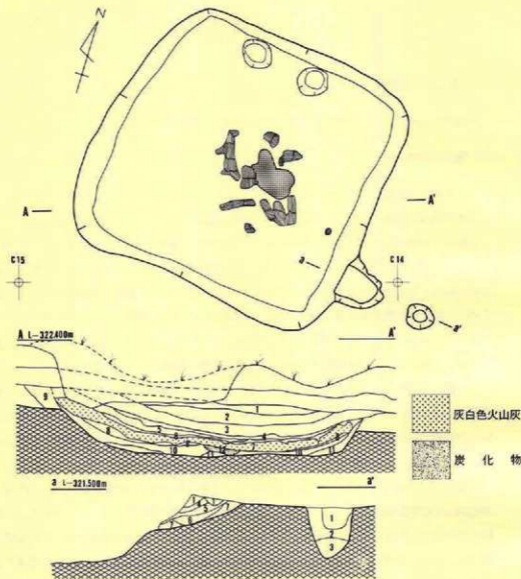
埋土は黒色や黒褐色を主体としたシルトで構成され、11層に細分されている。その中で7層は灰白色の砂状火山灰の堆積層である。7層から上位の埋土は砂粒や火山灰粒を混入し、締まりの良い1層～3層と、焼土や火山灰粒を含み、全体的に軟かい4層～6層に大別される。8層と11層は4層に近似している。10層には多量の炭化物粒や焼土粒を含む。なお、床面直上(10・11層)から多量の炭化材が検出され、さらに同面中央部からは焼土も確認された。炭化材の樹種は栗や樺で、検出状況から当住居跡は焼失したものと推定される。焼土は床面が焼成を受けて生じた現地性のものではない。本住居跡が焼失する際に生じた焼土であろう。

北壁際ほぼ中央付近の床面から柱穴状の土坑が2基(P_1 ・ P_2)検出されている。 P_1 は、長軸約34cm×短軸約30cm、深さ約20cmを測り、平面形は楕円形気味である。 P_2 は径約30cm、深さ約15cmを測り、平面形は円形を呈する。 P_1 ・ P_2 の芯々距離は約70cmである。当土坑は壁際に位置することや、2個1対を成すらしいことから考えると、本住居跡の出入口施設に関連する可能性が高い。

カマドは、東壁中央部のやや南寄りに構築されている。しかし、袖部・天井部が遺存していないため、全体的なことは不明である。また、燃焼部の焼土も検出されていない。煙道部は壁高中位から、外方に向けて次第に底面を高くして延びており、長さは約1.1mである。煙道部と煙出し部の取り付け方は不明であるが、煙出し部は長径約30cmの楕円形で、深さは約25cmを測る。煙道部の底面にも焼土の痕跡は観察されていないが、煙道部と煙出し部が検出されたことから、この部分を本住居跡のカマド部としておく。

遺物はまったく出土していない。

なお、床面から出土した炭化材による C_{14} 年代を測定した結果、 1240 ± 90 年B.P. (A. D. 710) が得られている。



B-20 型穴住居跡埋土土層注記

層位	色調	土質	土性
1	7.5YR2/1	黒色シルト	締まりがある。粘性はない。微量の砂粒、降下火山灰、焼土を含む。
2	7.5YR1.7/1	黒色シルト	締まりがある。粘性はない。微量の砂粒、焼土を含む。
3	7.5YR2/2	黒褐色シルト	締まりがある。粘性はない。微量の砂粒を含む。降下火山灰は全体にわたって散状に含む。
4	7.5YR1.7/1	黒色シルト	締まりがない。粘性もない。微量の焼土を含む。
5	7.5YR2/1	黒色シルト	締まりがない。粘性もない。焼成を受け赤色化した降下火山灰を若干含む。
6	7.5YR2/1	黒色シルト	締まりがない。粘性もない。白色の降下火山灰を若干含む。
7	7.5YR6/4	にぶい褐色	やや粒子の粗い降下火山灰層である。乾燥すると白色を呈する。
8	7.5YR1.7/1	黒色シルト	特徴は4層に類似する。
9	7.5YR2/1	黒色シルト	締まりがある。粘性はない。若干の砂粒を含む。
10	7.5YR2/2	黒褐色シルト	締まりがなく粘性もない。多量の炭化物質、焼土粒を含む。
11	7.5YR1.7/1	黒色シルト	特徴は4層に類似する。
12			炭化材料である。

B-20 型穴住居跡カマド部埋土土層注記

層位	色調	土質	土性
1	10YR2/2	黒褐色シルト質粘土	締まりがあり粘性もある。
2	10YR2/3	黒褐色シルト	締まりがなく粘性もない。微量の地山シルト粒、焼土粒を含む。
3	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土	締まりがない。粘性はある。多量の暗褐色粘土粒が散状に含む。
4	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土	締まりがない。粘性はある。若干の焼土粒、炭化材料を含む。
5	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	堅く締まっている。強い粘性がある。
6	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	堅く締まっている。強い粘性がある。微量の地山シルト粒を含む。
7	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト	特徴は5層に類似する。

第100図 B-20住居跡

(2) 土坑

〔C-24土坑〕(第103図、P L-58)

本土坑は、調査区中央部やや南東寄りの北向き斜面に位置する。

規模は、長軸約4.40m×短軸約4.10mで、深さは、検出面から中央最深部で約1.0mを測る。平面形は、不整ではあるがほぼ円形を示し、断面形は若干扁平な半円形状を呈している。また、壁の状態も起伏がみられ、整っていない。

埋土は黒色・黒褐色・褐色等のシルトや粘土質シルトで構成され、9層に細分されている。中でも、2層は灰白色の砂状火山灰の堆積層である。なお、1層は自然堆積の状況を示すものであろうが、3層以下の堆積状態は乱雑で不規則な堆積を呈し、必ずしも自然堆積とはいえない面もある。以上のことから、本土坑は人為的な遺構と成り得るかを含めて、問題の多い土坑である。

遺物は出土していない。

(3) 遺物(第104図、P L-59)

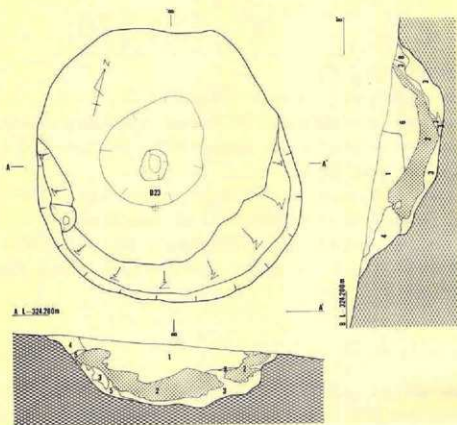
本遺跡の調査で出土した遺物は、いずれも粗掘り中に出土したもので、遺構内から出土したものはない。遺物の種類としては、土器と石器があるので、分けて説明を加える。

〔土器〕(第104図121~135、P L-59)

本遺跡から出土した土器には縄文式土器(121~124)と土師器(125~135)がある。まず、縄文式土器であるが、121は口縁端部を肥厚させ、さらに太い凹縁で渦巻文を付す。また、肥厚帯の下には並行沈線による文様をもつ。122は細い粘土紐の貼りつけによって施文された土器である。体部の縄文は両者とも原体P L横回転による単節斜行縄文である。123は中心に凹縁をもつ突帯が横位に貼付され、その上面に縦長の貼り瘤のある土器である。なお、瘤は縦方向に割られ、突帯には横方向の櫛掻きによる条線が入っている。124は器表に原体L R横回転による単節斜行縄文の付された土器である。125~135までは土師器で、いずれもクロコ未使用成形のものである。ほとんどのものはB-20竪穴住居跡の近くから出土している。口縁部破片は125・127のみであるが、頸には段をもち、口縁部は外反するらしい。調整技法は、口縁部は縦位のハケメ後ヨコナデ、体部の表面はナデまたはミガキで内面は粗いハケメまたはナデかミガキである。以上のことから、121・122は第IV群、123は第VII群、124は第XII群、125~135は第XVII群に入る。

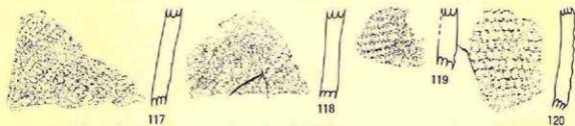
〔石器〕(第104図㊸、P L-59)

1点の出土で、両面に凹みをもつ凹み石である。

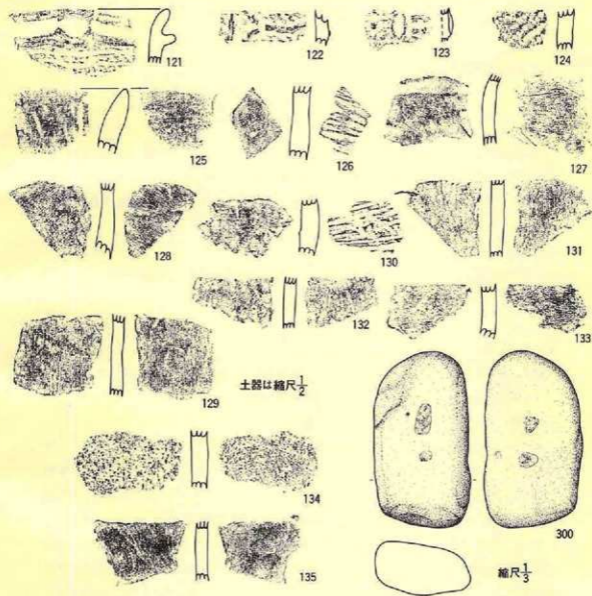


層位	色 調	土 性
1	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	やや締まりがない。若干の炭化材小片、降下火山灰（2層相当）を含む。
2	7.5YR6/4にぶい橙色	やや粒子の粗い降下火山灰層である。乾燥すると白色を呈する。
3	10YR2/1 黒色シルト質粘土	締まりがある。ブロック状に降下火山灰（2層相当）、地山粘土質シルトを含む。
4	10YR2/1 黒色シルト	締まりがなくフカフカする。粘性もない。ブロック状に降下火山灰（2層相当）、地山粘土質シルトを含む。
5	10YR4/4 褐色粘土質シルト	締まりがなく粘性は強い。降下火山灰、黒褐色シルトをブロック状に含む。
6	10YR4/6 褐色粘土質シルト	全体的に堅く締まっている。弱い粘性はある。地山シルトに近似する。多量の径2~5cmの凝灰炭塊、若干の高脚小皿、鉄分を含む小礫塊が混入する。
7	10YR4/6 褐色粘土質シルト	非常に堅く締まっている。強い粘性はある。混入物を除くと7層に類似する。
8	10YR2/1 黒色シルト質粘土	特徴は3層に類似するが、地山粘土質シルトの混入率が高い。
9	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	締まりがなくボロボロする。粘性はない。降下火山灰（2層相当）を粒状に含む。

第101図 C-24土坑



A. 上斗内IV遺跡



B. 上斗内V遺跡

第102図 上斗内IV・V遺跡の出土遺物

VI ま と め

前項までは、発掘調査によって発見された遺構や遺物の概略について説明したが、本項ではそれらの事実をより明確にするため、他遺跡例との対比を踏まえて、若干の考察を加えまとめとしたい。なお、遺跡ごとに、遺構、遺物に分けて記述することにする。

1. 上斗内川遺跡

(1) 遺 構

本遺跡から検出された遺構は既に記したとおりであるが、これらの遺構中、竪穴住居跡7・方形柱穴列1・円形柱穴列1・焼土遺構1（D-11焼土遺構）・土坑4は、出土遺物から縄文時代後期後葉～末葉に属するものと推定されるが、その他の遺構については所屬時期が確定できなかった。しかし、検出された層位や形状から考えると、縄文時代の遺構であろうことは推定される。

本項では、以上のことから竪穴住居跡を中心にして、時期の推定される遺構についてのみ、触れておく。

1) 住 居 跡

検出された7棟の竪穴住居跡を概観すると、検出状況から下記のように大別される。

I群 F-07・F-11・F-14・F-16竪穴住居跡

II群 D-12・D-15・E-17竪穴住居跡

I群は、調査区の北側で段丘縁から若干遠くに位置し、検出面からの掘り込みが浅く、いずれも壁際に全周する柱穴状土坑を有する。どの柱穴状土坑も床面からの掘り込みが浅い。炉跡は、F-16竪穴住居跡で検出された以外は検出されていない。後者は段丘縁に位置し、検出面からの深さが前者に比して深く、壁際に全周する柱穴状土坑は検出されていない。しかし、D-12・E-17の2棟では、壁際に2コの柱穴状土坑を有し、他遺跡例を考慮すると出入口施設に関連する土坑と考えられる。この柱穴状土坑は、D-12住では土坑の芯々間距離が55.5cmで南東壁際に、そして、E-17住は芯々間距離が58cmで南西壁際にそれぞれ位置している。位置する方向関係には差があるが、両住居跡ともに緩斜面の低位に位置するという共通点がある。このような在り方を示す柱穴状土坑は、近年岩手県内での検出例が増加しており、岩手部滝沢村卯

遠坂遺跡^②（後期前葉）、北上市八天遺跡^②（後期前葉）、九戸郡軽米町呷屋敷Ⅰa遺跡^③（晩期前葉）等の例が報告されている。また、未報告ではあるが岩手郡岩手町川口Ⅱ遺跡^④九戸郡軽米町馬場野Ⅱ遺跡^⑤でも同様な柱穴状土坑が検出されている。以上の遺跡で検出された遺構はいずれも縄文時代後期が多く、呷屋敷Ⅰa遺跡のみが晩期である。どの遺跡でも出入口施設との考え方を示しており、本遺跡例もこれに類するものと理解される。今後の類別の増加に期待したい。なお、D-15住居跡についても南側が未調査のため全容は不明であるが、1コの柱穴状土坑が壁際で検出されていることから同様な状況を示すであろうことが予想される。

炉は4棟の竪穴住居跡で検出され、欠損しているものもみられるがいずれも石囲い炉である。囲い石は直角礫の比較的小ぶりの礫を用いているが、円形を呈するように配列されている。また、これらの礫は、床面に埋設したものの他に、単に床面に配置しただけのものもみられ両者が混在する。傾向としては、比較的大きい礫が埋設され、小ぶりの礫は埋設されないようであり、これは、囲い石の上面を揃えるための処置であろう。

なお、F-11竪穴住居跡では、床面のほぼ中央部と思われる位置から掘込みの浅い円形を呈する土坑が検出され、さらに、この土坑の壁際からは小土坑も検出され、至近の床面から数個の礫も出土している。これは、住居跡の北側が調査区外であること、土坑から焼土が確認されない等から推定の域を出ないが、炉跡の可能性があり、小土坑は囲い石の抜取り痕ではなかろうかと思われる。

また、検出された7棟について規模的にみると、最大がF-07住居跡で6m×6mを越えるものと思われるが、他は、両径共3m～4mの範中であり、平面形はすべて円形ないしは円形に近い。

なお、D-15・E-17両住居跡では、床面のほぼ中央部炉跡にあたる部分に黒色土と地山褐色土とによって貼床が施されている。

最後に、これら7棟の時期についてみると、出土遺物から縄文時代後期後葉に属する住居跡群（集落跡）であろうと推定されるが、他遺跡から検出されている同期の住居跡の規模・形状・出入口施設・柱穴状土坑の配列等の特徴からも縄文時代後期に位置づけられる住居跡群であろうことの傍証となり得よう。しかし、前述の二群間に時期差があるか否かについては、調査範囲が遺跡全体の一部に限定されることや、住居跡の出土遺物が少量であること等から、詳述しうるには至らなかった。

2) 円形柱穴列・方形柱穴列

両者とも1遺構ずつの検出であるが、遺構を構成する柱穴状土坑の形状・規模・埋土がいずれも酷似している。また、これらの土坑からは柱掘え方も数コずつ確認され、あたかも掘立柱建物跡のそれに近似する。特に方形柱穴列については、全体の形状が掘立柱建物跡的である。

しかし、土坑からの出土遺物は、縄文時代後期末葉の土器片であることや、掘り中の遺物にも中近世のものがないことから、掘立柱建物跡の名称を付すのに躊躇した。円形柱穴列については、所謂掘立柱建物跡とは全体の形状が違うこと、土坑からの出土遺物が先の方形柱穴列と同様であること等から、前者と同種の遺構としたが、土坑が円形に配列されるものと方形に配列されるものという意味を含めて、標記のような名称を仮に付したものである。

このような遺構が検出される過程を考えると、当初から一般的な建物跡と同様に平地式住居として建設された場合と、元来は竪穴住居であったものが、掘り込みが浅いために、その後の攪乱や削平（粗掘り時も含めて）によって壁や床がなくなり、柱穴だけが検出される場合がある。本遺跡例がそのいずれであるかは明確でない。

岩手県内では、方形柱穴列として紫波郡紫波町西田遺跡^④例が知られているし、円形柱穴列としては北上市丸子館遺跡^⑤、八天遺跡・卯邊坂遺跡等の例があり、前者は縄文時代中期、後者は縄文時代後期と報告されている。いずれ、これらについては、所謂竪穴住居跡に比して検出例が少なく、建物の構造・機能・性格等不明な点が多く、今後、多くの検出例を待って、検討する心要があろう。

3) 土 坑

本遺跡の調査では7基の土坑が検出されている。形状はE-14土坑の長方形を除くと他は円形か楕円形を示している。出土した土器から所属時期の判明しているのは4基のみで、残る3基は不明である。中でもE-08土坑・E-09土坑は柱の据え方が定かでないものの、平面形・断面形・埋土ともに、先の円形柱穴列や方形柱穴列を構成している土坑と近似した様相を示している。一般的なフラスコ形土坑やピーカー形土坑と比較すると規模が小さく、掘り込みも浅い。しかし、墓塚として認定できる状況を示しているわけでなく、性格は不明である。長方形のE-14土坑については、他遺跡で多くの例が知られる「陥し穴」状遺構と近似した形状を示していることから、当遺跡の例もほぼこれに類すると推定される。

4) 焼土遺構

本遺跡では5ヶ所で焼土が検出されている。検出された層位は基本層序第Ⅲ層上面で、いずれも同位面で検出されている。遺物を共伴したのはD-11焼土遺構のみで、他にはない。出土した土器の時期は縄文時代後期後葉に層する土器のみで、このことから考えると、これらの焼土遺構は少なくとも縄文時代後期に層することは誤りなからう。性格を明らかにする状況は観察されていないが、D-11焼土遺構に共伴した土器は二次的に焼成を受けた痕跡を残しており、この焼土の性格を示唆しているのかも知れない。

(大原)

(2) 遺物

本遺跡の調査では土器・土製品、石器、石製品が遺物として出土しているが、ここでは土器の属性を中心にして記述する。

1) 土器

出土した土器には縄文時代早期～晩期、弥生時代、古代に相当するものが含まれており、それらの属性によって第Ⅰ群土器から第Ⅷ群土器に細分されている。しかし、それらは調査時に層位的に出土したものではないことをお断りしておく、以下に記述する大別と細別は室内整理中に型式学的方法によって分類したものである。完形品もあまり多くない中で破片も含めた分類であることから、修正や訂正を要する部分が多々あるものと考えられるが、そのことについては、筆者の今後の課題にしたい。

以下に、群別に説明を加えていくことにする。

〔第Ⅰ群土器〕

本群の土器は沈線と貝殻紋の組み合わせによる文様を付す土器群である。全体的な器形は不明であるが、口縁部分がキャリパー形を示し、口縁は4単位の波状を示すらしい。また、波状突起部の両側には小突起を付す。このような特徴を示す土器として物見台式土器^⑧が知られている。その中でも器形がキャリパー形を示す例は青森県上北郡六ヶ所村千歳遺跡^⑨での例が知られ、調査者は千歳式として報告している。この例の底部形態は突起のつく丸底風尖底であることから、本遺跡例でもほぼ同じ器形を示すであろう。岩手県での出土例としては岩手郡雫石町桜松遺跡^⑩があり、この遺跡出土のものとはもっとも酷似している。

以上のことから、本群は物見台式土器の範囲に入り、その中でも前記の千歳遺跡例や桜松遺跡例に近い土器群と理解しておく。

〔第Ⅱ群土器〕

本群は特徴によって1類と2類に細分されている。1類は底部と体部を欠失しているものの破片の湾曲具合から丸底か尖底を示すものと推定され、体部の縄文も単節斜行縄文に表出される特殊な縄文が施文されている(原体の復元できず)。内面には指押さえによる小起伏があるもののほぼ平滑である。このような特徴をもつ土器の例として二戸市沢内B遺跡の出土例がある。沢内B遺跡出土例では全て丸底風尖底・口縁部文様帯をもたない・連結による羽状縄文がある。単節糸体回転による燃糸文もある等の特徴もみられ、このような特徴は、青森県三沢市早稲田具塚^⑪第6類C種にほぼ相当する。早稲田具塚例は縄文時代前期初頭に位置づけられているが、最近の説では大木1式に相当する^⑫ともいわれている。

2類とした土器は口縁部～体部を残存する破片であるので全体的なことは不明であるが、口唇に刻みをもち、器表に結節回転による俗に綾絡文とよばれる縄文を付すことを特徴としている。このような特徴をもつ例は現在のところ筆者の管見に入っていない。しかし、綾絡文を付す土器としては盛岡市新城館遺跡例⁴⁵や二戸市上里遺跡⁴⁶例がある。しかし、両遺跡では口唇への刻みがない。中でも、上里遺跡Ⅱ群5類とした土器が近似し、同遺跡Ⅱ群6類とも一部共通している。本遺跡例もほぼ同じ特徴をもつことから、上里遺跡Ⅱ群5類と6類と同種の土器と考えられる。時期的にみた場合には縄文時代前期初頭～大木1式頃に位置づけられるものといえよう。

〔第Ⅲ群土器〕

本群は所謂円筒式土器の範疇に入る土器であるが、文様の施文方法や表出された文様によって細分されている。1類の特徴は、頸部に1条の隆帯を貼付し、体部と口縁部を限り、隆帯上には刺突痕をもつ。体部には連結による横位の羽状縄文を施し、口縁部には単軸結条体横回転による摺糸文をもつ。このような特徴は、円筒式土器の中では縄文時代前期末の円筒土器下層d式の特徴と同様であり、ほぼこの土器と同じ土器群であろう。2類は、口縁部文様に粘土紐を貼付していることから、中期円筒式土器に入るものであろう。粘土紐の間を刺突痕で充填することをも考え合わせると、中期の中でも円筒上層C式の特徴をもつといえるだろう。

以上のことから、1類は円筒土器下層d式に、そして2類は円筒土器上層C式に位置づけられるであろう。

〔第Ⅳ群土器〕

本群は所謂大木式土器に入る土器群である。隆帯をもつものを1類、沈線によるものを2類として細分したが、この両者は縄文時代中期に位置づけられる大木8a式の特徴とされている。特に28は器形がキャリバー形を示し、その典型ともいえるものである。

以上のことが本群の土器は大木8a式に相当し、縄文時代中期に位置づけられる。

〔第Ⅴ群土器〕

本群の特徴は、無文の器面に3～4条の並行沈線のみによって文様の付された土器である。このような特徴は、東北半では十腰内I式の一部や関東地方の堀の内I式に近いものと理解することができる。本遺跡例は沈線の引き方が粗雑な面もある(36)が、32～34の文様はどちらかという堀の内I式に近い要素である。以上のことから、本群は堀の内I式に近似した土器とし、後期初頭に位置づけておく。

〔第Ⅵ群土器〕

本群は、縄文時代後期中葉に位置づけられる土器群で東北半の十腰内Ⅱ・Ⅲ式、東南北半の宮戸Ⅱ式・室ヶ峰式、関東地方の加曾利B式等に相当する土器群であろう。岩手県の出土例

としては、西磐井郡花泉町貝鳥貝塚第Ⅲ群土器¹⁵、上閉伊郡大槌町崎山弁天遺跡¹⁶、裨貫郡大迫町立石遺跡¹⁷第Ⅳ群土器等があり、これらとの対比から、その属性を考えてみる。

1類は蛇行する並行沈線を付すことを特徴とする土器で、この文様は加曾利BⅠ式の特徴といわれている。岩手県内での出土例は比較的多いが、量的には少ない。しかし、十腰内Ⅱ式の特徴ともいわれることから、広く分布する土器であることが判る。

2類は、直線や曲線で区画された磨消縄文帯をもつことを特徴としていることから、貝鳥貝塚第Ⅲ群3類や崎山弁天遺跡第Ⅴ群3・4類、立石遺跡のⅣ群3類に近似した様相を示している。このような特徴は東北地方南半の宝ヶ峰式や宮戸Ⅱb式の特徴ともされることから、これらとはほぼ並行する土器と考えられる。しかし、細部の特徴では必ずしも全てが共通しているわけではない。特に本遺跡例では、立石遺跡や崎山弁天遺跡例にみられる刺突文をもつ土器がないことである。また、体部の縄文が、他遺跡例では単節斜行縄文が主体で他は少なく、本遺跡の場合は、二種類の原体を使用した縦位や横位の羽状縄文が多くみられる。宮戸Ⅱ式には縦位や横位の羽状縄文が多用されることが報告されており、宝ヶ峰式でも羽状縄文が散見されるらしい。本遺跡の本類とした土器の中には、本来次の4類に入る土器が含まれている可能性はあるものの、本類の該当する土器の中に羽状縄文を付す土器が含まれることは事実である。以上のことから考えて、本類は先の宮戸Ⅱ式や宝ヶ峰式、そして関東地方の加曾利BⅡ式にほぼ並行するものと考えられる。

3類は口縁端部や頸部に刻目帯をもつことを最大の特徴としている。このような土器は崎山弁天遺跡第Ⅴ群6類や貝鳥貝塚第Ⅲ群5類A、立石遺跡Ⅳ群5類等の土器と共通している。しかし、本類もまた、若干異なる要素をもっている。それは体部文様の区画である。本遺跡の場合には所謂木葉文的な区画を多用しており、他遺跡ではそれがいないことである。しかし、その他の特徴はほぼ共通している。木葉文的な区画は加曾利BⅡ式にも似た区画がみられるようであるが、十腰内Ⅲ式やⅣ式には多くみられる文様であるらしい。以上のことは東北北半の特徴をもつ土器群であることを示唆しているのかも知れない。これらのことから、本類の土器は十腰内Ⅳ式や加曾利BⅢ式に並行する土器と理解することができる。

4類は帯縄文と磨消帯によって器面が加飾され、一部に貼瘤をもつ土器で、体部の縄文は羽状縄文が多く斜行縄文は少ない。このような特徴の一部は、次のⅦ群1類とも共通する要素ではあるが、貼瘤の量や位置に差があることから別種とした。しかし、口縁部突起や一部に貼瘤がある等は所謂瘤付土器群の前段階的要素であることは事実である。岩手県での出土例としては貝鳥貝塚第Ⅳ群1類がもっとも本類に近似している。形式名でいうなれば、西の浜式を構成する一部なのかも知れない。

以上、本遺跡第Ⅳ群土器の属性についてみてきたが、1類は加曾利BⅠ式、2類は加曾利B

Ⅱ式、3類は加善利BⅢ式、4類は西の浜式の一部とそれぞれ並行関係がありそうであるが、他遺跡の出土例との比較的では、いずれも若干の相違がみられ、これが地域的な特徴を示すものかも知れない。

〔第Ⅵ群土器〕

本群は所謂「瘤付土器」と呼ばれる範囲に入る土器を一括した。このような土器は関東～東北全体にわたって出土し、関東地方では安行Ⅰ式とⅡ式、東南北半では新地式や金剛寺式・宮戸ⅢaとⅢb式、東北北半では十腰内Ⅳ・Ⅴ式等と呼称されている。本遺跡での出土としては先のⅥ群土器に次いで出土量が多い。体部文様や貼瘤の状況によって6類に細文されている。

1類は立石遺跡第Ⅴ群1類、貝島貝塚第Ⅳ群2類等に近似した様相を示し、一般に瘤付土器の直前の土器と理解されているものである。前群4類でも触れたように、貼瘤の量に多少の差こそあれ、口縁部や体部の磨消帯と縄文帯は前群4類とほぼ共通している。以上のことから、本類は西の浜式に相当する土器と考えられる。

2類は、縄文を充填した並行沈線が全周し、その縄文帯の上に貼瘤をもつことを特徴としているが、このような土器は貝島貝塚第Ⅳ群3類の一部（報文図18—35～37）に近似する。その他の例は筆者には知り得なかった。県外の例では宮戸第4類の中にこのような特徴をもつ土器がある。全体的にみると全てが共通しているわけではないが、地域性を考慮するならば、本類はこれらの土器と並行関係をもつ土器ということができるであろう。以上のことから、本類は宮戸Ⅲa式に並行関係をもとめることができるであろう。

3類は器面が入組文風に区画され、その中を撻擻きによる条線を充填する土器である。この種の土器の県内での出土例は明らかでない。県外の例をみると、福島県三貫地貝塚²⁶や宮城県清水遺跡²⁷からの出土品に近似している。安孫子昭二氏の瘤付土器の編年²⁸では、これらの土器を瘤付土器の第Ⅰ段階として位置づけている。このようなことから、2類と同様宮戸Ⅲa式に入る土器であろうか。

4類は入組文風に配された刻目帯とその上に付された貼瘤を特徴とする土器で、このような土器は貝島貝塚第Ⅳ群4類の一部（報文図18—40・41）や立石遺跡第Ⅴ群3類等に類例をもとめることができ、宮戸Ⅲa式の特徴といわれている。

5類は円弧状の刻目帯で区画し、その中の一部は縄文を充填する土器で、十腰内Ⅴ式の中にみられる特徴と近似している。

6類には貼瘤がないものの、器面に沈線による入組文が付される土器で、瘤付土器の終末的な様相との理解から、本群に入れたが、他遺跡での類例は定かでない。型式的には宮戸Ⅲb式に相当するものと考えられる。

7類は無文の器面に沈線のみによって施文された土器群であり、東南北半の新地式の中に類

例がみられる。

以上、本遺跡第Ⅶ群土器の属性をみてきたが、そのほとんどは宿付土器群の中でも宮戸Ⅲ a 式・新地式・十腰内Ⅴ式に相当し、後期最末葉の入組み文系土器群の宮戸Ⅲ b 式に入る土器は 6 類のみであることが明らかになった。

〔Ⅷ群土器〕

本群は器面に装飾文様を全くもたない無文土器であるが、本群単独でその属性を決定することは非常に困難であり、共伴土器の属性からの相対的な判断で決めている場合が多い。本遺跡から出土した土器全体を概観すると、縄文後期に属するものが大半を占め、本群の土器もまた、それらと共伴して出土している。したがって、本群の出土状況から考えて、本群は後期の所産になる土器と理解される。しかし、形式的な属性については定かでない。

〔Ⅸ群土器〕

本群は器面に櫛掻きによる条線が施される土器で、このような土器は貝島貝塚からの出土例があり、第Ⅳ群 5 類として分類されている。しかし、本遺跡出土のものと比較してみると、必ずしも同じ状況を示しているわけではない。特に装飾文様としての表出に差がある。本群もまた縄文時代後期に属することは明らかであるが、形式的な属性は不明である。ここでは第Ⅴ～Ⅶ群土器に共伴した土器とだけ記しておく。

〔Ⅹ群土器〕

本群は無文で研磨された器面に微隆起線による文様をもつもので、このような特徴は新地 1 式の特徴とされていることから、ほぼ同時期に属する土器であろう。

〔Ⅺ群土器〕

本群に入る土器には口縁部破片がないので不明な点が多いが、体部中位（とおもわれる）が窄みその位置に縦長の貼瘤があり、体部下位は縄文をもたず斜格子状の沈線文をもつという特徴があり、このような特徴は、宮戸Ⅲ a 式の中にみられるものである。以上のことから、本群もまた、宮戸Ⅲ a 式に相当する土器群と理解される。

〔Ⅻ群土器〕

本群は器面に縄文以外の加飾をもたない一般に粗製土器と呼ばれるものを一括したが、このような土器だけでその属性を判断することは困難である。しかし、本遺跡から出土した土器のほとんどが縄文時代後期に入るものであることから、本群の土器も後期に相当するものであろうことが推定される。付されている縄文には単節斜行縄文と羽状縄文があり、後期の土器でみた場合には羽状縄文の方が後出することが知られていることから、本群の中でも新旧があるものと考えられる。

〔第XIII群土器〕

本群には小型土器を一括しているので各型式に入るものが含まれている。

〔第XIV群土器〕

本群は縄文晩期に属する土器であるが、口縁部に何条かの沈線を付し、内面にも1条付している。

このような特徴から、晩期中葉の大洞C₂～A式に相当するものと考えられる。

〔第XV群土器〕

本群のもつ特徴は弥生時代に属することを表しており、289と同じ文様をもつ土器は和賀郡江釣子村蔵屋敷遺跡⁹から出土している。蔵屋敷遺跡は念仏車遺跡とも呼ばれ、念仏車式ともいわれた弥生時代の土器を出土したことで著名である。本群の土器もほぼ蔵屋敷屋敷出土のものと同様のものであると考えられる。

〔第XVI群土器〕

本群は北海道系の土器といわれ、形式的には北大式にもっとも近似している。しかし、北大式には微隆起線とともに口縁部に外面からの突縮文をも付すことを特徴としている。おそらく北大式の中でもっとも古い時期に位置づけられるものであろう。

〔第XVII群土器〕

1類の上飾器には器種として甕と坏があり、いずれもロクロ未使用成形のものである。器形や成形技法、器面の調整技法等を中心にして、県南部地方のそれを比較すると、8世紀頃といわれるものに近似している。2類は須恵器大甕の体部破片であるが、これ単独で時期を決定するのは難しい。しかし、内面に放射状(蓮ぐう文)の当具痕をもつものは9世紀～10世紀頃の遺物と共伴する例が多い。

〔注口部・口縁部突起部〕

本遺跡で出土した注口部の中で時期の判るものはいずれも新地式や宮戸Ⅲa式に入るものである。非常に大型の突起部であるが、このような突起部は宝ヶ峰式土器に往々にして見られるものであることから、本遺跡でもほぼそれに共伴するものであろう。

2) 土製品

本遺跡で出土した土製品の種類は前項で記したとおりであり、これらはいずれも縄文時代後期の土器と共伴して出土したものであり、後期の土製品類の組成を示す例として貴重である。

3) 石 器

本遺跡で出土した石器の種類や点数・特徴等は先に記したとおりである。これはいずれも縄

文時代後期の土器と共伴したことから、後期に属する石器群であろうと考えられる。後期の石器群としては盛岡市萩内遺跡例²⁴や岩手郡滝沢村卯造坂遺跡例等がある。本遺跡も後期の石器組成を考えるための好資料といえるだろう。

4) 石製品

石製品としたのは日常生活に使用された利器としての石器とは考えられない石器類を一括したのであるが、この中に稀有な例として軽石製で円孔を穿つ板状の石製品がある。本品のような製品は縄文時代後期の遺跡からの出土例が多いものの、数としては少ない。本遺跡のように2点の出土は稀である。性格としては装飾品であろうとしたが、「浮子」として考えている例が多いようで、本遺跡もその可能性を否定するものではない。本遺跡出土の石製品は量的には多くないが、その中では石棒の出土が多い。しかし、完形品のものはなく、いずれも破片である。 (高橋)

(3) 小 結

以上、上斗内Ⅲ遺跡の調査成果に基づいて、その位置づけを考えてきたが、その要約をしておく

1. 本遺跡は縄文時代後期後葉～末葉にかけての集落跡を中心とする遺跡であるが、出土した土器には縄文時代早期から奈良時代に亘る広範なものが含まれることから、調査区域外にそれらの時期の遺構が存在することが予想される。
2. 遺構の中では、竪穴住居跡の出入口施設、方形や円形柱穴列の検出は岩手県内でも稀な例であり、この種の遺構の時期や構造、性格を検討する好資料であろう。
3. 出土した土器の時期的範囲は前記のとおりであるが、この中では、物見台式土器や北大式土器の出土例は県内でも稀である。また、主体を占める後期の土器としても、中葉～末葉のものが継続して出土した例は貝島貝塚や立石遺跡・萩内遺跡例が知られるのみで、本遺跡例はそれらを補うものとして貴重な資料となるであろう。
4. 石器には特に顕著な傾向はみられないが、これが後期の石器群の特徴かも知れない。しかし、後期の石器組成を知る上での好資料であることは疑う余地がない。 (高橋)

2. 上斗内N遺跡

(1) 遺構

本遺跡から検出された遺構は、炭焼窯1基と土坑3基のみである。その中で炭焼窯は現在木炭生産の為に使用されている窯とは全く構造が異なるものである。検出された窯の構造から木炭の焼成法を考えると次のようになる。まず、薪の長さに合う巾で地面を掘り窪める。しかし、あまり深くすると燃えが悪いので加減する。次いで掘り窪めた底面に枕状に丸太を置き、その上に木炭にする木を積みあげていく。あまり高く積むと下が燃えすぎるので加減する。そして、積みあげた木に火を着けて火力がでるのを待つ。火の回り具合を見計って窯を掘り下げた時の土や周囲の土で全体を被覆し、「蒸し焼」にする。最後は、焼け具合をみて土を取り除いて木炭を取り出し、水をかけて火を消して木炭ができ上がる。この方法は、現在の「土窯」や「石窯」が使用される前には一般的に使用された炭焼きの方法で、「伏せ焼窯」と呼ばれる窯である。この窯で生産される木炭は軟質の黒炭(石窯焼成の炭は硬質で白炭と呼ぶ)で、鍛冶炭としては、昭和10年代にも使用された方法といわれる。本遺跡の場合は、年代を決定する資料はないが、本窯跡の底面に層厚10~15cmで堆積する木炭層のC₁₁年代を測定したところ、A. D 930年という値が得られた。筆者は炭窯に対する知見が残っているので、このような窯の時代上限がいつであるか判らないが、C₁₁年代が事実とすれば、10世紀にはもうこのような窯を使用していたことになり、木炭焼成技術のみならず、木炭を多量に使用する製鉄に伴う木炭生産等を知る上で好資料を提供したことになる。岩手県内では最近このような窯跡が数遺跡(未報告であるので遺跡名は省略)で検出されており、今後、事例が増加するものと期待される。

土坑は、断面がいわゆるフラスコ形に近い形状を示すもので、共存遺物はないが、埋土の状況や形状等は縄文時代の土坑と近似した状況であることから、本遺跡の土坑は縄文時代に属する土坑であろう。(大原)

(2) 遺物

本遺跡出土の遺物には特記すべきものはなにもない。おそらく、調査区域外に遺跡の中心が存在するものであろう。出土した土器は、胎土や焼成から考えて、縄文時代前期のものと後期のものがありそうである。(高橋)

3. 上斗内V遺跡

(1) 遺構

本遺跡からは、カマドを持ち方形を呈する竪穴住居跡1棟と円形を呈する大型土坑1基のみの検出である。

本住居跡については、遺物の出土はなかったが、付近の黒色土再堆積層から土師器(竈だけ)の破片が10数点が出土し、これらはいずれもロクロ未使用成形されていること、 C_{14} 測定においてもAD710年の結果が得られていることことから奈良時代に比定される可能性がある。ただし、カマドは、東側壁の南寄りに構築されている。なお、床面からは、上屋構造を想起される柱穴の検出はなかったが、北側壁際から2個の柱穴状土坑が検出されている。これは、配置・規模・形状等から入口状施設に関連する土坑であると考えられる。土坑については、その時期や性格を明らかにする資料は何も得られていない。しかし、埋土内に、先の住居跡の埋土内にも堆積していた灰白色砂状火山灰が大量に堆積していた。そのことは、住居跡同様8世紀頃の遺構である可能性を示すものであろう。性格は定かではないが、土取り跡か風倒木痕である可能性が高い。

(大原)

(2) 遺物

本遺跡から出土した遺物は少量である。遺物の中には土器と石器がある。

1) 土器

本遺跡では先の上斗内III遺跡のIV群・VII群・Ⅹ群土器に相当する土器が出土している。VII群土器は所謂大木式土器の範疇に入るものであるが、付されている文様から大木8₀式に相当しよう。VII群土器は「瘤付土器」であり、縦長の貼瘤があることから、宮戸III₀式か新地式・金剛寺式等に相当する土器であろう。Ⅹ群は器表に縄文のみが付された粗製土器である。

2) 石器

凹石が1点出土しているが、属する時期が明確でない。おそらく、縄文時代中期か後期に属するものであろう。

(高橋)

参考文献

- ① 「印達坂遺跡」『東北縦貫自動車道関連—1—』岩手県教育委員会 昭和54年
 - ②本堂 寿一 「八天遺跡」北上市文化財調査報告25集 北上市教育委員会
 - ③小平 忠孝他 「吠屋敷Ⅰ」遺跡調査報告書『岩手県埋文センター報告第61集』 財団法人岩手県埋文センター 昭和58年
 - ④未 報 告 昭和58年に当埋文センターが調査、現説資料あり、
 - ⑤未 報 告 昭和58年に当埋文センターが調査、現説資料あり、
 - ⑥ 「西田遺跡」『東北新幹線関連—1—』岩手県教育委員会 昭和55年
 - ⑦本堂 寿一 「丸子館」『縄文時代検討会資料』 於、秋田県能代市 1981
 - ⑧江坂 輝弥 「青森県下北郡東通村灰屋物見台遺跡の調査報告」『考古学雑誌36—4』日本考古学会 昭和25年
 - ⑨ 「千歳遺跡⑬発掘調査報告書」青森県埋文センター報告第27集 青森県教育委員会 昭和50年
 - ⑩中川 重紀 「桜松遺跡」岩手県埋文センター報告第29集 昭和57年
 - ⑪佐藤 達夫他 「早稲田貝塚」『上北考古学会報告』上北考古学会
 - ⑫熊谷 常正 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告第1号』岩手県立博物館 1983
 - ⑬松野 恒雄 「新城館」『岩手県埋文センター報告第30集』岩手県埋文センター 昭和57年
 - ⑭高橋与右エ門 「上里遺跡発掘調査報告書」岩手県埋文センター報告第55集 財団法人岩手県埋文センター 昭和58年
 - ⑮草間 俊一、金子 浩昌編 「貝島貝塚」岩手県花巻町教育委員会 岩手県文化財愛護協会 1971
 - ⑯ 「崎山弁天遺跡」大迫町教育委員会 昭和49年
 - ⑰中村 良幸 「立石遺跡」大迫町埋文センター報告第3集 大迫町教育委員会 昭和54年
 - ⑱吉田 格 「三貫地貝塚」『福島県史』福島県 1964
 - ⑳志間 泰治 「丸森町清水遺跡の調査」『宮城県史の地理と歴史』2 昭和35年
 - ㉑安孫子昭二 「東北地方に於ける縄文時代後半の土器様式」『石器時代第9号』石器時代研究会 1969
 - ㉒高橋 文明 「蔵原敷遺跡」『江釣子遺跡群昭57年度』江釣子村教育委員会 昭和58年
 - ㉓工藤 利幸 「萩内遺跡」岩手県埋文センター報告第32集 財団法人岩手県埋文センター 昭和57年
- 上記以外に、十腰内式土器の編年は岩木山所収の「十腰内遺跡」の報文、宮戸式土器の編年は後藤勝彦氏の「隠前宮戸島里浜台貝塚出土の土器について」等を参考にした。また、全体的なことは講談社発行の「縄文土器大成—3—」が参考になった。

第4表 出土石器計測一覧表

No.	遺 構 名 (ブツID記)	出土層位	器 種	石 質	石材産地	測 量				備 考
						全長	全幅	厚み	重さ	
1	E-17II	北西部埋土1面	打 錫	磐石	美羽山地中新統	1.9	1.4	0.5	2.23	有葉型、基部欠損
2	(D-89)	打錫	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.0	1.3	0.4	1.24	有葉型、先端部欠損
3	(D-89)	打錫	?	チャート	北上山地古生帯	2.9	1.4	0.5	1.27	有葉型、尖形
4	(D-89)	打錫	?	?	?	3.1	1.5	0.4	1.15	有葉型、基部欠損
5	(D-10)	打錫	?	磐石	?	4.3	1.6	0.6	2.46	有葉型、尖形
6	(F-91)	打錫以上	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	3.4	1.6	0.4	1.83	有葉型、先端部、基部上欠損
7	(F-16)	打錫上段	?	チャート	北上山地古生帯	1.5	1.2	0.4	0.32	有葉型、小葉形
8	(G-83)	打錫(横出段)	?	?	?	2.9	1.3	0.4	1.10	有葉型、尖形
9	D-19II	北西部埋土2面	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	3.8	1.2	0.9	2.27	横割形型に近しい、尖形
10	(E-88)	表土	?	?	?	4.0	0.8	0.4	1.33	横割形型、基部若干欠損
11	(E-10)	打錫抽出面	?	?	?	4.7	0.8	0.6	2.26	横割形型、尖形品
12	D-12II	北西部埋土1面	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.1	2.0	0.5	2.46	横割形型、先端部欠損
13	(D-12)	打錫	?	燧石	?	3.9	1.5	0.2	1.23	羽葉平型、尖形品
14	(D-12)	打錫	?	?	?	4.7	1.6	0.5	3.66	横割形型、先端部欠損、裏い
15	(D-11)	打錫	?	?	?	7.5	1.7	0.4	4.92	横割形型、先端部欠損、裏い
16	(表層)	?	?	?	?	3.8	1.6	0.4	2.62	横割形型、先端部欠損
17	(E-89)	打錫上段(横出段)	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	2.1	1.9	0.6	1.52	横割形型、尖形品
18	(F-85)	表土	?	チャート	北上山地古生帯	4.0	1.5	1.2	3.35	横割形型、先端部欠損
19	(D-10)	打錫	?	?	?	4.2	2.6	0.9	7.08	横割形型、先端部欠損
20	E-17II	北西部埋土2面	?	?	?	3.2	1.7	0.7	3.08	横割形型、尖形品
21	(D-88)	打錫	?	?	?	3.4	1.9	0.6	3.17	横割形型、尖形品
22	E-17II	北西部埋土2面	?	磐石	?	2.9	1.6	0.4	1.12	大羽型で先端部のみ残存
23	E-14土坑	埋土	打 七	?	?	7.5	2.5	0.7	16.12	横割形型、先端部欠損
24	D-11埋土遺構	一葉	?	?	?	5.6	2.8	0.9	31.28	横割形型、尖形品
25	(F-88)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	5.7	3.6	0.8	19.30	横割形型、尖形品
26	(D-88)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	6.5	3.4	0.9	18.16	横割形型、尖形品
27	(D-11)	表土	?	?	?	7.2	3.7	1.2	16.09	横割形型、先端部若干欠損
28	(F-88)	表土	?	燧石	?	5.7	3.7	0.9	25.79	横割形型、尖形品、一部両側欠損
29	(E-85)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	5.5	2.4	1.0	13.43	横割形型、尖形品
30	(D-89)	打錫	?	瑠璃灰質頁岩	?	7.6	2.8	0.9	18.53	横割形型、尖形品
31	(F-15)	打錫	?	?	?	8.7	2.6	0.5	12.63	横割形型、尖形品
32	(E-86)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	5.8	1.6	0.6	5.22	横割形型、尖形品
33	(E-17)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	4.2	2.1	0.5	5.14	横割形型、尖形品
34	(D-88)	打錫	?	?	?	9.3	4.5	1.5	41.03	横割形型、尖形品、両側欠損
35	(表層)	?	?	?	?	4.8	1.9	0.5	3.86	横割形型、尖形品
36	(D-89)	打錫	?	瑠璃灰質頁岩	?	6.9	3.1	1.1	19.29	横割形型、尖形品
37	(F-88)	打錫上位	?	燧石	?	4.4	2.9	1.0	13.23	横割形型、尖形品
38	(F-15)	表土	?	?	?	6.9	3.7	1.5	33.98	横割形型、尖形品
39	(D-89)	打錫	?	瑠璃灰質頁岩	美羽山地中新統	5.5	2.3	0.6	7.04	横割形型、尖形品
40	(D-10)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	4.5	2.4	0.6	6.22	横割形型、尖形品
41	(F-89)	打錫上位	?	瑠璃灰質頁岩	?	7.3	3.6	0.8	19.82	横割形型、尖形品
42	(D-88)	表土	?	?	?	5.0	3.0	0.7	11.78	横割形型、尖形品
43	(G-82)	表土	?	燧石	?	4.5	1.9	0.7	6.40	横割形型、つらみ型欠損
44	(E-85)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	5.3	2.2	0.8	10.7	横割形型、つらみ型欠損
45	(F-23)	表土	?	?	?	3.6	2.8	0.6	6.34	横割形型、つらみ型と先端部欠損
46	(D-88)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	5.5	2.5	0.5	7.22	横割形型、先端部欠損
47	(E-12)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.0	1.5	0.5	2.83	横割形型、つらみ型と基部欠損
48	F-16II	西部埋土上5cm	?	瑠璃灰質頁岩	?	4.4	2.2	0.6	4.45	横割形型、尖形品
49	(F-88)	打錫上位	?	瑠璃灰質頁岩	?	5.6	1.9	0.8	6.15	横割形型、尖形品、両側欠損
50	(D-88)	打錫	?	燧石	?	6.4	5.0	0.9	20.63	横割形型、尖形品
51	(F-24)	打錫上位	?	磐石	北上山地古生帯	13.5	2.5	1.1	32.8	横割形型、仔細に似た形で鋭い
52	(E-88)	表土	?	燧石	美羽山地中新統	3.8	5.2	0.6	12.29	横割形型、つらみ型、尖形品、両側欠損
53	(D-13)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	6.6	4.1	0.3	12.32	横割形型、つらみ型、尖形品、両側欠損
54	(D-88)	打錫	?	燧石	?	2.9	3.7	0.5	3.59	横割形型、つらみ型、尖形品、両側欠損
55	(D-10)	打錫	?	?	?	3.6	5.4	0.6	11.92	横割形型、つらみ型、尖形品
56	表層	?	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.4	6.4	1.2	28.30	横割形型、つらみ型、尖形品、両側欠損
57	表層	?	?	?	?	6.0	6.7	1.1	39.86	横割形型、つらみ型、尖形品
58	(D-11)	打錫	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.9	6.0	0.3	11.82	横割形型、つらみ型、尖形品
59	(E-84)	表土	?	?	?	3.0	2.8	0.5	1.4	横割形型、つらみ型、尖形品
60	(D-88)	表土	?	瑠璃灰質頁岩	?	3.0	6.1	1.2	15.84	横割形型、つらみ型、尖形品、両側欠損

第4表 出土石器計測一覧表

No	遺 構 名 (ブツID)	出土層位	器 種	石 質	石材産地	法 量			備 考	
						全長	全幅	厚み		
61		黄土	石 七	珸質岩	北上山地古生界	3.7	6.5	0.7	20.94	機形をツルミ型、刃部直
62	(F-47)	黄土	?	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	3.2	5.4	0.9	14.65	機形をツルミ型、刃部直、一面山崎型
63	(D-40)	礫層	?	珸質凝灰質泥岩	?	2.0	2.8	0.5	2.06	機形をツルミ型、刃部直、小型
64	(D-40)	礫層	?	硬質泥岩	?	4.8	5.4	0.7	18.13	機形をツルミ型、刃部直
65	F-166E	北東原埋土層位	行 業	?	?	5.2	2.5	0.5	7.48	
66	(F-22)	黄土	?	?	?	5.7	2.7	0.7	11.44	
67	(E-40)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	2.3	1.1	0.4	0.77	
68	(F-40)	黄土	?	チャート	北上山地古生界	3.4	2.1	0.7	5.20	
69	E-171E	埋土層2面	槌 器	?	?					
70	E-071E・E	埋土	?	硬質泥岩	奥羽山地中新統	3.6	5.4	0.6	11.97	
71	(D-10)	礫層	?	?	?	5.0	4.9	0.8	23.68	
72	(F-13)	黄土	?	?	?	5.1	2.8	0.9	13.18	
73	(D-40)	礫層	?	硬質凝灰岩	?	7.1	3.8	1.2	29.28	
74	(E-40)	黄土	?	粘板岩	北上山地古生界	3.8	4.4	1.0	17.29	
75	(G-43)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	3.4	2.6	0.4	7.25	
76	(D-47)	黄土	?	チャート	北上山地古生界	2.1	2.9	1.0	8.75	
77	(F-47)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	1.9	2.1	0.5	2.17	計測によって形像異状
78	(E-10)	黄土	?	硬質凝灰質泥岩	?	11.5	2.6	1.0	29.22	刃部直に入念割痕、縦長くて若干の曲
79	(D-40)	黄土	?	?	?	8.3	2.6	1.4	33.62	
80	(D-40)	礫層	?	珸質泥岩	奥羽山地中新統	5.1	2.8	0.9	13.18	
81	(E-15)	黄土	?	硬質泥岩	?	2.8	4.3	0.5	8.45	
82	(E-15)	黄土	?	珸質泥岩	?	2.5	3.7	0.9	9.82	
83	(D-10)	礫層	?	チャート	北上山地古生界	3.4	2.5	1.2	12.17	
84	(G-47)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	5.2	2.6	1.3	28.72	
85	(D-40)	黄土	?	硬質凝灰質泥岩	?	4.0	3.6	0.8	11.42	
86	(D-10)	黄土	?	?	?	7.4	4.4	1.1	26.37	
87	(D-40)	礫層	?	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	3.9	3.4	0.8	15.71	
88	(E-47)	黄土	?	?	?	4.9	3.5	0.9	25.42	
89	(D-40)	礫層	切削物	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	7.0	6.1	1.0	22.43	
90	(D-40)	礫層	?	?	?	5.3	6.2	1.4	54.08	
91	(F-13)	黄土	?	チャート	北上山地古生界	4.4	7.0	1.3	43.54	
92	(F-19)	黄土	?	珸質凝灰岩	奥羽山地中新統	4.7	5.1	1.2	29.64	
93	(E-11)	埋土上位	?	珸質凝灰岩	?	9.2	9.7	1.5	49.12	
94	(G-13)	黄土	?	珸質凝灰岩	奥羽山地中新統	8.2	3.8	0.9	26.16	
95	(E-10)	黄土	?	?	?	4.2	5.9	1.4	37.53	
96	(E-40)	黄土	?	硬質凝灰質泥岩	?	3.2	3.4	0.6	9.37	
97	(D-11)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	?	4.3	1.5	0.9	6.42	
98	(D-10)	黄土	?	硬質泥岩	?	4.6	1.8	0.9	8.44	
99	(D-10)	礫層	?	?	?	3.4	2.9	0.7	13.25	
100	(D-40)	礫層	?	粘板凝灰岩	?	5.0	3.9	1.3	13.55	
101	(F-17)	黄土	?	珸質凝灰質泥岩	?	5.3	3.8	1.6	38.05	
102	(D-40)	黄土	?	硬質泥岩	?	5.1	4.0	1.2	22.24	
103	(D-40)	礫層	?	?	?	3.7	5.0	0.5	13.84	
104	(E-40)	黄土	?	珸質泥岩	?	3.5	4.1	0.9	13.73	
105	裏掘	?	?	硬質凝灰質泥岩	?	4.9	4.2	1.0	26.26	
106	(F-17)	黄土	?	?	?				14.53	
107	(D-40)	礫層	?	硬質凝灰質泥岩	?	3.5	2.5	0.3	3.04	
108	(D-40)	黄土	?	珸質凝灰岩	?	2.2	2.1	0.5	2.42	
109	(Gライン)	礫層	?	?	?	4.2	2.3	0.7	5.78	
110	(E-12)	黄土	?	?	?				5.73	
111	(Dライン)	黄土	?	?	?				7.70	
112	(E-40)	黄土	?	珸質泥岩	?	3.0	1.3	0.6	3.80	
113	(E-40)	黄土	?	?	?	1.7	2.0	0.4	1.17	
114	(F-40)	黄土	?	硬質凝灰岩	?	1.9	2.2	0.3	2.20	
115	(F-40)	黄土	?	?	?	2.2	4.1	0.9	8.84	
116	(D-10)	礫層	?	チャート	北上山地古生界	2.5	4.1	0.7	4.77	
117	(E・F-12)	黄土	?	?	?				7.12	
118	(D-10)	黄土	?	粘板岩	北上山地古生界	2.7	1.9	0.4	1.80	
119	(D-40)	礫層	使用痕ある切片	硬質凝灰岩	奥羽山地中新統	3.4	3.4	0.7	9.42	
120	(D-12)	礫層	?	?	?	2.5	3.6	0.8	8.82	

第4表 出土石器計測一覧表

No.	遺 蹟 名 (ブライク名)	出土層位	器 種	石 質	石材産地	計 量			備 考	
						全長	全幅	厚さ		
121	(D-00)	目撃	※	チャート	北上山地古生界	5.7	2.5	1.1	11.75	
122	(E-07)	表土	※	柱状燧石質凝岩	奥羽山地中新統	3.9	5.8	1.2	25.72	
123	(D-00)	目撃	※	柱状燧石質凝岩	※	3.0	4.6	1.0	11.66	
124	(D-00)	目撃	※	チャート	北上山地古生界	3.9	2.2	0.9	8.50	
125	(E-16)	表土	※	柱状燧石質凝岩	奥羽山地中新統	2.9	4.9	1.4	13.12	
126	(F-04)	表土	※	—	—	—	—	—	—	
127	(E-06)	表土	※	燧石質凝岩	奥羽山地中新統	5.2	2.4	0.4	7.43	
128	(D-11)	表土	※	柱状燧石質凝岩	※	4.7	5.6	1.3	18.1	
129	(E-09)	表土	※	柱状燧石質凝岩	※	4.1	1.6	0.7	3.71	
130	(E-10)	表土	※	燧石質凝岩	※	3.1	4.6	0.7	8.36	
131	(D-00)	目撃	フレーク	燧石	※	1.4	1.8	0.4	1.56	
132	(D-11)	目撃	※	※	※	2.1	1.4	0.5	1.27	
133	(E-12)	目撃	磨製石斧	緑色燧石質	※	4.2	4.6	2.5	118	裾部を欠失
134	(F-03)	表土	※	プロビタイト	※	9.9	4.8	2.1	710	裾部を若干欠失
135	(E-02)	目撃上位	※	緑色燧石質	※	5.4	4.0	2.8	81	刃部を欠失
136	(E-00)	表土	※	※	※	—	—	—	—	刃部、基部を若干石に転用
137	(F-00)	表土	※	緑色燧石質	※	9.2	4.6	2.7	161	刃部を欠失
138	(G-15)	表土	※	※	※	9.5	5.5	3.2	302	基部を若干欠失
139	(E-03)	表土	※	※	※	5.3	3.3	2.4	55.97	基部のみ残存
140	(E-02)	表土	※	※	※	5.1	3.1	1.4	44.25	※
141	(F-04)	表土	※	※	※	11.4	5.0	2.6	302	完形品
142	(D-15)	表土	※	※	※	11.9	4.4	2.5	180	基部に於ており、磨合して発形となる
143	表録	※	※	※	※	6.6	4.3	2.7	114	基部のみ残存
144	(G-03)	表土	※	※	※	6.3	3.9	2.5	80	※
145	(E-00)	表土	※	プロビタイト	※	8.1	4.9	2.3	175	基部を欠失
146	(F-14)	目撃中位	※	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	7.7	4.8	2.2	158	※
147	(F-13)	表土	※	—	—	—	—	—	—	18.42 小型の発形品
148	(E-06)	表土	※	緑色燧石質	※	3.4	5.1	1.9	48.60	刃部を若干残存
149	(D-00)	目撃	※	※	※	2.1	3.8	1.5	13.46	※
150	(F-00)	表土	※	—	—	—	—	—	—	4.4 5.3 2.2 52.23
151	(D-00)	目撃	磨製石斧	緑色燧石質	奥羽山地中新統	5.3	5.9	2.3	108	刃部のみ残存
152	(F-17)	表土	※	—	—	—	—	—	—	5.1 3.1 1.2 26 刃部を若干残存
153	(E・F-12)	表土	※	緑色燧石質	奥羽山地中新統	5.7	3.8	2.0	74	※
154	(F-15)	表土	※	燧石質火山岩	奥羽山地中新統	4.7	6.4	2.4	113	刃部を若干残し、若干石に転用
155	(E-11)	表土	※	—	—	—	—	—	—	刃部を若干残存
156	(D-00)	表土2面	打製石斧	緑色燧石質	奥羽山地中新統	3.0	3.8	2.0	24.85	※
157	E-10E	表土2面	打製石斧	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	7.9	3.8	2.8	121	※
158	E-10E	灰濁土上実燧石?	燧石	燧石質火山岩	奥羽山地中新統	9.4	7.9	4.6	262	1面に凹みをもつ
159	F-11E	灰濁土上	※	※	※	10.1	5.9	2.7	504	※
160	F-10E	灰濁土上	※	※	※	15.4	4.9	4.3	589	2面に凹みをもつ
161	E-11E	埋土	※	※	※	10.5	6.8	4.6	440	2面に凹みをもつ、基部に磨痕をもつ
162	E-00E・状	埋土	※	※	※	15.5	5.0	3.0	410	1面に凹みをもつ
163	E-00E・状	埋土	※	※	※	11.7	5.9	3.8	346	2面に凹みをもつ
164	F-04P-2	埋土	※	※	※	7.1	6.6	4.5	262	※
165	(H-02)	目撃	※	※	※	11.6	6.9	3.8	506	1面に凹みをもつ、基部に磨痕をもつ
166	(G-02)	表土	※	※	※	14.2	4.7	3.1	326	2面に凹みをもつ
167	(F-13)	表土	※	※	※	6.3	6.5	4.5	228	2面に凹みをもつ
168	(D-00)	目撃	※	※	※	10.2	7.6	5.6	350	4面に凹みをもつ
169	(F-10)	表土	※	※	※	6.6	6.1	4.8	712	4面に凹みをもつ、小型
170	表録	※	※	※	※	11.2	9.1	5.4	728	4面に凹みをもつ、大型
171	(E-20)	表土	※	※	※	11.1	7.9	6.3	700	4面に凹みをもつ
172	(D-10)	表土	※	※	※	5.5	5.7	2.9	148	2面に凹みをもつ
173	表録	※	※	※	※	8.8	6.6	4.6	290	※
174	(D-00)	目撃	※	※	※	8.1	7.0	5.3	411	2面に凹みをもつ、異様に磨痕をもつ
175	(G-03)	表土	※	凝灰質火山岩	※	8.1	6.2	4.1	273	4面に凹みをもつ
176	(F-20・21)	表土	※	※	※	10.2	8.0	3.0	311	1面に凹みをもつ
177	(F-10)	表土	※	※	※	10.2	8.5	5.6	622	2面に凹みをもつ
178	(E-00)	表土	※	凝灰質粘板岩	※	6.9	4.8	1.8	125	1面に凹みをもつ
179	(F-12)	表土	※	花崗閃緑岩	北上山地古生界	5.2	4.5	1.7	38.5	1面に凹みをもつ、小型
180	(F-16)	表土	※	燧石質火山岩	奥羽山地中新統	9.4	8.2	6.4	550	4面に凹みをもつ

第4表 出土石器計測一覧表

No.	遺 蹟 名 (ブリード名)	出土層位	器 種	石 質	石材産地	測 量				備 考
						全長	全幅	厚み	重さ	
241	(H-02)	埋層	磨 石	緑色凝灰岩	美羽山の中新統	7.5	3.5	3.0	147	全周に磨面をもつ
242	(D-09)	埋層	〃	岡輝石安山岩	〃	8.4	4.5	5.2	328	外面に磨面をもつ
243	(G-ライン)	埋層	〃	石英安山岩	〃	9.3	7.0	4.8	342	全周に磨面をもつ
244	(D-10)	日層	〃	岡輝石安山岩	〃	6.6	5.6	4.1	190	〃
245	(F-07)	表土	〃	緑色凝灰岩	〃	4.2	4.2	3.5	117	〃 凹みもある
246	(F-09)	表土	〃	岡輝石安山岩	〃	6.8	5.7	5.1	280	〃
247	(G-03)	表土	〃	〃	〃	12.1	6.6	4.0	498	〃
248	(E-17)	表土	〃	プロピライト	〃	7.3	7.6	4.3	309	〃
249	(E-04)	表土	〃	岡輝石安山岩	〃	7.7	8.1	5.1	470	〃 凹みもある
250	表層	〃	〃	〃	〃	10.5	7.7	4.7	520	2面に磨面をもつ、凹みもある
251	(D-00)	表土	〃	〃	〃	9.2	8.6	5.7	602	2面に磨面をもつ
252	(F-14)	埋層上位	〃	チャート	北上山地古生界	5.7	4.8	3.9	175	2面に磨面をもつ、凹みもある
253	(E-12)	表土	〃	石英安山岩	美羽山の中新統	11.3	8.7	5.5	828	全面に磨面をもつ
254	(D-11)	日層	〃	岡輝石安山岩	〃	12.4	8.1	3.2	520	1面に磨面をもつ
255	(D-11)	表土	〃	〃	〃	9.4	6.9	4.1	260	2面に磨面をもつ、凹みもある
256	(F-08)	埋層上位	〃	〃	〃	6.0	7.3	3.9	330	〃 凹みもある
257	(E-13)	〃	〃	〃	〃	8.0	7.5	5.0	391	〃
258	(D-00)	表土	〃	瑤石	北上山地古生界	10.7	8.3	4.5	528	側面に磨面をもつ
259	(F-11)	表土	磨り石	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	14.3	8.0	3.4	808	〃
260	D-12位	灰層直上	石 皿	〃	〃	31.4	26.8	7.2	〃	欠形
261	E-15位	灰層直上	〃	〃	〃	19.1	20.7	5.8	4012	〃
262	〃	埋土1層	〃	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	9.7	12.4	5.7	1192	破片
263	E-17位	灰層直上	〃	〃	〃	32.3	26.0	9.9	〃	欠形
264	〃	埋土下位	〃	〃	〃	19.3	29.6	2.4	〃	欠形、2面使用
265	F-04土坑	埋土	〃	石英安山岩	美羽山の中新統	10.1	6.7	3.8	298	破片
266	(D-09)	日層	〃	石英安山岩質砂岩	〃	17.3	22.1	3.7	2605	欠形
267	(F-17)	表土	〃	〃	〃	18.8	14.0	5.8	2290	破片
268	(F-17)	表土	〃	〃	〃	11.3	12.8	1.9	420	欠形
269	(D-00)	埋層	〃	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	10.7	5.2	1.8	94	破片
270	(D-14)	表土	〃	石英安山岩質砂岩	〃	14.4	7.2	4.3	624	〃、2面使用
271	(F-13)	表土	〃	〃	〃	20.2	16.2	4.1	1812	欠形、2面使用
272	(E-17)	表土	〃	石英安山岩質砂岩	美羽山の中新統	11.4	10.5	1.8	359	破片
273	(E-15)	表土	〃	岡輝石安山岩	〃	8.0	6.4	1.3	79	破片
274	(F-17)	表土	〃	〃	〃	8.3	12.6	3.5	340	破片
275	(E-11)	表土	〃	石英安山岩質砂岩	美羽山の中新統	9.4	7.8	2.0	208	破片、2面使用
276	表層	〃	〃	〃	〃	14.7	13.6	4.8	1215	欠形
277	(D-09)	日層	〃	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	7.8	5.1	4.5	350	破片
278	(F-17)	表土	〃	〃	〃	11.8	17.4	4.6	255	欠形
279	(D-11)	表土	砥 石	流紋岩質凝灰岩	美羽山の中新統	5.3	4.0	1.5	82	2面使用、最近のものともう
280	(D-09)	埋層	〃	安山岩質砂岩	美羽山の中新統	9.4	7.2	2.5	130	2面使用
281	(F-09)	表土	〃	流紋岩質凝灰岩	美羽山の中新統	10.6	8.0	3.5	140	2面使用と磨面使用あり
282	(F-06)	表土	〃	安山岩質砂岩	美羽山の中新統	9.9	6.9	4.9	187	1面使用
283	(F-17)	表土	〃	〃	〃	6.2	7.1	3.8	120	1面使用
284	(D-00)	埋層	〃	流紋岩質凝灰岩	美羽山の中新統	7.3	8.1	1.2	59	2面使用
285	E-15位	北東部埋土1層	石 鉢	緑色凝灰岩	〃	9.9	4.3	0.7	37.1	〃
286	(E-05)	埋層上位	〃	〃	〃	28.1	7.0	5.5	834	〃
287	(D-00)	表土	〃	緑色凝灰岩	美羽山の中新統	9.3	4.6	1.3	53	〃
288	(F-18)	表土	〃	〃	〃	6.1	7.6	2.4	180	〃
289	(G-03)	表土	〃	安山岩質砂岩	美羽山の中新統	8.1	7.2	4.0	200	〃
290	表層	〃	〃	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	7.0	5.7	2.5	78	〃
291	(F-20)	表土	〃	安山岩質砂岩	美羽山の中新統	6.1	6.5	1.0	98	〃
292	(F-07)	表土	〃	緑色凝灰岩	美羽山の中新統	7.8	2.6	2.5	89	〃
293	(E-00)	表土	裝飾品(磨盤リ)	磨石	〃	8.7	5.7	1.5	37	〃
294	(F-03)	埋層上位	〃	〃	〃	6.6	4.2	1.2	82	〃
295	(F-13)	表土	〃	〃	〃	6.8	6.4	1.6	12.4	〃
296	(F-06)	表土	〃	流紋岩質凝灰岩	美羽山の中新統	3.5	1.3	0.7	2.36	〃
297	(F-07)	表土	〃	チャート	北上山地古生界	3.9	0.9	0.6	2.25	〃
298	(F-07)	表土	縁切磨	岡輝石安山岩	美羽山の中新統	5.2	5.3	4.0	1.34	〃
299	(D-00)	日層	石皿状石製品	流紋岩質凝灰岩	美羽山の中新統	〃	〃	〃	〃	〃
300	上4内V	〃	凹み石	岡輝石安山岩	〃	11.3	8.0	4.2	〃	〃

第4表 出土石器計測一覧表

No.	遺 蹟 名 (ブリーフ名)	出土層位	器 種	石 質	石材産地	比 率			備 考	
						全長	幅	高さ		
181	(E-12)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.1	7.4	4.6	422	凹みに凹みもつ
182	(F-18)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.8	7.5	5.9	492	凹みに凹みもつ、裏面に磨痕あり
183	(E-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.3	7.7	4.3	350	凹みに凹みもつ
184	(D-18)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.5	7.8	4.5	490	凹みに凹みもつ
185	(F-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.2	5.4	5.9	333	凹みに凹みもつ
186	(E-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.6	6.5	3.8	370	凹みに凹みもつ
187	(D-84(ベルト北端))	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.6	6.9	4.8	565	凹みに凹みもつ
188	(D-87)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.5	5.9	3.9	368	凹みに凹みもつ
189	(G-83)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.4	6.4	3.9	315	凹みに凹みもつ
190	(E-18)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.2	7.0	3.5	418	凹みに凹みもつ
191	(E-84)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.0	6.0	3.8	345	凹みに凹みもつ
192	(E-84)	細砂	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.7	6.7	4.1	312	凹みに凹みもつ
193	(Dライン)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	13.5	8.1	4.9	776	凹みに凹みもつ
194	(F-17)	細砂上位	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.6	5.7	3.4	411	凹みに凹みもつ
195	(F-13)	細砂中位	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.2	6.4	5.9	350	凹みに凹みもつ
196	(D-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.3	7.9	4.3	490	凹みに凹みもつ
197	表層	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.8	6.4	4.6	290	凹みに凹みもつ
198	表層	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.7	8.9	3.8	389	凹みに凹みもつ
199	(E-15)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.5	5.1	4.4	270	凹みに凹みもつ
200	(D-80)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	21.1	7.8	3.9	428	凹みに凹みもつ
201	(F-84)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.4	7.3	3.5	380	凹みに凹みもつ
202	(F-20+21)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.7	9.5	5.9	704	凹みに凹みもつ
203	(D-80)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.4	6.8	3.5	431	凹みに凹みもつ
204	(F-17)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.7	7.9	3.2	172	凹みに凹みもつ
205	(E-82)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.9	5.1	4.4	360	凹みに凹みもつ
206	(F-18)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.5	6.9	2.4	191	凹みに凹みもつ
207	(E-89)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.5	7.1	3.4	228	凹みに凹みもつ
208	(D-80)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.1	6.3	3.5	298	凹みに凹みもつ
209	(D-11)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.8	7.4	4.5	390	凹みに凹みもつ
210	(E-89)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.4	7.3	6.8	451	凹みに凹みもつ
211	(Gライン)	細砂	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.7	8.0	2.4	268	凹みに凹みもつ
212	(F-20+21)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.8	6.8	4.8	420	凹みに凹みもつ
213	(D-14)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.7	6.2	4.2	265	凹みに凹みもつ
214	(D-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.4	6.1	4.4	358	凹みに凹みもつ
215	(F-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.2	6.1	3.9	259	凹みに凹みもつ
216	(F-89)	細砂	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.6	5.2	3.1	277	凹みに凹みもつ
217	(E-89)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.1	6.7	4.1	380	凹みに凹みもつ
218	(F-12)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	8.7	4.8	2.3	149	凹みに凹みもつ
219	(E-18)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	9.9	4.2	4.8	198	凹みに凹みもつ
220	(F-84)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	14.9	5.2	3.3	425	凹みに凹みもつ
221	(F-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	13.1	5.9	4.6	490	凹みに凹みもつ
222	(D-80)	細砂	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	14.7	5.8	3.7	483	凹みに凹みもつ
223	(D-84(ライン北端))	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.0	5.6	3.9	410	凹みに凹みもつ
224	(F-89)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	16.9	4.1	3.0	442	凹みに凹みもつ、磨痕あり
225	(D-10)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.9	6.2	4.6	448	凹みに凹みもつ
226	(D-10)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.8	6.2	3.7	548	凹みに凹みもつ
227	(D-11)	日曜	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	13.8	4.6	4.0	420	凹みに凹みもつ、丸頭に磨痕もつ
228	(F-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.5	6.0	2.9	360	凹みに凹みもつ
229	F-08	細砂上位	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	10.9	5.0	2.5	264	凹みに凹みもつ
230	(E-84)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	7.7	8.1	5.1	470	凹みに凹みもつ
231	表層	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	15.3	5.0	3.3	390	凹みに凹みもつ
232	(F-15)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	12.9	5.2	3.2	330	凹みに凹みもつ
233	(E-84)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	14.9	6.8	4.1	620	凹みに凹みもつ
234	(F-80)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	11.6	5.4	3.4	270	凹みに凹みもつ
235	(D-87)	黄土	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	17.9	6.1	3.6	620	凹みに凹みもつ
236	(F-89)	細砂	磨り石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	7.9	7.8	5.1	438	凹みに凹みもつ
237	(D-80)	日曜	凹み石	安山岩(貫石)	興山(地)中新統	5.0	3.1	3.3	102	凹みに凹みもつ
238	D-12E	赤土	磨り石	緑色燧石	興山(地)中新統	11.7	9.1	6.3	1069	凹みに磨痕もつ、凹みもつ
239	E-15E	赤土	磨り石	緑色燧石	興山(地)中新統	10.9	7.8	5.0	640	凹みに磨痕もつ
240	F-17E	埋土最上位	凹み石	高麗石(安山岩)	興山(地)中新統	6.0	5.5	4.5	176	凹みに凹みもつ

写 真 图 版



A. 遺跡遠景



B. 遺跡近景

PL-1



調査後全景(上斗内Ⅱ遺跡)

PL-2



A. 調査前の雑物除去作業



B. 粗振り作業

PL-3



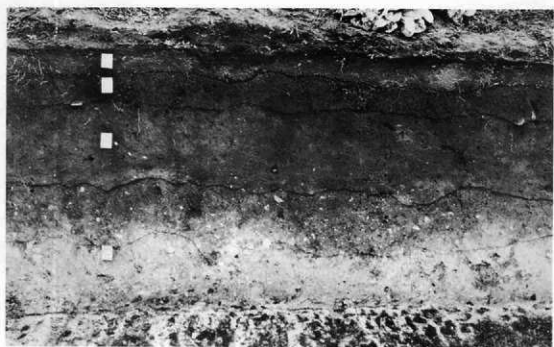
A. 住居跡の精査風景



B. 室内での遺物水洗作業

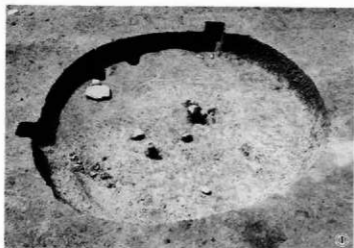


A. 現地説明会風景



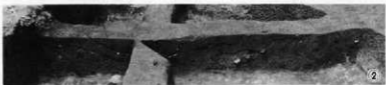
B. 基本層序

PL-5



①全景 ②埋土土層
③炉跡 ④出入口施設

A. D-12住居跡



①全景 ②埋土土層 ③炉跡 ④土偶出土状況

B. D-15住居跡

PL-6 住居跡



①全景

②埋土土層

③炉跡



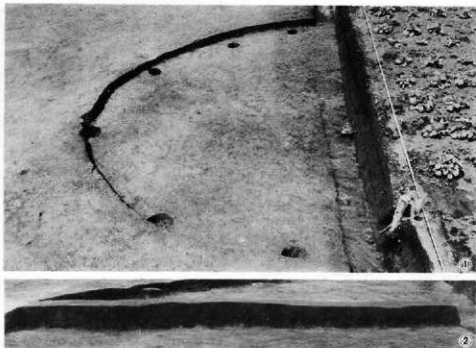
A. E-17住居跡



B. F-07住居跡

①全景 ②埋土土層

PL-7 住居跡



A. F-11住居跡

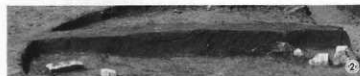
①全景 ②埋土土層



B. F-14住居跡

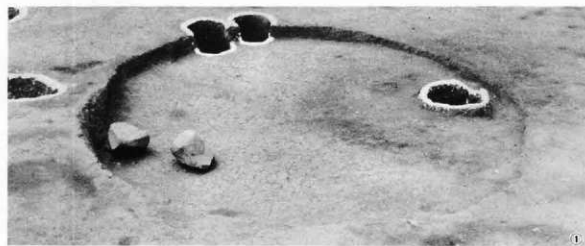
①全景 ②埋土土層

PL-8 住居跡



①全景 ②埋土土層
③炉跡 ④床面で検出の土坑

A. F-16住居跡



B. E-05住居跡状遺構

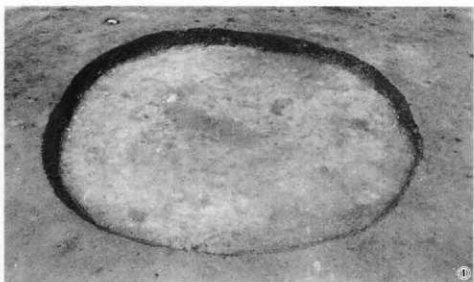
①全景 ②埋土土層

PL-9 住居跡・住居跡状遺構



A. E-07住居跡状遺構

①全景 ②埋土土層



B. E-09住居跡状遺構

①全景 ②埋土土層

PL-10住居跡状遺構



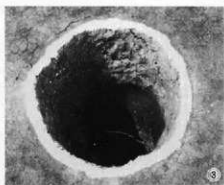
A. F-03住居跡状遺構

①全景 ②埋土土層



B. E-04円形柱穴列

PL-11 住居跡状遺構・柱穴列



① 全景

② 柱穴

③ 柱穴扩大

A. E-05 方形柱穴列

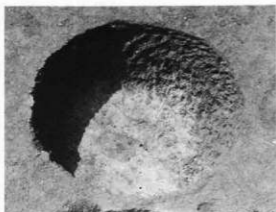


B. E-08 土坑 (埋土)

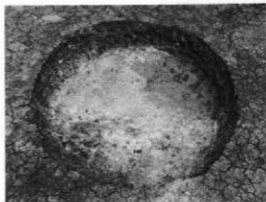


C. E-09 土坑 (埋土)

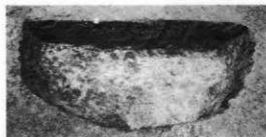
PL-12 柱穴列·土坑



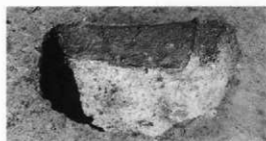
A. E-17土坑



C. F-06土坑

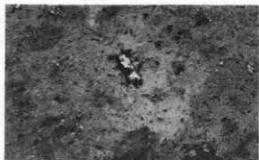


B. E-19 土坑

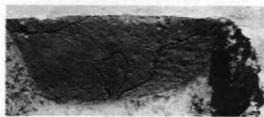


D. E-20土坑

PL-13 土坑



C. E-14 烧土遺構



A. E-14 土坑



D. E-17 烧土遺構

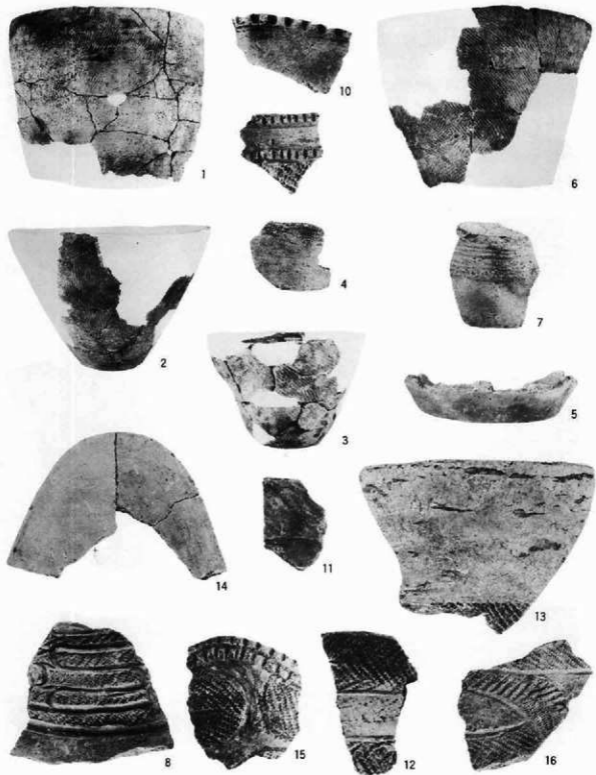


B. D-11 烧土遺構



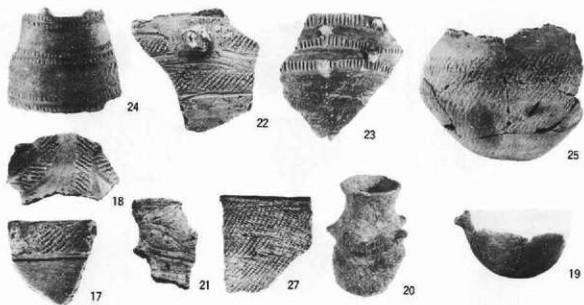
E. F-12 烧土遺構

PL-14 烧土遺構

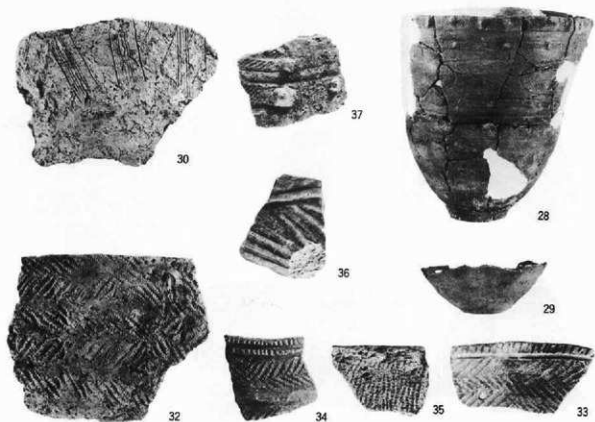


1~16

PL-15遺物 (D-12住居跡)



A. D-15住居跡



B. E-17住居跡

28~37

PL-16遺物 (A. D-15住居跡)
 (B. E-17住居跡)



A. E-17住居跡

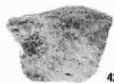


B. F-07住居跡



C. F-11住居跡

38~40



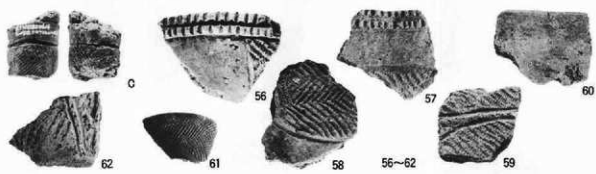
41~47

D. F-14住居跡

PL-17遺物 (A. E-17住居跡・B. F-07住居跡)
 (C. F-11住居跡・D. F-14住居跡)



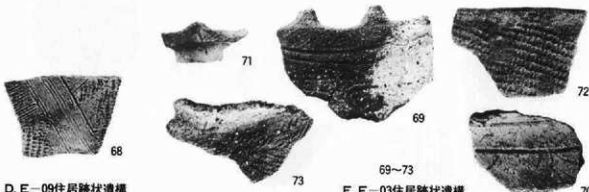
A. F-16住跡 48~55



B. E-05住居跡状遺構



C. E-07住居跡状遺構 63~67



D. E-09住居跡状遺構

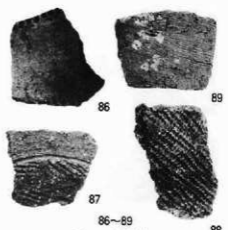
E. F-03住居跡状遺構

PL-18遺物 (A. F-16住居跡・B. E-05住居跡状遺構・C. E-07住居跡状遺構
D. E-09住居跡状遺構・E. F-03住居跡状遺構)



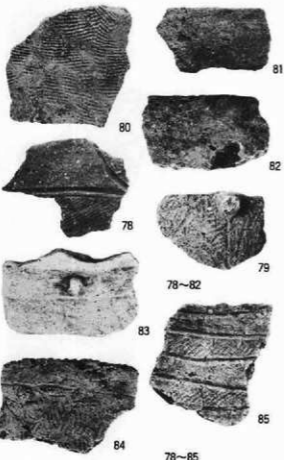
74~77

A. E-04円形柱穴列



86~89

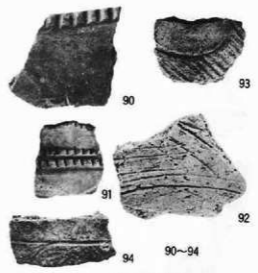
C. E-08土坑



78~82

78~85

B. E-05方形柱穴列



90~94

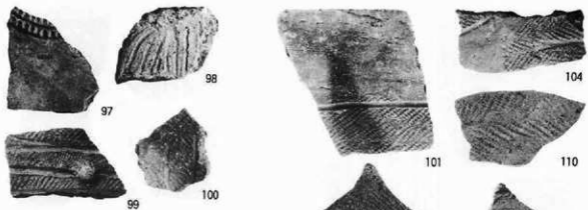
D. E-09土坑



95~96

E. E-14土坑

PL-19 遺物 (A. E-04円形柱穴列・B. E-05方形柱穴列
C. E-08土坑・D. E-09土坑・E. E-14土坑)

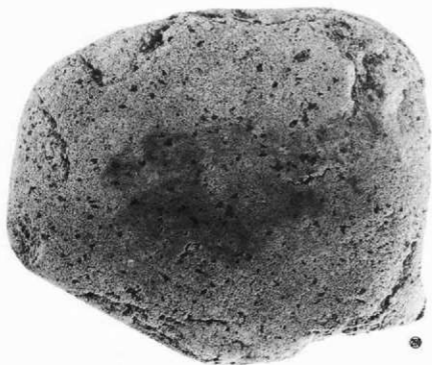


A. F-06土坑

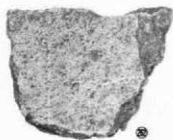


101~116
B. D-11焼土遺構

PL-20 遺物 (A. F-06土坑
B. D-11焼土遺構)

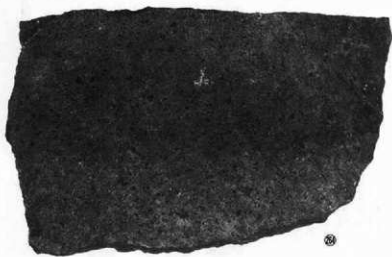
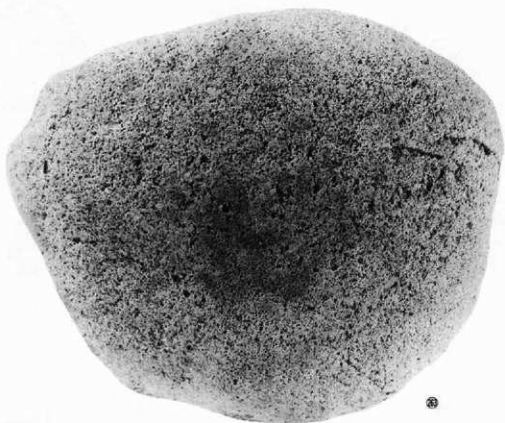


A. D-12住居跡



B. D-15住居跡

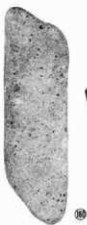
PL-21 遺物 (A. D-12住居跡
B. D-15住居跡)



PL-22 遺物 (E-17住居跡)



A. F-11住居跡



B. F-16住居跡



48



79

C. E-07住居跡状遺構



92



93

E. E-05住居跡状遺構



24

D. D-11焼土遺構



94



95

F. F-06土坑



96



97



98



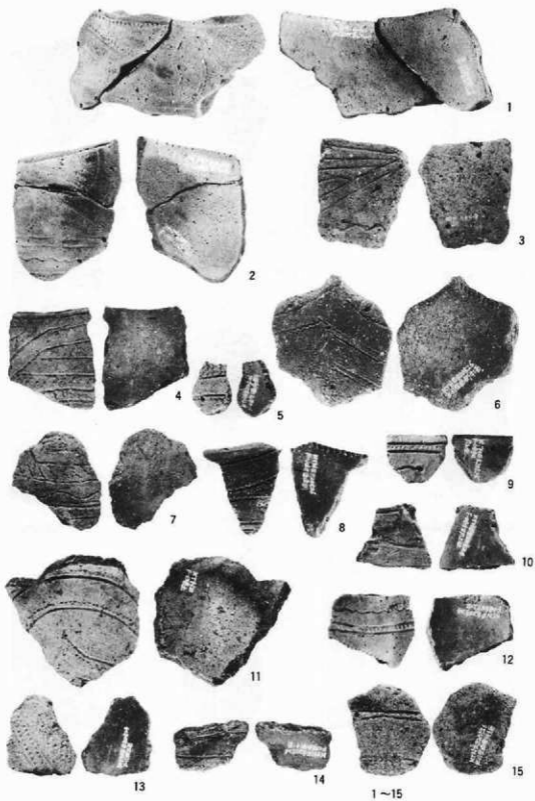
99

G. 遺構外

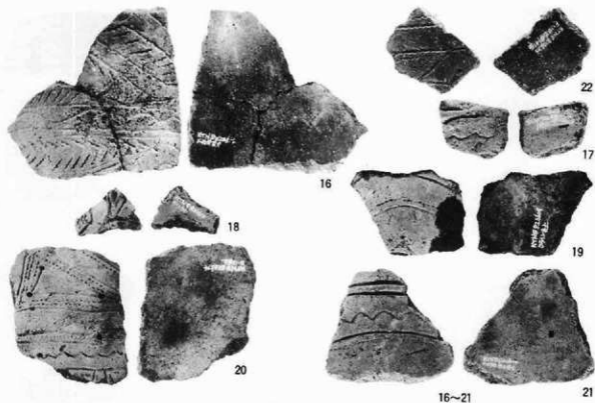


100

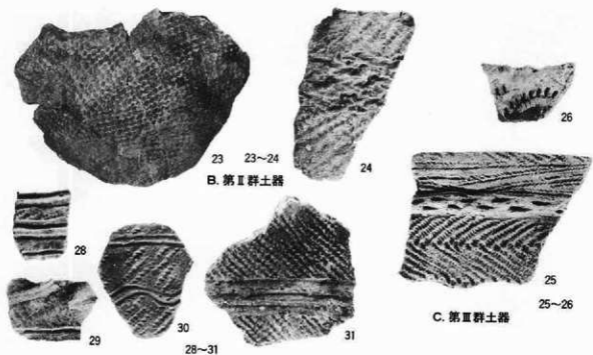
PL-23 遺物 (A. F-11住居跡・B. F-16住居跡・C. E-07住居跡状遺構・D. D-11焼土遺構・E. E-05住居跡状遺構・F. F-06土坑・G. 遺構外)



PL-24 遺物 (第I群土器)



A. 第I群土器



B. 第II群土器

C. 第III群土器

D. 第IV群土器

PL-25 遺物 (第II~IV群土器)



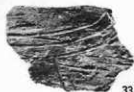
36



32



35



33



34

32~36

A. 第V群土器



37

37~38



38



42



44

B. 第VI群土器1類



39



48



45



46



50



41



40



43



49



47

C. 第VI群土器2類

PL-26 遺物 (第V・VI群土器)



51



54



55



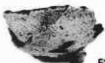
53



57



56



52



58



59



62



61



66



70



62

PL-27 遺物 (第VI群土器)

2類



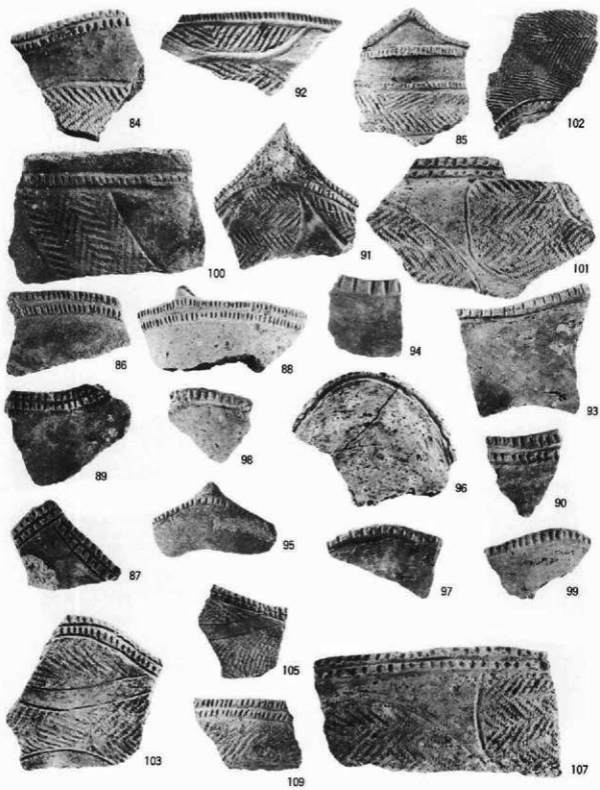
A. 第Ⅵ群2類



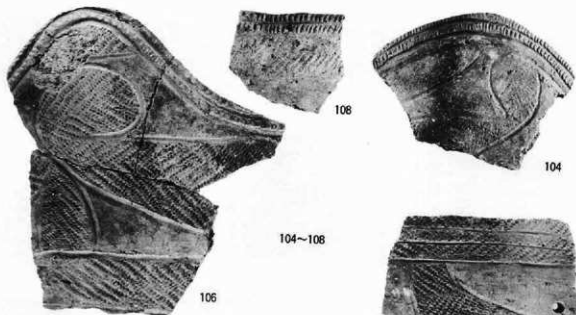
B. 第Ⅵ群3類

74~83

PL-28 遺物 (第Ⅵ群2・3類土器)

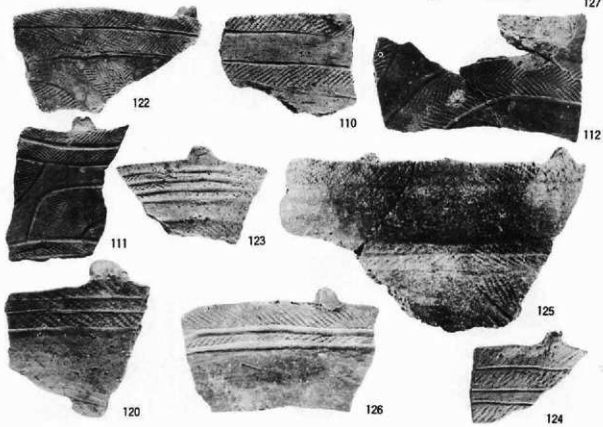


PL-29 遺物 (第VI 3類土器)



104~108

A. 第Ⅵ群 3類



B. 第Ⅵ群 4類

PL-30 遺物 (第Ⅵ群 3・4類土器)



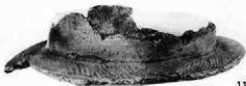
121



128



118



119



113



119

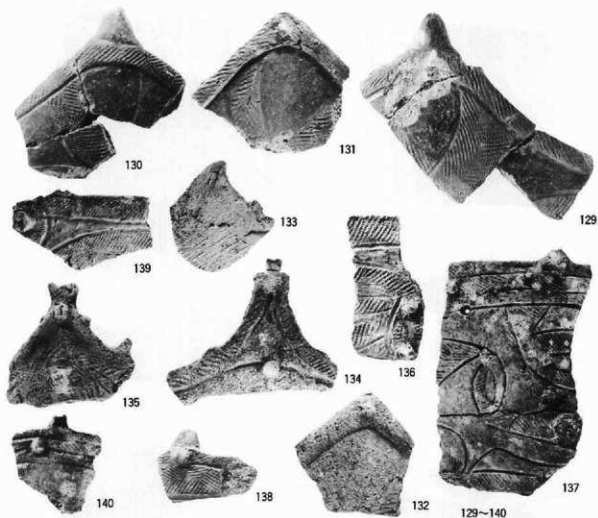


114



117

PL-31 遺物 (第VI群4類土器)



A. 第Ⅶ群 1類

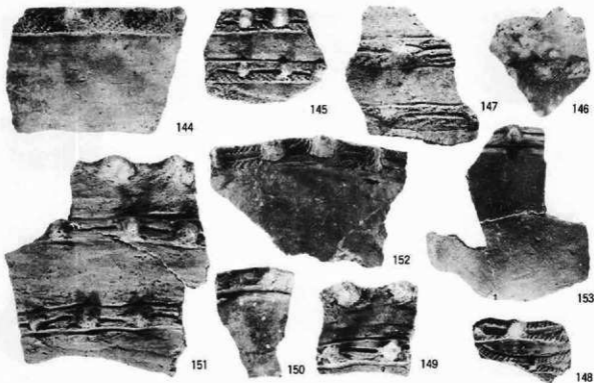


B. 第Ⅶ群 2類



C. 第Ⅶ群 3類

PL-32 遺物 (第Ⅶ群 1~3類土器)



A. 第Ⅶ群 2類

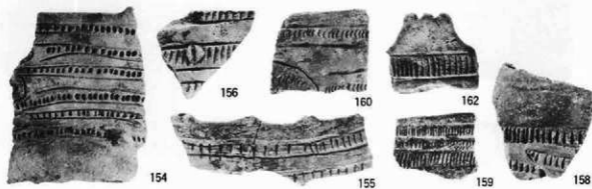
144~153



B. 第Ⅶ群 6類

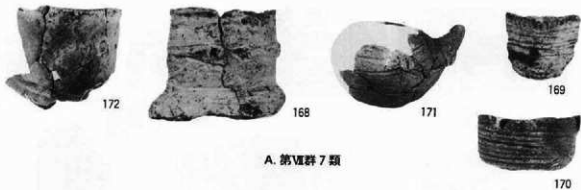


C. 第Ⅶ群 5類

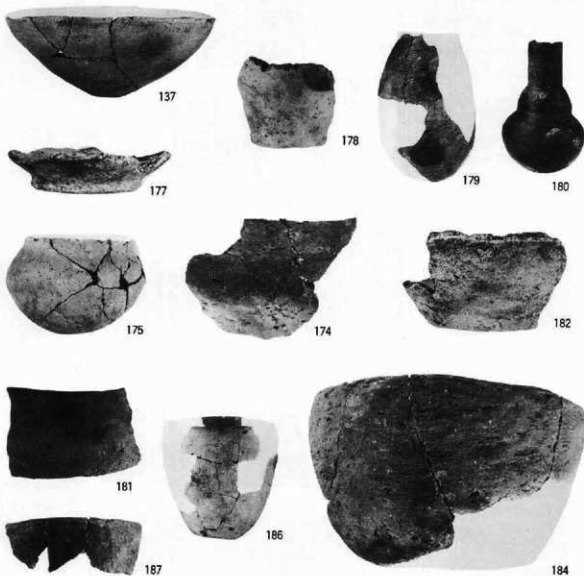


D. 第Ⅶ群 4類

PL-33 遺物 (第Ⅶ群~類土器)

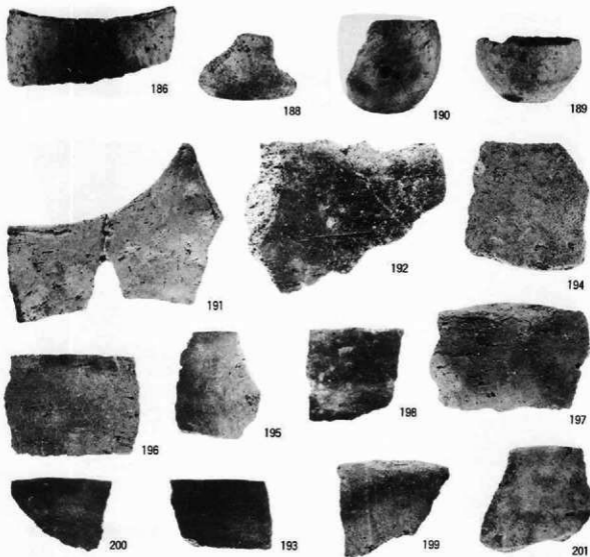


A. 第Ⅵ群 7類

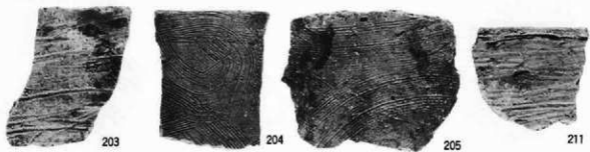


B. 第Ⅷ群

PL-34 遺物 (第Ⅵ群 7類・第Ⅷ群土器)



A. 第Ⅷ群土器

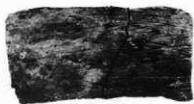


B. 第Ⅸ群土器

PL-35 遺物 (第Ⅷ群・第Ⅸ群土器)



207



213



210



215



208



209



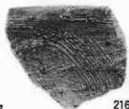
212



214

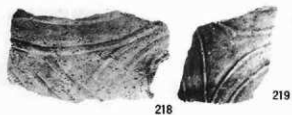


217



216

PL-36 遺物 (第Ⅷ群土器)



218

219

A. 第Ⅹ群 218~219



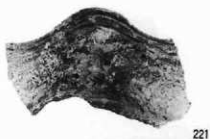
223



224

225

B. 第Ⅺ群 223~225



221



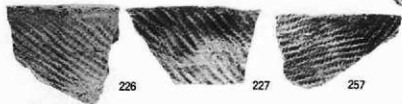
220

222

C. 第Ⅴ群 220~222



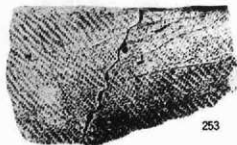
228



226

227

257



253



258



254



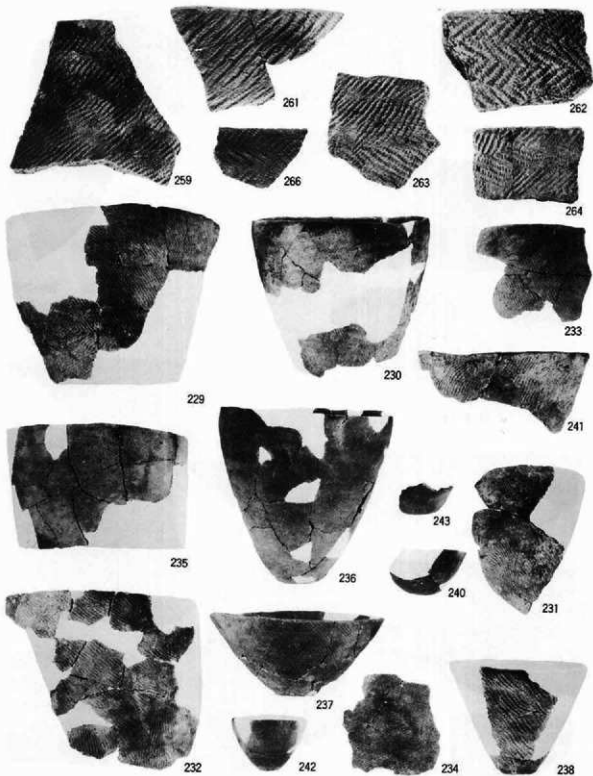
256



255

D. 第Ⅻ群

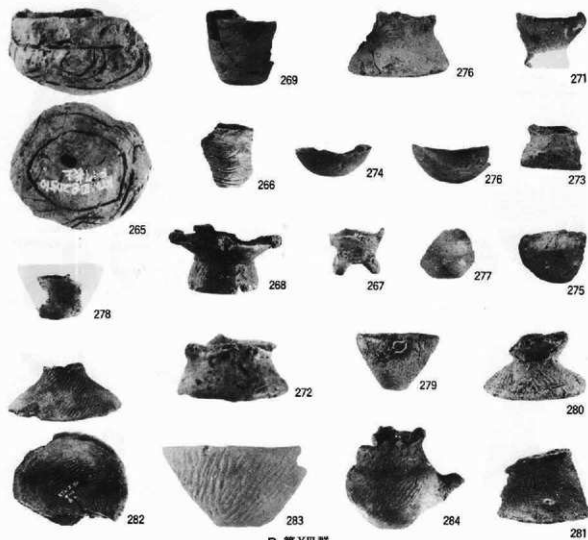
PL-37 遺物 (第Ⅴ・Ⅹ~Ⅻ群土器)



PL-38 遺物 (第Ⅻ群土器)



A. 第Ⅻ群



B. 第ⅩⅢ群

PL-39 遺物 (Ⅻ・ⅩⅢ群土器)



284



286

A. 第XIV群



289



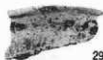
290

C. 第XVI群



288

B. 第XV群



292



302



303



291



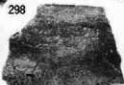
299



298



295



294



301



300

D. 第XVII群



314

E. 口縁部突起



304



306



312



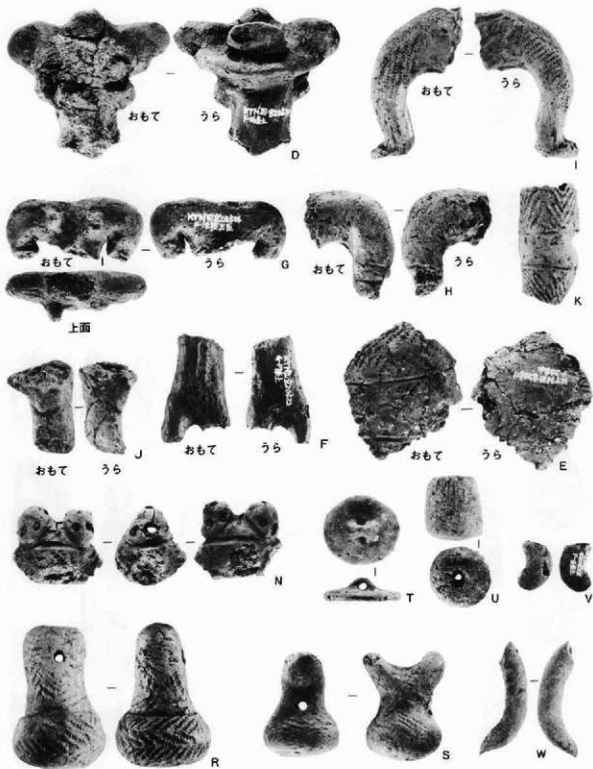
309



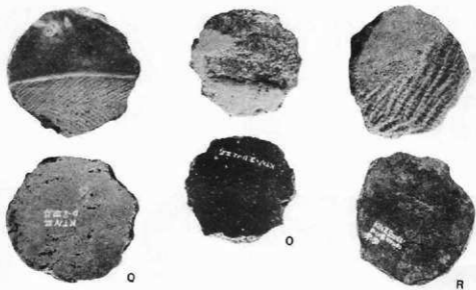
307

F. 注口部

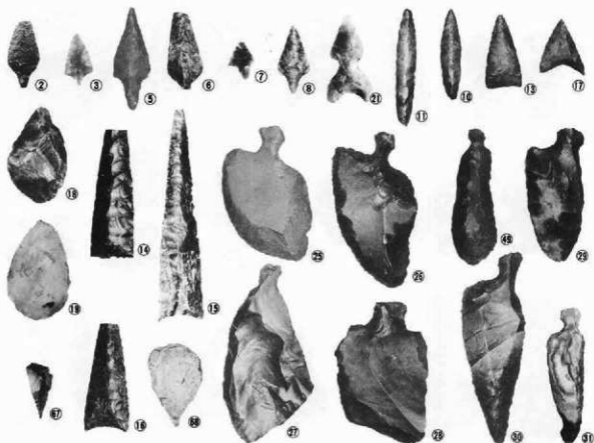
PL-40 遺物 (第XIV~XVII群土器、その他)



PL-41 遺物 (土偶・土製品)

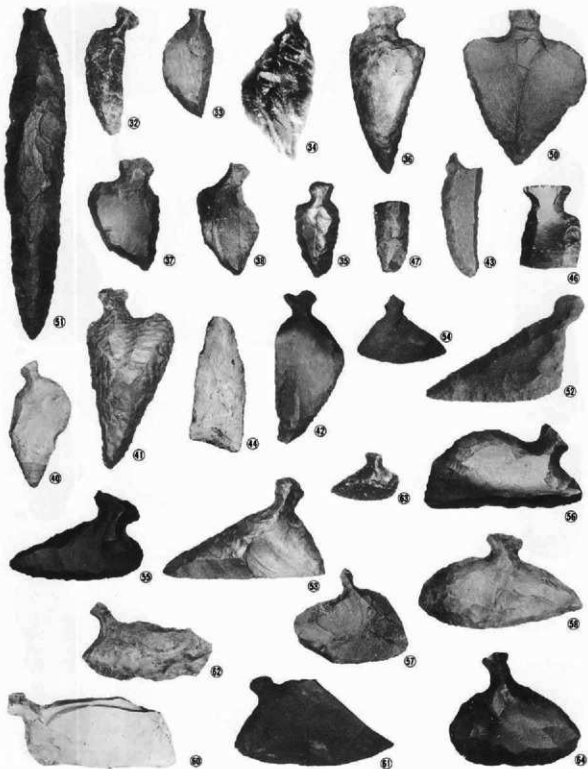


A. 土器片円盤

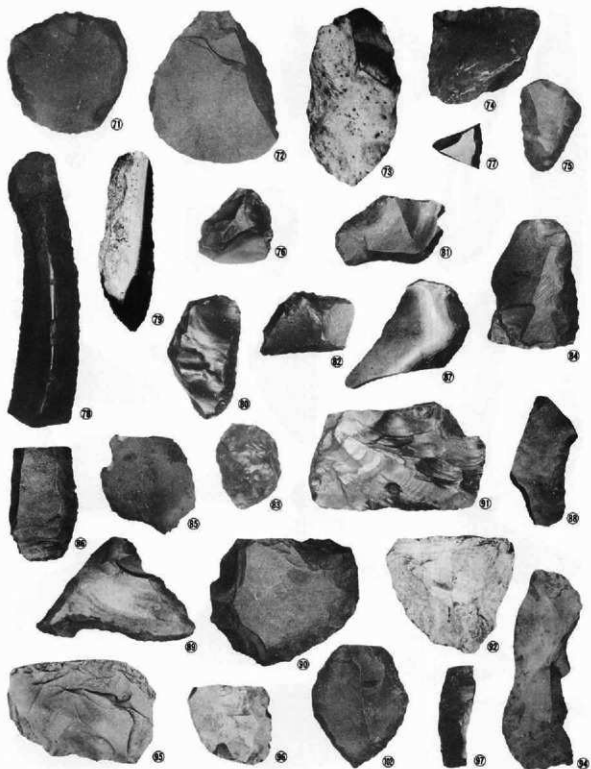


B. 石器

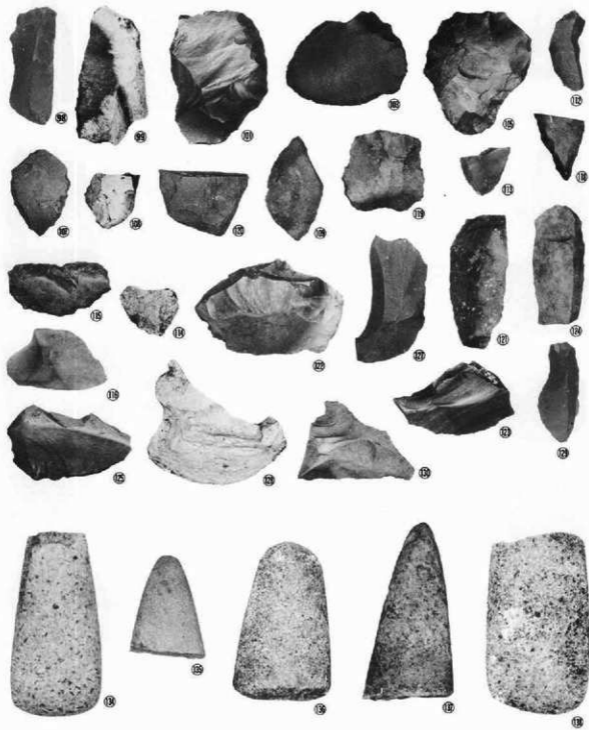
PL-42 遺物 (土製品・石鏃・石匙・石錐)



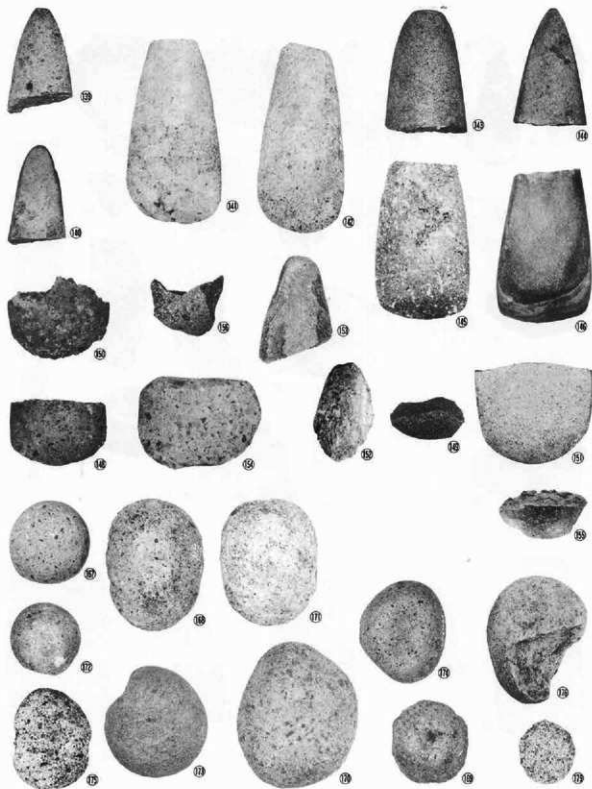
PL-43 遺物 (石匙)



PL-44 遺物 (攪器・切削器)



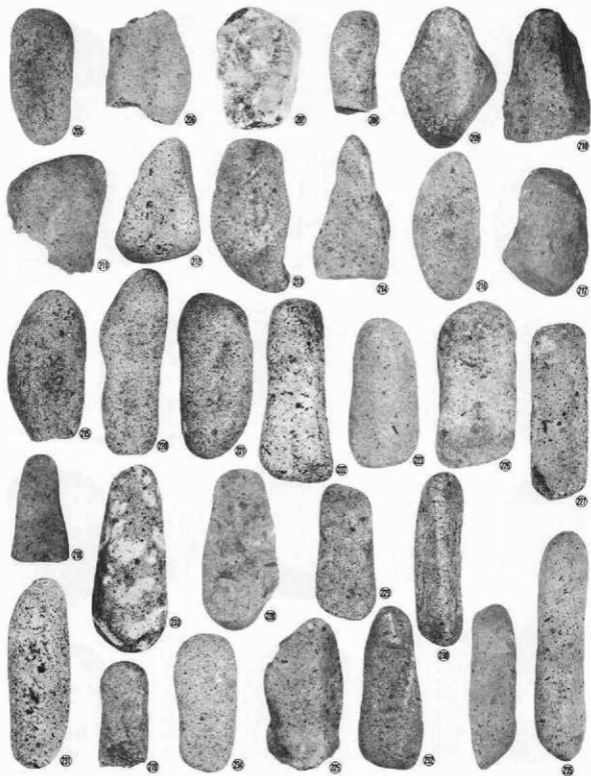
PL-45 遺物 (切削器・使用痕ある剥片・磨製石斧)



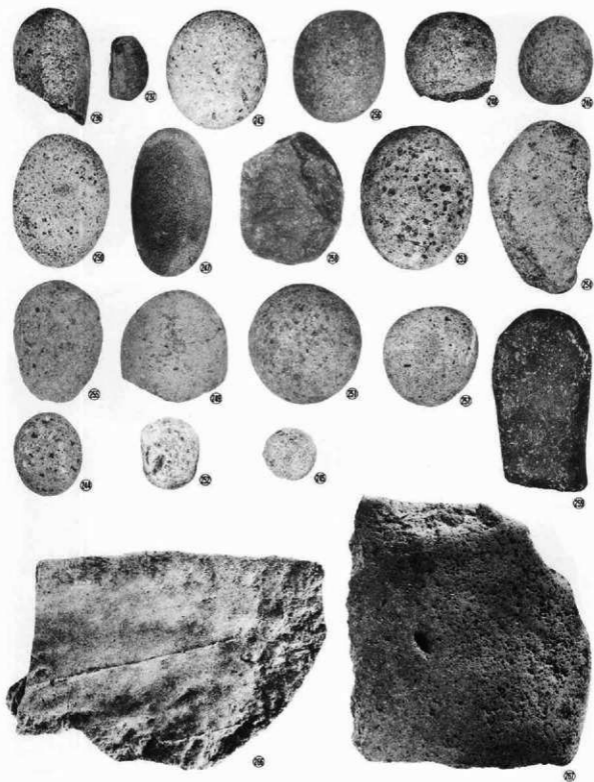
PL-46 遺物 (磨製石斧・凹み石)



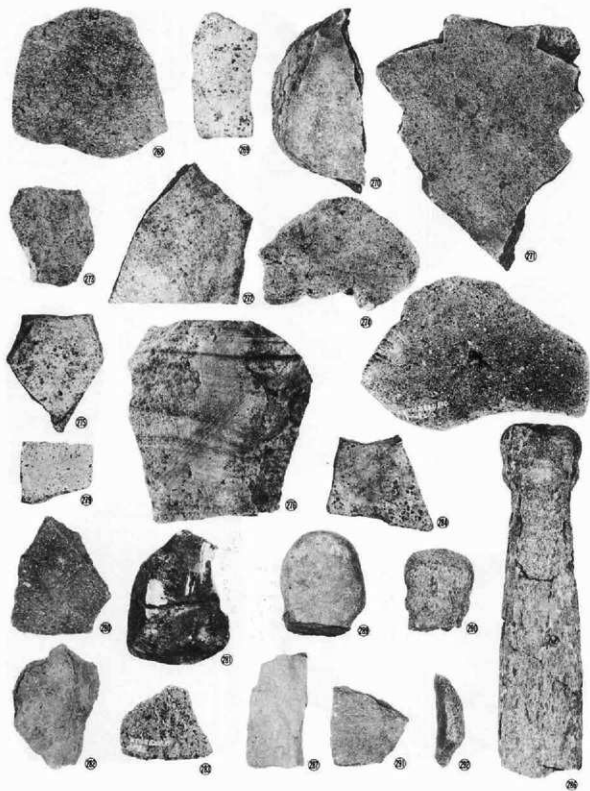
PL-47 遺物 (凹み石)



PL-48 遺物 (凹み石)



PL-49 遺物 (擦石・磨石・石皿・叩き石)



PL-50 遺物 (石皿・砥石・石棒)



PL-51 遺物 (石製品)



上の遺物は調査での直接資料ではないが、調査できなかった公共用道路敷地内から、土木工事中に出土したことが明確であるため、参考のため掲載した。上半分は見つからなかったとのことである。

PL-52 参考資料（土偶）



A. 遺跡遠景

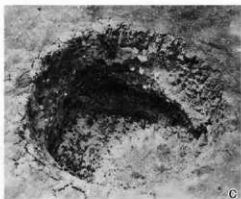


B. 基本層序

PL-53 上斗内IV遺跡



B



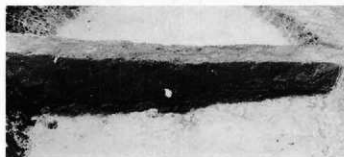
C



A



B



- A. B-16炭窟跡
B. F-11土坑
C. F-18土坑
D. G-17土坑

PL-54 遺構 (炭燒窯・土坑)



A. 調査前遠景

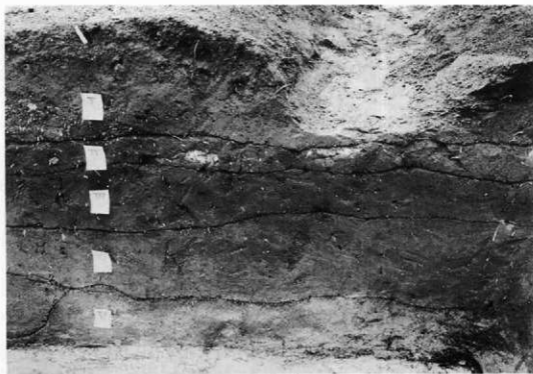


B. 調査後近景

PL-55 上斗内V遺跡



A. 粗掘りや遺構検出作業



B. 基本層序

PL-56 (作業風景・基本層序)



C. 炭化物・焼土



A. 灰白色砂状火山灰の検出状況
B. 埋土土層



D. 出入口施設か？

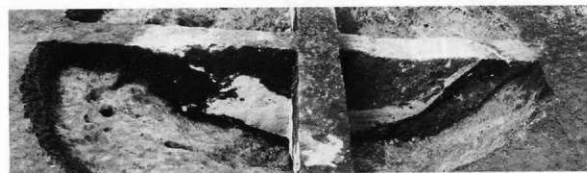
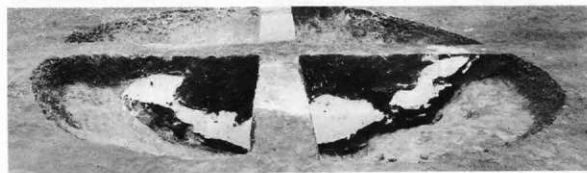


B-20住居跡



E. カマド
F. 完掘後全景

PL-57 遺構（住居跡）

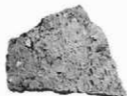


C-24土坑

PL-58 遺構 (土坑)



117



118



119



120

A. 上斗内Ⅳ遺跡



121



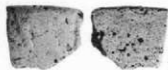
122



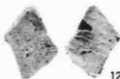
123



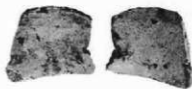
124



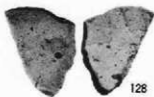
125



126



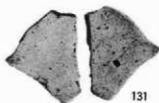
127



128



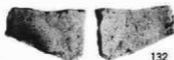
130



131



129



132



133



134



135



136

B. 上斗内Ⅴ遺跡

PL-59 遺物 (上斗内Ⅳ・Ⅴ遺跡)

岩手県埋文センター文化財発掘調査報告書第71集
上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書
広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

印刷 昭和 59 年 1 月 20 日

発行 昭和 59 年 1 月 31 日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 河北印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1984
